

義経不死伝説の声を聞く

関東・福島・宮城・岩手・青森・北海道・モンゴルへ

義経伝説地からの声を聞いてみた



義経神像・義経神社



静の舞・白旗神社



チンギス・ハーンの誕生地
デウリン・ボルタグ

池田 勝宣

義経不死伝説が生まれた背景には、義経の首が平泉から鎌倉腰越浦まで夏期に43日かけて運ばれていること。本当に首実検で確認できたのか。又その首は杉目太郎行信の焼け首と疑われる伝承も、確証のない首の行方は世に風聞を生んだ。実は高館襲撃の1年前に平泉を北へ向かって脱出という伝承が平泉から北に残されている。岩手県の東海岸沿いの寒村から青森の三厩・竜飛岬・道南辺りまで北走の痕跡がみられる。歴史学者は正史に記録ある以上、義経の生存伝説など以ての外という。しかし、後世の多くの文人墨客や紀行者が義経の伝説伝承に興味を示し、その記述を残しているの何故か、そのあたりの義経不死伝説の声を知りたくて伝説地を踏査した。結果、伝承は信仰となって継承されていたことがわかった。

2011年5月吉日

はじめに

源義経(1159 - 89)は平治元年生まれ、幼名牛若丸、後に九郎判官と呼ばれる。父は源義朝、母は九条院雑仕常盤、頼朝の異母兄弟。平治の乱に父義朝が敗死し、母子共々捕われの身となるが、牛若丸は出家を条件に一命を助けられ洛北鞍馬寺にあずけられる。やがて鞍馬寺を脱出、金売吉次の先導で奥州へ。旅の途中に元服をして源九郎義経と改め、平泉の藤原秀衡の庇護を受けた。時に16歳であった。

治承4年(1180)兄頼朝が伊豆で挙兵時、頼朝の軍門に駆けつけ、黄瀬川の陣に於いて初めて兄頼朝と涙の対面をはたす。一般庶民ではめぜたしとなるのだが、この時代、源平の肉親の血縁は、政治事情が優先され、親子と云えども敵味方に分かれて戦かわなければならぬ運命を持ち合わせていた一族でもあった。

義経は一の谷の合戦、屋島の合戦、壇ノ浦の合戦など平家を滅亡させた戦の天才いわれた。兄頼朝との武家政治の構築に次第にズレが生じ、また頼朝の御家人梶原景時の誣告によって、京都を追われ、奥州藤原秀衡の懐に逃げ込んだ。そして、秀衡の死去によって義経の命は危機に陥った。秀衡の死から1年4ヶ月後、秀衡の子息藤原泰衡によって、衣川の高館(衣川館)で文治5年(1189)閏4月30日に襲撃され、妻子ともども衣川で自殺したと『吾妻鏡』は伝える。

義経の首は鎌倉腰越浦に送られ、和田太郎義盛、梶原平三景時の両名により、「首実検」により義経と確認されたと正史は伝える。義経の首は、酒付けにされ43日かけて奥州から鎌倉に送られた。太陽暦なら夏、義経の「首」と本当に確認できたのか、当時から風評として義経に良く似た杉目太郎行信の焼き首ではなかったのか、と取り沙汰されていた。事件的に捉えれば未解決事件ともいえた案件であったわけである。

奥州藤原秀衡は臨終の枕元に子息の国衡・泰衡・義経を呼び「これからは義経を大將軍(主君)として、3人で協力して鎌倉にあたるように」遺言をした。父秀衡の遺言による策略の通り、惣領藤原泰衡の仕組んだ高館襲撃は偽戦ではなかったか。何故ならこの時分の泰衡は藤原政権の実権を握り、義経を討つことなぞ決して難しいことではなく毒殺、入浴中に襲うなど、召し捕えることもできたはずである。ただ鎌倉への事態解決のために、義経の首と偽戦は必要なことであった。この憶測が義経は北走したのではと言う風評が立ち、そして義経は「生きている」という風聞が広がった。義経生存伝説は、鎌倉軍に軍事経済に劣っていた奥州藤原政権は対等できないとみた泰衡が、高館襲撃事件が起こる1年前に義経主従を泰衡の指示で衣川館を脱出させたという秘話が「義経北行伝説」「義経不死伝説」となって発展するのである。

北へ逃走ルートは平泉から北海道道南あたりまで、痕跡は1本の線で結ばれて行き、義経北行伝説の事跡を追えば岩手県、青森県、北海道に伝説が多くあり、権力のある領主とは結びつかず、一般民衆の中で信仰となって現在に至っている。その守られてきた人々が

800年間もどのような経緯でこれらの伝説を守ってきたのか、この伝説伝承を守ってきた方々の文化や人々の歴史を知りたくて、だんだん深入りしてしまった。

調べてみると福島・宮城には義経の脇役伝承としての佐藤継信、忠信兄弟、金売吉次がおり、静御前の伝説も多々あることが判った。そして記述を残してくれた松尾芭蕉、古川古松軒、相原友直、橋南谿、菅江真澄、そして江戸後期に蝦夷地に入った松浦武四郎、近藤重蔵、間宮林蔵、シーボルト子息、明治黎明期イサベラ・バード等が義経伝説に興味を示し多くの記述を残していたことが判った。義経伝説現場に踏査探聞をして、できるだけ自らの主観を押さえ、現地に立って、記述を残した人々に焦点を当て、筆者の現場での同感の感想とさせていただいた。伝説は史実と違う。伝説は世の人々がその伝説伝承を信じていれば、いつまでも伝説は生き続ける。人々の生活の中で、英雄伝説はかくのごとくあってほしいという願望が、いわゆる「判官びいき」を生み、これらの人々がいる限り義経伝説は続く。伝説を信じる人々がいなくなれば、伝説は消えるのだと金田一京助先生はいう。伝承地の取材内容はできるかぎり現地取材通りとした。したがって、名前、名称や歴史的地名が一般の歴史書と異なることがあるが、現場取材の伝説伝承を優先とした報告とさせていただいた。旅の始まりは神奈川県鎌倉周辺から探聞、千葉、埼玉、栃木、福島、宮城、岩手、青森、津軽海峡を渡って北海道へ、そして、義経＝ジンギスカン伝説のモンゴル国へ、小谷部全一郎が見たオノン河に筆者も立ってみたい気持ちが湧き出かけた。

2010年1月吉日 池田 勝宣

目次	3
はじめに	1
第1章 鎌倉周辺事跡探聞 11ヶ所	5
1 鶴岡八幡宮 2 腰越状 3 木曾塚 4 弁慶塚 5 源義経を祀る御霊神社 6 旧相模川橋脚 7 白旗神社 8 源義経公鎮霊碑 9 弁慶首塚 10 義経公の 位牌・荘厳寺 11 伝・源義経公首洗い井戸	
第2章 埼玉・福島周辺伝承 6ヶ所	14
1 静御前の墓 2 静御前堂 3 義経の腰掛松・弁慶の硯石 4 庄司戻しの桜 5 弁慶の腰掛松 6 阿津賀志山防塁 余話・1話	
第3章 千葉・栃木・福島・宮城・岩手・金売吉次伝説地探聞 17ヶ所	19
1 吉次観音・吉次沼 2 金売り吉次の墓 3 伝称・吉次塚 4 伝・金売吉次兄 弟の墓 5 義経と吉次のゆかりの八幡神社 6 金売り吉次・吉内・吉六三兄弟のお堂 7 住吉公園内の吉次長者屋敷跡 8 矢本町の吉次屋敷跡 9 河南町の長者館跡 10 三條吉次の墓 11 玉山金山・竹駒神社 12 炭焼き藤太夫妻の墓 13 金 田八幡神社 14 黄金山産金跡 15 下衣川の長者庵寺跡 16 金売吉次商用場 17 首途八幡神社 余話・1話	
第4章 栃木・福島・山形・佐藤継信・忠信の伝承地 6ヶ所	30
1 医王寺 2 大鳥城 3 甲冑堂 4 佐藤継信・忠信の供養塔 5 常信庵 6 善光寺の佐藤兄弟の供養碑	
第5章 宮城栗原市・金成・栗駒に伝わる伝承 6ヶ所	35
1 杉目太郎行信の供養碑 2 渡辺俎豆次の碑文 3 判官森・義経の胴塚 4 大 原木館跡 5 栗原寺 6 沼倉小次郎高次の万代館	
第6章 埼玉・志賀・木曾・石川『奥の細道』松尾芭蕉を考える 4ヶ所	41
1 義仲寺 2 大蔵館跡 3 実盛首洗い池・実盛塚 4 多太神社 余話・2話	
第7章 義経北行伝説・岩手県編 36ヶ所	48
1 高館 2 清悦社 3 雲際寺の位牌 4 観福寺 5 弁慶屋敷 6 多門寺 7 鈴木三郎重家と源義経公の供養碑 8 玉前神社 9 五十瀬神社 10 源休館跡 11 五輪峠 12 荒覇吐神社 13 風呂屋 14 駒形神社 15 続石 16 中村判官堂 17 判官家 18 山田八幡宮・関口神社 19 法冠神社 20 大槌 町の駒形神社 21 宮の口判官堂 22 判官神社 23 鈴ヶ神社 24 日向日月 神社 25 判官堂 26 長沢判官堂 27 津軽石判官神社 28 横山八幡宮 29 黒森神社 30 判官稻荷神社 31 加茂神社 32 畠山神社 33 鶴鳥神 社 34 諏訪神社 35 久昌寺 36 義経神社 余話・8話	
義経伝説・青森県編 23ヶ所	69
1 熊野神社 2 三島神社 3 三八神社 4 おがみ神社 5 長者山新羅神社 6 高館 7 藤ヶ森稻荷神社 8 小田八幡神社 9 矢止めの清水 10 帽子屋敷 11 義経公夫人の墓 12 日本中央碑 13 椿神社 14 貴船神社 15 法光 寺 16 寺下観音 17 仏ヶ浦 18 善知鳥神社 19 円明寺 20 十三湊周 辺 21 三厩・義経寺 22 兜岩 23 竜飛岬	
義経伝説・北海道編・道南・道央・道東 37ヶ所	81

1 函館港 2 船魂神社・童子岩 3 矢越岬 4 白神岬 5 義経山山号 6 阿吽寺 7 江差島 8 姫川 9 弁慶岬 10 佐藤家のニシン御殿 11 雷電岬 12 弁慶の刀掛岩 13 兜岩 14 神威岩・女郎古岩 15 神威神社 16 セタカムイ岩 17 赤岩伝説 18 石狩のハマナス 19 黄金山 20 岩燕伝説 21 小谷部全一郎が創設した虻田学園跡 22 洞爺湖中島 23 キムンドの滝 24 義経岩と洞窟 25 シノダイ岬 26 門別稲荷神社 27 判官館跡 28 義経神社 29 ハヨビラ山 30 義経台 31 義経の里本別公園 32 えりも岬 33 オショロコツ 34 春採湖の一本松 35 義経の窓岩 36 義経の舟 37 義経岩 余話・8話

第8章 モンゴル紀行 13話

109

1 クリルタイ跡 2 オノン・デリウン・ボルタグ 3 オノン河畔 4 ゲルの夜話 5 チンギス・ハーンの泉 6 デリウン・ボルタグ 7 チンギス・ハーンの誕生記念碑 8 アウラガ遺跡 9 チンギス・ハーンの陵墓について 10 伝説義経の墓 11 チンギス・ハーンの概略 12 「元朝秘史」の黒テンの毛皮 13 もう一つのジンギスカン伝説 余話・2話

第9章 義経=ジンギスカン伝説考 10話

124

1 義経北行伝説 2 親子シーボルトによる義経伝説の研究 3 末松謙澄 4 内田弥八 5 小谷部全一郎 6 義経=ジンギスカン伝説の証明根拠 7 藤原泰衡の頭蓋骨について 8 源頼朝没後の流れ 9 同時期に大陸へ渡った鳥居龍蔵をみる 10 満蒙・中国・ロシアの歴史の概略を観る 余話・2話

おわりに

143

(横40字×34行×145頁)

追記 平成23年3月11日、未曾有の大地震と津波は市・町・村を襲い大災害をもたらしました。東日本大震災にあわれました方々にお心より見舞い申し上げます。津波の被害地は義経伝説地と重なり、神社や祠の被災流失を想定のヶ所を上げておきます。

- | | |
|-----------------------|-----------|
| ① 弁慶の腰掛松・南相馬市原町区町池 | 第2章福島県の5 |
| ② 住吉公園内の吉次屋敷跡・石巻市住吉町 | 第3章宮城県の7 |
| ③ 矢本町の吉次屋敷跡・石巻市矢本大曲宮前 | 同の8 |
| ④ 山田八幡宮・宮古市山田町 | 第7章岩手県の18 |
| ⑤ 関口神社・山田町山田 | 同の18 |
| ⑥ 法冠神社・釜石市鶴住居町室浜 | 同の19 |
| ⑦ 大槌町の駒形神社・上閉郡大槌町 | 同の20 |
| ⑧ 宮の口判官堂・同大槌町 | 同の21 |
| ⑨ 津軽石判官神社・宮古市津軽石 | 同の27 |
| ⑩ 判官稲荷神社・宮古市本町 | 同の30 |
| ⑪ 諏訪神社・久慈市長内町 | 同の34 |
| ⑫ 熊野神社・八戸市種差海岸 | 第7章青森県編の1 |
| ⑬ 義経公夫人の墓・上北郡おいらせ町 | 同の11 |
- ※ 現地を未確認ですが上記以外でも被災流失ヶ所が想定されます。

第1章 鎌倉周辺事跡探聞 11ヶ所

源義経の「北行伝説」に入る前に鎌倉鶴岡八幡宮周りから歩いてみたい。ご存知鶴岡八幡宮は、康平6年(1063)に源頼義が由比郷鶴岡に京都の石清水八幡宮を勧請したのが始まりとされ、頼義の長子義家7歳の時に京都、石清水八幡宮(860年清和天皇の命で創建)で元服して、八幡太郎義家と名乗ったのが有名な話である。武神・軍神の神として、源氏をはじめ足利氏、徳川氏、今川氏、武田氏の清和源氏の氏神、武神・弓矢の神として崇敬された。治承4年(1180)に源頼朝が鎌倉の中心に祭るために、現在の地へ移した。頼朝が征夷大將軍となり鎌倉幕府が成立後、頼朝による鎌倉の都市作りは鶴岡八幡宮を中心に進められ、東国の武士団との強い結びつきは、頼義、義家親子による前九年・後三年の役以後、源氏の勢力を東国に根付かせた。

1 鶴岡八幡宮 鎌倉市

八幡神は8世紀初頭、西国九州宇佐の地に、突然歴史の舞台に出現した新しい神であった。当時、奈良の都でも知らぬ名の神であり、国家神となる神が何故、辺境の地「国東」(九州に遠征した景行天皇が山口県の佐婆津から九州を見て国の先、古代ヤマト支配地域のクニの境をさして言ったとう)に誕生した神は、古代ヤマト国と隼人国の勢力圏争いのクニ境であった地域が、現大分県宇佐神宮であった。この時代豊前国は新羅系、百済系、高句麗系等の多くの渡来民を従属させ、ヤマト朝廷は隼人国を最前線に防波堤の役目として渡来人を入植させた。養老3年(719)大隈日向の隼人族が、新羅からの援助を得て数万の軍勢で大和朝廷に叛いた。この時、朝廷は宇佐八幡宮へ勅使を遣わし御神託を仰いだ。御神体は「薦社の三隅池の薦を刈り枕をつくり、これを神体とせよ」との神託が出たので豊前国將軍宇努男が薦枕の神輿を奉じて先陣し戦い、隼人を平定した。この勝利によって大和朝廷から国難の大乱を鎮める神、国家神・八幡神として認められたのである。

『宇佐神宮由来記』の宣命に(天皇の命令を伝える文書)「豊前国宇佐郡に座す広幡の八幡の大神」とある。また「八幡大菩薩」となるのは延暦17年(783)の官符にみられる。



鎌倉鶴岡八幡宮



源頼朝の墓

安永8年(1779)頼朝の子孫薩摩藩主島津重豪が再建した。墓の周辺は頼朝の持仏堂があり、頼朝没後は法華堂と呼ばれた。

2 腰越状 鎌倉市腰越・龍護山・満福寺（江ノ電腰越駅下車7分）

義経は兄頼朝の誤解を解こうと、腰越浦までやってきたが弁解することも許されず、その思いを腰越から大江広元に訴えたのが「腰越状」である。『吾妻鏡』文治元年5月24日の条に「腰越駅においていたずらに日を渉るの間、愁鬱の余りに、因幡（大江）前司広元に付して一通の歎状（嘆願書）を奉る。広元これを披露するというのが、敢えて明らかとする仰せなし」腰越状を要約現代文で綴る。

《 左衛門少尉源義経、恐れながら申しあげます。私は鎌倉殿の代官の一人に選ばれ、天皇のお使いとなって戦い朝敵を滅ぼし、先祖代々弓矢の家系を天下に示し、父の恥をそそぎました。鎌倉殿からは褒美がいただけるに違いないと思っておりましたのに、逆にあらぬ告げ口によってお叱りを受け、莫大な勲功も止められ、功績があっても御勤気を蒙り、空しく血の涙にくれています。つくづく思いますことは、良薬は口に苦く、忠言は耳に逆らうと言われます。讒言した者の真実も正されず、鎌倉へも入れてもらえない間、私の弁解もできず、いたずらに数日を送っています。この時あたり、兄上の顔を拝見できないままでは、骨肉を分けた兄弟なのに空しくなります。私の宿運も極まったのでしょうか、とても悲しいことです。（中略）兄上以外お頼みする処はございません、兄上殿の広大の御慈悲を仰ぐのみです。便宜を図って頂、寛大なお気持ちでお許しいただければ、家門を栄えさせ、永久に子孫へ栄華が伝えられるでしょう。将来の心配が事無くなり、一生の安寧が得られるでしょう。お話は言い尽くせませんが、ここでは省略させていただきます。ご賢察くださいますようお願いいたします。義経恐れ謹んで申しあげます。元暦2年5月・左衛門少尉源義経進上 因幡前司殿（大江広元）》



腰越状・満福寺



腰越浦・奥は江ノ島



満福寺

後、平泉衣川館から義経の「首」が腰越浦の満福寺に送られてきた。『吾妻鏡』文治5年6月13日の条、《 泰衡が使者新田冠者高平、豫州（義経）の首を腰越の浦に持参し事の由を言上す。よって実検を加へんがために、和田太郎義盛・梶原平三景時をかこの所に遣はす。件の首は黒漆の櫃に納れ、美酒に浸し、高平が僕従二人これを荷擔す。観る者皆雙涙を払ひ、兩衫（両袖）を濡らすと云々。》と文学的に「見る者、双涙をぬぐひ、両袖をぬらす」と伝える。

3 木曾塚 鎌倉市大船5丁目・常楽寺の裏山

大船駅より東に徒歩20分位の所に臨濟宗建長寺末寺の山門に黄檗宗の木庵筆「栗船山」と立派な篆額がかかっている。寛元4年(1246)北条時頼の招聘を受けた南宋の蘭溪道隆がこの寺に一時に住した。蘭溪は建長5年建長寺を創建に招かれて開山。ここ常楽寺は木曾義仲の嫡子「清水冠者義高の塚」が寺の裏山にある。(蘭溪は南宋より来朝・元寇政治を危険視と進言する人物)

『新編鎌倉誌』は木曾塚について、《姫宮の西にあり。此塚、本は常楽寺の未申の方十町ばかり田の中に有りて、里民呼で木曾免と云う。相伝。木曾義仲の嫡子、清水冠者義高が塚なり。義仲は江州にて討る。義高は頼朝の婿にて、鎌倉に在しが、ひそかに遁て追手の堀藤次親家が郎黨、内藤光澄に討る。光澄首を持って帰る。実検の後ここに葬る也。『東鑑』に、元暦元年4月26日とあり。延実庚申2月21日に、田主石井某と云う者塚を掘り出して、今の所に移す。塚の内に、青磁の瓶あり。内に枯骨泥に交て有しを洗い清て塚を建しとなり。》とある。(免=税のまぬかれた田か)

『吾妻鏡』元暦元年(1184)4月26日の条 《堀藤次親家が郎從藤内光澄帰参す。入間河原において、志水冠者を誅するの由これを申す。この事密儀たりといへども、姫公すでに漏れ聞かしたまひ、愁歎(泣き悲しむ)の餘に漿水(心痛の病)を断たしめたまふ。理運といひつべし。御臺所(高楼)またかの御心中を察するによつて、御哀傷殊にはなはだし。》大姫の嘆き悲しみを伝えている。木曾冠者義高之墓の石碑文は次のようにある。

「義高ハ義仲ノ長子ナリ義仲管テ頼朝ノ怨ヲ招キテ兵ヲ受ケ將ニ戦ニ及バントス、義高質トシテ鎌倉ニ至リ和漸ク成ル、爾来頼朝ノ養フトコロトナリ其ノ女ヲ得テ妻トナス後義仲ノ栗津ニ誅セラルルニ及ビ遁レテ入間河原ニ至リ捕ヘラレテ斬ラル(略)」

大正15年1月 鎌倉同人會建

木曾義仲は木曾谷で治承4年(1180)挙兵したが、関東の頼朝軍に対抗できず、和解の条件として義仲の子息義高を頼朝に娘婿として差し出していた。元暦元年(1184)父親の義仲が大津(滋賀県)で敗死すると、頼朝は「娘をくれておくのも無駄なこと密かに小冠者を片付けろ」。この知らせを聞いた大姫は夫義高を助けるため、母政子と女装させ侍女たちと鎌倉を遁れ、武蔵入間河原(埼玉県入間市)で堀藤次親家に捕えられ斬首された。義高享年12歳。頼朝の娘大姫は、義高の殺されたことを漏れ聞いて、父頼朝の不法を強く話ったという。困惑した頼朝は大姫の気を和らげるためか、義高を刃にかけた内藤光澄を打ち首にした。内藤光澄はいい面の皮であった。『常楽寺略記』によると、木曾義高に嫁した頼朝の娘「大姫」の死後、母の北条政子が二人のために阿弥陀の3尊を安置して仏堂(栗船御堂)を建立した。北条政子の心の辛さが思われる。二人の出会いは義高11歳、大姫5歳。大姫20歳で死去、薄幸の女性であった。

4 弁慶塚 茅ヶ崎市鶴嶺八幡宮・鳥居をくぐり直ぐ右側

この塚は江戸時代にできた『新編相模風土記』に出ていて、その存在は知られていたが消滅していた。発掘により享保2年「浜之邑」と判読できる破片も出てきた。昭和57年に新しく碑を建て直した。場所は公用地であるが、私地の屋敷続きなので、お断りしてから入れるようにして下さい。



木曾義高の墓



弁慶塚



鶴嶺八幡宮・源頼義創建

弁慶塚の由来 武蔵国稲毛（川崎市）の領主、稲毛三郎重成が亡妻（北条政子の妹）の冥福を願い相模川に橋を架け、建久9年(1198)12月28日、その落成供養を行った。源頼朝は多数の家臣衆を引き連れて、この式に参列、盛大な落成式が行われた。頼朝はその帰途に鶴嶺八幡宮付近にさしかかったとき、義経、行家ら一族の亡霊が現れ、頼朝の乗馬が棒立ちになり、頼朝は落馬して重傷を負い、翌正治元年1月に死去した。後年、里人たちが愛計り義経主従の霊を慰めるため、ここに弁慶塚を造ったと伝えている。（『茅ヶ崎ふるさとの歴史散歩』）

5 源義経を祀る御霊神社 茅ヶ崎市南湖・東海道線平塚進行方向左側

御霊神社の由来は「御祭神・源義経・鎌倉権五郎平景政。御霊神社の創建年代は不詳であるが、古くより御霊山、西雲寺の領有地に毘沙門堂にあった。その後、幾多の変遷を経て現御霊神社になったものである。言い伝えによれば、治承年間(1177—1182)にこの地方一帯を治めていた懐嶋権守平景能がこの毘沙門堂に鎌倉権五郎景政の霊を祀った。建久9年(1198)鎌倉幕府初代将軍源頼朝一行が、相模川の橋供養の帰路、非業の死を遂げた弟の源義経の亡霊が現れ頼朝を襲った。源義経の霊を鎮めるためにこの毘沙門堂に合祀したとも伝えられている。明治元年の神仏分離に際し御霊山西雲寺より独立し現在に至っている。現社屋は昭和4年に再建したものである。」とある。

東海道線小田原方面を見て、右側に「弁慶塚」左側に御霊神社があることは、旧東海道の左右にあったことになる。この場所は東海道馬入川の渡しがあった所、一般庶民の馬入川を渡る水難安全祈願とされていたのではないかと思える。現在の場所は馬入川より1、2キロメートル内陸に入っている。

6 旧相模川橋脚・馬入川（国指定） 茅ヶ崎市下町屋・現在は公園

大正12年9月1日、関東大地震によって、突然に水田から橋脚が地上に橋脚の姿を現した。出現した橋脚は7本とも11本ともいわれている。檜丸太で、最大のもは周囲2メートルもあったという。橋幅は7メートルと推定された。現在の相模川から1、2キロ東の内陸となっていて、旧相模川が氾濫を繰り返して西に移動したと言われている。

建久9年（1198）12月27日稲毛三郎重成の亡き妻（政子の妹）のために相模川に橋をかけ、その橋の落成供養に参列した頼朝は、その帰路に義経や弁慶の亡霊を見て馬が驚き跳ね落馬した。頼朝は翌正治元年正月13日に歿（53歳）した。

頼朝の死の謎 源頼朝伝説の最たるものは、相模川の落馬事件であろう。『吾妻鏡』は建久7年（1196）から、頼朝の死去の建久10年2月までが欠落している。頼朝が建久10年（正治元年）1月13日死去しているが、この間『吾妻鏡』に頼朝の記述が空白となっている。いろいろの憶測はあるが落馬事件が死をもたらした落馬説・病死説・暗殺説等があるが、落馬事件のあったこの地区には昔より様々な亡霊説話が伝わっている。

- ①頼朝なきものにしようと思んだ一味が、橋板をずれるようにしていた。
- ②鶴嶺八幡宮の前に来た時、義経の亡霊に斬りつけられ狂気の刀を振り気をうしなう。
- ③落馬で死去となり、遺体は龍前院に安置され密かに葬られた。

この辺りは馬入川の渡しがあった場所で、鎮霊と民衆に安全祈願のために塚や神社を建立したと思われる。大正12年に、この出土した丸柱は建久9年稲毛重成が架橋した時のものと断定した。よって、頼朝が渡り初め式の帰りに落馬したのはこの橋と考えられる。

（東洋史・和田清、沼田頼輔調査研究による）馬入川の由来については頼朝が橋供養の時、悪霊が出て馬が驚いて川の中に飛び込み死んでしまったことから馬入の名がついた。上流が「相模川」下流が「馬入川」国道の大橋は「馬入橋」となっている。（『茅ヶ崎歴史みて歩き』）



御霊神社



関東大震災で露出した橋脚



現在の脚跡・史跡公園

7 義経を祀る白旗神社 藤沢市本町 御祭神 寒川比古命 源義経公

『白旗神社誌』より。古くは相模一の宮、寒川比古命の御分霊を祀って、寒川神社と呼ばれていた。創立年代は詳しくはわからない。『吾妻鏡』によると、源義経は兄頼朝の勘

氣をうけ、文治5年(1189)閏4月30日、奥州平泉衣川館において自害した。その首は奥州より新田冠者高平を使いとして鎌倉に送られてきた。高平は、腰越の宿に着き、そこで和田義盛、梶原景時によって首実検にも立ち会った。伝承では、弁慶の首も同時に送られ、首実検後、夜の中に2つの首は、此の神社に飛んできたという。このことを鎌倉(頼朝)に伝え、白旗明神として此の神社に祀るようになり、とのことで、義経公を御祭神とし、のちに白旗神社と呼ばれるようになった。(建久9年(1198)白旗神社を勧請・宝治3年(1249)に義経公を合祀)義経没後60年後のこととなる。

『新編相模国風土記』に《白旗明神社を亀形山と呼ぶ。文治5年^{ていせい}廷尉義経、奥州敗死し、其首級実検の後、此地に埋め、其霊を祀りて当所の鎮守とせしと云ふ、義経の首級腰越にて実検ありし事、東鑑に見えたり、(略)例祭6月15日当社及八王寺権現^{みこし}の神輿を仮殿に移し、同21日迄神事あり。》とある。

8 義経公鎮霊碑 白旗神社内。

相州藤沢の御首と800年の時を隔て、宮城県栗駒町^{くりこま}沼倉・判官森御葬礼所の御骸、両地の魂土^{たまつち}を合祀鎮霊碑とした。判官森(栗原市)では義経公の兜を形ちどり、鎮霊も平成11年に建立された。(第5章・判官森義経の墓で述べる)

平成11年6月13日、鎮霊祭を斎行、白旗神社氏子崇敬者、奥州菅原次男氏等4名の参向を賜り、双方の「魂土」を合せ祀り二つの辛櫃^{からびつ}に納めた。一つは栗駒の代表の方に、一つは鎮霊碑に納め、鎮めの神楽羽能・御幣招^{ごへいまねき}の舞を二座奉納して鎮魂祭を滞りなく終了した。(白旗神社氏子広報『ささりんどう』5、6号より)



白旗神社



源義経公鎮霊碑



弁慶首塚

源義経生誕850プレシンポジウム 平成11年7月25日、義経の胴塚がある宮城県栗原市と首塚のある神奈川県藤沢市の両氏子により、2つに分かれていた義経公御分霊は合祀され、栗原市に鎧型碑^{よろいがたいしづみ}、藤沢市に兜型碑^{かぶとかたいしづみ}がそれぞれ建立され、その具現化として「義経願成甲冑^{よしつねがんじょうかつちゅう}」が誕生し、その日を義経の誕生日と定め毎年生誕祭が催行されてきました。(源義経生誕849年シンポジウム実行委員会代表 菅原次男氏・論文集より)

9 弁慶首塚 白旗神社から東南へ徒歩で約八分、常光寺の裏、八王寺社跡にある。このあたりに弁慶の御霊を祀った八王寺社が建てられた。この八王寺社というのは藤沢市藤沢の浄土宗常光寺のことで山号を八王山と称している。（『わが住む里』36号より）

10 義経公の位牌・^{しやうけんじ}莊嚴寺 弁慶首塚の東側 白王山

莊嚴寺の始まりは平安時代の末期、元暦元年（1184）覚憲僧都による。その後寺は荒廃するが、宝暦年間（1751—64）に白旗神社の東に再建。白旗神社が天保6年（1835）で完成する3年前に源義経の位牌がつくられたという。明治8年まで白旗神社境内に寺宝としてあった。

表に	白旗大明神神儀
裏面に	清和天皇十代御末源義経公
	御誕生平元己卯歳
	文治五己卯閏四月卅日卒御年三十七歳
	崇 白旗大明神 天保三辰歳法印宥全調之

と記された位牌が保存されている。高さ40センチ、台上の高さ54センチ・巾18センチ木製黒漆塗りである。天保6年(1835)義経没してから644年後のこと。位牌に御年37とあるが、31歳の誤記である。義経公は白旗神社に神として祀られ、莊嚴寺に精霊が安置されている。（『わが住む里』藤沢市中央図書館蔵・36号より）

『我が住む里』著者小川泰堂（江戸末期の郷土史家）によれば、《 藤沢の河辺に金色なる亀、泥に染たる首を甲に負ひ出たり、里人驚き怪しみけるほどに、側らにありける児童^{たちま}忽ち^ちに狂気のごとく^{ひじ}肱を張「我は源義経になり、薄命にして^{ざんしや}讒者の毒舌にかかり身は奥州高館の露と消るのみならず、首をさへ捨られ^{えんこん}怨魂やるかたなし、汝等よきに^{とむら}弔ってくれよ」といい終りて倒ぬ、諸人恐れてこれを塚となせり、これにより鎌倉御所に於いて義経の^{おんりよう}怨霊^{たた}さまさまの祟りをなして右大将を悩ます、これに依って首塚の北山上に社をいとなみ、神として尊とみ御法楽ありける。その時鎌倉在勤の諸侯もこれを尊信し社の東には諸木、西には松を植えて奉納ありしよし社説に見ゆ》とある。（『義経と藤沢』平野雅道著より）



義経公の位牌



義経公首洗い井戸



源義経公820年鎮霊祭

義経の首実検の流れ 『吾妻鏡』文治5年（1189）閏4月30日の条《 今日陸奥国において、泰衡源豫州（義経が予州守であった）を襲ふ。（略）泰衡兵数百騎を従え合戦す。豫州持仏堂に入り、まづ妻22歳、子女子4歳を害し、次に自殺すと云々。》とあり、鎌倉へ義経の自害の知らせが届いたのは5月22日。頼朝は6月9日に亡き母の供養の予定があるので、その前に義経の首級が到着されては困るので、道草で遅らせよう奥州へ飛脚をだしている。泰衡の使者新田冠者高平は腰越の浦で供養の儀式が終わるまで待たされた。

同6月13日の条《 泰衡が使者新田冠者高平、豫州の首を腰越の浦に持参した。首実検を和田太郎義盛・梶原平三景時等がたちあった。この首は黒漆の櫃に納れられ、美酒に浸して、高平の僕従2人これを担いでやって来た。》首級を見て、梶原は「義経ではないかもしれない」といえば、和田は「義経の首として届けでている以上、義経に決まっている」このことにより43日過ぎた義経の首級の検分し、「さらし首の処刑」で終了した。あれ程義経追討を脅迫したのだから、きっと頼朝から「ごくろう」のねぎらいを期待していた使者であったが、なんの沙汰もなかったと伝えられる。鎌倉政権は大きくゆらぐことなく、現在で云えば防衛長長官と国家公安委員長の2人が確認している様なものである。大政治家頼朝は、義経の首の真偽など眼中になく、藤原奥州を制覇して、朝廷を外した武家政治確立の最終段階に入っていたといえる。

11 伝・源義経公首洗い井戸 白旗神社南方・徒歩5分・本町白旗交番を入る

『吾妻鏡』によれば兄頼朝に追われた義経は奥州で亡くなり、文治5年に藤原泰衡から義経の首が鎌倉に送られてきた。義経の首は首実検の後、腰越の浜へすてられ、それが潮に乗って境川をさかのぼり、この辺りに漂着したのを里人がすくいあげ、洗い清めた井戸と伝えられる。『我が住む里』によれば「義経公の首をこのところに埋め塚とし、村人うやまいおそれ、往来にもかならず礼拝せしより此名あり、上古はこの塚の上に大木の松ありしが、今は枯失たりと老人いへり」とある。（『義経と藤沢』平野雅道著より）

また「首洗い井戸」には武蔵坊弁慶之霊と亀井坊（亀井六郎重清）伊勢坊（伊勢三郎義盛）片岡坊（片岡八郎弘津経）駿河坊（駿河二郎）の股肱の臣の霊も合祀されている。

その後の義経の首 『特集藤沢を知る』「義経の首塚」126号によれば「頼朝は和田・梶原からの報告を聞いたのみで、義経の首は見えていないと言われる。それから義経の首がどのように扱われたかは史書にはみられない。腰越の浜に捨てられたという言い伝えもあるが常識的に考えれば、首はさらされても、最後は誰かの口添えで埋葬されたはずである。一説では、京都から逃れた義経を匿った罪で、頼朝の命により幕府に呼び出され、鎌倉に滞在していた牛若時代の義経の師、聖弘上人が首を貰い受け藤沢に埋葬したという

言い伝えもある。ここ藤沢は平安時代末期、東海道と東山道の連絡道であった可能性もある。首実検後、当時の鎌倉の玄関口腰越近辺には葬れなかったこともたしかで、片瀬をのぞくと、鎌倉に最も近い社寺である白旗神社（藤沢）が選ばれたことが考えられる。」と解説されている。

ここ藤沢市、横浜市戸塚地区は坂東八平氏（桓武平氏流の平良文を祖とする諸氏・秩父氏・上総氏・千葉氏・中村氏・三浦氏・鎌倉氏等）の鎌倉権五郎景正の孫の景宗が^{おおば}大庭御厨（藤沢市）に因んで大庭氏を称した地域となる。大庭景宗の^{しよし}庶子（正妻でない子息）、鎌倉郡俣野郷に^{またの}俣野五郎^{かげひさ}景久が住んでいた所でもある。

『平家物語』によれば景久は平家に運命を賭けて北陸^{くりからとうげ}倶利伽羅峠の戦で木曾義仲に敗れ^{かがのくにしのほら}加賀国篠原で討ち死にしている。『平家物語』は伝える。^{さねもり}齊藤実盛が平家方の敗色が濃くなった時、景久に向って木曾義仲軍に合流してはどうかと問うと、景久は、「われらは、なんといっても東国では人に知られた名のある者、旗色の威勢のいい方に着いたり、あちらこちら参るのは見苦しい。方々の心は知らない。景久はこの合戦で平家方として討ち死にする覚悟でござる。」と言うと、^{みども}齊藤実盛は笑って、「実は身共の決心を聞いたまでのこと。実盛はこのたびの戦いに討死しようと覚悟をきめもうしていた」と言う、一同この意見に同意し最後の酒宴に連なった者は皆北陸の地で討死した。俣野五郎景久の武勇の誉れだからこそ『平家物語』に語られたのであろう。

^{じしゅう}時宗（一遍宗祖）第4代は^{とうたくさんむりょうこういんせいじょうこうじ}藤沢山無量光院清浄光寺通称^{ゆぎとうじ}遊行寺を建立したのは景久の子孫の^{どんかい}呑海上人である。白旗神社の周辺には義経伝承が生々しく残っていることは、源平の争いで辛苦をなめた人々によって義経の靈魂を鎮め、義経の首を丁重に葬ったことは推考される。



義経公大鎮靈祭・白旗神社氏子衆

第2章 埼玉・福島周辺伝承地 5ヶ所

1 静御前の墓 埼玉県栗橋町・JR栗橋駅前（高柳寺跡）

義経は吉野山で静と別れる時「叔父にあたる土岐出羽守光行が武蔵国葛飾郡伊坂郷の高柳寺の住職をしているから、そこへ訪ねよ」と言い渡して別れた。

安政5年(1858)に出版された赤松宗旦の『利根川図志』によれば、静の舞衣のことが記されている。光了寺はもと栗橋の南の高柳村にあって、そこに静を葬り、舞衣がこの寺の秘宝となった。寿永2年(1183)に日照りが続き、この舞衣を着けて舞ったところ、一天にわかにかき曇って雨が降ったという。現光了寺（古河市中田・小谷部全一郎の墓がある）には過去帳と静の位牌があり戒名は「巖松院殿義静妙源大姉」。

静女塚碑文の一部 全漢文・明治21年内閣書記・巖谷修書

「栗橋停車場の東百歩、古家有り。伝わるに舞妓静女の墓となす。曰く静女は已に鎌倉を通る。廷尉は陸奥に在り。一罷婢を従いて間関、東下す。此に至り廷尉、害に遭ふを聞く。一口して遂に絶ゆ。村人之れを憐れみ高柳寺の僧に請うて誦経し以って高柳寺に葬る。後、中田に移り光了寺と改称す。静女の錦の段舞衣を蔵す。（略）」

静女之墳 静御前は磯の禅師の一人娘として仁安3年(1168)生まれと伝わり、白拍子と呼ばれ美しい舞姫。干ばつが3年も続き人民は困窮していた。後鳥羽上皇が寿永元年、京都神泉苑に舞姫百人を選び、「雨乞いの舞」を命じた。最後に静が舞うと、にわかにかき曇り雨が3日3晩降り続いたという。静は15歳でありながら才能を賞賛され、「蝦蟇龍」（雨竜・螭竜 雨を降らせる竜）の錦の舞衣を賜った。この衣は現在古河市中田町の光了寺に保存されている。平家追討に功績のあった義経に寵愛を受けたのもこの頃である。奥州平泉に落ち延びた義経を慕って平泉に向い、下総下辺見付近で義経討ち死の報を耳にして、悲しみにくれ仏門に入り義経の菩提を弔いたいと京都に戻ろうとしたが、馴れぬ長旅の疲れで病気になり、文治5年5月15日この地で亡くなった。享和3年(1803)関東郡代中川飛驒守忠英が建立したといわれている。（静御前遺跡保存会）又、静御前墓の側にある義経招魂碑は『成吉思汗ハ源義経也』の著者小谷部全一郎が私費で建立したもの。小谷部は『静御前の生涯』で静を理想の女性として描いている。

2 静御前堂 郡山市大槻町大田地区

郡山市観光協会の説明は、「静御前堂は里人が静御前の短い命をあわれみ、その霊を祭ったのがこのお堂であると言い伝えられています。静御前は、平家滅亡後、頼朝に追われて奥州の藤原秀衡のもとに下った義経を慕って北に向かい、この地までたどりつきましたが、すでに義経は平泉にたつたと聞き、途方に暮れてついに池に身を投じたという言い伝えがあります。かつぎ（きぬの着物）を捨てた所が「かつぎ沼」、身を投じた池が「美女池」である。」と解説されている。静御前の気持ちを察してのことなのか、地元では静御

前堂に参拝するときは「恋人同士や若夫婦連れで参詣するものではない」と昔からの言い伝えがある。俗説に片方が不幸になる話をそっと教えてくれた人がいた。



静御前の墓・栗橋町



小谷部が建立した招魂碑



静御前堂・大槻町

3 義経の腰掛松・弁慶の硯石 すずりいし 福島県伊達郡国見町石母田 町指定天然記念物

『南部叢書 三・平泉雑記』相原友直著 (1703 - 82) 藩医・歴史文化記述者の巻之二に
《 越懸松・硯石 伊達郡国見山ノ下ニ義経ノ腰掛懸松アリ、樹ノ围九尺程高一丈ホド枝
篠四方ニ垂レテ地上ニハビコル事十二三間ホド也、奇異ノ古木ナリ、弁慶硯石右ノ松ヨリ
四五町ヲ隔テ南ニ當リ畠ノ傍ニ在リ、四方七、八尺餘ノ石面ニ式尺餘ニ一尺四五寸程ノ拗
ミ有テ四時水ヲ貯テ旱魃ノトキト雖トモ潤ルル事ナシ。》とある。

義経腰掛松の由来は、義経の東下りに陸奥国と都の間を往来する金売吉次とが同行した時に腰掛けた松と伝わる。この古松の株に腰掛けて休息をとったことが松名のおこり。初代の腰掛松は文政4年に松根元の蜂退治のために消失してしまった。現在の木は2代目の樹齢2百年といい、松の祠は初代松の株に小さな「義経神社」が祀られている。

硯石 腰掛松の南側に小高い硯石山の頂上に弁慶の硯石といわれる岩がある。『信達二郡村誌』には《 石面に縦二尺余り、横一尺四五寸許りなる、硯の海（穴のような窪み）を穿って常に水を湛へたり、百日の旱魃にもいまだ合って、潤ることなしと、相伝いて弁慶が硯という。》とある。

『東遊雑記』古川古松軒著に《 石田村という所に義経腰かけ松とて名木あり、幹の大きき二抱え半、高さおよそ一丈、枝葉四方に垂れて枝の地に入ること二か所、南北十間余、東南十二間余、周り百七十歩なり。この地より七、八町隔てて、弁慶の硯石とて方三尺余り、凹なる岩あり。これを硯として着到を記せしという。手水鉢などにすれば至ってよき石なり。水の二斗も入るべきか。》と記している。

（『東遊雑記』古川古松軒 (1726 - 1807) 江戸期将軍が代替わり毎に諸国諸藩の民情を視察する幕府直轄の巡見使制度あり、古川は随行者兼記録係で、東北地方見聞記を全12巻を幕府に献上している）

4 庄司戻しの桜（霊桜碑） れいおうひ 白河市表郷 おもてごう 中野字庄司戻（白河の関の近く）

治承4年、源頼朝の挙兵を知り奥州平泉から鎌倉に馳せる源義経に対し、信夫の庄司佐

藤基治は自子佐藤継信・佐藤忠信を従わせ、決別するにあたり「汝等忠義の士ならばこの桜の枝が生づくであろう」と諭して携えていた1本の桜の枝をこの地に突き立てた。その後、戦いに臨み兄弟共に勇戦し、義経の身替わりとなって討死した。桜樹はその忠節に感じて活着^{かつちやくほんも}繁茂したという。後の天保年間(1830 - 44)野火によって焼失した後も、新しい孫生え^{ひこば}(株根から出た芽)次々と出て、美しい花を咲かせる里桜と伝う。(白河市教育委員会・白河市指定史跡)



義経腰掛松と義経神社



弁慶の硯石



庄司戻しの桜一分咲き

5 弁慶の腰掛松(泉の1葉松) 南相馬市原町区町池

福島県教育委員会の説明に「推定樹齢400年の巨木といわれる。一般的に黒松は二葉のものが多いのですが、この松樹は一葉をまじえる貴重な松で、大正時代にはもう1本あったといわれます。次の伝説が伝わります。義経は泉長者^{いずみちやうじや}に軍資金を出すよう申し付けが、長者は従わないので、弁慶は長者の屋敷を焼き払い、この松に腰掛けて燃えさかる屋敷を眺めてという。」とある。(県指定天然記念物)

6 阿津賀志山防塁 福島県伊達郡国見町

頼朝は院に対し泰衡^{やすひら}追討^{せんじ}の宣旨を出して貰う様に何度も要求したが、容易に許しがでなかった。懐^{ふところ}嶋^{しま}権^{ごん}守^{のかみ}平景能(現神奈川県茅ヶ崎市)の助言は「軍中では將軍の命令を受けるもの、天子の詔^{みことり}は関係はない。ましてや泰衡は源氏の累代の御家人だ」この言葉に頼朝は勇気付けられ、文治5年7月19日、28万4千騎の大軍を出動させた。阿津賀志山の合戦の様を『吾妻鏡』文治5年(1189)8月10日の条《二品^{にほん}(頼朝)すでに阿津賀志山を越えたまふ。大軍木戸口に攻め近づき、戈^{ほこ}を建て箭^やを傳ふ。しかれども国衡たやすく敗傾しがたし。重忠^{はいけい}・朝政^{あつかし}・朝光^{あつかし}・義盛^{あつかし}・行平^{あつかし}・義澄^{あつかし}・義連^{あつかし}・景簾^{あつかし}・清重^{あつかし}等、武威を振ひて身命^{みことり}を棄つ。その鬪戦^{こえ}の聲、山谷を響かし郷村を動かす。》と頼朝軍進軍の様子が生々しく伝えている。(二品 = 律令制親王の位階の第二等目)

この遺跡は頼朝鎌倉軍が奥州藤原氏攻略に進軍してきた時、平泉の藤原泰衡の異母兄藤原国衡^{くにひら}を大将として(2万騎とも)鎌倉軍を迎え撃つために築いた防塁遺構である。現厚樫山^{あつかしやま}(289^{メートル})の南麓から3、2キロ南下して阿武隈川^{あぶくま}近くまで跡が続き、今も原形をとどめている。『吾妻鏡』では口五丈堀と記載されており、1971年の調査で「二重堀^{ふたえぼり}」

の幅も15尺とほぼ同じ、堀の深さ1、5尺から2、8尺、薬研堀（V字堀）も確認されている。8月8日から10日にかけて激戦が展開された古戦場跡である。

鎌倉軍の軍勢は、東海道を千葉常胤、八田知家、北陸道は比企能員、宇佐美実政、東山道は頼朝が進んだ。藤原軍はこの防塁を異母兄弟の藤原国衡軍2万で対峙、鎌倉軍をここで阻止する作戦であったが、あまりにも藤原軍の軍事力が小さすぎて合戦前から勝負はついてたといえる。藤原氏本営は国分原鞭楯（仙台市）に進軍し泰衡が指揮し、白瀬川、名取川に大縄を引いて柵として構えていた。国衡軍の陣地はここ阿津賀志山に軍勢を固め阿武隈川の水を堰き止めて、鎌倉軍をここで阻止する作戦を用いたが、畠山重忠の指揮する工兵隊はここをわけなく陣地を切り崩す3日間で落した。藤原国衡は出羽国へ逃亡したが、現大川原町金ヶ瀬辺りで畠山重忠の門客、大串次郎（武蔵七党の系譜）に討れた。奥州合戦は藤原軍の本格的に戦ったのはここ国見と、もう1ヶ所は鎌倉軍に戦いに挑んだ所は宮城県栗原市津久毛橋の戦いであった。圧倒的な軍事力の差に藤原泰衡は自から平泉の館群に火を放ち、蝦夷国を目指し逃亡の途中に比内郡贄柵（秋田県大館市二井田）に立ち寄りよったところ、家臣の河田次郎の変心により殺された。享年25歳とも伝わる。頼朝は28万4千騎の兵を引き連れて陣ヶ岡に7日間布陣していた。そこへ河田次郎が泰衡の頸を抱え、息急き切って陣ヶ岡にやってきた。『吾妻鏡』文治5年9月6日の条《河田次郎、主人泰衡が頸を持ち、陣岡に参じ、景時をしてこれを奉らしむ。（略）しかるに譜第の恩を忘れ、主人の首を梟する科、すでに八虐を招くの間、抽賞しがたきによって、後輩を懲しめんがために、身の暇を賜ふところなりてへれば、すなわち朝光に預け斬罪に行はると云々。》河田次郎は褒美を期待しながら頼朝の前に出たが「累代の恩を忘れ、家来が主を殺すとは不とどき至極である」と言われ小山朝光に預け斬首された（岩手県編・余話錦神社の頁で述べる）

余話・奥羽の由利八郎惟平という兵 秋田県沿岸南部の由利郡の武士。鎌倉出羽進撃軍と戦い捕虜となり、陣ヶ岡（紫波郡紫波町）に連れられて来た。由利八郎を捕えたと言乗り出た鎌倉武士2人いたので、どの武将が由利を捕えたかの確認のために、由利を最初に訊問に当たったが梶原景時は敗者を見下し態度に由利八郎は怒り、「わが主人は秀郷將軍（平将門を討つ）の正統であり、3代にわたって鎮守府將軍になった。それに対して、お前の主人は兵衛佐にすぎないではないか。ましてやお前と我とでは優劣はない。勝敗は時の運、運が尽きて囚人となるのは勇士の常だ」と述べて、応じなかった。頼朝は景時の無礼を悟り、畠山重忠に交替させた。重忠は自分から敷き皮を持ち寄って八郎を座らせ、礼を正して尋ねると、今度はきちんと答えた。頼朝はみごとなふるまいに感じ入った。『吾妻鏡』文治5年9月7日条《この男の申状をもって心中を察するに、勇敢の者なり。尋ねらるべき事あり。》口訳で、《頼朝は「お前の主人泰衡は、奥羽両国を支配

し17万騎を従えながら、百日も支ええず、たった20日のうちに一族みな滅び、しかも河田二郎1人に殺されてしまったではないか」と挑発すると、八郎はすかさず応えた。

「そういうあなたのお父上義朝殿は、海道15カ国を領しながら、平治の乱のとき、1日も支えられずに零落したではないか。数万騎の大將だったのに長田の庄司のために簡単に命を落とされた。昔と今とで甲乙つけられるだろうか。藤原泰衡はたった2カ国にすぎなかったが、その勇士たちは数10日間、あなたを悩ませたではないか」》と。

筆者が奥州藤原氏や千葉氏の講演などでお世話になっている大矢邦宣先生（平泉郷土館長・盛岡大学教授）は著書『奥州藤原氏五代』に次のように述べられている。「頼朝はぐうの音もせず、幕を下したという。そしてまもなく由利八郎は赦されて由利郡に帰った。坂東武者は奥州征伐を通じて、みちのくの武士から「武士道」を学んだ。頼朝は鎌倉に帰るなり永福寺建立を命じた。奥州征伐の後味の悪さからきたものか、数万の怨霊をなだめるため、因縁の業苦から救うため、との大義は表向きの話で義経や泰衡の怨霊封じであろう。世の人々は、朝敵でなく頼朝個人の宿業のために誅殺された、その鎮魂の為の建立であることは判っていた。鬼門に当たる北東方（鎌倉鶴岡八幡宮からみて）に建て、怨霊封じとし、それは中尊寺の二階大堂を真似たものであった。」

現在は永福寺跡だけが残り、地名は鎌倉市二階堂になっている。



弁慶の腰掛松



阿津賀志山防塁跡

第3章 ^{かねうりきちじ}金売吉次 伝説地探聞 17ヶ所

義経伝説から見れば金売吉次は脇役伝説となるのだが、金売吉次が奥州と都を結ぶ、現代から見れば総合商社のセールスマンのイメージに思われるが、この時代は奥州と都間の「通訳者」（都語と奥州語の通詞）が仲立ちしなければ交易が成立しない時代と思われる。筆者が30年前に聞いた話であるが「東北弁が分らなければ、津軽弁は尚分らない」と言われたことがある。この時代の金売吉次は、奥州言葉や蝦夷言葉まで通じていたと考えられる。都言葉や貴族のしきたりや武家の関係など知り尽くした、当時の政治経済の情報提供者、武家と民間の表裏の交渉もできる、一流の黒幕的な人物と推察できる。物と金がうまく交換できることは、その領地を治めている地頭との認可や保護が必要なはずであるが、現実にはシルクロードの隊商のように、大人数の群れを作り、僧侶、管理者などの赴任地へ同行して、護衛付の隊商のような移動の長旅であっただろう。それでも強盗にあったり、病気になったり、災害にあって命を失う人が多々あったことが分る。

吉次伝説は『平家物語』は「三条の^{きつじ}橋次という商人」、『源平盛衰記』は「五条の^{きつじ}橋次末春と云う金商人」、『義経記』は「三条の長者、^{きちじのぶたか}吉次信高」、『平治物語』は「義経の郎党^{ほりやたらうかげみつ}堀弥太郎景光」、『吾妻鏡』に文治2年9月22日条《京都において豫州（義経）一党、堀弥太郎生け捕られる》『玉葉』に文治2年22日条《伝聞、九郎義行（義経）郎従2人、堀弥太郎景光、兵衛尉忠信（佐藤忠信）擄取了》とあり実在の人物のようである。『義経記』（義経没後2百年後成立）には次のよう語られている。《京都の三條に吉次^{のぶたか}信高という大金持ちがいて遮那王（義経の幼名・16歳まで）を奥州藤原秀衡公に引き合わせ、「染皮百枚、鹿の皮百枚、鷲の羽百尻、駿馬三百疋に銀張りの鞍、貝を^{ぞうがん}象眼した唐櫃^{からびつ}のふたに砂金を一杯授けられる」吉次はもう何も不足はないと喜んで京へ戻っていった。》とある。

これだけのご褒美を受けることは、只者でないことが知れる。当時においても膨大な金額、この褒美に引き合うだけの将来へ見つめた「おいしい話」を秀衡に耳打ちしたことはかなりの黒幕である。遮那王が奥州藤原氏に招かれたことは、藤原氏の将来を見据えた選択しカードを秀衡は得たことになり、又、秀衡の野望も垣間見ることができる。この時代は奥州藤原氏の財政と軍事力の自信が窺がえる。金売吉次と藤原氏の関係は、炭焼き藤太伝説のある通り産鉄伝承と深くかかわった人物との関連性も指摘されている。2代目藤原基衡の時代に、^{そうほんいつさいきょう}宋版一切教（経・律・論の仏教聖典）を手に入れるため、10万5千両の大量の砂金を北上川を経て塩釜から船で大阪、博多へ運ばれ、中国の宋へ送られた話は有名である。奈良大仏の^{とぎん}鍍金のために、宮城県涌谷町から産出の砂金9百両（13kg）が天平21年（749）送られた。鍍金から金の換算すればトンを超える数量となる。途方ない量となれば奥州以外の蝦夷地からも産出した説が生まれた。（『金売吉次の事蹟』金成町）

『宋史』の「日本伝」に入栄僧・裔然（東大寺）が984年に中国へ渡り、日本の情報を伝えている。「東の奥洲（陸奥）は黄金を産し、西の別島（対馬か）は白銀を出し、それを貢賦（みつぎ）とする。」と中国側に記録がある。又『日本書紀』天武天皇三年「対馬国銀始めて当国に出づ」とある。この情報がやがてマルコポーロの耳に入り『東方見聞録』の中で黄金の国ジパングという話に繋がるのが史実あるらしい。

1 吉次観音・吉次沼 千葉県印旛郡本埜村

昔、吉次三兄弟の墓があった所は吉次沼と呼ばれている。この謂れは『利根川図志』赤松宗旦（2代目赤松宗旦1806—1862）が吉次沼を紹介している。《 埜原新田の内、行徳新田といふ所の堤の内に入り。伝傳ふ、むかし金賣吉次信高兄弟、陸奥国に往来して此所を過ぐ。隣村萩原村に荒神左近といふ強盗あり、吉次兄弟を殺して貨を奪ふ。土人墳を作り樹を植ゑて跡をしるす。是を吉次の墓といふ。宝永元年の洪水に、此所の堤切れ墓掘れくづれて押流さる。其跡方二百歩ばかりの沼となる。今堤を吉次沼といふ。又隣村中根村戸崎といへる所に観音堂あり。十一面観世音なり。是金賣吉次の守本尊なりといふ。靈驗あらたなり。》とある。又、大正5年発行『千葉県印旛沼本埜村誌』中根観音堂について「何時のころかわからないが、絹売吉次吉内という兄弟がこの地へ商いに来て、安食町（成田市北西）方面から船出したところ途中で腹黒き船子に襲われ、所持金を奪われ、水中に突き落とされ死んでしまった。この兄弟は常に信仰して肌身離さず持っていた観音仏（一寸八分）が、中根の観音堂に祀られ、吉次観音という堂は中根村戸崎の丘の上にある。」とある。観音堂の説明板には「奥州多賀の住人金売吉次信高本名堀弥太郎兄弟、この地で横死。以来この山に籠燈かかる。これ吉次の怨霊なりと守本尊十一面観音を祀る。故に吉次観音とも言う」とある。（本埜村教育委員会）



吉次沼



吉次観音堂



壬生・金売り吉次の墓

2 金売り吉次の墓 栃木県壬生町・稲葉地区・壬生街道

松尾芭蕉の『奥の細道』、芭蕉に随行した曾良随行日記に「壬生ヨリ楡木へニ里。ミブヨリ半道バカリ行テ、吉次が塚、右ノ方二十間バカリ畠中ニ有。ニレ木ヨリ鹿沼へ一里半。」とある。（楡木・現鹿沼市内）

『壬生町史』に「壬生には古い街道がはしっている。このあたりには、金売り吉次墓、巴御前墓、朝比奈三郎墓などがある。金売り吉次墓は上稲葉の街道脇の田中にある。伝説では、源義経を奥州まで連れ出した商人の吉次が、今度は頼朝におわれて逃げる義経の供をしてこのあたりまでたどりついたが、ここで死んだのだと言われている。しかし、義経の奥州への逃げ道は一般には北陸路から羽黒への道だったとされているし、あえて鎌倉幕府の御家人の多く住む関東を通過したとは考えにくいから、この伝説が史実であるとは思えない。しかし、この一帯は「吉次内」という字名で呼ばれ、案外古い伝承であることもわかる。壬生街道は日光街道とも呼ばれ、江戸から21から25里目にあたる。」

壬生町のガイドブックには、「兄頼朝に追われた義経と同行し壬生の稲葉の里までたどりついたが、ついに病に倒れ死去した。里人の憐れみにより塚を築いたといわれるが、塚は現存しない。墓石と称する丸石を祠でおおって「吉次の墓」として町の指定史跡になっている。また近くにある小観音堂（二尺五寸角位）は、吉次が守り本尊として持っていた観音像を祀ったものという。」と説明されている。当時の人々は長旅に護身のお守り観音像を懐に持ち歩いていたことがわかる。（小観音堂は吉次の墓写真の右側にある）

3 伝称・吉次塚 栃木県足利市久保田町^{あしかが}

この吉次塚については足利市へ電話で問い合わせしてみた。すると、昭和50年頃、51号線バイパス工事ため撤去、遺跡地は何もないという。何か手がかりを探そうと再度、足利市社会教育課を訪ね、その吉次塚の写真は足利図書館にあることが判かった。

吉次塚伝説は次のように説明がある。《「高さ約 十五尺、周囲十五間の円墳、義経の従者金売吉次奥州への帰路、此地にて病没し埋葬の処といふ。」と伝説有り、吉次が義経のお供してこの地に通りかかったとき病気になり「東に向いて日の当たるところに」と遺言して死んだので葬ったところと伝えられ、土地のひとは「吉次塚」とよんでいます。この金売吉次の後の名が「堀弥太郎光景」といわれ、鞍馬山で対面したのがきっかけとなり、最初の奥州行きから自分が40歳で死ぬまで献身的に義経のために尽くした義侠の人だったようです。また、この吉次塚から約5百^ほ愛宕山中学校の西の方に「宿尻橋^{しゆくじりばし}」と「別れ橋」があり、いずれも吉次にゆかりの伝説が残されています。》と解説がある。写真から見ると古墳とも思える。（『足利の伝説』より）

4 伝・金売吉次兄弟の墓 福島県白河市・白河南湖^{なんご}

白河市教育委員会説明は、《 3基の石塔は、中央が吉次、左が吉内、右が吉六のいわゆる「金売吉次さん兄弟の墓」と伝えられています。石塔は白河石（安山岩^{ぎょうかいがん}質凝灰岩）で作られた宝篋印塔^{ほうきょういんとう}ですが、後世に積み替えられたため、別種の石造塔の一部がまじっています。承安^{じょうあん} 4年(1174)吉次兄弟が砂金を交易して、奥州平泉と京とを往来する途中、

藤原太郎入道を首領とする群盗に襲われて殺害され、里人がそれを憐みこの地に葬り供養したと伝えられています。また、源義経がここに立ち寄り、吉次兄弟の霊を弔い、近くの八幡宮に合祀したと伝えられています。石塔の石囲いは元治元年(1864)の建立です。土地の人々から「吉次様」の墓として信仰されています。》と説明されている。又、歴史のまち「しらかわ」ガイドブックに、「この付近には小金橋、金分田、小金田などの黄金にちなんだ地名もあります。」とある。

『平泉雑記』相原友直・卷之三・三條^{サンジヨウ}吉次に、《奥州白川ト白坂^{カゴハラ}駅トノ間ニ華龍原ト云ル処アリ、海道ノ傍^{ソバ}ニ小社有リ、昔三條吉次・同吉内・同吉六ト伝ル兄弟ノ者ハ毎年都ヨリ黄金商ノ為ニ平泉ニ下リタルガ、或時^{アルトキ}此所ニテ盜賊ニ害セラル、此小社ハ其墓ニ祠ヲ立シナリト伝、葛籠^{カワゴ}ヲ捨置^{ステオキ}タル地故ニ名ツクルトゾ、又分散橋^{ブンサンバシ}トイフ小橋有リ盜賊金ヲ分散^{ブンサン}セシ処ナリト云。》と記述がある。



伝・吉次塚昭和46年頃



伝・金売吉次の墓



同所にある八幡神社

5 義経と吉次のゆかりの八幡神社由来

《皮籠^{かわご}村、旧名葭野宿^{あしのしゆく}ト云ウ。八幡神ヲ祭ルハ天喜^{てんき}年間(1063—58)陸奥守源義家朝臣下向ノ時、八幡大神大幡^{おほつた}此処ニ建テ、人馬ノ勞ヲ少時休ムルニ、白鳩一^{しらつば}双来リテ旗上ニ舞ケレバ、任国ニ入ルノ古端ナルト木切草ヲ結テ、神祭セシ給ウヨリ土人国司ノ任恵ヲ仰^{あおぐ}、社殿ヲ建テ永ニ鎮護^{ちんご}ヲスル。年経テ治承年間、強盜藤沢太郎ガ金売吉次ヲ害シ分散セリ。其ノ包^{つづ}メル皮葛籠^{かわくずかご}ヲ捨テ置ケルニ依リ、皮籠村ト云、今猶小金橋、金文田ノ字名ハ金銀配分^{はいぶん}セル処ナリト云。吉次ノ靈魂^{れいこん}土人ノ崇^{あがめ}ムルコト、枉^{きよう}ケルニヨリ八幡祠ニ合祀シ相殿トス 明治五年棟札ノ由緒ヲ写ス。》と由来書がかかげてある。

『奥ノ細道・曾良随^{そら}行日記』には「関明神、関東ノ方ニ一社、奥州ノ方ニ一社、間廿間^{ばかり}計有。両方ノ門前ニ茶ヤ有。小坂也。コレヨリ白坂ヘ十町程有。古関(白河の関)ヲ尋テ白坂ノ入口ヨリ右ヘ切レテ旗宿ヘ行。」芭蕉と曾良は関明神から白坂ヘ行き、吉次の墓の手前で右に曲がって旗宿ヘ向かっている。この吉次の墓は知らなかったかもしれない。

『東遊雑記』古川古松軒著・天明8年(1788)5月10日「白川城の南一里街道筋に小社あり、これを吉次・吉内・吉六の社という、社の後に無銘なる小石の墓3つあり。伝う、奥州の金売り吉次兄弟のしるしなりと。(略)予按ずるに、吉次は今いう呉服屋のこと、

秀衡^{はんじょう}繁昌^{はんじょう}のころ、かの館に出入りし、都通いせし商人ならん。この節金花山^{きんかざん}（金華山）より黄金多数出でしゆえに、これを都へ持ち上りしことなどありて、金売りの称名を得しものなるべし。」と記述している。

6 金売り吉次・吉内・吉六3兄弟の堂 会津若松市^{ふくしやうじ}福昌寺 内・高瀬^{たかせ}観音堂

『福島県北会津郡郷土誌』大正6年の復刻版・旧蹟に次のようにある。「神指村高瀬福昌寺内ニ在リ相伝^{じょうあん}フ承安^{じょうあん}ノ頃金賣吉次吉内吉六ト云フ者當ニ都鄙^{とひ}（都と田舎）ノ間ニ往来シ此処ヲ過ギ村東ノ川ヲ渡リシニ水俄^{にわ}カニ漲^{みなぎ}リ舟^{たちまちこわれ}忽^と壊^ひレ吉六溺死セリ其冥福ヲ祈ラン為メ観音ヲ建立シ黄金ヲ観音ノ軀^{しんちゆう}中ニ納メ後、来修理ノ用ニ備ヘシニ永禄天亀ノ頃住僧像ヲ破リ金ヲ盗ミ去リシト云フ、石塔ノ高サ三尺、福昌寺殿源宗了淵大居士、承安二壬辰天三月二十日ト彫附アリ吉六ハ兄吉次吉内ト義経ノ供トシテ京都ヨリ奥州ニ下リシテ以テ名アリ」とある。

高瀬観音堂の説明板に《 承安2年(1172)金売吉次、吉内、吉六という者^{おうこがわ}応湖川を船で渡ったところ、川水にわか増水して船は転覆、吉六は溺死した。吉六の冥福を祈って建立したのが観音堂であるという。観世音の胎内には黄金を納め、後の修理の用に備えてあったが永禄・元亀(1558—72)の頃、よこしまな住僧これを破り、金を盗み去ったという。吉六の位牌と称するものがあり「福昌殿源了淵居士、承安二壬辰天三月二十日」と記してある。高瀬観音堂（会津33観音第15番）十一面観世音立像を御祀りしこの石塔は吉六の墓と伝えられている。この吉六伝説を裏付けるものとして、村の西に「吉六壇」という地名が残っている。》とある。

の^え乗り得ても心許すな天小舟^{あまのおぶね}
高瀬^{たかせ}の波^{なみ}は時^{とき}を嫌^{きら}わず



吉次兄弟祠・遠方に見える会津若松市

『新編会津風土記卷之二十八』《高瀬村、昔村に川アリ、石高ク流急ナル故ニ高瀬村ト名クト云、（略）観音堂、境内東西二十四間、年貢地^{ネンギ} 村中ニアリ、（略）此処ヲ過ギ村東ノ川ヲ渡リシニ、水俄^{タチマチコワ}ニ漲^{ソノメイフク}リ舟^と忽^ひ壊^ひレ吉六溺死セリ、其冥福ヲ祈ラン為此堂ヲ草立シ（略）会津三十三所巡礼ノ一ナリ。》（会津若松市図書館より）

7 住吉公園内の吉次屋敷跡 宮城県石巻市住吉町

北上川河口の津。北上川の上下の商圈は大きな経済圏となっていたであろう。この河口に金売吉次の屋敷跡の伝承があることは、当時かなりの商業力を持っていたことになる。

8 矢本町の吉次屋敷跡 石巻市矢本大曲字宮前

矢本町大曲にある吉次屋敷跡。屋敷跡には黒松の「月観^{つきみ}の松」高さ15メートル、樹齢千年と云われる大木ある。吉次がこのあたりに滞在し、月を鑑賞したと伝える。「月観の松」は昭和48年に町指定天然記念物。

9 河南町の長者館跡 石巻市旧河南町須江^{すえ}（長者原）

長者屋敷跡の説明板は、「須江字関ノ内・長者平と云われる所。金売吉次が平泉と都の往復の際、この地に仮の屋敷をたて住まいと伝わる。この館はどのようなものであったか知る由もなく、わずか当館四方にめぐらした方形の土塁が残る。」別説、中世豪族の山城であったとも言われている。



北上川河口吉次屋敷跡



矢本町吉次屋敷跡



河南町長者館敷跡

10 三條吉治の墓 宮城県大崎市（旧岩出山町）岩出山下野目大阪

奥州の金商人吉治、三條吉治が隊商組んで通ったという。「吉治街道」が町内に数ヶ所ある。神奈川県「金沢文庫書」（北条実時が武士教養の書籍集）に「弘安7年に年貢として玉造郡から砂金50両が鎌倉へ送られる」と記録がある。ここ岩出山周辺は砂金が産出は郡内の金鉾^{おにこうべ}周辺にあつて、昭和40年頃まで採掘されていた。三條吉治の墓について次のように伝わる。吉次街道の資料には「旧岩出山町の岩出山小学校分校跡付近、座敷乱木（座敷乱木遺跡がある）に吉次街道があつた。この吉次街道沿い1本松北東にある雨生沢に堀や土堀の跡も認められる掃部ノ長者屋敷と称される丘陵があり、三條吉次の一族で掃部と名乗る者が住んでいたと伝えられる。現在どうにか「経三條吉治之墓」と読みとれるが、昭和31の調査記録には「妙法蓮華経三條吉治之墓」と、墓誌銘「千葉文治郎」という施主名がある。（年号不明）吉次の遺体を埋葬した墓ではなく、吉次に縁のある文次郎という人が吉次を供養して建てたものと思われる。墓と並べて建てられている小さい石碑は、千葉文次郎の子孫が明治になって建てたものという。岩出山町座敷乱木の吉次の墓から東に向う吉次街道は、古川市宮沢野崎にある館神社付近で、3丁目から岩出山町下真山に向う吉次街道と交差して長者原に入り、通揚を経て高清水方面に向っていますが、その先には吉次街道についての伝承が残っていません。」とある。2年越しの探

索、江合川の丘陵の篠竹を掻き分け難所であった。（旧有備館「吉次街道」の資料提供）

1 1 玉山金山・竹駒神社 陸前高田市竹駒町

大船渡線の竹駒駅から東へ5キロ位上ると、竹駒神社と玉山金山がある。竹駒神社の由緒によれば、金山守護神として、京都伏見大社より勧進されたと伝えられる。

『続日本記』「文武天皇、大宝元年(701)凡海宿称鎌を陸奥に遣わし金の精錬をさせた」とあり、又「天平六年(734)奈良大仏造営のため金山を探していた僧行基が夢告によって、コブシ大の三好金を発見し、稻荷神社を山城国伏見より金山守護神として勧請し創建す」と『神社名鑑』にある。『続日本記』「天平二十一年(749)二月陸奥国始めて黄金を貢る。是に幣を奉りて畿内・七道の諸社に告ぐ。年号改めて天平感宝元年とした。夏四月、従五位上の陸奥守百済王敬福が小田郡に黄金出ましたと献上す。陸奥守より黄金九百両貢進した(13kg)」(竹駒神社年表より)

現在の玉山金山の坑道跡は江戸時代のもので、山の中腹には金売吉次屋敷跡が残されている。現金山坑道口は「壺水玉乃湯荘」となり市民の憩いの湯場になっている。吉次の時代の産金は坑道堀でなく河原の堆積した砂をより分け砂金を採取していた。後世の話であるが、玉山金山の入口には「是より八町」検問所跡がある。八町四方にいるかぎり、主殺し、親殺し以外問わない掟があった。治外法権の場所で金生産奨励を優先して3、4年坑道で働ければ「よろけ病」にかかり死んでしまうということで、罪は問わず働かせた記録がある。(市民いこい湯・「玉山金山」資料提供)



三條吉次の墓



玉山金山千人抗跡



竹駒神社

1 2 炭焼藤太夫妻の墓 宮城県栗原市・旧金成町畑

炭焼藤太夫妻の墓は旧金成町畑の説明は「藤太夫妻の墓はもとの寺場山の峯に在ったものを、地元の篤志家がこの場所に移してあったが、約5百年を経て塔石は消磨損壊したので正徳5年時の身は三迫大肝入佐々木佐内が相謀り建て改めたものである。左右の石塔(層塔)の刻字は消磨し見られないが各々藤太とおこやの没年月日と法名が刻してあったと伝わる。はじめの石塔は調査の結果、左右共、三重塔の形状と思われ、鎌倉時代の石塔と推定されている。」とある。藤太夫・開基常福寺殿安叟長樂居士。おこやの前・徳雄院

智眼貞慧大師。夫妻の位牌は福^{ふく}成^{おう}山^{ざん}常^{じょう}福^{ふく}寺^じにある。

炭焼藤太史 『金成町史』の民話伝承として「奥州産金開発とともに平泉藤原氏の隆盛の頃、金成畑村に炭焼きをしている藤太という朴直な男が住んでいた。ある日、京から、清水の観音のお告げで夫になるべく人が奥州金成にいることを知らされた長者の娘（三條右大臣の娘おこや姫の説）が、都より金成に下ってきて2人は夫婦になる。或る時、親より渡された砂金で米味噌買うように藤太に渡した。市に行く途中雁^{がん}鴨^{かも}を見て、藤太は思わず砂金包を投げつけ、雁鴨を捕らえ、引き下げて喜んで妻に渡した。妻は砂金と米味噌はどうしたかと聞けば、砂金は雁鴨に投げつけたという。妻はあの砂金1包でこの世のもの何でも買えるものであるといった。藤太、これは不思議だな、我が炭焼き小屋の周りはこの砂金だらけであるといった。それ以来、藤太は砂金を採り続け長者になったという。そして、橘^き治^ち、橘^な内^い、橘^ろ六^くという3人の子をもうけ、息子たちは成長し、金田八幡宮の山裾に東^{ひがし}館^{だて}、南^{みな}館^{みだて}、西^{にし}館^{だて}と屋敷を構えていたという。兄弟は藤原秀衡に仕え、京と奥州を往来する豪商となり、とくに兄橘治は義経の案内役として登場し、また近在の寺社へ仏像を奉納し勧請するなど、金売橘治信高としての事績は有名である。また金の豊富な字名として、金田^{きん}荘^{じょう}、金山^{きん}沢^{ざい}、金流^{きん}川^{がわ}、金鷄^{きん}橋^{はし}、金鷄^{きん}坂^{さか}、金沼^{きん}がある。」と伝う。



炭焼藤太夫妻の墓



左藤太・右おこやの前

藤太夫妻の面 金田八幡宮の宝物、炭焼藤太夫妻の面を、吉次は両親の仮面を来世に伝えるために八幡宮に奉納して、「広く是ヲ聞き見セシムルコトナカレト伝へ来ル者成」と言い含めていたという。おこやの前は、黒髪が縮み、眼は恐ろしく見開き、夜叉のような顔であるが「内心ハ広大慈悲忍辱貞節」の女性であったと、清水家の先祖である清浄院量海別当が書き残している。（『金成町史』「金売吉次の事蹟」・旧金成町教育委員会）

13 金^{かね}田^だ八幡^{はちま}神社^{じんじゃ}（東^{ひがし}館^{だて} 跡） 旧金^{かね}成^{なり}町中根^{なかね}字館^{くわん}下

平安初期大同2年（807）、坂上田村麻呂が奥州に下向のおり金田の里に金神金山彦神社を祀る。後、前9年の役頃、源頼義、義家父子が東征の陣場金田城を築きその鎮護のため金田八幡神社を勧請したと伝えられる。『風土記書上』によれば、東館は南北24間、東西42間、館主は金売橘次信高と申伝え、当時は羽黒派修験清浄院が住居した。平安後期、畑村に住む炭焼藤太夫妻の子、橘次は東館、橘内は南館、橘六は西館に住居した。牛

若丸の東下りの途中この東館に泊まり、平家追討を祈願した。橘次の開運印、義経の位牌などがある。清水家が別当を努める金田八幡宮で、清水家は、自性院系譜によると従五位下清原業隆にして、其の子孫12代を経て紀伊守佑隆、天授2年(1376)羽黒派修験道により紀伊守宥義と称し、その世代より清浄院と改め代々別当を努める。清水家に伝わる伝承によると「義経は吉次の東館によく泊まりにきていた、ある日頼朝の追って手が押しかけ、詮索をうけたが、義経が自害し果てたと位牌を見せて説明したという。」位牌の表面は「せんかんつうさんげんこうだいこじしんぎ 捐館通山源公大居士神儀」裏に「文治5年閏4月28日源義経」とある。位牌の説明は第5章の7・奥州「雲際寺の位牌」で後述する。

余話・金田八幡神社参詣帳の記録 金成の東館の所蔵「えぞ 蝦夷地御用公儀衆 むら 金成邑金田八幡宮社参詣覚留書」の古文書が残こされている。これは江戸時代の末期、蝦夷地・北海道にロシアの南下で騒然となり、北方警備のため奥州街道を通る幕府役人(公儀衆)が、蝦夷地渡海の行き帰りの無事を祈るため、金田八幡に参詣に31回の記録が見える。そのうち蝦夷地探検家の近藤重蔵が5度(春に2回、晩秋に3回)立ち寄っている。

かんせい 寛政12年(1800)寛政10年11月29日「蝦夷地より帰府の途中、幕臣近藤重蔵、高橋三平、湯浅三衛門の3人参拝す。家臣石川喜蔵を残し、小仏像、じゅうき 什器、縁起、社記など図画させる」。翌年、享和元年(1801)3月4日、江戸より蝦夷地への往路、幕臣近藤重蔵銀子一両を供之へ参詣す」。同年11月14日「蝦夷地より江戸へ御上り路、幕臣近藤重蔵参詣す」。量海住職にさとうゆ 砂糖湯をご馳走し、エトロフ探検の話語っている。又、文化2年(1805)9月13日、江戸より御下向の途中、もがみ 最上徳内ら3名が八幡社を参詣している。最上はエトロフ 択捉島、ウルップ島、クナシリ 国後島を調査後『へんようぶんかいずこう 辺要分界図考』『今所考定分界之図』を著している。蝦夷地へ緊急に渡る幕府役人の行動が早春に北に向かい北が凍結の11月には江戸に帰還していることがわかる。(『金成町史』より)金田八幡社に訪れたが、近藤重蔵が何故に金田八幡神社に参詣しているのか、疑問が湧いたが理由は見出せなかったが、後、北海道平取町 びらとりちよう に義経神社を尋ねた時、その謎は解けた。表紙にある「義経神像」である。北海道開拓の下検分をしているとき、現地アイヌの「オキクルミ神=源義経」の伝説を知り、近藤はこれをアイヌ懐柔政策に義経像について考えたいたことが判る。日高門別の会所に目の見える形「義経神像」を祭ることに重要な意義を見出し、参詣と同時に下準備のために清水八幡神社を調べていたのである。(義経神像北海道編で後述する)



金田八幡神社



義経の位牌『金
売吉次の事跡』
より

14 黄金山産金跡・黄金山神社 宮城県遠田郡涌谷町字黄金山

我が国最初の産金遺跡はここ湧井町の黄金山神社の地にある。時は奈良東大寺大仏像の
鑄造 までの工程は進んだが、仏体の鍍金するため、国内での産金が採掘されず苦慮してい
ていた。その時分に小田郡黄金山（現遠田郡の東半分の篋岳丘陵）の最も産金の重要な地
を豊前国宇佐神宮から「黄金は八幡の力でわが国から出してやる」との神託が出て百済の
帰化人陸奥国守百済王敬福 が発見に至る。産金技術の先進国大陸から来た帰化人たちの
技術の高さが窺われる。百済王敬福は天平21年（749）小田郡黄金山産出の砂金9百両を
献上した。（わくや万葉の里「天平ろまん館」資料より）

歓喜した聖武天皇は「陸奥国始めて黄金を貢 ぐ。ここに幣 を奉 りて畿内七道の
諸社に報告した。」と特記させ、年号を「天平」から「天平感宝」（秋7月感宝元年を
天平勝宝元年とした）と改元し、陸奥国には三年の調・庸を免す。」と。又多くの官人に
官位を授ける。越中国守大伴家持 は「天皇の御世榮えむと 東なる陸奥山に 金 花咲
く」の歌を万葉集に残し、百済王敬福は従五位上から従三位に叙せられ、産金の協力者
上総国の丈部大麻呂は従五位下に叙した。（『続日本紀』より）

『気仙沼市史』に「涌谷黄金山神社付近は第3紀の砂礫層が堆積しており北方の大貫金
山や南部北上山地の含地帯から流出した金鉱が破碎、砂金として堆積したものを採取した
ものであろう」とある。産金の開発は韓国の砂金の地形と似ていたらしく、百済や朝鮮半
島からの先進技術を持った渡来人の活躍によることが大きいと資料館は解説する。ここ黄
金神社は「天平ろまん館」があり砂金取り体験ができる資料館になっている。

15 下衣川の長者廃寺跡 奥州市衣川村

この遺跡は南を正面とするほぼ正方形約（南北百_レ・東西90_レ）土塁で区割りされて
おり、昭和33年、同47年の2回にわたる発掘調査によって西門土塁跡、南門、本堂と
西方塔が確認された。ここは承安4年16歳の源義経を京から連れてきたという秀衡の御
用商人三條吉次季（末）春の屋敷跡と伝えられてきたが、礎石の配列や遺物の配置跡、及
び土師器等から平泉藤原氏の時代か、それ以前の重要な寺院跡と推定された。



仏堂絵図・ろまん館資料より



金山神社



衣川村・長者廃寺跡

『平泉志』高平眞藤著 《吉次宅地跡、三條吉次信高居所、下衣川にあり、衣川の北

に館門の旧礎今猶残れり、里俗に此辺を長者か原といふ、吉次旧跡とて栗原郡金成村傍の畑地其他所々にあり、地方に居る大賈にして金銭の商業を以て上京せし序屢鞍馬寺に詣で牛若丸に会ひ遂に其依頼に任せ平泉に伴来れり・・・ 》とある。

16 金売吉次商用場（達谷窟毘沙門堂・国指定史跡）平泉町平泉

毘沙門堂の傍らは「金売吉次商用場」と伝えられている。おそらくこのお堂で金の買付けの仕切り場をしていたのか。縁起では、延暦20年（801）征夷大將軍坂上田村麻呂が悪路王を征伐して、達谷窟毘沙門堂の創建とつたえる。

『吾妻鏡』文治5年9月28日の条を現代文で。「頼朝は鎌倉への帰路、1つの青く茂る山を見て尋ねる。あれなる山は何であるか。田谷の窟と申します。古に賊主悪路王ならびに赤頭等が塞を構える岩屋でありました。悪路・赤頭たちは良民を苦しめ、女子供を掠め乱暴を振っていたのを、延暦20年（801）坂上田村麻呂が桓武天皇の勅命を受け蝦夷征伐で平定しました。坂上將軍はこの窟の前に9間4面の精舎を建立して多聞天の像を安置し、西光寺と号して水田を寄付いたしました。」と頼朝に伝えた。

『菅江真澄遊覧記』「はしわの若葉」の達谷窟毘沙門堂の記述に、《むかし、悪路王がひそかに都にのぼり、葉室中納言某卿に御姫がひとりおられたのを盗みとってきて、この窟に隠れ住んだ。都の人が大勢尋ねてきたが、ある年、花の盛りに悪路王が酒を大いに飲んで酔いふしているとき、姫君は桜原を逃げだし、人に導かれて都に帰られたと言っている。》とある。（岩手県編・余話悪路王伝説で述べる）

17 首途八幡神社 京都市上京区桜井町（堀弥太郎の屋敷跡）

12世紀、奥州藤原氏の京都居館を構えていた場所いう。社伝の説明に「かつてこの地に金売吉次の屋敷があったと伝えられ、源義経が奥州平泉に赴くに際、道中の安全を祈願して出立したという。「首途」とは出発の意味で、以来この由緒により「首途八幡宮」と呼ばれるようになった」と。この辺りは現在でも西陣織の間屋街になっており、古来より、織物、酒などが下って（関東・東北）行き、奥州からは、海獣のなめし皮、オオワシの羽（矢羽）乾物などが京都に上って来た。



達谷窟毘沙門堂



京都市・首途八幡神社

第4章 佐藤継信・忠信の伝承 6ヶ所

佐藤継信最後の事 『平家物語』「屋島の戦い」を口訳で《 能登守平教経は都第一の強弓者、九郎大夫判官を射落そうとねらわれたけれど、源氏方は奥州の佐藤三郎兵衛継信、同四郎兵衛忠信、伊勢三郎義盛、武蔵坊弁慶等が我も我もと馬の頭を並べて、判官の矢面にたちふさがった。たちどころに鎧武者十余騎が射落される。なかでも真っ先に進んだ奥州佐藤三郎兵衛が、左手の肩を右手の脇の方へつつつと射抜かれて、馬から逆さまにどしんと落ちる。判官佐藤三郎兵衛の手をつかんで、「三郎兵衛、どんな気持ちだ」と言われると、息の下から細い声で申すには「今はもう最後とぞんじます」判官「思い残すことはないか」と言われると、「思い残すことは何もございません。ただ君がご出世なさるのを拝見しないで、死にますことが残念に思われます。そのこと以外には、弓矢を取るものが、敵の矢に当たって死ぬことは、もとより覚悟しているところです。源平のご合戦に奥州の佐藤三郎兵衛継信と言うものが、讃岐国屋島の磯で、主君のお命にお代り申し上げて討たれてしまったと、末の代まで話の種に申されることは、弓矢を取る身にとっては、この世での名誉、冥途での思い出でございます」判官は涙をはらはらと流し、「この辺の尊い僧に一日教を書いて弔ってもらってくれ」といってたくましい黒い馬に金覆輪の鞍をつけてその僧にお与えになった。これをみる武士どもはみな涙を流し「この主君の御ために命を失うことは、なにも惜しくない」ともうした。》

1 佐藤親子の菩提寺・医王寺 福島市飯坂町

松尾芭蕉の『おくの細道』は、元禄2年(1689)芭蕉が46歳の春から秋にかけて風狂の旅を奥州から北陸地方へ、150日と6百里の路風に吹かれ、弟子の曾良を伴いながら旅の叙述である。飯坂湯の庄司の里へ訪ね2人の嫁に袂を濡らしている。

《 飯塚の里 月の輪の渡しを超えて、瀬の上といふ宿に出づ。佐藤庄司が旧跡は、左の山際一里半ばかりにあり。飯塚の里鯖野と聞いて、尋ね尋ね行くに、丸山といふに尋ねあたる。是れ庄司が旧館なり。麓に大手の跡など人の教ふるにまかせ涙を落とし、又かたはらの古寺に一家の石碑を残す。中にも二人の嫁がしるし先ずあわれなり、女なれどもかひがひしき名の世に聞こえつるものかなと袂をぬらしぬ。墮涙の石碑(『三国志』晋の將軍羊祜の徳を偲んだ羊公碑)も遠きにあらず。寺に入りて茶を乞えば、義経の太刀弁慶が笈をとどめて什物とす。五月朔日のことなり、その夜飯坂にとまる 》とある。折しも端午の節句、佐藤継信・忠信に天高くおよげ、およげ、の芭蕉の想いであったらう。

笈も太刀も 五月に飾れ 紙幟 芭蕉

若桜と楓 継信の夫人若桜、忠信の夫人楓は、義経公の奉公終えて夫たちの帰還を待ち望んでいたが、2人の凱旋は叶わなかった。心待ちしていた母の乙和を慰めるために若

桜、楓は武将姿になり、夫の立ち振舞いを見せて、母を喜ばした。

太刀佩^{たちはい}て 武装悲^{ぶそうかな}しき 妻^{つま}の秋 自得

※ 医王寺本堂に継信の妻「若桜」忠信の妻「楓」の像がまつられている。

やがて義経が頼朝に追われ大鳥城に落ちてきた。義経は継信の射た「鏃^{やじり}」などの遺など持ち、佐藤元治夫妻を慰め、2人の子息の霊を供養した。父、元治は奥州藤原氏に最後まで忠義をつくし、文治5年の頼朝軍にひるむことなく戦い、その戦いの傷がももて77歳の高齢で亡くなったと伝わる。

2 大鳥城・佐藤庄司^{しやうじ}の城 飯坂温泉飯山公園

佐藤元治は平泉藤原秀衡の領地の荘園管理をしていた。庄司の職名、佐藤元治こと「湯の庄司」といわれた。藤原3代に仕え、この丸山に城を構え坂東の勢力に対峙していた。信夫の「佐藤」はもと藤原姓を名乗り代々左衛門尉^{きえもんじやう}に任ぜられていた。左衛門尉の左と藤原の藤を姓とし「佐藤」となった。（『福島市史』より）

『信達一統志』（伊達両郡の地誌）に《大鳥城を築くとき生きた鶴を城の中央に埋め、本城の守護神と成す。故に「大鳥城」の名を負せたり「鶴の魂羽を張り大鵬に変じ、敵を拒む」ところの堅城とうたわれた。》とある。



医王寺



佐藤継信・忠信の墓



大鳥城跡

3 甲冑堂^{かちやうどう} 宮城県白石市斎川^{さいがわ}字坊ノ入・村田神社内

現在の甲冑堂は昭和14年に再建されたもの。継信、忠信の妻の孝行話しが、国定教科書高等小学校読本で取り上げられた事により、甲冑堂再建の気運が高まり寄付金などにより実現した。この像は宮城県柴田町の小室達^{とうる}（1899 - 1953）が制作した。小室達は仙台市に伊達政宗騎馬像も制作している。元禄2年(1689)5月3日芭蕉と曾良はこの地を訪れて、佐藤元治の子継信、忠信兄弟の嫁、楓・初音について「2人の嫁がしるし先ず哀れなり」と記している。飯坂の医王寺によったのか白石の斎川^{さいがわ}に寄ったのかははっきりしないが。曾良の「随行日記」にはここ甲冑堂に立ち寄ったとしている。2人が見たであろう当時の堂は明治8年消失している。（甲冑堂では忠信の夫人は初音という）

『東遊記』に見る「甲冑堂」^{いわ} 橘南谿^{たちばななげい} 著 (1753 — 1805)、東西諸国漫遊紀行の医者。甲冑堂を次のように記述している。《 奥州白石の城下より一里半南に才川という駅あり。此の才川^{さいがわ}（齋川）の町末に、高福寺という寺あり。奥州筋近年の凶作にこの寺も大破に及び、住持^{じゅうじ}となりても食物乏しいければ、僧も住まず、あき寺となり、本尊だに何方へ取収めしにや寺には見えず。庭は草深く、誠に狐^{きつね}・梟^{ふくろう}のすみかかといふも余りあり。此の寺に又一つの小堂あり。俗に甲冑堂といふ。堂の書付には故将堂とあり。大きき僅かに二間四方ばかりの小堂なり。本尊だに右の如くなれば、此の小堂の破損はいふまでもなし。やうやうに縁に上り見るに、内に仏とてもなく、唯^{ただ}夫人の甲冑して長刀を持ちたる木像二つを安置せり。「いかなる人の像にや」と尋ぬるに、佐藤継信・忠信二人の妻なりとかや。その昔、鎌倉殿の義兵を挙げ給ふを聞き、秀衡^{いともご}に暇乞ひして鎌倉へ赴^{おもむ}き給ふ時、佐藤庄司、我が子の継信・忠信を御供に出せり。其の後、義経京都へ攻め上り、平家を追い落し、一の谷・屋島などにて、さばかりの大功をた給ひて、再度奥州へ来り給ひし時、初め付き従ひて出でたりし亀井・片岡など皆無事にて帰国せしに、継信は屋島にて能登殿の矢先にかかり、忠信は京都にて義の為に命を落とし、兄弟二人とも他国の土となりて形見のみかへしを、母なる人かなしみ歎^{なげ}きて、無事に帰り来る人を見るにつけて「せめて一人なりともこの人々の如く帰りなば」など泣き沈みぬるを、兄弟の妻女その心根を推量し、我が夫の甲冑を着し、長刀を脇ばさみ、勇ましげに出で立ち「唯^{ただいま}今^{がいせん}兄弟凱旋せし」と其^{その}倂^{おもひかげ}を学び老婆に見せ其^{その}心をなぐさめしとぞ。其の頃の人も二人の婦人の孝心あはれに思ひしにや、其の姿を木像に刻みて残し置きしなり。嗚呼、兄弟の人は古今ためし少^{すくな}き忠義武勇の士なり。其の人に連れそひし夫人また希代^{きだい}の孝女^{こうじょ}にて、夫婦忠孝^{まさ}の勝れしも世に珍しき事なり。余、この物語を聞き、此像を拝するに、そぞろに落涙^{らくるい}せり。》この続きを口訳で、《 これ程人の手本ともなりえる孝行な婦人の像が、このように荒れはてた小さな堂に雨風も防ぐことも出来ないで、像の彩色も落ちてなくなり、僧侶も守らないで香や花を供える人もなく、年月のたつにつれてますます荒れ、おしまいには跡かたもなくなってしまうだろう。今に此等の事をも語り伝える人もなくなろう。しかるに誰一人あつてほしいとって、一銭^{さいせん}の賽銭でも供える人もないのは、世には忠孝に感じる人が少ないのであろうか。余りにいたわしく感じたので、詳しく書きつけて帰った。》と、橘^{はくしん}南谿は追真の想いを記述している。（『東・西遊記』栗本主税訳・昭和16年版。2人の家嫁の鏡として戦前文部省国定教科書『高等小学読本・巻3』・女子用に使用された）

甲冑堂の宮司さんの説明によれば、奥州合戦後、佐藤一族は宮城、福島、山形に隠れ住んでいたが、菩提を弔うため大鳥城・医王寺に近くにと、この地に甲冑堂を作り、二人の木像を刻み後世に孝心を伝えようとしたと、説明をしてくれた。



左忠信の妻初音右継信の妻楓



甲冑堂



橋南谿（国史大辞典）

4 佐藤継信・忠信の供養塔 栃木県黒羽町寒井

『大田原市史』よれば、この多層塔は、源義経の重臣で屋島の戦で義経の矢衣に立ち戦死した佐藤継信と弟忠信の供養塔である。この地は、東山道の道節で碑に囚む「角折坂」の伝説がある。この地を五輪平と言う。『黒羽町誌・ふるさと雑記・ふるさとの民話』には次ようにある。大田原市寒井は五畿7道のうち東山道に属していた。東山道に属する国は、都に近い近江・美濃・飛騨・信濃・上野を経て下野に入り、さらに陸奥・出羽の鎮守府に結ぶ官道であった。「寒井」とは『和名類聚集』の寒井郡のことを意味し「厩」は駅家である。10世紀頃の寒井に49戸の住居跡がみられ、駅戸としての石上郷の規模を推察することが出来る。この地は義経・西行などの人物が往来した所でもある。従って義経塚とか源氏が「旗揚げ」したという「白幡山」などの伝承地でもある。「角折坂」は、継信と忠信の供養碑を牛に負わせて東山道を登る途中、那珂川を越したところで、牛が倒れ角を折ってしまった。やむを得ず、この地に碑を建て冥福を祈ったという。牛が角を折った所が「角折れ坂」牛の亡骸を葬った所を「牛が淵」と呼んでいる。

5 常信庵・佐藤兄弟の母梅唇尼 山形県米沢市旭町通り

正應山常信庵寺伝承は次の通り解説されている。《 佐藤庄司正信（奥州藤原氏の重臣、佐藤元治の一族）とその子佐藤継信・忠信兄弟の菩提を弔うため、正信の後室が建立した寺と言われています。兄継信は屋島の戦いで能登守教経の放った矢面になり討ち死した人物、弟忠信は義経主従を脱出させた後、六條堀川で壮絶な自刃を遂げた人物です。源義経が兄頼朝に追われ、奥州藤原氏を頼りに逃亡する途中、この寺院に立ち寄ったとする史跡で、東北に数多い「義経伝説」の1つです。一行が鼠ヶ関（庄内）を避けて内陸に入り、羽前米沢に立ち寄り、自分の楯となって討死した忠臣、佐藤兄弟のゆかりのこの寺に立ち寄り「きゃらぼく」の木を植えて菩提を弔ったというロマンです。境内には父正信、継信、忠信親子を祀った三尊社がある。》（「米沢城下町散策」の案内説明）

門脇に「佐藤後室梅唇尼源九郎判官義経公接待遺跡」と書かれた石柱が建っている。（大正4年建立）常信庵は佐藤正信の菩提寺で、明治24年墓地整理中にミイラが出土梅唇尼と刻んだ墓誌がでてきた。「梅唇尼」とは誰か、古記録を調べて、梅唇尼は佐藤正信

(佐藤元治の弟)の後妻で、佐藤継信・忠信の実母であることが判った。

義経主従は奥州に落ち延びる途中、ここ米沢では母梅唇尼は義経一行が山伏姿で落ちてくるのを知り、「山伏接待」と門にかかげ何日も待ちわびていた。義経は兄弟の主君に忠臣の礼と、母にたいしての謝罪の気持を伝え、結果、義経は大成できなかったお詫びの言葉を述べたことは難くない。佐藤兄弟が没後800年後、実の母「梅唇尼」のミイラが、米沢市で発見される。日本の湿気ある東北の土の中に、他にミイラが出土した例があるのだろうか。母性が子供への愛の執念の形か、本当に凄い話である。



佐藤兄弟供養塔・黒羽町



常信庵境内・三尊社



義経が植えたきやらぼく

6 善光寺にある佐藤兄弟の供養碑 長野市善光寺本堂左側

母梅唇尼は2人の死を諦められず、長野の善光寺へ詣で2人の墓を立てたと伝えられている。善光寺本堂の左側にあるが、一般の人知らず見過ごされている。係り員に案内を頼むと「よく、ご存知ですね」と言われてしまった。

「佐藤兄弟碑 山門の西数間に南向せる2基の大宝篋塔なり。継信忠信兄弟寿永の乱に失せしを、義経遺髪を与へしより母梅唇尼文治3年持して参詣供養せし塔と云ふ。(塔形略同じきも北なるは稍大にして古く字銘も異なり。四方に梵字弥陀種字有り、大石破損せり。南なるは梵字弥陀其他の種たり。1人の建立にてはなし。尼の参詣は事実ならんも此塔の建立は尚下れる頃の事なり。旧寺城にて此塔の位置明からず。)(『善光寺史』)

「善光寺山門の西側に並ぶ2基の宝篋印塔。西側の塔には応永4年の銘と逆修の文字が刻まれていることから室町時代の逆修供養(生前に自分の死後の幸せを祈る)塔とされる。源義経の身代りとなって死んだ佐藤継信・忠信兄弟の母が、善光寺に参詣して2人の冥福を祈って建てたという伝承が伝わる。(『善光寺御開帳公式参拝ガイドブック』)

「伝・佐藤兄弟供養塔 長野県指定文化財

この地方で最古の逆修供養塔です。西塔には応永4年(1397)の銘が入っています。古くから源義経の忠臣佐藤継信・忠信兄弟の供養塔といわれ、若くして戦死した2人を供養するため、母親の梅唇尼が善光寺に参詣して建てたと伝えられています。継信28歳。忠信26歳。」(善光寺説明板)



継信・忠信の逆修供養塔

第5章 金成・栗駒に伝わる伝承 6ヶ所

『吾妻鏡』文治5年(1189)8月21日の条《^{にほん}二品(源頼朝の官位)松山道ヲ経、津久毛橋ニ至リ給フ。梶原平二景高一首和歌ヲ詠ムノ由之ヲ申ス。陸奥ノ勢ハ 御方ニ津久毛橋 渡シテ懸^{かけ}ン泰衡ガ頸^{くび}》とあり、鎌倉軍は海、陸、山の三道から28万4千の軍勢で平泉へ押し寄せてきた。^{さんほさま}三迫 川沿い一帯は江浦藻^{つづくも}が生い茂る湿地帯を、この藻を刈り敷き詰めて全軍を渡したという。金成、栗駒には義経伝承が色濃く残っている地域である。

1 杉目太郎行信の供養碑 宮城県旧^{かんなり}金成^{つづくも}町津久毛 橋城跡

この地に義経の身代わりとなったとされる杉目太郎行信の墓(供養碑)の碑文について地元の郷土史研究家・佐々木信義氏の津久毛橋周辺の郷土史を編集された『ふるさとの標』からご紹介します。

《 正面中央に源祖義経神霊身替杉目太郎行信 右へ古塔 泰衡霊場 左へ西塔弁慶衆徒霊文治5年4月30日と記されている。また裏側には中央に清衡之霊、大治元年7月10日。右へ基衡之霊、保元2年3月19日。左に秀衡之霊、文治3年12月28日、さらに側面には義経の辞世の歌「後の世もまた後の世もめぐりあえそむ紫の雲の上まで」と、弁慶の辞世の歌「六道のみちのまたに待てよ君、おくれ先だつならいありとも」と刻まれている。「身替り杉目碑」の背後に判読困難な自然石の古碑がある。中央に梵字、その下に「^{しよおうおう}正應(1288—93)6年2月20日」右行に「^{せきとうげんしゆく}石刀現宿」左「^{きしんみつぽう}皈眞密方」ときざまれていることがみとめられた。古碑の法号解釈検討はいろいろなされてきた。その中で「義経北行」の研究者、仙台市在住・石田真男氏の肯定論が一番法号の解釈にふさわしいと思われるので、それにしたいが説明したい。「皈眞密法」の「皈眞」の「皈」は「帰」の異字で、「皈眞」は「帰依する」ことで、密法は真言宗のことであるから、全体として「真言密法に帰依する」になろう。その下に「敬白」とあり敬白は「^{うやま}敬って申し上げる」意味であるから、古碑の建立者より身分や社会的な功績があり地位の高い方のために古碑を建てた供養碑になろう。次に、「石刀現宿」の意味である。注釈をのぞき本文の意味のみとする。「石刀現宿」は「永遠のために自刃し、現に安らかになる」あるいは「石のごとき強き意思で自刃し、その意思は死後も宿る」の意味にもとれる。壮烈なまでの執念を感じるのである。すると、義経のために身替りになって自害した杉目行信の法号に最もふさわしいように思う。》

杉目太郎行信について『信達一統志』志田正徳著・信夫伊達両郡の地誌に「福島城(大仏城、杉妻城、杉目城)に治承年間(1177—81)杉妻太郎行信の居城」とある。

『ふるさとの標』佐々木信義著「文治5年には栗原郡三迫^{ぬまくら}沼倉の城主、藤原泰衡軍として頼朝軍と戦いこの地津久毛橋で戦死。^{いみな}諱は行信、信夫郡杉妻城に住む。治承4年頼朝挙兵時、佐藤庄司^{もとほる}基治に遭って告別する。文治5年8月杉妻城陥落の時討死したという」。



杉目太郎行信の墓



津久毛橋城跡遠望・杉目の墓は正面の山

2 渡辺組豆治の碑 杉目行信の墓の入口に真言宗江浦藻山信楽寺跡に明治45年、渡辺組豆治なる者の碑文が石灯籠に刻んである。読み下しを見る。原文は漢文。

《これは、陸奥の国出羽の国の押領使であった平泉四代目藤原泰衡の墓である。泰衡は3代目秀衡の嫡子である。今から804年前の9月、源頼朝のために殺された所である。死骸をここにうめ江浦藻山信楽寺と呼んだ。藤原氏が滅びた後頼朝の家来で地頭の葛西と大崎は互いに争い、耕作をしたり戦い駆り出されたり、安らぐ日は殆どなかった。信楽寺の社や大切なものを入れるところが、兵乱による火事や野火で荒れ、木が崩れ修復が不能となったのをある人が特に惜しんで其の墳墓に墓石を立てて法名を「石刀現宿販眞密法」とした。そのわずかに残っている遺跡は正応6年であるから、600年の歳月を経てきたもので、あたまの傷が付き遺跡が埋もれるので神として子孫に祀られることができなかつた。明治21年に碑を建てることを相談し、それを明治24年の3月灯籠一基を供え年を占いて3月1日を例祭とし、ここに敷物をしきお神酒を上げもろもろの美味の供えもので霊を慰めることを思いめぐらした。里人が集まって飲食し神を祀ったこととは、枯れ木を生き返らせ恩に報いることである。主催者の渡辺組豆治撰文は五城の宮沢他吉、書は菅原善兵衛である。》（『ふるさとの標』・上武大学国文学教授・野口博久氏訳より）

津久毛橋の合戦（栗原市金成津久毛）阿津賀志山防塁（伊達郡国見町）の合戦の鎌倉軍の先陣隊2万騎が津久毛橋へ押し寄せてきた。迎える奥州軍は、津久毛橋の南面に広がる400町歩の大湿地帯に鎌倉軍を引き入れ、沼地に突き落とす作戦を立てた。この大湿地帯の中ほどに長さ6間、幅2間の「つくも橋」が架してあった。この橋の幅が狭く騎馬武者が並走する広さ、2万の鎌倉軍をここで戦えば、迎える7千の奥州軍、5分の戦いができるかと藤原軍が考えた決戦場であった。百戦練磨の坂東武士団、奥州軍の背後を突く奇襲攻撃に、さしもの要害津久毛橋の柵もあえなく陥落した。（『文治奥州合戦・津久毛橋城の戦い』佐々木信義著より）

2万対7千の多勢に無勢の藤原軍は、江浦藻の生える沼地へ鎌倉軍を引き入れて、殲滅せんと構えていたが、つくもの沼地の北側山々を越えて鎌倉軍は背後を突き、挟み討ちに会いあえなく敗れた。ここ津久毛橋合戦も阿津賀志山合戦も、百戦練磨の頼朝軍は奥州の詳細なる情報を持ち合わせていて、藤原軍につけ入る隙を与えなかつた。



渡辺 俎豆治の碑文 泰衡とある



義経散華会 (供養祭)

『菅江真澄 遊覧記』に記す。「ここに江浦草山信楽寺 という、真言の寺の池あり。たんご桜とていみじき清水（桜清水）のもとに立たり。立たる石の面に正応6年（1293）2月20日と記して、左右には、石刀現宿婦真密方敬白と書たり。いかなる故かあらん。（略）」とある。菅江が記述した「桜清水」灯籠の右脇で今でも清水は湧いている。

3 判官森・義経の墓（胴塚） 栗原市栗駒沼倉

宮城県栗原市栗駒沼倉の栗駒小学校裏山の中腹、に通称「判官森」がある。栗駒町誌に《 曰く大願成就 沼倉村基兵衛 上拝源九郎官者義経公 文治5年閏4月28日、『吾妻鏡』の閏 30日とも異なり、五輪塔は平泉金鶏山にある義経公の妻と幼児の墓と同一形式である。直、沼倉村であるから江戸時代の顕彰と考えられる。》とある。

『平泉雑記』相原友直著・卷之一「義経墳墓」に、《 愚按ズルニ、此地ト云ルハ、栗原郡三迫庄、沼倉村ヲサス、義経高館ニテ自害ノ後、沼倉小次郎ト云モノ、此地ニ葬テ墓ヲ築キタリ、此所ニ高次ガ館。伊校本、館址山上ニアリ、弁慶峰ト云アリ、昔弁慶逍遙カセシ地ナリト云、伊校本高次ハ義経ニ親シカリシ者ナルニヤ》又、「秀衡家臣」に《沼倉小次郎高次 栗原郡三迫ノ庄沼倉村ノ城主也。此人義経之屍ヲ我領地ニ葬シト伝。泰衡ノ家臣ナルヘシ。》とあり、古碑には次の様に刻まれている。

大願成就

上拝源九郎判官者義経公 文治五年閏 四月二十八日

『奥羽観蹟聞老志』佐久間洞巖著（1653 — 1736）江戸前中期の儒者・画家・書家・歴史家、次のように記述している。《 万代館主沼倉小次郎高次（別名恵美小次郎高次）は義経と親交があったので義経自刃後遺骸をこの地に葬り、墓碑と五輪の塔を立てて吊ったとある。又、一説には杉目小太郎行義なる者が、義経に生きうつしとのところから身替りに自刃して義経を北国に落としたとも伝えられる。その信疑は何れにせよ、碑面に刻まれた「大願成就」とか「上拝」という文字が意味するのみを考え時、文治4年秀衡の遺言に基いて、忠衡、泰衡と打合せの上ひそかに平泉を出て北海道に渡ったことを暗示するものではなかったのかと思われる》さらに《源義経の墓が沼倉村に在る。義経の死後、沼倉小次

郎高次がこの地に墓を建てた。》とある。（『栗駒町誌』『栗原市史』より）



源義経公の胴塚



偲び参りのお猪口



大原木館跡（喜泉院）

「**偲び参りのお猪口**」 右中写真にあるように、義経の命日に酒と供物を持って「偲び参り」がある。義経の命日頃は、山も木々の芽がふき出す森となり、静かに義経の霊と酒をくみかわす、只静かに人それぞれの想いで酒を注ぎ合うそうである。

「**義経公しのび参り**」 「毎年4月28日—30日」義経公の命日は旧暦4月30日（4年1回だけの日）。毎年供養するためか、又は清悦物語の影響か、江戸時代に建立されたと思われる供養碑には文治5年4月28日と刻まれている。現在のしのび参りは新暦の4月28—4月30日に催行されている。目に青葉の季節、お進めしたい秘所である。

「**源義経公散華会**が毎年4月29日・30日に」 「判官森義経供養祭散華会」は源義経公誕生850実行委員会（菅原次男世話役・新湯温泉くりこま荘内）の主催・栗原寺住職による法要が毎年行われている。1999年7月25日、神奈川県藤沢市の義経公首塚の御霊土（白旗神社）を栗原市の義経公胴塚に迎霊し、合せ祀り、義経公没後810年ぶりに合祀されました。鎧（胴塚の御霊）に兜（首塚の御霊）を載せる儀式が催行され、その甲冑は義経願成甲冑と命名され、7月25日を誕生の日とした。以来毎年、散華会（命日）に兜がはずされ兜神輿と鎧神輿となり練り歩き、鎧神輿に兜が載せられて義経願成甲冑となる。ここに首と胴体が合体する。6月13日から7月25日の間、源義経公の迎霊特使として、菅原次男氏は白装束の山伏姿に扮し、御霊土を背負って神奈川県藤沢白旗神社から宮城県栗駒判官森間500キロの道程を歩き通した。（源義経公生誕849年実行委員会・後援栗原市教育委員会・河北新報社）

4 **大原木館跡（鈴木館）** 栗原市大原木字袖山 現喜泉院

「鈴木館」とも云う。義経四天王の1人鈴木三郎次重家の館跡という。義経公へ付き添い、平泉へ下向の時、息子三河守と住居し、平泉高館において壮絶な最後をとげる。享年30歳。遠く三河国本城村より2子を連れてきた妻亀世御前は恩家の討ち死にした報をうけると、尼僧になり館に庵を結ぶ。これが現在の喜泉院である。若妻25歳であった。そ

の後、天正18年(1590)葛西一族が伊達政宗に鎮圧されるまで大原木館は続いていた。

「風土記書上」によれば本丸高さ4丈、南北15間、東西七間と記されている。また『平泉雑記』卷之一 十七 重家館 《 鈴木三郎重家が館、栗原郡三ノ迫庄大原木ニアリ、今寺トナル、尼我山喜泉院ト号ス、後世鈴木参河カ居城成ト云、古城考ニタリ、是ハ天正中ノ事ナルニヤ大原城ト号ス。》とある。

5 白馬山 栗原寺 栗原市尾松

安永の書上『栗原風土記』によれば、栗原寺は用明天皇2年(587)の開山で、白馬山栗原寺称し、天台宗奥州総本山であり、金堂(本堂)を中心に36坊にわかれ、七堂伽藍を備え、僧数千人を配した。その後、たび重なる戦乱で消失し、平泉の藤原氏滅亡後廃寺となったが、元禄2年(1689)仙台の恵沢山竜宝寺宥日和和尚が再興し、宗派を真言宗に改める。『吾妻鏡』『義経記』義経東下りに登場する栗原寺は、義経は金売吉次に伴われ藤原秀衡を頼っての際は、この寺に一泊し泰衡迎いの僧兵50人の護衛を従えて平泉へ向ったとある。

大河兼任の乱に驚き 『吾妻鏡』文治5年(1189)12月23日の条《 奥州の飛脚去夜参じ、申して云はく、義経ならびに木曾義仲の子息、および秀衡入道が男等の者ありて、おのおの同心合力せしめ、鎌倉に発向せんと擬するの由、謳歌の説ありと云々。よつて勢を北陸道に分け道はすべきかの趣、今日その沙汰あり。》義経や義仲の子息が旗挙げして不穩の動きを、緊急に鎌倉へ伝えている。同6年1月6日の条《奥州の故泰衡が郎従大河兼任以下、去年窮多より以来、反逆を企て、あるいは伊予守義経と号して、出羽国海邊庄に出であるいは左馬義仲の嫡男朝日冠者と称して同国仙北郡に起ち、ついに兼任7千余騎の凶徒を集めて鎌倉の方に向ひ首途せしむ。その路は河北・秋田城・多賀の国府まで軍を進めたが、秋田・大方より志加の渡りで氷が割れて、5千余人が溺死した。》とあり同1月13日の条《今日奥州の凶徒を鎮めんがために行き向う。上総介義兼、千葉新介胤正、大將軍たまわる。》 同2月6日の条《奥州の飛脚参著す。申して云はく、去月23日、かの国を出ていない。その日いまだ下著の軍兵なし。ここに兼任等の逆賊群集すること蜂のごとしと云々》 同2月11日の条《今日千葉新介等駆せ加はりて襲ひ至り、栗原一の迫に相違うて挑み戦ふ、賊徒分散するの間、兼任なほ5百余騎を率し、平泉・衣河を前に陣を張り、栗原に差し向ひ、衣河を越えて合戦す。区賊北上河を渡りて逃亡する。兼任防戦せしむといえども、やがて敗北し、身は逐龍す。郎従等は梟首 あるいは帰降する云々。》 同3月10日の条《大河次郎兼任従軍ことごとく誅滅後、ひとり進退に迫り、栗原寺に出づ。ここに兼任、錦の脛巾を著け、金作の太刀を帯いていたので、樵等怪しみて、数十人が取り囲み、斧で兼任討ち殺す。》兼任の乱は終焉したとある。

ここ栗原寺は義経の東下り場面であり、後、寺付近で大河兼任が大立ち回りの末樵に

斧で撃ち殺された場所でもある。大河兼任の乱に救心力として義経や木曾義仲の子息を旗挙げに名を使われていることは、奥州方面において、藤原氏を頭に慕う勢力が残存していたこと、鎌倉側においても、確固たる義経の死に自信がなかったことや、義仲の子息や義経の生存が風聞として巷に信じられていたことが分る。

その後栗原寺は、この廃寺跡の存在が謎となっていたが、昭和36年に東北大学チームによる発掘調査により、この境内の地下に栗原寺の金堂跡が確認された。現在の地表面より1メートル下に礎石があることが確認されている。（栗原町史誌より）

6 沼倉小次郎高次の万代館 栗原市沼倉

沼倉小次郎高次の館が沼倉の地に万代館跡が残っている。一説には杉目太郎行信は沼倉小次郎高次の弟と云われ杉妻城（すぎのめ・福島市）の城主とも云われる。平泉の南に位置する宮城県栗原郡栗駒町には義経の胴塚が、金成町には津久毛橋跡に杉目小太郎の墓がこの周辺には駿河館（駿河次郎の館）、亀井館（亀井六郎館）、鈴木館がある。



義経公願成甲冑誕生奉納舞楽



現在の白馬山栗原寺



沼倉小次郎の万代館跡

左上の写真は「義経誕生850年祭シンポジウム実行委員会」主催奉納祭、平成21年7月25日に、南沢神楽（南部神楽伝承振興会）の「屋島の戦い」の演目を披露された。

第6章 「奥の細道」 松尾芭蕉を考える 4ヶ所

次の第7章で「義経北行伝説」すなわち「生存伝説」に入っていくわけであるが、どうしても芭蕉の「夏草や 兵どもが 夢の跡」日本戦乱の歴史を一句に詠まれた芭蕉の旅心に少し立ち入ってみたい。芭蕉は『奥の細道』で佐藤元治の里を訪ね、子息の佐藤継信・忠信の夫妻、「楓」「初音」が、悲しむ母を喜ばすために男武者姿の出で立ちで慰めた古事に「二人の嫁がしるし先ず憐れなり」という感情を表し、木曾義仲・斉藤別当実盛・佐藤継信忠信兄弟・源義経の人物が好きで、特に木曾義仲は無条件で好きであったようだ。

1 義仲寺 滋賀県大津市馬場

膳所駅の北東、旧東海道沿いに義仲寺ある。木曾義仲と松尾芭蕉の墓が背中合わせになっていることでよく知られている。寺伝によれば、寿永4年(1184)、この地で敗死した義仲の菩提を弔って、愛妻の巴御前が建てた一庵が開祖とされたと伝わる。芭蕉は元禄7年(1694)大阪本願寺南御堂前の花屋仁左衛門の別邸で客死し、遺言により門人が義仲寺に葬った。木曾義仲の墓、宝篋印塔の横にある。

木曾殿と 背中合わせの 寒さかな 又玄
旅に病んで 夢は枯野を かけめぐる 芭蕉



義仲寺



松尾芭蕉の墓



木曾義仲の墓

義仲寺略誌に《 義仲寺の地は、その昔は粟津ヶ原といわれ、寿永3年1月20日征夷大將軍木曾義仲公はここで討ち死にした。その後、年を経て一人の尼が来り公の塚に待して、供養ねんごろなるによって、里人いぶかしみ、その有縁を問ふに、「みづからは名も無き女性」と答へるのみだったが、この尼こそ巴御前の後身にてこれが往昔当寺を巴寺と呼び、また無名庵の名の出た由緒という。元禄の俳聖松尾芭蕉は木曾公の心情に同情し、慕って無名庵に來り滞在されること多く大阪の宿で死去される時、遺骸は近江義仲寺なる義仲公の御墓の傍に埋めよと遺言した。無名庵は芭蕉翁の没後、その高弟内藤文艸が庵主となった。代々の俳人によって我国俳諧道第一の聖跡とされてきた。本寺は古から「よしなかでら」とも呼ばれ、現在は天台宗となっている。(義仲寺略誌より)

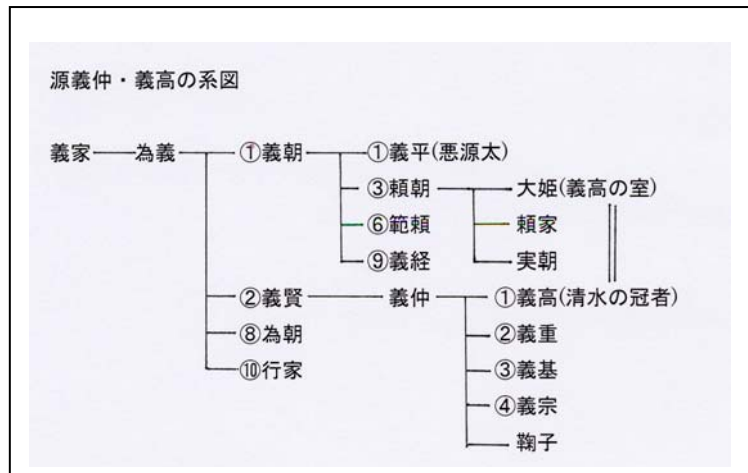
2 おおくらやかた 大蔵館跡 埼玉県比企郡嵐山町

手短に木曾義仲のことにふれる。第1章の3「木曾塚」項で義仲の子息義高のことは簡単に述べたが、松尾芭蕉が惚れ込んだ義仲なので、その生い立ちに少し寄りたい。

木曾義仲 (1154 — 1184) の父は源義賢。義賢は清和源氏八幡太郎義家の孫、為義の次男である。義賢は都へ出て東宮帯刀長を勤めて「帯刀先生源義賢」とよばれた。12世紀半ばに武蔵北西部の豪族秩父重隆の養子になり、上野国多胡郡と北武蔵に勢力を伸ばしていた。鎌倉を根拠地として南関東の武士団の組織を固めていた兄義朝の勢力と衝突した。その時分、兄の義朝は源氏の棟梁として京都いた。義朝の長男義平は義賢の甥、義賢は義平の叔父になる。久寿2年(1155)8月15日、現比企郡嵐山町の大蔵館で、義朝の長男義平(15歳・鎌倉悪源太と呼ばれる・悪とは強い)によって義賢は討たれた。その原因の因縁は、義家の死後、棟梁の地位を継いだのは為義の長子義朝であったことによる。この父子は仲が悪く、これに反して次男の義賢は父為義と仲がよかった。この大蔵館襲撃の二ヶ月後、保元の乱が起った。この乱では源氏も平家も二つに別れ、後白河天皇側に平清盛・源義朝がつき、崇徳上皇側に義朝の父為義・頼賢(義賢の弟)、平忠正が陣営に加わって義朝と戦っている。戦いは一日で天皇側の勝利に終わり、結果、清盛は叔父の平忠正と其の子息3人を斬り、義朝は父為義とその子息等9人を斬った。後、武家政権を確立した源頼朝は、弟の義経、6男範頼(伊豆修善寺で頼朝に殺される)や叔父の行家や木曾義仲を滅ぼして行くことになるが、今義経伝説もその延長線上にあったわけである。源氏の血は時の政治に優先された。



おおくらやかたあと
大蔵館跡 ・ 大蔵神社



話を戻して、義仲の幼名は駒王丸こまおうまるといい、義賢の次男として生まれ、この大蔵館襲撃事件で父を失った時は2歳であった。この大蔵館襲撃に義朝の家人畠山庄司重能しげよしは義平に従い襲撃に参加している。義平は、重能に「駒王丸を生かしておいては後々の憂いうれとなるから、必ず殺せ」と言い渡した。重能は「承知いたしました」と答えたものの、人情から考えても、嬰兒を殺す気持ちになれない。母方に有力者が居れば助けることはできるが、義朝に逆らえる力がない限り、東国では、駒王丸が哀れに思っても、一族を危険に巻き込

んでまでも助けることはできない。家の運命を賭けて、駒王丸を守ろうとする東国の豪族は1人も現れなかった。その頃、斉藤別当実盛（？— 1183）越前国生まれ・長井庄庄司、斉藤実直の養子・が武蔵国長井（熊谷市妻沼）に住して長井庄斉藤別当と称していた。源氏との主従関係を結び武蔵に帰っていた。重能から「男と見込んで」と実盛は駒王丸を託された。実盛は思案深くして、駒王丸の乳母である夫の縁を頼って、信濃国木曾の土豪「仲原兼遠」に預けた。母（小枝御前）は涙ながらに「この子をお助けください」と嬰兒の保護を哀願した。中原兼遠は「この子供はまさしく源氏の正統、八幡太郎義家殿の4代の後胤にあたる。世間というものは、昨日の淵が今日は瀬となるという譬のとうり変わりやすいものである。いまは親を討たれて心細い孤児の境遇であるけれども、いつの世か、日本60余州の武士の総大将になられるかわからない。兼遠、なんとしてでも養育して、北陸道の大將軍にして、天下の桧舞台へ晴れ晴れしく乗り出せましょう。」胸をたたいて受けてくれた。「うけていただけますか、」と実盛。武士の一言で答える兼遠、名場面である。信濃の武士団は義朝の勢力圏外であり、いつか必ずやってくる、由緒正しき八幡太郎の血を引いているこの嬰兒が、兼遠は「いつかくる・・・」その日を見すえて育てていたのであろう

20年後 駒王丸は木曾義仲と称し成人していた。義仲は養父兼遠に平家討伐を打ち明けると、《 兼遠ホクソ咲テ、殿ヲ今マテ育ヒ奉ル本意、偏ニ其事ニアリ。憚候事ナカレ。》『源平盛衰記』は伝える。兼遠の本心が表れている。



義仲の墓・木曾町德音寺



中原兼遠の墓・林昌寺



木曾日義村に駒王丸を預ける

後、以仁王の令旨に呼応して義仲は木曾谷から挙兵した。義仲は鎌倉の頼朝との戦略をかんがみながら「横田河原の合戦」「火打（燧）合戦」「倶利伽羅峠の合戦」へと構えるのであるがその時分に坂東を固めた頼朝は甲斐から信濃に手が伸びてきた。義仲軍は3千騎、頼朝軍は二万騎の対峙であった。この衝突を避けるため、今井兼平の妹との間に生まれた嫡子、清水冠者義高を頼朝の大姫の婿として鎌倉へ差し出す。この人質に義仲は「義高を皆の代わりに鎌倉へ使わした。いかに吾子児が可愛くて渡さなければ、戦いが始まるだろう。それを避けるために吾子を頼朝へ人質に差し出すのだ」これを聞いた妻女たちは泣き、夫たちはふるい立った。そして3ヶ月後、倶利伽羅峠の合戦で大勝した。（長野県木曾郡日義村に義仲館の資料館がある）

3 実盛首洗い池・実盛塚 石川県小松市手塚町・篠原町（篠原合戦場跡）

その後、実盛は「平治の乱」で源氏が敗れたため、長井庄は平清盛の次男宗盛の領地になり実盛は平宗盛の家人となっていた。実盛はすでに70歳を越す老武者になっていた。『平家物語』によれば、平家は倶利伽羅峠で敗走し、そして篠原の合戦（現小松市）で、故郷の最後の合戦に挑む思慮があり、平宗盛に許しを申し出た。「屍を曝す北陸の地は、せめて侍大将の着ける錦の鎧直垂（大将が鎧の下に着る衣）を着けて戦いたい」と申し出る。平家の敗走の中只一人引き返し戦いを挑んできた武士がいた。それが実盛最後の場面を口訳で語る。

《彼は胸中思うところがあったので、赤字の錦の直垂に萌黄緘の鎧着て、鍬形打った兜の緒をしめ、金作りの太刀を佩き、切斑の矢負い、重藤の弓をもって、連銭葦毛の馬に、金覆輪の鞍を置いて乗っていた。信濃国諏訪神社下社の祝部金刺氏の一族、手塚太郎光盛が、

「ああけなげな。いかなる御方か、ただ一騎ふみ留まって戦うとはさても殊勝な、お名乗りあれ」と声をかけると、

「そういう貴公は誰か」

「信濃国の住人、手塚太郎金刺光盛」となのった。

「さては互いによい敵よ。思うところあって、名乗はせぬぞ。寄れ、組もう、手塚、あっぱれ。お前は日本一の剛の者と組討するきだな、こやつ」

組み合っ一緒にとどつと馬から落ちた。実盛は軍に疲れと手負い負っていたので、手塚の下に組み伏せられた。手塚は郎党に首を取らせ、木曾殿の御前に参り、

「光盛は不思議な曲者に組んで討ち取りまいり、錦の直垂を着ているので、侍大将かと思われ、名乗れ、名乗れと責めましたが、最後まで名乗らず、声は坂東武者の声でありました」と申すと、木曾殿は、

「おう、それこそは斉藤別当に違いなかりょうぞ。髪や鬚の黒いのは合点がゆかぬ。樋口次郎は日頃親しい間柄、樋口を呼べ」樋口次郎兼光は一目見るなり、

「ああむざんやな、斉藤別当でございます」と言った。

「それならば、もう70以上、髪や鬚の黒いのはどうしたことか」樋口次郎は涙を流し

「斉藤別当が日頃言っておりました。60過ぎて戦場へ向う時は、髪や鬚を黒く染めて先駆けするのも大人げないが、さりとて老武者と侮られるのも残念と申して居りました。では洗わせて御覧なされませ」と申したので、洗わせてみると、もとの白髪になってしまった」と。命の恩人斉藤実盛その人であった。義仲はこの不運な恩人に涙を流し、義仲の胸中察して、「むざんやな甲の下 きりぎりす」と芭蕉は詠む。



倶利伽羅峠合戦碑

「実盛塚」の説明は次のようにある。「寿永2年6月源氏の若武者手塚の太郎光盛と相搏って劇的な最期を遂げた斉藤別当実盛を葬った墓所である。康応2年（1390）時宗総本山遊行寺（相模国藤沢山無量光院清浄光寺）14世遊行上人太空が此の地へ来錫の節実盛の亡霊が現われ、上人の回向（死者の成仏を祈る）を受けて、妄執をはらし上人は実盛に「真阿」という法名を与えられたと伝えている。以来、歴代の遊行上人が加賀路を巡錫の節には必ず立寄って此の塚に回向された、謡曲「実盛」はこれらの伝説に基いて作られたものである。」と説明がある。

この説明に付け加えれば、第1章の11「伝源義経公首洗い井戸」の編で、鎌倉郡俣野郷に住んだ坂東八平氏の鎌倉党の流れ「俣野五郎景久」の子孫、呑海遊行上人（4代）が相州藤沢の時宗総本山清浄光寺、通称遊行寺を創建したことは第1章で述べた。代々遊行上人たちは篠原巡錫の折には実盛の供養と祖先の五郎景久の供養を兼ねていたのである。五郎景久は篠原の合戦において討ち死にしているが埋葬地は伝えられていない。

4 多太神社 小松市上本折町

多太神社には木曾義仲の奉納したと伝える実盛の形見の「甲と赤地錦の切れと甲冑」がある。（国重要文化財）実盛が戦死した後、木曾義仲は戦勝祈願の書状をこの神社へ奉納したと伝わる。



実盛首洗い池



実盛塚



多太神社・斉藤実盛像

木曾義仲の最後 京に華々しく入洛した義仲であったが、飢饉の京都は治め難く、義経や範頼の坂東軍に義仲の北陸軍は追い詰められてゆく。『平家物語』は感銘深く語る。

《 宇治川、河原と敗走し、木曾殿は、今井四郎兼平と主従2騎になって、乳母子（乳母の子は乳兄弟）の今井兼平をかえり見て「日ごろは何とも思わぬ鎧が今日は重うなった」といい、兼平は主君義仲に武人らしい最後を遂げさすために獅子奮迅の働き、自害すべく粟津松原へ急ぐ。兼平が振り返ると、三浦の石田次郎為久の放った矢が義仲を射抜く。》近江国粟津の松原で義仲31歳の命であった。義経や範頼（義朝の6男・義経の異母兄）の前戦軍に追い詰められ義仲は敗死した。（今井兼平の墓・現大津市膳所にある）

余話・芭蕉の木曾義仲への想いについて 義仲に惚れ込んだ芭蕉の心象に付いて語った書はみあたらないので筆者の勝手お粗末の推量であるが芭蕉と義仲の関係を考えてみる。

1 つには、芭蕉は義仲の本心は「旗^{はたあげ}拳」にあったのではなく、母や斉藤実盛や養父中原兼遠、息子の樋口次郎兼^{かねみつ}光と今井四郎兼^{かねひら}平が義仲を主君として仕えてくれた、乳兄弟^{ちきょうだい}への「義理」をなによりも大事に考えていた。義仲は兵^{つわもの}達の夢に男の義理を立てた。立てることが1番の想いではなかったか。拳兵^{けんべい}の成就^{じゅうじゆ}は2の次であったかも知れない。その想いを誰にも話すことができない義仲の心を汲んでしまった芭蕉ではなかったのか・・・。

2 つには、京に上り、寿永^{じゆえい}3年(1184)正月従五位下(源義朝と同じ官位)から一挙に登りつめ、さらに武門最高の荣誉である征夷大將軍に叙任、旭將軍となった。2歳にして父を打たれ、木曾谷の日陰で育った義仲は眉目麗しき源氏の武将となり、諸国の兵士を従え蜂起した。義仲の育った環境は木曾谷の自然児そのままであった。都からみれば粗野で無教養に見えた木曾や北陸の文化と武士の立ち振る舞いは、武力に劣等感を持つ公家達から見れば、儀式や格式作法等に、荒ぶる武士にたいする軽蔑態度は伝統的にあった。義仲も都の政治文化を吸収する手はずもなく、自然児義仲の家臣もまた自然児であった。

義仲を揶揄^{や ちゆうしやう}嘲笑^{ちやうしやう}する話は『平家物語』「猫間」に出てくる。《中納言藤原光隆の屋敷は猫間(中条壬生)にあったので猫間中納言と呼ばれた。木曾義仲と相談事があって訪ねたところ、郎等たちが「猫間殿がおいでになられました」と言うと、義仲は大笑いして「猫が人に対面するののか」と笑いがある。話は続く「猫殿がいらしたのだ食事を用意せよ」と進め、たいそう大きく深い田舎^{いなかごうし}合子(蓋のある漆塗の椀)に飯を山盛りして、お惣3品を添えて、平茸の汁でお進めした。中納言はあまりに椀がうすぎたないので、召し上がらないでいると、「猫殿は小食であられる。掻^かい給え、掻^かい給え」とせめたてた。》

この情景を見れば、義仲の取り巻く家臣団に、都の政治文化の教養を教授する人材がないことが判る。最も必要な顧問、補佐役を勤められるのは叔父の源行家であったはず、しかし行家は後白河院による行賞が義仲より低いことで激怒し、義仲と行家は心が1つになれない不幸な甥と叔父の間柄であった。義仲は歴史上の大成する大人物になるその強運と命運の環境は頼朝に遠く及ばなかった。推測の域であるが義仲自身、自らの運命を予測していたのでは、・・・その琴線^{いた}に芭蕉は甚く感じてしまったのではないのか。

木曾義仲は終盤^{もちろ}は脆かった。義仲はそれでも充分に余りある人生と、芭蕉は心底そう想っていたのではないだろうか。義仲は肉親の情も知らず、ただ乳母子^{めのとご}と運命を共にできたことに哀感をさそい、芭蕉は花や木々や月をながめ、「義仲よ、それでいいんだ」と、月夜に袂をぬらし、何度も自問自答していたのではなかったのか。「奥の細道」の狂風の旅は、義仲の心と供^{つわもの}にあったと思う。戦乱の世といえ義経も、義仲も共に31歳の命であった。芭蕉の名句は兵^{つわもの}たちの供養の句と思われるのだが・・・。

飯坂で佐藤兄弟に
 平泉高館で義経に
 多太神社で実盛に
 敦賀ひうち燧ヶ城跡で（福井県今庄町）

笈おいも太刀たちも 五月きつきに飾かざれ 紙かみ幟ぼり
 夏草なつくさや 兵つはもの どもが 夢ゆめの跡
 むざんやな 甲かぶと のしたの きりぎりす
 義仲よしのぶの 寝覚ねざめめの山か 月つき悲し

余話・曾良の晩年を想う 第3章・金売吉次の2で『曾良随行日記』でふれたので横道であるが河合曾良かわいそらに付いて少し述べる。元禄2年（1689）3月27日、芭蕉と『奥の細道』に同道した。曾良四41歳。芭蕉は曾良について「曾良は河合氏にして惣五郎と云へり。予の薪水しんすい（家事炊事）の労をたすく。このたび、松しま、象潟共にせん事を悦び、曾良、髪を剃りて宗五を改めて宗悟とす。」曾良は体が弱く、加州なかやまの湯（石川県中山温泉）で芭蕉と別れる。後、宝永6年（1709）徳川家宣いえのぶ将軍が就任すると、江戸幕府は日本全国津々浦々の治政の実情を見て歩く、巡見使じゆんけんしの国々分担発令が下る。（全国を8つの区域に分ける。民情を調べ幕府が大名の藩を監視する制度）翌年5月、曾良62歳で九州地区の巡見使の1員に選ばれ、現在の長崎県壱岐市いき（壱岐島）郷ノ浦に上陸、勝本かつもとで体調を崩し、壱岐島に上陸して16日後、勝本の海産物問屋、中藤家で死去、62歳。現勝本港の見える高台の中藤家の墓地に眠っている。（勝本町教育委員会）

曾良の生き方は人間業わざを越えた恬淡てんたんな生き方であるが、壱岐島の旦那衆も曾良の気持ちを受け止めた。西の果て対馬海峡に生きる海の男の度量がさわやかである。



那須野・右が曾良

かさねとは
 名なるべし 八重やえ撫子なでこ
 曾良の



壱岐市勝本町・曾良の墓

春にわれ
 筑紫つくしかな
 曾良
 乞食かじきやめても

第7章 義経北行伝説・岩手県編・36ヶ所

義経の高館襲撃事件を『平泉町史・論説編』より「第3節・義経最後の日」を見てみる。「先代秀衡が2年前の10月29日に病没してから、平泉に対する頼朝の攻撃は露骨になっていた。頼朝は朝廷の権威を最大限に利用し義経を^{ほんしん}叛臣、泰衡を叛臣の同類に仕立てあげる工作に成功し、対平泉院宣が2度もでている。最初は秀衡が死んだ翌年早々の2月、2度目はその年の10月、いずれも泰衡と義経の離間策謀であり、泰衡に対する恫喝である。義経と結託するならば必ずや「臍を^{ほぞ}嚙む^{うら}恨を遺すであろう。であるから^{もつば}傳ら^{ほうが}鳳衡の^{げんし}敵旨を守り、^{きょうあく}梟悪な義経に同情しないならばその勲功にしたがって恩賞を^{あた}興えよう。もし区徒義経にしたがうならば、官軍をつかわし征伐するぞ」というのであるから脅^{おび}えた泰衡は義経を急襲することに踏み切ったのである。」と結論を論説している。

義経北行伝説とは、衣川で藤原泰衡に高館（衣川の館）にいた義経主従が襲撃され、義経妻子ともども自殺したと『吾妻鏡』は伝えるが、実は1年前に平泉を密かに脱出し、北へ向かって北走していった。すなわち「生存伝説」が「北行伝説」で、義経ファンにおいては、衣川襲撃事件は800年たった現在でも解決していない事件なのである。



義経堂より北上川右東稲山



高館義経堂

1 ^{たかたか}高館 周辺 平泉町の解説は次のようにある。

高館は北上川に面した丘陵で、判官館（はんがんだて・ほうがんだて）とも呼ばれ義経最後の地として伝えられてきた。藤原秀衡は頼朝に追われ逃げてきた義経を平泉に^{かくま}匿い秀衡の死後、頼朝の圧力に耐えかねた4代目泰衡は父の遺命に背いて義経を襲った所とされる。平泉町観光協会の説明は、「吾妻鏡によると、義経は「衣川の館」に滞在していたところを襲われた。今は「判官館」とも呼ばれるこの地は「衣川館」だったのだろうか。ここには、天和3年(1683)伊達綱村の建立した義経堂があり、甲冑姿の義経の像が祀られている。」と説明され正確な館跡はわからないとしている。

俳聖松尾芭蕉が『奥の細道』（元禄2年・1689）の前文に「さても義臣すぐってこの城に籠り、功名一時の^{くさむら}叢となる。国破れて山河あり、城春にして草青みたりと、笠うち敷きて、時の移るまで涙を落し待りぬ」と記し、夏草が生い茂る草叢を観て詠む。

夏草や ^{つわもの}兵どもが 夢の跡

『吾妻鏡』文治5年閏4月30日の条に《 今日陸奥国において、泰衡、^{義朝}源豫州（義

経)を襲ふ。これかつは勅定に任せ、かつは二品(頼朝)の仰せによってなり。與州、民部(藤原)少輔基成朝臣の衣川の館にあり。泰衡兵数百騎を従へ、その所に馳せ至りて合戦す。與州の家人相防ぐといへども、ことごとくもつて敗績す。豫州持佛堂に入り、まづ妻(22歳)子(女子4歳)を害し、次に自殺すと云々。前伊予守従五位下源朝臣義経・年31」と伝える。この記録は義経の死後77年後とされる。黒漆塗り桶に酒漬けにされ、43日経て(旧暦6月13日・太陽暦なら夏)鎌倉腰越浦に運ばれた。襲撃時に焼首になり、当時から「本当に確認できたのであろうか」という疑問の風聞はあった。

林羅山の『本朝通鑑』続編(1670年)「俗伝にまた云う。衣川の役義経死せず、逃れて蝦夷島に至る。其の遺種今に存す」とあり。『大日本史』「義経伝」(1720年)徳川光圀編纂、俗伝として「世に伝う、義経衣川館に死せず、逃れて蝦夷に至る」と世評に伝える。新井白石の『読史余論』(1724年)でアイヌ伝説俗伝として、「義経手ヲ束ネテ死ニ就ベキ人にアラズ、不審ノ事ナリ」「今モ蝦夷ノ地ニ義経家跡アリ。マタ夷人飲食ニ必マツルモノ、イワユルオキクルミト云フハ即義経ノ事ニテ、義経後ニハ奥ヘ行シナド云伝ヘシトモ云フ」とある。



義経妻子の墓



弁慶の墓

義経妻子の墓 毛越寺の一院(平泉郷土館近く)、千手院境内の傍に残る中世の石塔は「義経公妻子の墓」と伝えられる。千手院背後の山は「金鶏山」と呼ばれ藤原秀衡と義経が相談のうえ、雌雄一対の黄金の鶏を山頂に埋めたという伝承が残されている。

弁慶の墓 (月見坂入口)武蔵坊弁慶大墓碑建立由来。文治5年(1189)義経の居城高館焼討されるや、弁慶は最後まで主君を守り遂に衣川にて立往生す。遺骸をこの地に葬り五輪塔をたて、後世中尊寺の僧素鳥の詠んだ石碑が建てられている。〃色かえぬ 松のあるじや 武蔵坊〃 月見坂上り左に弁慶堂があり、薙刀を手に七つ道具を背負う弁慶像が安置されている。

『奥細道菅菰抄』 芭蕉の『おくのほそ道』研究家・蓑笠庵梨一著(1714—83)は次のように述べている。(芭蕉の足跡をほぼ実地に踏査)《 義経追討ノ事、或ル説ニ云、秀衡病テ将ニ死ントスルトキ、竊ニ三子ニ遺言シテ云、鎌倉將軍ハ、人トナリ、頼モンゲナシ。嘗テ義経ヲ亡ボシ、且 我ガ所領ヲモ奪ハンノ志アリト見ユ。然レドモ、我レカク

存命^{ナガラエ}テ在ル故ニ、イマダ手ヲ出ス事アタハズ。我レ死セバ、必ズ鎌倉ヨリ義経ヲ討ベシ。左アラバ、汝等ガ身モ亦危^{マタアキ}フカルベシ。所詮我ガ死後ニ至リ、国衡、康（泰）衡ハ、伴^{イツワリ}テ鎌倉ニ属シ、義経ノ討手ヲ願ベシ。忠衡ハ、義経ニ従テ、権^{カリ}ニ是ヲ拒ギ、義経、及ビ義経ノ近臣ノ功アル者ヲバ、皆蝦夷^{エゾ}ヘ奔^{ヘン}ラシムベシ、ト囑^{イヒ}付^{ツケ}テ、秀衡死シヌ。果シテ幾許^{イクバク}モナク、鎌倉ヨリ義経追伐ノ聞エアリ。是ニ於テ、三子ヨク父ノ遺命ヲ守リ、国衡、康衡ハ、高館ヲ攻メ、忠衡ハ、義経ニ代リ、自殺シテ焼死シ、人ヲシテ其形ヲ知シメズ。近臣亀井、片岡、弁慶ガ徒ヲモ、亦^{マタ}各人ヲ代ヘテ戦死セシメ、義経ヲバ、近臣ト俱ニ蝦夷ヘ送ル。其後国衡、康衡、兄弟モ亦終ニ頼朝ノ為ニ亡ボサル。義経ヲ蝦夷ニテハ、ギクルミト云。後ニ義経、中華ヘ渡リ、名ヲ義行ト更^{アラタ}メ、仕テ列侯トナリ、義行王ト称ズ、ト云リ。（略）東都ノ俳士玄武房、予ニ語テ云、今ノ中華ハ韃靼^{ダタン}人ノ治ニテ、世ヲ清ト云。其ノ先ハ義経ヲ祖トス。故ニ世号モ亦清和源氏ノ清ヲ取ト。乃チ清朝ニテ撰述セシ図書大成ト云書ニ載スト聞ヌト。按ズルニ、今清朝王城下ノ戸戸、義経ノ画像ヲ門柱ニ粘^{ヘル}事、蝦夷志ニ見エテ、玄武房ノ談ト符合ス。義経高館ニ死セズ、蝦夷ヲ経テ、中華ニ渡ル事ハ、実ニシテ明カナリ。》と。蓑笠庵梨一の時代は新井白石の『蝦夷志』『読史余論』、沢田源内の『金史別本』が教養人に読まれていたことが想像できる。

2 清悦社^{せいえつしゃ} 旧川崎村・岩手県南部・一関市川崎町門崎^{かわさきちやうもんざき}

『清悦物語』は栗駒や遠野にも伝承が、旧川崎村には「清悦社」が存在する。奥州合戦後、論功行賞として千葉一族の葛西氏の重臣^{うすぎぬ}薄衣氏が入った所でもある。清悦社は寛永7年(1630)3月7日、源義経の家臣、清悦なる者が、460歳の寿命を全うして、旧川崎村門崎字川崎の葛西宮内の家で没し後塚を築き、祀った御社が「清悦社」である。かつては大きな御堂が建築されていたが、終戦後の北上川の大洪水によって流失してしまったという。清悦社は不老長寿の清悦にあやかりたいと、近在から参詣者でにぎわっていた。葛西家には清悦が着用したと云われる鎧と清悦社の額が残こされている。先の大戦中戦地に赴く若者たちが「無事に帰還できる」風評が広がり祈願詣が多くあったという。

『清悦物語』昭和52年、千葉房夫氏が旧家に所蔵されていた古文書6編を、読み下したもの。（『東磐史学』平成17年・第30号 一関市立川崎図書館資料提供）

『清悦物語』の経緯を要約すると「清悦は文治の昔、源義経に従って、武蔵坊弁慶、常陸坊などと供に平家討滅の合戦に参加し、義経が源頼朝の忌諱^{きい}（怖れる事）に触れて諸方流浪の末、平泉に下って来た家来の1人である。ある日、仙人から不思議な食物（皮もない朱色の魚・ニンカンという魚）を食べて不老不死の身となり、高館の戦いもしせず、義経死後存命^{みそう}して民搔^{らくはく}間に落魄し平泉山中に住み、長命すること460余歳にわたったと伝える。伊達政宗の第7子、柴田郡村田城主、伊達宗高の家来に小野太左衛門という人が、清悦を大変尊敬して寛永年中就いて兵法を学ぶこと6カ年、遂にその奥義を伝授されるに

至ったという。清悦について兵法を学びながら義経主従の物語を聞いてこれを書き留めたものが『清悦物語』である。」とあると解説されている。

『清悦物語』千葉房夫氏の読み下しの一部を抜粋する。「高館^{たかだて}落城の場面」《 明る^{みそか}晦日になりければ、武蔵坊云いけるは、今日ばかりの御合戦なり、君を二度とおがみ申す事あるまじ、二百五騎の者共に御盃^{さかずき}をと願ひければ、義経公も尤と思し召し、則ち御盃をくだされば、これ迄と弁慶は元結を切って御前におき、山伏のようになる。鈴木兄弟その外、思い思いに出立し、衣川の大蔵坊も一所になって、関東勢へ切っかかる。御所方の軍兵いずれも必死と思ひ定めしことなれば、十騎が関東方百二百騎にかけ合いて一足も退^{ひり}ぞかず、えいえいと声をあげて押しかける。午^{うま}ノ刻より申^まノ半ばまで（昼12時から午後4時過ぎ）すでに軍^{いくさ}は十三度と思うところに、敵の勢も二、三騎に射たすなと思えば、御所勢もむざんに討死しまずとす。弁慶は衣川の中の瀬に立ち死を遂げにけり。鈴木兄弟も亀井いたでを負いて、搦手^{からめて}の御門より小高き所へ引きあげて、一所に腹を切る。義経公につき添う者としては、この清悦と常陸坊とその外近習二人なり。（略）判官^{かみふさ}へ兼房申し上げるは、只今御前も、御両人の若君も生害と申せば、御心安くと庭の石に御腰をかけさせたまいて、御腹を十文字に切って臓をつかんでくり出し、義経の御首を腹の中に入れ、きぬをもって腹をまき、清悦と常陸坊近習2人にて、御所中に火をかけ焼きあげる。文治四年閏四月二十八日より同三十日迄三日三夜の戦にて、高館の御所落城なり。》と。

千葉房夫氏は「解題」に次のように述べておられる。「この物語は、正しい歴史実話ではないが、このような妄団談奇談を好んで聞かんとした、当時の民衆の切実な要求があったことがうなずかれる。文治の昔の源平合戦や高館合戦の非業な義経などを物語ることによって、忘れられた義経の最後への敬慕の情をよみがえらせたことと信ずる。」

右は清悦社



3 妙好山・雲際寺^{うんまいじ}の位牌 奥州市衣川

妙好山の由来は、北の方が義経公の乳母妙好尼の菩提を弔うため、当寺の前進である梅際寺を再建し、運慶作の不動明王を安置し、従者の禅師頼然を開山として妙好山とした。雲際寺の由来は、《 嘉承^{かししょう}4年(850)慈覚^{じかく}大師の開創にして天台宗^{うしまだ}牛局山梅際寺と号す。文治5年源義経公と北の方とともに平泉高館にて御自害義経公の位牌表面は「捐館^{せんかん}通山源公大居士神儀^{つうざんげんこうだいこじしんぎ}」裏面は「文治5年閏4月28日 源之義経」北の方の位牌は、「當寺^{とうじ}開基^{かいき}局山妙好尼大師^{きよくざんみょうこうにだいにし}」僧頼然これを安置して生涯開向す。》とある。

義経位牌の「捐館^{せんかん}通山源公大居士神儀」は「捐館」（身分の高い人の死に冠する尊称・住んでいた館を捨てる・死という意味も）とは、「館を捨て、山を^{とんせい}通って遁世した。」す

なわち「館を捨て、山を通過して遁世（出家・世から逃げる）した。「世間から姿をくらました」ということになる。第3章の14、金田八幡宮の義経位牌も「捐館通山源公大居士神義」と同じである。



正面奥が雲際寺

『菅江真澄遊覧記』「かすむ駒形」に「経文の一節を唱えながら妻子をとものにさしつらぬき、その太刀で腹をかき切られたのは文治5年閏4月29日のこと、御年33歳であった。法名通山源公大居士と彫った霊牌は、衣川村の雲際寺におさめられている。」と記述している。

義経主従の北走路・其の1

高館で自刃を装い弁慶を始め、片岡、鈴木、亀井、鷲尾、伊勢等と川越夫人を引き連れて、奥州本街道を避け北上川の対岸へ出た。観福寺、弁慶屋敷、多門寺から江差の玉前神社、五十瀬神社から、伊手の源休館でしばらく休息する。東に向け五輪峠を野宿しながら住田へ出る。そして遠野の村々を過ぎ、大槌、室浜から現山田町の浜川女で一時的の休息をする。海岸を北へ、宮古へ入った。祖父頼義が勧請したという横山八幡で大望成就の祈願と写経を納める。鎌倉の威にかかる所を避けたのか内陸西へ向う。川井村、箱石、新里、茂市村に出るが、色々の事情があったのか又宮古に戻っている。宮古の黒森神社で2、3年留まり写経を納めている。そ

ふだい うねどり

れから普代村の鵜鳥神社で渡海の渡海成就を祈祷し、この辺りの海岸から（気仙の津と

たねさ

も）海路八戸種差海岸へ渡る。



4 観福寺 一関市大東町猿沢野田前

平泉を脱出した義経主従が泊まった寺とされる。観福寺縁起によれば、猿沢のこの辺は

よど

金山帯で、川の澱みで砂金がとれた。平泉初代藤原清衡が東山のこの地に池を作り、「猿沢の池」と名づけ、それが村名となった。金の採れる山里は金山として栄えた。当時、金山は現在の我々が考えるような、鉱山に坑道を開けて採掘するのではなく、川に沈殿した

すけつね

砂金をより分ける原始的な産金であった。建久2年(1191)工藤佑経(義経の配下)の長

おい

男、犬坊丸が寺を立建。観福寺の寺宝に「亀井六郎の笈」がある。

5 弁慶屋敷 奥州市江刺区田原

たばしねやま

東稲山から観福寺へ、義経主従はここ弁慶屋敷に立ち寄る。白粟五升を求め炊かせて空腹を満たした。この時の粟を借りた「粟借証文」があったという。また、この屋敷はかつて武蔵坊弁慶が住んでいたこともあり、このことから弁慶屋敷と呼ばれるようになった。



観福寺



亀井六郎の笈



弁慶屋敷跡

6 多門寺跡 江刺区本町

観福寺からここ多門寺に投宿し、その謝礼として鈴木三郎重家の「笈」を置いて去ったと伝えられている。多門寺は明治五年の火災で笈も焼失し、現在の多門寺がある。境内には「弁慶の腰掛の松」と名付けられた老松があったという。(岩手観光連盟)

7 鈴木三郎重家と源義経公の供養碑 江刺区岩谷堂

文治5年閏4月30日源義経公は衣川館自害されたとき、家臣の鈴木三郎重家も同所で戦死した。その後、建久年間(1190—1198)に鈴木三郎重家の子、鈴木小太郎重染は、父の敵を打つため故郷の紀伊国から陸奥国に入り、この地に至った時、敵の顔に似た人面石

を見て、覚る所があり、亡き君源義経公と亡き父鈴木三郎重家の追福のため一寺を建立して、鈴木山重染寺（多門寺の前身）と称したと伝えられる。（江刺市観光物産協会説明）

『平泉雑記』相原友直著 卷二 「鈴木重染」に 《江刺郡片岡村医王山重染寺ト云ル寺アリ、昔鈴木三郎重家ガ子重染ト云者紀州ヨリ父ノアトヲ尋ネテ奥州ニ下リ後ニ僧トナリテ小庵ヲ結ビ隠レ居レルソノ旧跡ナリ。》とある。

8 玉前神社 江刺区玉里字玉前・人首川沿いにある

北走の義経主従が玉前神社に立ち寄り、武運長久と道中安全を祈願するために5日間逗留した。玉前神社には社宝として保存されている経文、太刀、鎧など義経ゆかりの品々がある。延暦20年（801）征夷大將軍坂上田村麻呂が、種山高原の大森山に逃げる蝦夷の人首丸追う途中、この神社を訪れて武運長久を祈願したと伝える。（岩手県観光連盟）

余話・人首川の伝説 人首丸伝説は今から1200年前、東北・岩手の大地で征東の朝廷軍と蝦夷の酋長大墓公阿弋流為が日高見国胆沢（水沢市胆沢地方）で、両者は戦いを繰り返していた。『続日本紀』延暦8年（789）6月3日の条《征東將軍の紀古佐美は奏上する。副將軍等謀議して3軍を河（北上川）を渡って賊を討つことにした。巢伏村に至り、前軍は賊徒に阻まれ河を進み渡れません。そこへ賊徒800人が官軍をさえぎり戦い、その力は強く官軍は後退したが、さらに賊が400人、河の東の山から現れて、官軍は前後を挟みうちにされ、官軍側は戦死者25人、矢にあたった者245人、溺死した者1036人、泳ぎ着いた者1257人ですと、朝廷に報告した。》これが有名な「巢伏の戦い」である。これに対しアテルイ軍の戦死者89名と伝わる。第2次（794年）征夷大使大伴弟麻呂が10万の将兵で斬首457級、捕虜150人、捕獲の馬85頭、焼滅した村75ヶ所、アテルイ軍に打撃を与えたが降伏にいたらなかった。第3次征夷大將軍は坂上田村麻呂で従来の武力から温情政策に変えたことにより、アテルイは500余人を率いて田村麻呂軍に降伏した。田村麻呂はアテルイと副将磐具公母礼を伴い京都に凱旋した。田村麻呂は天皇に両者の助命嘆願したが公家たちの反対により河内国植山で処刑された。『日本紀略』に「この2虜は並びに奥地の賊首である。2虜を斬る時、田村麻呂申して云うように、願いに任せて帰えしてしまえば、その賊類（日高国残賊）が勢力を増してしまう。公家たちは野性獣の蝦夷たちの心はあてにはならない。たとえ田村麻呂が云うように奥地に放還するは、古事にあるように虎を養いあとに患となる。即ち両虜を河内国杜山にて斬ってしまえ」と伝える。（首塚は枚方市牧野公園内）



現在の多門寺



鈴木重家と義経供養碑



玉前神社前人首川流れる

余話・江刺に伝わる人首丸伝説 ^{ひとかべまる} 達谷の窟 ^{たっこく いわや}（金売吉次 17 達谷の窟参照）を逃れた人首丸（大武丸の子）は江刺原体の鬼淵に潜み逃れ、米里の大森山（820 疔）に立てこもったが、田村麻呂の女婿の田村阿波守兼光に討たれた。兼光が首を見ると鬼ではあるが美少年であった。兼光は少年の霊を祀る観音堂を建てた。後、玉里に移され大森観音となり明治8年までこの地を人首村と称して偲んだそうである。大正6年夏に宮沢賢治はこの地区を訪れ、原体村（現江刺市田原）で12歳位の子供たち舞う稚児剣舞に人首丸への鎮魂と供養の剣舞を見て激しく心を打たれ「うす月に かがやき出でし踊り子の 異形のすがた 見れば泣かゆも」と短歌を詠んでいる。（『春と修羅』より）

余話・鬼剣舞 ^{おにけんばい} 史実とは別に剣舞の伝承は興味深い。悪路王・安倍貞任・源義経など中央権力によって悲運な最期を遂げた者たちの亡霊を慰めるために踊られ始めたのが剣舞であるという。まさしく「鬼」となって戦った亡霊に念仏剣舞で鎮霊する。これ等の剣舞が悪路王・貞任・義経北行伝説を生み語り継いだといえる。剣舞は剣を持って舞うところからのあて字だが「バイ」は「舞」がなま ^{マイ} たものではなく、「反閤」からきている。反閤 ^{へんぱい} は陰陽師や修験者の用いる祝法で、悪霊を足の踏み方で地面を鎮め邪気を払う行い。神楽などの呪術的な足づかいともいわれる。（「北の鬼の復権」えみし学会より）

余話・悪路王伝説 ^{あくろおう} 悪路、赤頭、大武丸、大猛丸 = 「悪路王」となる。アク = 武力が強い。坂上田村麻呂が蝦夷首領の阿弭流為 ^{アテルイ} を征伐した人物と一般的には云われている。民俗学大家柳田国男は、アク = 芥 ^{あくた} をあて、洪水に溢れる下流の地、地面の悪い低湿地を意味するという。アクタイ、アクタレ = 強情の意味につながる。又、茨城県の鹿島神宮宝物殿にある「悪路王の首」は次のように説明している。「平安時代、坂上田村麻呂将軍が奥州に於いて征伐した悪路王の首を持参、寛文年間に口伝により木製で復元奉納したもの。また大陸系のオロチオン族の首領で悪路の主とみる人もいる。」と説明がある。

9 五十瀬神社 江刺区田原地区

五十瀬神社には義経主従が3日間滞在して英気を養ったと言われている。この神社の裏山に休息し、粟めしを所望したと伝わる。



悪路王の首・鹿島神宮



五十瀬神社



源休館跡

10 源休館跡 江刺区伊手・伊手小学校の裏山（現在は稲荷神社）

義経主従は五十瀬神社から東南の伊手に向かった。伊手小学校を訪れると、教頭先生と校長先生が、親切に現場案内をしていただいた。帰り際に、「ここ源休館に来られる人がおられますか」と質問しましたら、校長先生は「休日などはわかりませんが、私の知るかぎりでは5人ほどおりました」とのお話でした。校長先生は校庭の子供たちに、にこやかに声をかけておりました。ここ伊手はなんとも素晴らしい風光明媚な所である。

『平泉雑記』に《奥州江刺郡伊手村ニ源休館ト云アリ、郷説ニ義経ノ居城云フ、杉ノ古木アリ》とある。大杉古木は明治末頃までであったという。

11 五輪峠 奥州市と遠野市国境

伊手から盛街道県道8号には姥石峠を越え北に向かうと人首川を上ると五輪峠に入る。この県道174号は冬季通行止めとなる。義経北走には数人の仲間連れで峠を越えたことであろう。現在でも山は深い。峠には宮沢賢治の碑が、「五輪峠と名つけしは、地輪水輪（仏教の宇宙観）また火風峠5つの故ならず ひかりうずまく黒の雲ほそばそめぐる風のみち 苔蒸す塔のかなたにて大野青々 みぞれしぬ」と説明があった。

12 荒覇吐神社 気仙郡住田町川口

住田高校の前と聞いてきたが何処を探しても神社らしきものは見渡らない。おばあさんと行き合い尋ねると、学校の南、目の前の岩山の頂上にあった。岩山に登るのは下からみても厳しく、当日は腰痛のため残念であるが山登りは中止した。義経主従は旅の安全と健脚に長旅を祈願したという。「荒脛神」は一般的には脛巾は旅人の脛を保護する脚半で道中の守り神、健脚を願って祀った神、ワラで編んだ脛巾・脚半を奉納する。又、アラハバキ（荒覇吐・荒吐・荒脛巾）信仰は東北地方に見られる民俗信仰で、起源は古く「まつろわぬ民」（大和朝廷に服従しない民）の信仰とも、縄文神の一種とも云われる。

13 風呂屋 遠野市上郷町細越

義経主従は赤羽根峠を越え、この家で風呂をたてさせ入浴した。それ以来、この家の姓を「風呂」と呼ぶようになったと伝えられている。またこの辺は、今も「風呂」という地名となっている。（遠野市説明）



五輪峠



岩山の頂上が荒覇吐神社



風呂屋

14 駒形神社 遠野市板沢

風呂屋から町の中心部へ4キロ位行くと、釜石線沿いに駒形神社がある。義経主従がここまで来たとき、義経の愛馬「小黒号」が死んだ。ここに祠を建てねんごろに葬った。それ以来、この神社を駒形大明神とか駒形神社の名で呼ぶようになった。（遠野市）

遠野は古くから馬産地であるため、その守護神として祀られている駒形神社も多い。日本語の古語に「駒」「牧」は馬からきている「マ」と言う。ウマはマを引き伸ばした形、これは古代に朝鮮を經由して入ってきた中国語と云う。（『倭国』岡田英弘著より）

15 続石 遠野市綾織

県道396号上れば「千葉家南部曲り家」の手前に続石はある。県道より30分位山を登ったところにある。左右に並んだ六尺(1,8m)の立ち石に五間(9m)の笠石が鳥居状に載っている。古代に造られた石室が剥ぎ取られたドルメンようになっている。

伝説は、《昔、弁慶がこの石組を組むために、隣にある泣き石の上に載せた。泣き石は一人では無理だと言って一晩中泣き明かした。弁慶はそれなら他の石を台にしようと、今の台石の上に置いた。それゆえに続石の笠石には弁慶の足跡の窪みがある。》近くには泣き石もある。（『遠野物語拾遺第11話』）

16 中村判官堂 釜石市橋野中村

義経主従は笛吹峠を越えて橋野中村で宿泊した所と伝わる。

中村判官堂の別当を努める和田家の裏山に登った頂にある。この祠は笛吹峠近くに祀られていたものが、30年位まえに和田家に移されてきた。和田家では毎月15日に必ず参詣をしているという。祠の中に衣冠束姿の義経像がある。案内や書物には「石像」となっているが確認すると「木像」であった。



駒形神社



続石



中村判官堂

17 判官家 宮古市山田町大沢

山田町大沢に「判官家」と呼ばれる家名がある。ここ大沢の地で義経主従が宿泊のお礼に、義経の官名「判官」を贈ったという。現在も屋号として「判官」となっている。現在は「箱石家」を名乗っているが、江戸期までは「判官家」と称していたが、明治以後、判官の姓は恐れ多いので改姓したという。2009年4月初め、突然の訪問でしたが、「箱石家」御夫妻が歓迎していただいた。御夫妻供教職員を退職され、悠々自適生活に筆者も甘えて色々質問に答えていただいた。見せていただいた位牌に「宝暦2年(1752) 午ノ星 28代 判官孫市」とあった。現在の御当主は48代か49代と言われておりました。義経主従が宿泊した家は、山田町の「浜川女(現在は浜川目)」言う所に7、8人が1週間滞在したという。江岸山「南陽寺」曹洞宗・山田湾に南面している。箱石家の菩提寺、南陽寺の墓地に「判官家」の黒みかげ石で立派な墓所があります。筆者は墓石の卸業をしていた関係上、一目見て高額であることがわかる。ご当主曰く「義経伝説がある以上、粗末な墓は作れない。これもご先祖さまの導きで、やむを得ない事です。」と言われておりました。そして「箱石家」苗字の謂れの山を案内していただき、箱石の如く本当に四角い花崗岩かこうがんが、山の法面のりめんにありました。尚、「岩手日報」が平成17年に「義経北行伝説紀行」金野静一先生のシリーズ連載があり、箱石さんの教え子が、その担当にあたり、道南方面への義経伝説の取材と一緒に訪れたそうです。

18 山田八幡宮・関口神社 宮古市山田町役場隣り

この神社のご神体は「清水観世音菩薩かんぜおんぼさつ」で、地元の郷土史家の話では、《義経の家臣、佐藤継信の長男三郎義信がこの地において、北走途中の義経が、継信が生存中に片時も手放すことのなかった守り本尊「清水観世音菩薩」を三郎義信に手渡した。》と伝えられているものである。ご神体は高さ3寸の青銅製という。25年に1度、宮司さんによるご神体箱の衣替えの時、深夜ローソク一本の明かりでこの儀式にあたるという。従って、氏子の皆さんにはご開帳は無いという。(岩手日報「義経観光ルート」より)

関口神社 山田町関口奥不動の礼拝所として明治初年地名をとり関口神社と改名し

た。現在の宮司38代佐藤明德氏（佐藤継信・忠信の後裔）が関口神社と奥宮不動尊に案内いただいた。関口村の佐藤信政に、義経が継信の持仏「熊野権現神像」を与えたのが関口神社のご神体という。（『山田町史』）

「山田八幡宮由来記」 「文暦 2年（1235）2代佐藤義衛氏は、祖父継信氏陣中にてても守護奉候清水観世音菩薩尊を義経公奥州御下向候、鷲洞館（八幡宮の一带の山）に見えられた時、義経が亀井太郎氏（六郎）に清水観世音尊を被為命給い、父義信氏に授けたものである。尊像を御家に安置せし事を、恐れ鷲洞山内に観世音堂を建立し祀り、この時経堂も建立した。即ち、文治4年（1188）9月、佐藤氏の初代義信（継信の子）が義経から賜った清水観世音菩薩尊像を義信の子2代義衛が47年後、文暦2年に観世音堂を建立して祀ったものである。文化7年庚午佐藤左京藤原之兵馬」（『山田町史』）

「佐藤家文書」 「出羽ノ国守護職、佐藤庄司秀信（元治）之三男佐藤豊前信政、（秀信の妾の子）也。文治元年出羽ヲ去テ陸奥に至ル。秀信ノ長男三郎兵衛尉次信（継信）、次男四郎兵衛尉忠信兄弟、九郎判官義経公ニ伏リ（仕え）、元暦元年（1184）、屋島、壇ノ浦ニ於テ兄次信討死ス。其後、判官殿ト御兄二品頼朝公之御不興（不仲）に寄テ奥州江御下向ニ、佐藤次信常ニ深信為成熊野大権現座ス。（次信は常に信心深く熊野大権現守護神としていた）次信戰場ニ赴ク時茂陣中ニ守護シテ此御神ヲ信ス。然ルニ次信ハ判官ノ御命ニ替リテ、八島ニ討死シ故、（屋島において討ち死にした）義経公ハ其後、此神ヲ為守護奥州に下リ給イシ也。（この神をもって奥州に下り）大沢ニ至リテ（文治4年大沢に落ちてきた）豊前信政ハ判官ニ目見ス。尤モ信此国之案内ヲ致セリ。（義経主従を案内した）其功判官感給イ兄次信ノ信心為致所之（義経はその功績を感じて継信の信心していた）熊野神像亀井ノ六郎ニ被為命豊前ニ給イシ也。（亀井六郎に命じて信政に渡した）此ノ時ヨリシテ佐藤家ノ家ニ此熊野権現ヲ守護ス。後ニ斗リテ斯ル尊像ヲ家ニ置参ラセン事ヲ恐レ、同国関口村藤ノ森ト言ニ安置シ奉ル。（関口の藤の森に熊野神社を建立し奉る）子孫永ク之可為守護神祭可為猶能ク信心者也。（子孫永々に守護神として信心するように） 文治4年甲ノ9月 佐藤豊前信政（花押）（佐藤光作氏所蔵）」

（「山田町の義経伝説」山田八幡宮提供）



判官家と彫刻・南陽寺



山田八幡宮



関口神社

19 法冠神社 釜石市鵜住居 町室浜

地元では義経を偲びホンカン様と呼び、このホンカンが法冠になったようである。現地の観光連盟の説明は、この地にやってきた義経主従は鵜住居川に沿ってこの室浜で休息した。後、土地の人々は義経が休息した跡に、義経の霊を祀り「法冠神社」と号した。現在でも国道45号から外れ、昔を偲ぶ浜である。古文書は明治29年と昭和8年の大津波で失っているという。義経主従はこの地より大槌川の上流を目指した。金売吉次の金山長者森があるからだ。

20 大槌町の駒形神社 上閉伊郡大槌 町（大槌川を4キロ位上る）

義経主従は吉次の産金山長者森へ向かう途中、ここで馬を繋ぎ休息した。この場所に里人が祠を建て「駒形大明神」とした。この社の奥には馬頭観音碑がたくさんある。駒形神社のことを「高麗方（形）神社」とも良馬の守護神とされ、古くは、高麗から来た帰化人の神とされている。『日本書紀』に「天智天皇5年（666）冬、百済の男女2千人を東国に住ませた。」とある。『続日本書紀』に「靈龜2年（716）5月 駿河・甲斐・相模・上総・下総・下野の7カ国にいる高麗人1795人を武蔵国に移住させ高麗郡置いた」（現入間郡）とある。百済は古代朝鮮半島南西部あった古代国家(346-660)、唐軍13万と新羅軍5万の連合軍に百済は滅亡するが、663年日本は3万7千の将兵の援軍を百済に送ったが、唐・新羅連合軍に白村江の戦いで大敗、後敗北した日本軍は亡命を希望する百済人貴族を伴って帰還している経緯がある。

21 宮の口判官堂 駒形神社よりさらに3キロ位上流

義経主従は大槌川上流の宮の口で野宿した。後、里人が判官さまを偲んで祠を建て、崇拜した。お堂の由来は「住年以来キャラ神木アリ、大正初期ノ水害ニ流失セリ、昭和39年、祠ヲ再建崇拜セリ」と説明文があった。



法冠神社



大槌町の駒形神社



宮の口判官堂

余話・『甲子夜話』 卷61に「義経往満州の項」 松浦静山 著 (1760 — 1841) より義

経伝説をみる。静山は歴史文化、風俗、政治経済など『甲子夜話』の大随筆を残す。平戸松浦家第34代当主（9代平戸藩主）明治天皇の曾祖父にあたる。

《 義経高館にて自害せしと『東鑑』等に記せしが、奥州の所伝は、彼処より正方の山路、黒石通りして、^{氣 仙}けせん、相さり（地名）、南部越へ、^{ロツカウシヤマ}六角牛山（遠野市と釜石市の境界）、^{カッチ}甲子町（釜石）、大槌浜と云に宿し、是より船に乗じて満州に到れりとぞ。この時秀衡曰ふ。源家は我が主君なり。然ば今鎌倉に頼朝坐せば、其跡ふと云べからず。すれば義経の身安全を^{ねがふ}冀なりとて、満州に使い遣し、船2百艘に5斗入りの米百表宛を積み、これを資とし、義経を彼に託せしとぞ。又義経の安泰を祈るが為に、湯殿山に^{きせい}祈誓して、秀衡自ら肉食^{ようしゆ}嬌酒を断しとぞ（略）大槌浜の人家には、昔義経の宿せし家、又弁慶の宿せし、亀井の宿せし、片岡の宿せし杯、処々にその往跡を云ふと。又蝦夷の地にて義経と云言ばを、ヲキグルミと云こと、皆人の知る所なり。この余、義経の跡処々に有りと云へば異邦に往しこと事実ならん。》と記述がある。この記述は義経が蝦夷地へ渡る前に大陸側と交渉があったかに見え、この時代の知識人たちが義経不死伝説を語られていたことが想像できる。静山は松浦家の正史『家世伝』の藩内の調査し、家伝系図など多岐に及び、甲子の夜に稿を起こし『甲子夜話』と標題し、大随筆集を総計278巻を著する。

22 判官神社・昔は判官^{ごんげん}権現と呼ばれた。 川井村山田線箱石駅近く

箱石駅から県道106号を上って右側の山を登る。山名家の裏山、通称判官山を登る。山名家には中世から伝わる明暦4年(1658)棟札に「御所クロウハングワンヨシツネ大権ゲン之所」と記してある。義経主従が海岸方からここ箱石にきて宿泊の礼に「^{えん}役の行者の像」を置いていった。義経の家臣に山名義信という人物が同行していたが、青森の浪岡で鎌倉方と戦って討ち死にしたと伝わる。もちろんこの社の祭神は判官義経である。

23 鈴ヶ^{すずか}神社 静御前様と呼ばれた。 箱石駅と川内駅の間

この神社は急勾配の山の頂にあり、鈴ヶは静御前の静が転じたと伝わる。この鈴ヶ神社は静御前を祀ったものであり、静御前の屋敷もあったという。鈴ヶ神社は、鈴権現とも呼ばれ、甲冑姿の義経の像もあったと伝えられている。また、この鈴久名の地名も静御前によったものである。

24 日向^{ひゅうが}日月神社 宮古市刈屋・岩泉線岩手刈屋駅・新里村^{にいさとむら}役場裏

文治元年(1185)11月、吉野山で義経と別れた後、静は捕らえられ鎌倉へ送られてきた。翌年鶴岡八幡宮で有名な「静の舞」を舞う。『吾妻鏡』文治2年4月8日条、《畠山重忠の銅拍子^{どうびょうし}をなす。静^{しずか} まづ歌を^{ぎん}吟じ出して云はく、〃吉野山峰の白雪ふみ分けて入りにし人のあとぞ恋しき〃 次に別物^{わかれもの}の曲を歌ふの後、また和歌を吟じて云はく、〃静^{しず}や

静しずしずおだ巻きくり返し昔を今になすよしもがな〃 まことにこれ社壇の壯観と吟じれば上下皆興感を催す。》と伝える。



判官神社



鈴ヶ神社・小山の頂にある



日向日月神社

静にやどった遺児は、男であったので鎌倉由比ガ浜に捨てられた話になっているが、ここ神社の伝承では、殺されるはずの男児が、宇治川の先陣争いで有名な佐々木四郎高綱によって、密かに奥州もいち茂市の地で育てられ、成人して佐々木四郎義高と名乗り、生涯この地で過ごし82歳で没した。義高は奥州閉伊郡を治め、子孫は繁栄し閉伊地方の13ヶ所を領有し「田鎖たぐさり13家」と称し、義経の遺子伝説は宮古市の田鎖方面に広く語られている。

もいち

25 判官堂 新里村・茂市小学校の裏山

このお宮は諸国行脚の老僧が建立したものという。義経主従が北へ向かう途中ここで経を納め、「判官堂」と改称したとつたえられている。『東奥古伝三閉伊の巻』によれば、その後、義経主従は海辺を通して蝦夷に落ちて行ったという。(岩手県観光連盟)

26 長沢判官堂 宮古市長沢

この長沢集落に「竹下家」の氏神が判官堂で、義経の石像を祀っている。義経主従がこの竹下家に宿泊し、義経主従は北へ向かい戦力の体制を整える相談をしていた。竹下家の祖先が「なにとぞ、我ら一族をお味方にお連れください」と同行を願ったが「その志は誠にありがたいが、今はこの通りの世を忍ぶ身であるため、それはできぬ」と謝絶したと伝わる。義経一行は竹下家の裏山の峰伝いに北をめざしたという。そして当家では、義経の祠と石像を造り、代々伝えているという。『成吉思汗は源義経』の著者佐々木勝三氏は昭和24年にこの地に訪れ、先祖源三の話を伺っている。筆者は、この長沢判官堂を探すため集落をぐるぐる回っていたら、「あんたたち、はながんさんを探しているんだって」集落の人に分ってしまった。「長沢判官堂」と正式名で聞いていたので、「はながんさん」と尋ねれば早く見つかったようである。岩手県に入り特に感じることは「義経生存伝説」の真偽を中央での机上論は大きな御世話であることが判る。義経伝説は伝説伝承から確かに「信仰」になっていることを実感として受け止められた。

27 津軽石判官神社 宮古市津軽石駅近く

義経主従がここに館を建ててしばらく住んでいたという。昔「判官社とよばれていた。岩手観光の大正11年『下閉伊郡誌』に、津軽石村には、はじめ渋溜村と称し、文治年間すでに小集落各地に散在するに至れり」とあり、今から500年前に判官館という呼び名があつて地元の人々に崇拝されていることが判る。祠には白斑の馬に跨った衣冠束帯姿の義経神像が安置されている。（岩手県観光連盟）



判官堂



長沢判官堂



津軽石判官神社

28 横山八幡宮 宮古市宮町

宮古湾内の西に突き出た小山を横山といい、ここに祀られたお宮が「横山八幡宮」である。横山八幡宮由来によれば、義経主従が正治元年(1199)源義経公と家臣共々平泉を逃れ、当宮に参籠した。大般若経100巻の写経を奉納した。家臣の鈴木三郎重家（亀井六郎の兄）は老齢のためこの地に残り、当宮の宮守となり近内という所で住み一生を終えた。重家は義経主従を普代村まで見送って別れを惜しんだと伝えられている。後、重家の息子重染が江刺区岩谷堂に重染寺を創建したのは「岩手県編5」で述べた。

29 黒森神社 宮古市山口・黒森山（310㍍）

黒森山は古来より閉伊地方の霊山信仰を集め、神仏習合の菩薩救済の本願所として栄えた霊山である。「黒森神社寄付名鑑」に《大般若経 壹部 右ハ義経、弁慶蝦夷地下向ノ際当所ニテ写経ス》とある。黒森山神譜の記録には《源武公義経モ亦従臣十余輩トコノ名山ニ詣デ甲冑及ビ陣刀ヲ修ム、各々大般若経六百巻ヲ模写シテ神具トナス》とある。

義経主従は3年3ヶ月にわたって黒森山に籠り、行を修め、般若経6百巻を写経して奉納した。「黒森」は「九郎森」から転じた名であるといわれている。標高330㍍、宮古市の北側に位置し、一山を巨木に覆われ昼なお暗い山。モミ・カヤの木の樹齢千3百年が茂り、神仏習合の霊山、陸中沿岸の漁業と交易を守護する山と信仰をあつめている。

30 判官稲荷神社 宮古市本町・常安寺前

当社縁起には、義経主従が宮古まで来た経緯と、義経の甲冑を地中に埋めて祠を建て祭神としたのが判官稲荷神社であると伝える。ここ小高い丘は居館を構えたという所で、「館山」「判官山」ともいう。義経は館山に住み、写経や立ち振る舞い舞の姿を見て、地

元の人々は心服と尊崇の念で崇^{あが}めたと伝わる。



横山八幡宮



黒森神社



判官稲荷神社

3 1 加茂神社 下閉伊郡岩泉町赤鹿

加茂神社は旧家「^{ほろのけ}襲野家」が代々の別当を努めている。ここに鎌倉由比ガ浜の続きがある。頼朝の命により義経の赤子が由比ガ浜に捨てられる運命であったが、佐々木四郎高綱（母は源為義の娘、宇治川の合戦で梶原景時と先陣を争う、木曾義仲追討では義経の陣）に助けられ、密かに閉伊の茂市家で育てられ佐々木義高を名乗った。その義高を祀った社である。義経公の子息義高公を祀っているが、その時代は表立てることが出来ないので義経公ゆかりの神社としたと伝わる。

3 2 畠山神社 下閉伊郡^{たのはた}田野畑村

義経主従の追捕を命じられた畠山重忠がこの田野畑村まで来たとき、その乗馬が斃れたため、この地に埋め祠を建て^{あぶみ}鏡を供えたのがこの神社の始まりであると伝えられる。鏡は鎌倉時代のものであるという。鏡は下閉郡田野畑村民俗資料館に保管されている。史実とは別に、男畠山重忠の勇気と温情が東北の人々にはたまらなく好きであったのであう。この地域には30軒の集落の氏子が守って近年神社の改修も30軒で費用をだし合って改築をしているそうである。ここでも伝説は「信仰」になっている。

^{はたけやましげただ}畠山重忠 (1164 - 1205) ^{おぶすま}武蔵国男衾郡畠山荘（埼玉県大里郡川本町）を本拠とする畠山重能の嫡子源頼朝が房総を平定し武蔵に入ると、重忠は服属し相模入国の先陣を勤めた。阿津賀志山（第2章の5・阿津賀志山防塁）の戦いで、藤原国衡の首を獲り、恩賞として陸奥国^{くずおか}葛岡郡（現岩出山町）の地頭職を与えられた。元久2年(1205)北条時政の後妻、牧の方の女婿である平賀朝雅と対立し武蔵国へ進出を企てる北条氏の謀略に取り込まれ、^{ふたまた}二俣川（横浜市）で重忠の百数10騎と北条幕府の大軍と激突し殲滅された。42歳という。後、畠山重忠の3男、^{ちやうけい}重慶は出家して奥州の二戸郡^{じやうほうじ}浄法寺に住んだ。しかし二俣川でだまし討ちの悔しさから幕府に^{そむ}叛いた。これを知った北条幕府は重慶追討を命じ、重慶も無念の死を遂げた。重慶の子息が生き残り浄法寺氏の租となる。



加茂神社



畠山神社

33 鵜鳥神社 (うねどり様) 下閉伊郡普代村卯子西山

鵜鳥神社は卯子西山神社は地元ではうねどり様という。『鵜鳥神社』熊谷儀一・文弥共著、神社の歴史、伝承などが伝えられている。神社社務所発行より紹介。

《うねどり様は延暦五年(804)卯子西山薬師寺として開眼されたのが始まりとも伝え、また大同二年(807)卯子大明神としてとして建立起源とも伝わる。文治五年源義経が卯子西山で金色の鵜の子育てを見て、神鳥ならんと、この地で七日七夜渡海の安全を祈願したら「汝の願いを聞きとどけよう」といって姿を消した。普代村へと来た義経主従はこの地で牛追いの童子に出会い、弁慶が地名を尋ねたが童子は何も云わずに「不行道」と地面に書いて消えた。これが「**不行道伝説**」である。漢文では「行かざる道」「行かざる道」となる。義経は「不行道とは、我が身も進退窮まったか」と嘆き一夜を過ごす。義経の蝦夷へ行く決意は固く、不行道から一山登ったところが鵜鳥神社で七日七夜、海上祈願、武運長久を祈った。》とある。伝承は「この村社はもと鵜鳥大明神という。その創建の年代不詳なれど、源義経の蝦夷島に走れる時、この祠に祈れりと伝う。この時代、普代村より北に行く道がなく、この不行道で行き止りであったらしい。」(『岩手郷土史』より)



鵜鳥神社



不行道・神社下の道



諏訪神社

34 諏訪神社 久慈市長内町

「迫る迫って、畠山重忠の影、討ち取れるか、逃げおおせるか、運命を分ける一矢を、構えた胸の内に湧いた武士の情け」 伝説としては、義経主従の追捕の命を受けた畠山重忠であったが、共に平家を討った間柄、落ちて行く義経に同情したのか、重忠はわざと矢が当たらないようにして義経を助けた。その矢は松の木に当たった。この矢をご神体と

して祠を建て祀ったのが諏訪神社である。又、久慈市吉田に「源道」「侍浜」という地名が残る。源道は「昔、源氏の兵隊が通った」ことからこの名前ができたと伝える。

35 久昌寺 宮古市田代

源氏の一族である源義里がこの田代に居館を構え、平泉を脱出した義経主従が北へ向かう途中立ち寄った、と伝えられている。久昌寺には、源義里が奉納し、長久息災延命を祈ったという鰐口が残っているという。（岩手県観光連盟）

36 義経神社 紫波町赤沢地区

この神社は、義経北行伝説とは異なり、義経が16歳から21歳まで、金売吉次に連れられて、ここで六年間武芸に励み頼朝挙兵前に逗留し武芸に励んでいた所と伝わる。この神社を所有する大角家は屋号を「判官堂」と呼ばれ、義経とゆかりのある家とされている。大角家周辺の野山で、馬を駆けながら弓を射る練習した場所「的場」（後世の流鏑馬とも）急斜面を下る練習をした所を「鐙越」など字が現存している。

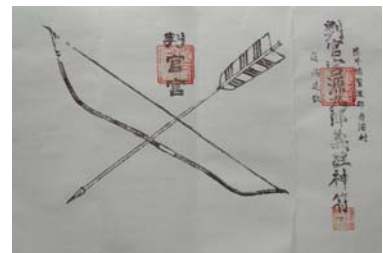
義経が武術の鍛錬を終え、水を飲むために立ち寄った井戸、槻木の清水は現在でも湧いている。この井戸で知り合った娘との間にできた子の子孫が大角家と伝えられている。義経青年期の武術に明け暮れと、娘との恋の逗留を過ごしたが、時は風雲急を告げる頼朝挙兵の報を聞き、義経は急ぎ身支度を整え出発した所と伝わる。大角家には義経が使ったとされる弓などが残されているという。江戸期の「判官宮源九郎義経神符」の版木がある。



久昌寺



義経神社（義経宮）



判官宮神符

余話・陣ヶ岡史跡（紫波郡紫波町陣ヶ岡標高136mの独立の丘）

紫波町に入ったので陣ヶ岡歴史公園に立ち寄ってみたい。この陣ヶ岡の森は、奥州の戦いに歴史上の武人たちが宿営地に自軍を鼓舞するために陣を敷いた所。公園の説明板に武将略縁記が次ぎように記されている。

景行 43年	日本武尊	蝦夷征討野営		
斉明 5年	安倍比羅夫	蝦夷追討野営	神社創建	(659)
天応 元年	道嶋宿禰	蝦夷追討野営	神社奉建	(781)
延暦 20年	坂上田村麻呂	蝦夷征討宿営	八幡宮奉建	(801)

		蝦夷捕虜 1 萬 2 千人宿営	
天喜 2 年	安倍頼時	神社再建	(1 0 5 4)
康平 5 年	源頼義・義家	蜂神社奉建 3 萬 2 千騎本陣	(1 0 6 2)
		安倍貞任のさらし首	
治承寿永 年間	藤原秀衡	蜂神社再建 高水寺再建	(1 1 7 7 一)
文治 5 年	源頼朝	2 8 万 4 千騎陣営	(1 1 8 9)
		泰衡のさらし首	(以下略)

陣ヶ岡蜂神社由来。征夷大將軍坂上田村麻呂が胆沢地方の首長アテルイ軍を滅ぼし延暦 2 2 年 (803) に北上川と雫石川の合流地に志波城造営に成功を祝って蜂神社を創建と伝わる。「蜂」の由来は、前 9 年安倍貞任との戦いで苦戦中に、厨川地区辺りから蜂の巣を夜間に獲り、貞任陣内に投げ入れ勝利したという。この勝利の蜂を祀ったのが蜂宮説。八幡太郎義家の「八」説。頼朝が泰衡の額に八寸釘を首に打ち込んだ「八」説。尚近くには、各武将野営跡、月の輪形の由来跡、藤原泰衡の首洗い池などがある。頼朝がこの地陣ヶ岡で宿営した本心は、前九年の役で頼家・義家父子が合戦に勝利したが、朝廷は「私戦の合戦」と判定され、奥州を領有化できななかつた頼義・義家親子の苦汁の思いを、自らが陣ヶ岡に立つことでその想いを晴らしたのであろう。貞任の梟首のごとく、泰衡の首をさらして、厨川に進軍した頼朝の心は、「見てくれ、高祖父頼義よ、曾祖父義家よ、源氏の総大将として今ここに余は進軍している、この頼朝の勇士の姿を見てくれ」との強烈な熱き胸中で進軍したことに難くない。

ここで敗者藤原泰衡のその後の流れを見てみよう。

余話・錦神社 (大館市二井田字上出向) 藤原泰衡は頼朝に忠誠を誓ったが聞き入れられず、平泉に火を放ち蝦夷ヶ島を目指して敗走した。途中、出羽国比内郡贄の柵の郎従、河田次郎を頼って立ち寄ったところ、河田は頼朝を恐れ自らの軍兵で館を取り囲ませ、鎌倉軍に囲まれたように偽装して泰衡を自害させた。(文治 5 年 9 月 3 日) 泰衡 3 5 歳と伝える。河田次郎は泰衡の首を差し出し、恩賞を期待したか判らないが、頼朝には「普代の主人の恩に背く大罪である」と、痛烈に非難の言葉を浴びせられ陣ヶ岡で斬首された。

地元の錦神社の由来は「後に首の無い泰衡の遺体は、里人によって錦の直垂に大事に包まれて埋葬されたという。この墓が〃にしき様〃と呼ばれて当神社となり、毎年旧 9 月 3 日にお祭りが催されている。」(案内板・大館市立南中学校 P T A)

紀行家菅江真澄がこの地を訪れ、この錦神社にまつわる村人の心優しいはからいと、泰衡の命日にちなむ行事を「贄能辞賀楽美」の紀行文に「6 百年のむかし、陸奥の押領使藤原朝臣泰衡が鎌倉の軍勢に敗れて、蝦夷が千島に落ちのびようと、この出羽の国まできて、年来の家来である河田次郎というものが、贄の柵に住んでいるのを頼り、立ちよつた

ところ、心が変わりした河田次郎は泰衡をかくまっておきながら、やがて打ちとってしまった。そして一刻も早く泰衡の首を頼朝に見せ奉ろうと、急いで馬をとばせて行ったとかいうことである。それが文治4年の9月2日のことであったと伝えられている。(略)五輪台の由来は、泰衡の妻がおのれの夫の行方をさがしもとめて、ここに来て、篠原のなかに身をおかくし2、3日いたところが、泰衡がうたれたと聞いたので、自分ののどに剣をたててしんでしまったと語り伝えられている。その墓石といって、長谷部藤衛門とかいう家の庭に、五輪石がぐだけて転がってあったのを、残っていた3つの石を重ねて堂を作り、それをおさめておいた。出向^{いでむかい}(錦神社)の田の神と同様に3月の3日、9月の3日には、御酒や糰^{しとぎ}(もち)をささげてお祭をしているという。」(『菅江真澄遊覧記』)

余話・西木戸神社 (大館市八木橋) 錦神社より東北東3キロ位離れた所に泰衡の夫人を祀る西木戸神社がある。由来は「西木戸神社は、奥州藤原家四代伊達次郎泰衡の夫人を祭神とし、8百年間地元の奉仕が続けられている。文治5年、夫人は平泉を逃れて贄^{にえ}の柵を目指す泰衡のあとを追ひ、ひない^{ひない}比内町八木橋までやって来た。この地ですでに4日前泰衡が、譜代の郎従河田次郎の変心によって討たれたと聞かされ、従者由兵衛に後事を託して(3人の子を道連れに)生害を遂げた。里人はその心根をあわれんで祠を建立し五輪の塔をおさめて靈魂を慰めたのが神社の始まりである。源頼朝の武家政治は、泰衡の死により全国統一を完成した事実は、日本の歴史に特筆されるべきだが、その後、夫人の殉死を文人、墨客、学者らの多数の人々が訪れ、今もなお悲涙^{ひるい}をそそいでいる。神社の名称はこの一帯が泰衡の異母兄西木戸太郎国衡の采邑地^{さいいうち}(知行地)だったからで、五輪台の里名は五輪の塔の安置によるという。里人と有志の寄進に成り800年の長い歳月、休むことなく続いた情のこまやかさをしのばせている。西木戸神社の祭典は旧暦の9月7日におこなわれている。」と説明されている。(比内町教育委員会・ひないの文化にふれる会)

神社のいわれを現代の子供たちへ伝えている両町の大人たちに筆者は感銘を受けた。800年もの間、藤原泰衡夫妻の霊を守られ、田の神として祭る里人の情に敬意を表し、横道の話であるが述べさせていただいた。



陣ヶ岡史跡・蜂神社



大館市二井田・錦神社



比内八木橋・西木戸神社

義経北行伝説・青森編 23ヶ所

青森県の義経の伝承は、八戸市内丸にある「おがみ神社」に保存されている「類家稲荷大明神縁起」古文書がそれである。この古文書は八戸藩医、関諄甫が享保 17年(1732)に榊氏(僧浄円)からの聞書したものである。この古文書を読み下した正部家種康著『北の義経伝承』から要約で語る。

榊氏の先祖は類家(八戸市類家)稲荷大明神で義経公のお世話役していた。義経公が稲荷神社に参詣の折々、榊の枝を差し出す役目をしていて、義経公から名前を呼ぶ代わりに「さかき」と呼ばれていたので、義経の許しを得て榊を自分の姓にしたという。それ以来子孫も榊姓を名乗り、その一族の住んで居た所が三戸郡階上町の榊部落という。類家稲荷大明神は現在の八戸市類家1丁目にある。別名「藤ヶ森稲荷」と呼ばれている。

「類家稲荷大明神縁起」の内容は、文治3年10月、藤原秀衡が死去後、密かに企てられ、泰衡や国衡の動向を見て、秀衡亡きあとの平泉には、もはや永く居る地ではなくなってきた。そこで義経は家来の板橋長治(秀衡の3男・泉三郎忠衡の母方の叔父で忠衡の家臣)と喜三太を呼び、「北の浜辺に近い安全な隠れ家を用意せよ」の命令を出した。2人は安全と思われる場所を八戸市糠塚にある長者山にきめ、交通の良さと見晴らしも利くと義経に報告をした。この両人は仮小屋まで設えて、早速お支度なされと義経を急ぎ立てた。家来衆6、7人召し連れて、文治年中巳の4月中頃(高館襲撃の1年前)、気仙という所より御船に乗り、上陸した所が種差海岸、そして白銀地区へと入った。

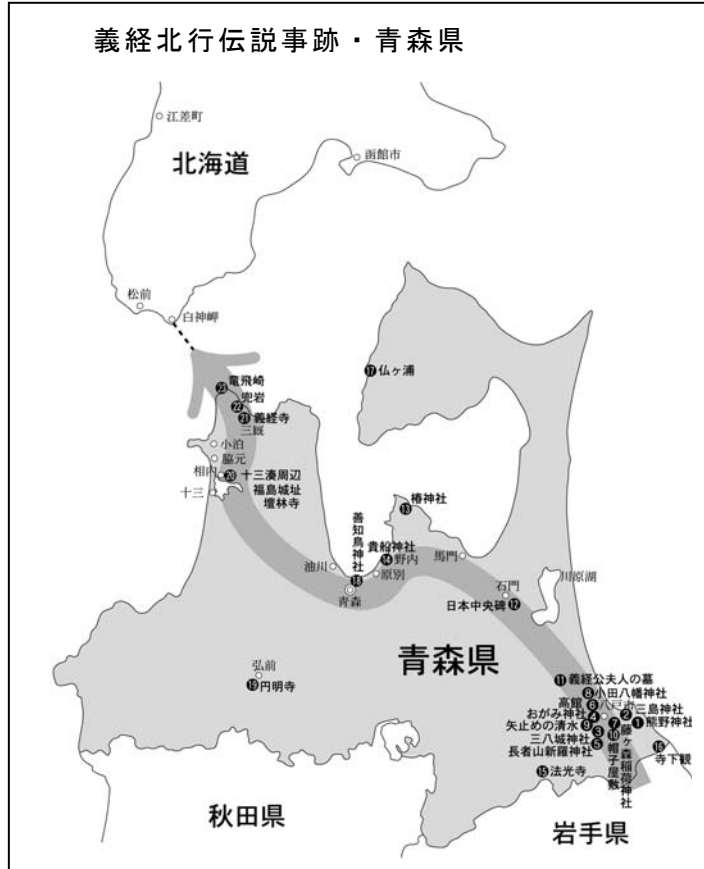
初めの住みかは館越山(現館越山)で、更に良い場所へと移ったのが高館山(現高館)に移り、家来達はここを「高館の御所」と呼んだ。この高館から3、4人の家来を連れて類家の藤ヶ森稲荷へ参詣によく出かけた。藤ヶ森稲荷までは遠く離れていたの、家来達が茅小屋を作り逗留した。雑作の小屋が家に似た形に似ていたの、そこに入っている者達のことを「類家の者共」と回りの人は呼び、またここを類家村と名付けた。また御装束の鳥帽子を狩衣を小屋に掛けたので「鳥帽子屋敷」と呼ばれた。板橋長治が居た所は板橋村といい、住まいの近くより朮を買い、精米にして糠を捨てた所を糠塚村といった。又、鞍馬(京都)より毘沙門尊像を持参され、高館の東の山下に小社を建て祀ったのが、今の毘沙門堂がそれである。その社で大般若教も書写され、奉納したものが今の小田神社に残されている。社の前に小川が流れており、その水を利用して小さき田を造り開田した。これが今の地名の小田村であると記述されている。また平泉藤原氏敗戦のわけを問えば《武器武具と戦略が整わなかったこと、そして高館の泰衡の襲撃事件は、「義経公平泉の御所をお立ちのきなされ候跡にての次第の事」の語りで、権之守と呼ばれる乳母が、義経夫妻と同年輩の男女と、幼き子供の焼け死体を並べたところ、泰衡の兵達は「これぞ間違いなく義経公ご夫妻と若君のなきがらぞ」と申し鎌倉へお送りした。》と記述されている。

義経主従の北走路・其の2

八戸か一三厩一蝦夷が島へ

種差（鮫が浦）に上陸した一行

は白金から八戸に入る。館越にしばらく潜伏していたが、川越夫人の旅の疲れと病で没した。馬淵川を渡り祖父頼義が巡視に使用した城跡に館を構えたのが高館で、兼ねてより心願の大般若教150巻を納めたのが小田八幡である。長者山に泰衡の家臣、板倉長治が仮館を構え、そこに一行は住居する。その後板橋長治がここに留まり、義経を偲び一字を建てたのが新羅神社である。身の危険が迫るようになり一旦、七戸へ、そして野辺地に出て浅虫、青森、油川を経て津軽三厩にしばらく足を止めた後、蝦夷ヶ島福山の地に渡った。別説、北津軽十三湊の藤原秀栄を頼り、檀林寺で態勢を整え十三湊から蝦夷が島へ渡った伝承が伝わる。



1 熊野神社 八戸市種差海岸・八戸線種差海岸駅

種差海岸の前面の丘陵に熊野神社はある。伝説によれば義経主従は平泉を逃れて気仙（陸前高田の津）から船で八戸をめざしここ種差海岸に上陸した。そして白銀を経て野辺地方面に向かったという。青森県の義経伝説は、ここ熊野神社から始まる。

地図の上から太平洋側の岩手県を見て想像すれば、岩手編34の「鶴鳥神社・うねどり様」で述べたように普代村から北へは陸路はなかったようだ。陸前高田や宮古から先は海路で八戸に向うことが早く安全であったと思われる。逃れる身では内陸の北上川に沿った陸路を、義経主従危険を察知したのか選んでいない。



種差海岸



熊野神社



三島神社

2 三島神社 八戸市^{しらがね}白銀

海路を舟でやってきた義経一行は、八戸の浦へ上陸し、白銀の村に一時仮住居を定め、このあたりの白銀に残る字に「源氏^{げんじ}圀^か内^{ない}」という地名は「源氏の屋敷」との意味だといわれ、義経一行が館越に居を移す前に「法官^{ほうかん}氏」の世話を受け住んでいたところといわれている。「法官」という姓は、義経一行に世話をやいてくれた者に、「今後、判官と名乗るがよい」と申し渡したが、判官と名乗るのは差し障りがあるというので法官と改正したといわれる。源氏圀内には現在でも「法官」の姓は現存している。（八戸観光協会）

3 三八城神社 八戸市三八公園内

公園内にある神社に力自慢の弁慶の足跡が刻まれている「弁慶石」がある。この石に人間の足型のようにくぼみがあり、力自慢の弁慶が石に印した足跡がそれだという。

4 おがみ（霧）神社 八戸市内丸

義経の北の方（京の久我大臣の娘）中年間(1205)がここで亡くなった。その奥方の葬った所が奇怪なことが起ったので、「報^{あが}霊大明神」して崇め祀った。その場所がおがみ神社の所であった。ここに姫君が祀られ、姫君の手鏡も所蔵されている。おがみ神社の名の由来は「義経の妻＝女将・おかみ」から来ている説もある。（『北の義経伝承』より）

5 長者山新羅神社 八戸市長者

藤原秀衡の死後、藤原一族と泰衡との心離れ生じ、義経は密かに家来の板橋長治と喜三太2人に「平泉より離れた北の地で、海辺に近い安全な場所を探し、我々の隠れ家を用意せよ」命令した。2人は八戸の地にたどり着き、現在の八戸市糠塚にある「長者山」の見晴らしのよいことと、周りに堤があるので防御に優れているとして居を定めた。2人は隠れ家を用意して義経を迎えたという。板倉長治は泰衡の家臣で、後、ここに留まり義経を偲んで新羅神社を建てた説も伝わる。（八戸観光協会）



三八神社



おがみ神社



長者山新羅神社

6 高館 八戸市高館

長者山の東に小高い丘に館を構え、その場所が平泉に似ているので「高館の御所」呼ば

れた。後、「高館」と呼ばれるようになった。高館はこの高館山の西方にあったと言われている。（八戸観光協会）

7 藤ヶ森稲荷神社 八戸市類家

「類家稲荷大明神縁起」（おがみ神社所蔵）によれば、高館に落ち着いた義経は、信仰していた京都藤ヶ森稲荷の社の土を、常陸坊海尊ひたちぼうかいそんに一握り取に行かせ、この土をこの地に埋め、社やしろを建てたのが「藤ヶ森稲荷神社」である。義経はこの社におこもりすることがあり、そのため仮小屋を作った。その小屋が家の形をしていたので、そこに入出入りする者たちを「類家の者ども」と呼ばれた社がここである、それが現在の類家という地名の起こりという。また「京ヶ原」「柏崎」「京ヶ崎」由来も記されている。（八戸観光協会）

8 小田八幡神社 八戸市小田

平安時代の天喜年間（1046 - 57）源頼義が鎮守府将軍に任ぜられ、この地方を平定した際、八幡の祠を建立したと伝える。義経北行伝説では、義経主従が書いたと云われる大般若の写経が約600巻と、京都から持参した毘沙門天像を所蔵している。義経は高館近くの沢を利用して、小さな田んぼを作らせ稲作を開田させたのが、これが「小田」という地名の由来という。境内には義経堂の祠がある。（八戸市教育委員会）

この頃、世間様々な噂が義経の元に入ってきた。義経は「今更、鎌倉や京都に呼び出されても、満足な士官も望むことができまい。もし鎌倉からの追手が差し向けられれば、開田の行なわれた人々にも難儀をかけるだろう。ここを立ち去り、あとをくramsるのが一番よかろう」と云い、また近臣をつれて北に向ったという。（『類家稲荷大明神縁起』）



高館



藤ヶ森稲荷神社



小田八幡神社

9 矢止めの清水 八戸市馬淵川緑地

義経が高館からどこまで遠くへ矢を放つことができるか弁慶に命じたところ、4キロも離れた馬淵川を越えたところへ届いたという。矢を抜いたところから水がコンコンと湧き出てこの地名が付いたといわれている。昔からこの湧き水で往来する人のノドを潤うるおした酒造りの水としてもつかわれたという。（青森県観光連盟）

10 帽子屋敷 八戸市類家

義経が藤ヶ森稻荷に来た際に、鳥帽子や狩衣などを置くところがなかったため、仮抗をたて、そこに掛けていたことから、その一帯が帽子屋敷と命名されたといわれている。現在は芭蕉堂公園として市民に親しまれている。お堂の中には宮本重良作の松尾芭蕉の木彫像がある。（青森県観光連盟）

11 義経公夫人の墓 上北郡おいらせ町

おいらせ町商工観光課案内地図で現地に入る。奥入瀬川沿い藤ヶ森の地名の場所にある。その「夫人ヶ森」由来の説明は、「この部落は義経公の妻の死せる時、其の遺骸を埋葬せる所なり。曰く、藤森部落内川口某の宅地に接続して東方に同氏の畑あり。畑中に直径二間程の円塚あり。頂上にクルミの木を植え、同家にては之を巫女塚と呼び居れり。小谷部博士著『成吉思汗は源義経也』より」と解説してあった。

大正の初め、小谷部全一郎はこのおいらせ町までやってきている。どのようなルートでここまで来たのであろうか。現在考えても、大正初期の交通事情でここまで来ることは、並大抵の精神力ではない。小谷部は職にも就かず、妻の和裁の賃稼ぎ生活、義経伝説研究の執念の凄さを思い知る。妻菊代の死後『純日本婦人の倂』の中で「なまじ私如きところへ嫁にきたために」と妻への積年の想いを告白している。



矢止めの清水



帽子屋敷跡（芭蕉公園）



民家地にある義経夫人の墓

12 日本中央碑 （つぼのいしぶみ・壺の石碑）上北郡東北町字家ノ下

義経は六ヶ所村平沼の豪族橋本与右衛門に身を寄せた後、つぼの石文に立ち寄り 〃三熊野の つづく小山の ふみ石を 見るにつけても 都こいしき 〃 と義経が「日本の碑」を見て詠んだと伝わる。義経はここを通過した頃は、この石碑は立っていたらしい。石碑伝説は9世紀初頭坂上田村麻呂が都母の地で、石の面に弓の筈で「日本中央」と彫り建立したと伝わり、日本は「ひのもと」と読み、当時の蝦夷地を指す呼び名で、蝦夷征伐が北進するにつれ、陸奥の最奥の地「都母」がその中心であった説と考えられている。

みちのくの いはでしのぶはえぞ知らぬ

かきつくしてよ つぼのいしぶみ 源 頼朝

みちのくの 奥ゆかしくぞおもほゆる

つぼのいしぶみ 外の浜風

西行法師

日本中央の碑^{いしぶみ}の発見 石碑は昭和24年(1949)東北町千^{ちびき}曳の川村種吉氏によって同町石文集落付近の赤川支流の湿地帯より偶然発見された。「坪と石文」(つぼのいしぶみ)が古くから歌に読まれたり、多くの研究者によってその所在が探索されていた。何故この地域に碑が特定されたかは、色々な記述や古地図、または前述の伝説などの地名によることが要因と考えられている。坪と石文という地名が隣接していたことや、地名との記述が千曳神社(男子千人で引いても動かない石が、壺^{つぼ}という乙女が引くと容易に動いた伝説・千人引き→千引→千曳)周辺の地域と考えられていた。明治9年明治天皇東北巡行の際、命を受けて石文を探したが発見できなかった。現在では田村麻呂ではなく次の征夷大將軍文屋綿麻呂が刻んだものと考えられている。(東北町日本中央の碑保存館資料より)

13 椿^{つばき}神社 夏泊^{なつどまり} 半島椿山^{ひらない} 平内町

義経主従は野辺地に入り、平内の地に義経主従が泊まったという伝承はある。平内町は、陸奥湾に突き出たところが夏泊半島で、その北端の山が椿山のヤマツバキの自生北限地帯である。また白鳥の飛来地として知られている。土地の女と、他国の船乗りとの悲恋物語は、愛の証として椿の種を北限まで運んだことを示しているといわれ、椿は異境に咲く花ともいわれ、椿神社は猿田彦命を祀っているが、棟札には「奉造椿宮女人神霊」とあり、女性の入水して死んだ壺を祀って椿明神という。

椿明神の由来 『津軽俗説選』に《 椿宮の神は縁結びの神也と言ふ。此崎は12丁が間、椿にした、花にても、葉にても取れば、風雨烈しく、海上荒ると云伝へし故、年毎に繁茂せしもの也。村老の言、むかし此所に女あり、他方の船人と契る事久し、或年油をとりて髪に付けよとて、椿の実を多くくれたり、夫れより此男死せしか音信なし、女恋慕の余り記念なりと、椿の実を植えしに、かかる林となれりと、此女も程なく恋死せしを、村人祭りて一祠とせしとぞ。》とある。「義経の遺児鶴姫がこの地で自害し、ここに白椿が1本もないのは、椿が鶴姫の血潮で染まったため。毎年冬になると当地を訪れる白鳥は父義経の化身であり、非業の死を遂げた娘の魂を慰めている。」と。(平内町観光課)



つぼのいしぶみ



夏泊・日本の北限椿



椿神社

14 貴船神社 青森市平内町

JR野内駅より海側に鷲尾山あり、五穀豊穰の神を祭った貴船神社がある。この神社は大同2年(807)坂上田村麻呂が蝦夷征伐時に建立と伝える。義経主従はこの貴船神社で逗留し航海安全を祈願した。ここには義経と「浄瑠璃姫」の悲恋の話が伝わる。浄瑠璃姫の父は源の中納言諸仲、母は兼高長者の娘、美貌の姫と矢矧の郷での滞在中に2人は恋中になる。義経は薄墨の笛を姫に形見として矢矧をあとにする。伝・浄瑠璃姫は、《三州から義経の後を慕って遙々やってきたが、旧津軽郡の野内という所で、義経に追いつき、やれうれしやという気の緩みか、長旅の心労で貴船神社のほとりで死んでしまう。姫の亡きがらを、桐の木を目印に埋葬して、これを家臣の鷲尾三郎に守らせた。》と、伝わる。神社前の貴船川は、この川を鷲尾川と呼び、また「鷲尾」姓も現存すると云う。

貴船神社御事歴 石碑には、祭神 高淤加美之神 大同2年坂上田村麻呂公創めて斯地へ勧請、とあり義経の蝦夷渡海の部分は《文治五年源義経卿 衣川の戦い後 北海道へ渡航の途次 当村に淹雷し崇敬特に深く 其の旧跡鷲尾川を始め 歴々境内付近に存す (後略)》とある。また『東遊雑記』古川古松軒は貴船明神を記述している。「青森より東2里に、貴船明神の社あり。いい伝う、義経公蝦夷渡海の節、無難に渡海なさしめ給いとて、山城国鞍馬山の貴船明神を勧請し、小さな社を建て置き給いし旧跡と神主のいいしなり。」と記述がある。

15 法光寺 三戸郡南部町

法光寺は弁慶が八戸から食料を買い求めた際、この寺に宿泊したとされ、その礼状が残っていたと云われている。宝永3年(1707)法光寺13世不慧和尚が書いた「白華山法光禅寺諸来歴記」に法光寺に1泊した弁慶が、寺宛に出した宿泊の礼状を寺で保管してあるとあるが、その後法光寺の火災で焼失したという。

16 寺下観音 三戸郡階上町

寺下観音は奥州南部糠部33ヶ所の1番札所。弁慶の書いた大般若経一巻がある。また義経が学んだとされる兵法書「鬼一法眼 虎の巻き」が残されているという。



貴船神社



法光寺



寺下観音

17 仏ヶ浦 下北郡佐井村

昔、義経がここから北海道松前へ橋を架け渡そうとして、たくさんの材木を牛に曳かせたのだが、ここで牛が倒れてしまい、材木が石に化けてしまった言い伝えがある。ここは冬期、陸路も限られる自然環境の厳しい所、大正11年にこの地を旅した紀行家大月桂月は「神のわざ鬼の手づくり仏ヶ浦（仏ヶ浦）人の世ならぬ処なりけり」と詠っている。京都大阪から東北北海道の船で結ぶ中継地として繁栄した佐井村であった。津の背後は切り立った岩壁で、古来より文化は海から入って来たのだろう。

18 善知鳥神社 青森市安方

安瀉は古来より自然の湊・善知鳥沼で舟の泊まりとなっていた。人皇19代充添天皇の御時、鳥頭中納言安瀉は罪あって勅勘（天皇のとがめ）蒙り、高倉の霊夢によって外ヶ浜なる湯の島のほとりに着いた。其の所の海岸干瀉に小祠を建て宗像（北九州の海路を守る海の神々）の3神を祀った。安瀉の死後、何処からか一羽の異鳥が飛び来て、雄はうとうと啼けば、雌はやすかたと啼くのであった。ある時猟師がその雄を捕えると、雌はそれを悲しんで啼いた。間もなく猟師はうとう崇りか非業な病に倒れた。里人は怖れて塚を建てて祀った。後、勅使が下って三角相という桶にこの善知鳥安瀉を捕え、大神宮に奉った。この葬った場所に社が建てられこの社が善知鳥神社となった。（『旅と伝説』）

19 円明寺 弘前市新寺町

善知鳥神社を後にした義経主従は円明寺に宿泊する。この寺は慶長11年(1606)に油川から現在の弘前市に移転してきたもの。寺宝に弁慶の「大般若教」と弁慶の「笈」が保存されているという。油川の修験道に泊まり、弁慶の炊事番であったが熱をだしてしまい、他の者にたのんだら、水の分量がわからずこまっていた。そこへ義経がきて、「米は1升到水1升3合、他の穀類なら水を多めに」と答えに、一同みな感じ入ったと、円明寺に伝たわる。現在の円明寺には義経北行伝説を伝えるものはなにもないという。



仏ヶ浦



善知鳥神社



円明寺

20 十三湊 周辺・福島城址・檀林寺 北津軽郡市浦村

十三湊は十三湖（じゅうさんこ）の辺りに中世から近世にかけて栄えた湊である。北海道アイヌと和人との重要な交易湊で、当時の博多湊と双へきの湊都市であった。『アイヌ語辞典』を引くと「トサ」の「ト」は湖・沼となり、「サム・サマ」は側に・横の意になり、湖の側、又は湖の横という意味になるようだ。

義経主従は円明寺から藤原秀栄の誘いか、十三湊へおもむいている。秀栄は平泉藤原氏2代目、藤原基衡の次男、即ち3代目藤原秀衡の弟であるという。十三湊の安東氏季の養子になったが、藤原氏を名乗る。治承5年に秀衡の指示で秀栄は陸奥権守に任じられる。後、子息の秀元に跡目を譲り、秀栄は「檀林寺」に籠り、義経主従をかくまったという言い伝えがある。藤原秀栄は泰衡や国衡の鎌倉方との苦悩の交渉を理解して、十三湊にかくまうことは容易に想像がつく。（市浦村史2）

『吾妻鏡』文治3年10月29日の条《 今日、秀衡入道、陸奥国平泉の館において卒去す。日来重病持み少なきによって、その期に前伊予守義顕（義経）をもって大将として国務せしむべきの由、男泰衡以下に遺言せしむ云々 》とあり6人の実子を差し置いて、義経を大將軍として陸奥の国政を司らせようしていた矢先だという。

『可足記』 江戸中期、十三湊の僧侶「権僧正可足」（京都養源院権僧正慈天師筆記・津軽3代信義の第11子）が津軽藩主の質問に答えた、『可足記』（可足文書）に風聞の記録を書き留めたものと云われている。（延宝年間 1673 — 80）この記録の出典が明記されていないので信頼性が薄いとされ、青森県史、市浦村史は参考としている。義経十三湊亡命伝承は次のように記述され、可足権僧正筆記之写を義経の部分に抜粋する。

《 文治5年8月25日、秀衡の子伊達次郎泰衡が狼狽の所より一族滅亡候を被歎候而十三の檀林寺にて一族の回向執行候、此時人入道殿御子息秀元御代にて候、九郎判官身代には一家の内、杉目太郎行信いたし候、行信か首、鎌倉殿へ見参に入候、泰衡亡て判官義行と改、入道殿御頼にて高館の城より5、7人貌をかへ、津軽へ来候、次々十三の檀林寺へ差置候、此頃又関東より討手下候へ共、在家知不申判官再び高伊館へ帰り義兵を催候、其時泰衡の郎等由利広常判官の旗を拵候而伊達の大木戸にて戦申候、此隙に判官海上を廻り伊豆箱根に至り、鎌倉を襲候半とて出陣之処、広常之勢南部華山（気仙）の者為に利を失ひ、軍破れ候は外ヶ浜に落来、判官の音信候ところ、判官三厩より出船候て、達火（竜飛）の潮に掛り難船に及候、此時広常か従兵散々に落去、広常も被捕候て鎌倉にて被罪候、判官狄ヶ島に漂着して再び帰り不申候、後金の国へ渡候由、其渡候所をおかむひ（神威岬）と申候、判官子孫金国に有之護衛源義澄と申候由承候。 》

口訳で、《衣川の合戦後、義経の一行5、7人が姿を変え、津軽に来た。十三湊の檀林寺に落ち着いてもらった。頼朝の兵がやって来て、うるさかったが、知らぬ存ぜぬでおし

と通した。義経は再び高館に戻って兵を挙げ、旧泰衡方の武将由利弘常も、判官の旗を揚げて立ち上がった。計略をもつて義経勢は海路、三浦半島から伊豆箱根にいる頼朝を襲うことにしたのだが、津軽半島三厩を出たところで、遭難してしまった。義経一行は蝦夷の地にたどり着き、二度と帰ってこなかった。その後はオカムイ（神威岬）から船出して中国大陸の金国に行った。子孫はまだ同国に生存していて義澄と名乗っているとか。》

（『市浦村史二』・『総合研究津軽十三湖』より）

又、「『新撰陸奥国誌』「文治5年5月義経十三壇林ニ来ル。主従7人。家族ヲ率イテ十三ヨリ海ニ航シ西蝦夷ニ住了ニ、ヲカムイ岬、ヨリ満鞆ノ地ニ渡ル。」とある。

北海道、上の国町 史には「藤原氏の敗民3千人流入す」とあるから、青森県の安潟や十三湊から、敗走した藤原軍が蝦夷島にかなりの人数の渡島したことが知れる。この人々が「渡り党」の一部であったと思われる。近年の十三湊の発掘調査で繁栄の頂点は14、5世紀といわれているので、義経一行が本当に蝦夷に渡ったとすれば、外が浜や安潟からであったと思われる。



十三湖大橋辺り



福島城址



檀林寺址

21 三厩・義経寺 東津軽半島外ヶ浜町

十三湊から義経主従は蝦夷ヶ島へ渡る時、三厩をめざして来た。ところが海は荒れ狂い渡ることができない。義経は所持している観音像を岩のくぼみに安置して、3日3晩祈ると、白髪の老人が現れ「汝の願いを聞き届けよう、3頭の馬を与えよう、これに乗って渡るべし」とお告げがあった。岩窟を見ると3頭の馬が繋がれていた。海は風となり、蝦夷ヶ島に渡ることができた。この岩の厩石を三厩（三馬屋）と呼ぶようになった。

時は流れ、寛文7年(1667)当地を訪れた僧「円空」が厩石のくぼみからその観音像を発見した。円空は夢の中でその像が義経渡海の時の観音像であることを知る。円空は新たに観音像を彫り義経の持仏観音像を体内に納め、草庵を営んだのが義経寺の起こりという。

義経の観音像について 義経寺にある観世音菩薩像は、青森県の文化財の説明によると、

《延宝元年(1673)当寺住職如現が古篋の中から、当時すでに半分読み難くなっていた縁起を発見し、このままではその伝も失われるのを恐れて、判読を書き留めておいた奥書、『竜馬山観音縁起』なるものがある。その内容は、義経が兄頼朝に追われて渡海する際、日ごろ念持の正観音像を岩上に安置し去った。その後年を経て、寛永年間、越前国西

川郡符中の産田空なる僧が諸国遍歴の途次この地にきて、その正観音像を発見した。円空は靈夢^{れいむ}によって先の古事を知るを得て、昔を追憶し、また土地の安全、衆生利益のためにと自ら新たに観音の木像を刻み、かの尊像を胎内に納め、草庵を結んで安置した。》とあり、この寺は円空上人開山となっている。古来より北方交易や近代の蝦夷地開拓に、この湊に船を停泊し風待ち^{なぎ}をして、「安全祈願・義経風祈りの観音」を拜んで天候の確認と風待ちするのが習わしで、漁民、船乗りたちの海路安全守りの寺となっている。



三馬屋・厩石



源義経渡道碑



龍馬山義経寺

三馬屋^{みんまや}から松前の津へ渡る 『東遊雑記』古川古松軒著（東洋文庫）天明8年（1788）の既述に《七月十九日天気あしく、松前渡海ならずして、三馬屋に逗留、宿主越後屋権十郎、この所を三馬と称せること、いい伝う、義経蝦夷渡海の節、従者三十余人馬三疋を具し、この浦へ来り給いしに、漁家の伏屋ばかり、馬を入れる所なし、幸いに岩穴ありしゆえ、三疋の馬をいれて、風まちをし給いしより、三馬屋浦というよし、土人物語なり。今に岩穴の大なる所あり。（中略）三馬屋より竜飛鼻^{たつび}まで三十六町道に三里近し。竜飛鼻より白神鼻まで七里、しかれば松前の津までは十里に少し遠し、右のごとくわずかなる海上といえども、西の方数千里の大海より東海へ行く潮、片潮（潮が数日続いて一方にだけ引くもの）にて、その急なること滝の水のごとし。海上に三つの難所あり、いわゆる竜飛鼻潮・中の潮・しらかみの潮と称し、竜飛の潮というのは、潮流竜飛鼻の岩石に行きあたり、そのはねさき至って強く、潮行き一段高し。中の潮というのは、竜飛鼻よりわけ出す潮先と白神鼻よりわけ出す潮先と、中にて戦うゆえに、逆浪^{さかなみ}立ちあがりて時として定かならず。この潮行き・潮くるい、不案内にては一棹^{ひとさお}誤る時は、船を潮に押し廻され、忽^{たちま}ち危うきにいたることにて、日本一の瀬戸なり。（略）船頭の太鼓の拍手につれてそれより帆をあげ、竜飛鼻の潮を乗り出すと、高声^{かじとり}に楫取に知らず。取楫・おも楫を隙なく知らせ、船行き潮の調子にかなえば、「ソロウタ、引け」とよばわる。荒波の立ちあがりて舟のうえを打ち越す時は、水主・楫取同音にて、「船玉明神^{みとうじん}、たのむぞ、たのむぞ」と声を上げて太鼓を打ちてひょうしに乗じて船をつかうことなり。》とあり、古来よりこの様な津軽海峡の渡海の様子であったのであろう。この難海ゆえに時間をかけて日和をしっかりと見定めて、少しでも気持ちに気に掛かる天気ならば船出はしなかった。古川松軒の『奥羽・松前巡見私記』はその臨場感を今に伝える。

22 兜岩 古川古松軒と菅江真澄が三厩で遭遇する 外ヶ浜町

義経が兜を掛けたけた岩場が「兜岩」と伝わる。この岩場前で歴史の偶然であるが、菅江真澄と古川古松軒の遭遇の話しにふれる。なんと、天明8年(1788)7月11日に三厩の湊で古川古松軒と菅江真澄が遭遇している。2人にとっては「与^{あずか}り知らぬこと」話であるが、古川は幕府の巡見使随行役、菅江は秋田藩校明德館出入りの書記、現代人は勝手に空想してしまうが会話をするような関係ではなかったろう。菅江はこの時の宿泊を断られ迷惑をしていた。「外が浜づたひ」に記述している。《 巡見使を迎えるために、宿という宿ではすすはらい清めて、その準備がひとかたでなく、いついつの日に武蔵(江戸)をたつてここにおいでになるといって、どこでも大ぜいの人^{むさし}がみちみちていて、ちよつとここに、といつて休むところもない。わたしは磯辺に立ち渚の冑石^{むさし}というのを見ながらたらずみ、朝川を渡つて算用師^{さんようし}という村にきた。》

地名の算用師は現外が浜町三厩算用師である。菅江は湊近くの部落で、蝦夷の子孫が和人と同様生活している浦長宅に宿泊して松前行きの舟待ちをしている。北海道アイヌとは別系の津軽アイヌを尋ねている。『北海随筆』下巻 元文4年(1739)板倉源次郎著に、《 津軽、南部にも蝦夷有り。言語通ぜずといへ共、頭は月代を少剃、此蝦夷は本邦往古よりの蝦夷にて、松前の蝦夷と出会する事をのぞまず、系図をただして甚差別する事なり。》と記述がある。この時代まで津軽半島の北端宇鉄付近には蝦夷が残っていたが、次第に同化して文化年間には一般百姓に組入れられた。南部下北半島も同様と云われる。

23 竜飛岬 外ヶ浜町

竜飛岬は本州最北端の岬、日本海から吹きつける風は瞬時に霧や風や荒波に変わる。演歌の「津軽海峡冬景色」ではないが、津軽海峡の気象の変化は海の男たちを恐れさせた。海峡を渡れば、道南の白神岬や矢越岬にも義経一行が荒海の苦難の伝説が知れる。又、義経主従が蝦夷ヶ島に渡つたのはこの竜飛岬の説もある。この岬を竜馬が飛んだ崎^{さき}ということから竜馬ヶ崎と呼ばれ、それが後に竜飛岬と云われるようになったという。



兜岩



竜飛岬



古川古松軒・国史大辞より

北海道編 道南・道央・道東 37ヶ所

北海道は古来より蝦夷、渡島・越度島といわれた所である。そもそも蝦夷地が渡島の名で日本の国史に現れるのは、『日本書紀』斉明天皇の5年(659)《三月に阿倍臣を遣して船師一百八十艘を率て、蝦夷国を討った。阿倍臣、鮑田・淳代(秋田・能代・津軽地方)二郡の蝦夷二百四十一人、其の虜三十一人津軽郡の蝦夷一百二十人、其の虜四人、胆振鉏の蝦夷二十人を一所に簡びて、大きに饗たまひ禄賜ふ。(略)問菟の蝦夷胆鹿島・菟穂名二人進みて曰く、「後方羊蹄を以て政所とすべし」といふ。(略)胆鹿島等に語いて、遂に郡領を置きて帰る」とある。同6年《三月に阿倍臣名を闕せり。を遣して、船師二百艘を率て肅慎国を討たせた。(略)》(首八十 = 多くの意味。1・2・3の地名不明。『日本書紀』より)

記録としては、阿倍臣は陸奥の蝦夷を引き連れて、大河(後志説・十三湊説)碓を下し宿営し、肅慎に帛などの物を海辺に積んで、友好を求めたが、肅慎は品物を受け取らず引あげてしまい親善は成立しなかったと『日本書紀』は伝える。この時、2人のアイヌの申し出に「後方羊蹄を政庁として頂きたい」とアイヌ側から願いがでていた。

肅慎について 『アイヌ文化の源流』石附喜三男著に「樺太から北海道へ肅慎の南下、斉明紀はオホーツク文化の南下現象がある。蝦夷と肅慎の相対がはっきりとしているので、阿倍比羅夫が北海道での記録と考えて良いと思われる」とアイヌ人と別の肅慎(しゅくしん)と述べている。樺太南端にいたアイヌ民(骨嵬=クイ)が、樺太北部にいたニヴフ(ギリヤーク)が北海道オホーツク沿岸に移住してきた狩猟民が肅慎と思われる。ミシハセ=ニヴフ人が北海道オホーツク沿岸移住説に、司馬遼太郎著『街道を行く・オホーツク街道』「遠い祖先たち」に「ミシハセとは何人なのか。諸説があり、決定的な考え方はない。「オホーツク人」こそ、ミシハセでないかということである。証拠はない。ただ、私の気分だけである。」と述べている。又、『オホーツクの古代史』菊池峻彦著に「『金史』の地理志によれば、金朝の東の境界にいる民族を吉里迷という名称が記されている。この吉里迷の名称は元朝の正史『元史』の「世祖本紀」にサハリンの住民として記されている。吉里迷はサハリン南端にいる骨嵬(アイヌ)によって圧迫されていることを訴えたので、至元元年(1264)に世祖フビライは骨嵬征討軍をサハリンに派遣したという。至元23年まで元軍は7回にわたってサハリンへ遠征軍を派遣している。吉里迷はニヴフ民族を指してギレミと呼び、ギレミはロシア人がニヴフ民族を指してギリヤークと呼んだ。」と述べている。骨嵬はアイヌ人、オホーツク人=ニヴフ民族であることが判る。(オホーツク人文化については、北見市常呂遺跡・網走モロヨ貝塚がある)

日本の歴史から見れば青森県の安瀉(安方)や十三湊が日本の最北端の航路湊であるがアイヌの北方交易圏から見れば、南端の湊が安瀉、外が浜、十三湊が交易の湊になるわけであるが記録としては残っていない。現在の松前、函館は7世紀頃に和人が入りはじめ、

渡島という言葉は北海道の入口を指す旧称で、南部津軽の人々が「おしま」と呼んだことに由来する。現在の檜山支庁の八雲町旧村落、西海岸の熊石から南部、函館を含む渡島半島と呼んだ。渡島には日の本、唐子、渡党の三種のアイヌ民いた。日の本アイヌは襟裳方面の国後、択捉、千島に住み、唐子アイヌは石狩方面に住んでいて、樺太アイヌ系と同じで「禽獣魚肉を常食として農耕を知らず」とあり言葉も通じなかった。渡党アイヌは函館、松前、道南に住み和人に似て髭は濃く多毛で野卑であったが言語は通じていた。渡党のアイヌは宇曾利鶴子（函館）万堂宇満伊大（松前）は現在の外ヶ浜、青森市、鱒ヶ沢の海岸線にやって来て交易を展開していた。この渡党の登場は建久2年(1191)源頼朝が重犯罪人の流刑地、渡島に送ったのが始まりと言われているが、奥州合戦後、藤原氏の敗走者が新天地蝦夷に多く渡った人々が渡党の祖であろう。その中に義経主従が入っていることは充分考えられる。

貞治の碑（鎌倉期から室町期）が函館市内から宝暦3年(1752)函館で出土した。碑文に「貞治6年丁未2月日且那道阿慈父慈母 同尼公」（祀った人・尼になった夫人）とあり、板碑には右に阿弥陀如来礼拝図 左に弥陀如来来迎図がある。貞治6年は南北朝時代の北朝の年号、村上天皇の正平22年(1367)にあたる。供養供養塔婆碑を見るかぎり箱館（旧称）に居た和人たちは浄土信仰に生活に安住を求めて文化的な生活をしていることが知れる。義経の蝦夷伝説より170年後の石碑であるが、函館が栄えていたことが判る。



碑は函館称名寺にある。高田屋嘉平の墓・土方歳三の碑もある

北海道の義経伝説 北海道内に100話以上あると云われ、アイヌ伝説に見られる義経伝説はアイヌの英雄神オキクルミやサマイクル伝説が混合して、江戸時代に道南方面に進出した和人と、アイヌ民との接触過程で成立したものと云われている。その伝説はアイヌ神話に出てくる英雄神、国造りの神が人間界を造ったとき、色々な試験をうけて人間界に降りてきた神、オキクルミとサマイクルで、天上界から稗の種を盗んで、アイヌに伝えたという神話である。アイヌにブシ矢（鏃にブシ草の毒を塗る）などを教え、魔神をも退治した。オキクルミはアイヌと同じ服装をし、超人神でなく人間的な神なのである。サマイクルはその補佐役で、オキクルミの引き立て役の神で、そこで正確な記録はなく口承伝説としてオキクルミを義経、サマイクルを弁慶にみたてた。地域によってはその逆もある。

日高の平取村では粟や稗の栽培をアイヌに教えたりしたことが、義経=オキクルミ伝説に結びついている。釧路方面に行くと、酋長の娘とねんごろとなったり、宝物や兵法書を奪ったり、アイヌの文字を義経が盗んでしまったので、そのためアイヌ民からは文字が無

なくなってしまったなど、盗賊のように義経の悪評が悪い。西側日本海側方面は樺太を経て満州へ渡った伝説や、西部の寿都の弁慶岬から高麗、沿海州へ渡る伝説も伝わっている。

小谷部全一郎はアイヌ伝説を聞いたなかに「義経はクルムセの国へ行った」、とあるのだが「クルムセ」とは何処なのだろうか、誰もわからない。沿海州とする説、日高、千島列島、カムチャツカ方面説などがある。『蝦夷志』の「蝦夷地図説」に《 東北の海島は凡そ37。総称して「クルミセ」亦た名付けて「ラッコ嶋」と曰う。》と記述がある。クリル人が住む所をクルミセといい、国後・択捉・千島列島を指す名称とすると、そちらへ渡ったとすればジンギスカン＝義経伝説は消える。

『**蝦夷志**』 新井白石著・アイヌ伝説俗伝として享保 5年(1720)義経の記述をする。
《 俗尤も神を敬うも、而も祠壇を設けず、其の飲食に祭る所の者は、源の廷尉義経なり。東部に廷尉居止める墟有り、土人最も勇を好み、夷中皆な之れを畏る。夷俗は凡そ飲食には乃ち之れを祝いて「オキクルミ」と曰う。之れを問えば則ち判官なりと曰う。判官は蓋し其の謂わゆる「オキクルミ」か、夷中廷尉と称する所の言なり。廷尉居止の地名を「ハイ」と曰い、夷中称する所の「ハイクル」は即ち其の地方の人なり。西部の地名にも亦た弁慶崎なる者有り。或は伝う、廷尉此より去って北海を踰えたりと云う。寛永間越前国新保の人漂いて韃靼の地に至る。是の年癸未、清主乃ち其の人を率いて燕京(金代の北京の古称)に入り、居ること一年余り、勅して朝鮮をして送致して還らしむ。其の人曰く、奴兔千部の門戸の神は、此れ間々廷尉の像を画きし者に似たりと。亦た似て異聞と為す可し。》と。

口訳で「アイヌは神をもっともうやまう。シャモ(和人)のように神社をつくらない。アイヌは酒を飲むときは、神と祭っている義経と家の中で酌み交わす。北海道の(日高、厚岸方面)東部に義経の居館もある。アイヌの人々はシャモの武人、義経をオキクルミ神として崇め、オキクルミとともに酒の宴で神聖な祈りをささげる。オキクルミは判官なり。西部地方(石狩から道南方面)には弁慶岬という名も伝わる。〃清国〃へ漂着した人の話しでは、ヌルガンの役所には義経の絵図神があった。寛永年間に新羅人、韃靼人がこの地に漂着している。この人達の話しから義経は燕京で大軍を率いて汗(王)となって国を平定している」(奴兔千 = 清朝時代のアムール川下流に奴児干都司の役所)

『**蝦夷随筆**』 板倉源次郎著(1738年に著す)

義経の記述部分は《 義経を崇敬すると云事本那にていひ伝ふれどもさだかにしかりとも見えず。浄瑠璃の内に義経の事有りて、義経幼年の時小船に乗りて蝦夷へ来りて八面大王の娘に通じ、大王の狩に出たる隙をうかがひ秘蔵せし虎の巻をぬすみ又小船に乗て本国へ逃帰り。大王より帰りにて追かけしかども、津軽地にて暴風に吹逢返されたりと云事を作りたりといへり。又或筆記に、東蝦夷クルと云処に義経の社ありて今にたへず祭り、此所の蝦夷は云に及ばず余村の蝦夷も崇敬する。シャムシャキンの時の勇者ヲニビシも即ク

ル蝦夷なりといへり。此事松前中に敢て知る者なし。オニビシが出し所はサル（沙流）と云所なり。山中に岩窟ありて古へ仙人住たりと云伝たる。処はあれども、義経の社とはなしと云へり。クルはサルの間違へなるべし。西蝦夷地に六条の間とす処に弁慶崎と云処あり。義経此所より北高麗へ渡りたまふともいへり。是も又さだかならず。義経の事を夷語にウキクルと云り。是は浄瑠璃にありける物ときこゆ。此浄瑠璃の根元夷如何して作り初けるにや、此文句を訳せば大略可レ知なれども夷語に能通ぜし通詞もなし。》と記す。

余話・韃靼国 14世紀中頃「元朝」の継続国家は相続争いで弱体化したところを、宗教秘密結社の白蓮教徒が組織する「紅巾の乱」が蜂起。元朝を中国領から追い出し紅巾軍の朱元璋（太祖・洪武帝）が南京で大明皇帝に就く。これが「明朝」（1368—1644）で漢民族王朝が成立する。中国史では「元朝」が滅びたことになるが、元朝皇帝は中国領土を失っただけで祖国蒙古に逃れた。明朝は5度もモンゴル遠征征伐軍を送るが、元朝を滅ぼすことはできなかった。後世に「北元」と呼ばれ蒙古高原で強大な軍勢力を維持しづけた。中国の正統史観では「明」は「元」から天命を受け継ぐ王朝でなければならず、モンゴル民族を「蒙古」と呼ばず「韃靼・タタール族」と呼び、彼等が元朝の後裔であることを言葉の上で否定したのである。従って、『元史』210巻は明朝成立後、数年で編纂された。「漢民族王朝」は「夷狄王朝」を早く過去の歴史事実として葬るため漢民族王朝の正当性を誇示したのである。中国の歴史を辿れば、漢民族王朝は「前漢」「後漢」「宋」「明」「中華民国」現在の「中華人民共和国」となる。鮮卑系族が征した王朝は「随」「唐」、蒙古族が征した王朝は「元」女真族が征した王朝は「金」「清」となる。したがって、現在の中国国土は征服王朝の国家と国土を継承している訳である。

義経主従入夷伝説の路・其の3

蝦夷の矢越岬では竜神の荒海に矢を射て鎮めて、義経は白神岬付近に上陸する。海岸伝いに松前に入りその歓びに義経は義経山欣求院を建て旅の疲れを休める。一行は江差から乙部村、寿都村へシリベツ川から羊蹄山を越え洞爺湖に出る。そして千歳から入鹿別を経て日高へ辿りつき足固めをする。日高からピラトリ部落に入ろうとしたが、ピラトリアイヌの勢力が強いので、門別に向かい新冠に館を建て付近のアイヌを従え様子をうかがった。やがて力を持った義経はアイヌを従えハヨピラの地に入った。義経はここピラトリアイヌ人々を愛し、アワやヒエの耕作を授け、また舟の操縦や漁法などを教えた。人々はその徳を慕って「判官様」「ホンカンカムイ」として尊崇した。若者の訓練も整え準備万端成って若者たちを引き連れて大陸（クルムセの国）へ向って旅立った。

ここで、北海道の義経伝説を整理しておきたい。北海道の各市町村の義経伝説は各様にあるわけであるが、伝承の路順は誰も見た訳ではないので地図での編集上「西側コース」

「東側コース」のご案内したい。「西のコース」は日本海側を北に上り、函館から義経が上陸したとされる現福島町→松前町→江差→寿都→積丹半島→小樽→石狩方面となる。

「東のコース」松前町から→長万部→洞爺湖→白老→勇払→門別→平取→襟裳→釧路方面となる。まず函館から西側コースをたどることにする。

1 函館港 おしま 渡島半島南部に

位置する箱館は、戦国時代河野政通が築いた館が箱形だったので箱館の地名となる。明治2年に函館となり明治維新後、函館は名実ともに北海道の門戸となり、この北海道の地を踏むものがその第一歩を印したのが東浜栈橋である。当時連絡船は沖に停泊し客は舢舨 はしげぶね でこの栈橋との間を行き来した。この東浜栈橋は、明治4年に作られた。（函館市）

明治11年(1878)英国人イサベラ・バードとシーボルト（子息）がこの東浜栈橋に上陸して、2人とも義経伝説を記述している。

2 船魂神社・童子岩 みなだま 函館市元町（北海道最古の神社といわれる）

義経主従は津軽の三厩 みんまや から渡島へ渡る途中、逆浪のため船が沈みそうになったが、どうか船魂明神の加護により上陸することができた。辿り着いた一行は喉の渇きで水を探していたところ、忽然と童子が岩の上に現れ指をさした。その方向を見ると、こんこんと水が湧き出ていた。この岩を土地の人々は「童子岩」、船魂神社の託宣水 たくせん と呼ぶようになったという。現在泉は湧いていない。（船魂神社縁起）



東浜栈橋



船魂神社にある童子岩

3 矢越岬 上磯郡知内町・福島町の境

矢越岬は福島町との境、小谷石の西南端の津軽海峡に面し、海から岸壁が35ハの岬になって、陸から岬までの道はない。矢越はアイヌ語のヤ・クシに由来し「沖の向こう・内陸を通る所」の意なる。三厩の竜飛岬と矢越岬の海峡は潮流の変化が激しいので、この沖合は魚類の宝庫であるが、昔から灘を通過する時、近年までその儀式はあり、船を止め航海の安全を祈願するために帆を降ろし、酒などをあげて航海の安全を祈った。矢越にまつわる義経伝説は《 義経一行は、三厩から船出はしたもの、かい 櫂を忘れて来てためなびなた 薙刀を船べりに結び付け漕いで渡った。これが蝦夷地くろまかい という車くるま 櫂の始まりという。蝦夷地の岬付近に来た時、一天俄かに黒曇がわき、海が突然にあれだした。義経はこの岬には妖怪がいる、私が退治するといって強弓引き「南無八幡大菩薩」と唱え矢を射たところ、海は急に静かになった。後に義経が弓矢で岬に棲む妖怪を退治して通り過ぎた岬を「矢越岬」の名がついた。》とある。（知内町郷土資料館資料提供・文化、漁業、開拓、北前船の展示）

『昔江真澄遊覧記』の「えぞのてぶり」矢越の山の説明を《行くにつれて、ふなかくしの崎、つつら沢、マシタ、山背泊やませどまりを経て矢越の山（矢越までが福島町）が近づくと、船長は酒を提ひさげ（木製のかたくち）にうつして、舳へさきにたててこの神酒を海の面にこぼして磯山の神をまつた。（崎には神が祀ってあり、そこを通るとき船人は帆を下げ、神酒をささげる風習があった）蝦夷のくにから帰ってくるときは、どの船もしばらく帆をおろし、この矢越山に向かって蝦夷の国のアキノが作った弓矢をおみやげにもってきて、矢を放ち奉る習慣がある。それで矢越の山の名があるのだ》と記している。

4 白神岬 松前町と知内町の町境

矢越岬の西、松前町に入ると直ぐの岬が白神岬である。北海道最南端の岬と竜飛岬まで19・2kmという。大正7年渡島教育会が編纂した『函館支庁管内町村誌・其の2』（道立文書館蔵）「中世の福島・和人の蝦夷地定書・義経伝説の持つ意義・吉岡村（福島町）の沿革として」に《 本村開発ノ起源ハ書ノ微スベキモノナク其ノ詳ヲ知ルコト能ハズト 雖モ吉岡宮歌禮髭ノ各字中吉岡ハ福山、舊事記ニ文治5年7月15日鎌倉將軍右大将頼朝公藤原泰衡追討ノ節津軽糠部ぬかのぶ（八戸周辺）ヨリ里人多ク当国へ逃渡り、初メテ定住ストアルヨリ観ルニ津軽はなれヲ距ルコト僅カニ七里自然ノ港湾ヲ有スル當地ノ如キ最初ノ上陸地点ナルベキカ 》と記述がある。江差町の『檜山沿革史』によれば平泉藤原氏残党の定着した所は、吉岡、松前、江差の3箇所、記述から津軽や糠部から渡島の人々が渡り党になったと思われる。『函館支庁管内町村誌その2』・『福山旧記』によれば《 文治5己酉年5月12日、奥州落同日蝦夷地両山関江渡海ス、松前庄司義行道案内致ス。大将源九郎判官義経公始トシテ泉三郎忠衡、武蔵坊弁慶、常陸坊海尊、亀井、鷲尾、等主従百余人ト馬6匹引キテワタル。蝦夷地大将張達大王討ツ韃靼国江渡ル》と記述がある。

5 義経山山号 松前町

松前に上陸した義経一行は、渡海を無事に越えられたことを阿弥陀仏に感謝し、阿弥陀仏千体（千体仏像の一体は函館の称名寺あるという）を刻んで一堂に安置した。これが義経山欣求院である。欣求院は明治元年から同2年にかけての戊辰戦争で戦火を受けたが、阿弥陀像だけが焼け残り光善寺に移されたと伝える。光善寺境内に「義経山」と刻まれた石碑は、義経山欣求院の山号であると言われている。（松前町）

6 阿吽寺（真言宗）松前町

義経主従が渡島の折、危うく海難に遭遇せんとしたが、どこからともなく不動明王が現れてその仏力によって一同無事に渡海できるよう、導きいただいた。義経主従が入山した所が「阿吽寺」で、山号は「海渡山」義経が無事に海を渡ることが出来たので、この名がつけられた。この阿吽寺は、津軽の安藤氏が南部氏に敗れ蝦夷地に逃れ、嘉吉3年(1443)本尊の不動明王立像ともに渡ってきたとも云われている。又、山門は松前城の堀上門を移築したものと説明があった。（松前町）



矢越岬



白神岬



阿吽寺山門


7 江差鷗島 檜山郡 江差町・カムイシリ（神島）

義経主従は、アイヌの酋長シタカベの家に滞在した。シタカベの娘フミキに義経は恋されてしまった。しかし、義経ある夜ひそかにこの地を離れる決心をした。義経はシタカベから夷舟を譲り受けたが、三厩から連れてきた白馬を乗せることができず、鷗島の岩陰につないでおくことにした。フミキは舟で義経を追ったが、義経の乗った舟に追いつけなかった。このことを知ったシタカベは「カムイの名を汚す」といって娘を白刃の露とちらした。後、その場から赤い花の草を見つけ、草笛で吹いてみると、素晴らしい音色が流れた。これが舟歌として歌いつがれたのが「江差追分」の始まりという。（江差町）

馬岩 義経はついに鷗島に帰ってくることはなかった。待ちわびた白い竜馬は、いつしか白い岩と化してしまった。その姿は首を上げて、**嘶** いているかのように見える。後世の人々は、いつしかこれを**馬岩**と呼ぶようになった。（馬岩・開陽丸復元船北西の岩場）

江差追分 江戸時代から信州中山道で唄われた「**馬子歌**」が全国に広まり、越後に伝わって船歌となって船頭たちに唄われた。今から200年程前に北前船によって江差に運ば

れたという。江差の浜で女の悲哀を南部から蝦夷地に流れて来た座頭佐之市がケンリョウ節と追分を加えて独特の音調を持つ江差追分を誕生させた。（江差町）

- （前唄） 松前江刺の 津花の浜でヤンサノエー
すいた同士の 泣き別れ
連れて行く気は やまやまなればネ
女通さぬ 場所がある
- （本唄）^{おしよろ} 忍路高島 およびもないが
せめて^{うたす}歌棄 ^{いそや}磯谷まで
- （後唄） 蝦夷地海路の おかもい様はネ
なぜに女の 足とめる

忍路、高島は小樽市。歌棄、磯谷は^{すつつ}寿都町。忍路鷹島に会いに行けないが歌棄、磯谷まであなたを迎えに行きたい女心。松前藩の和人婦女子通行禁止時代の歌である。



光善寺にある義経山標石



鷗島の馬岩

8 ^{ひめかわ}姫川 ^{にしぐんおとべちよう}爾志郡乙部町（オトベツ・川尻に沼のある所）

義経と静御前の伝承は青森県南部の「おいらせ町の夫人ケ森」が北限かとおもって思っていたが、乙部地方まで静御前は義経を尋ねてやって来ている。静御前はこの乙部までようやく辿り着いた時は身も心も絶え絶えであった。乙部の人たちは「九郎判官様は、乙部岳を越えてさらに奥の蝦夷地へ行った」と。これを聞いた静御前は気力を失いこの大川の水際で帰らぬ人になった。乙部の里人はふびんに思い川のほとりにねんごろに葬った。土地の人は静御前の気持ちをもって「姫川」と呼んだ。（函館土木現業所）

9 弁慶岬 ^{すつつぐんすつつ}寿都郡寿都町

乙部からソーランラインを北へ上ると弁慶岬に着く。寿都湾に入った所が「江差追分」の^{うたす}歌棄の町になる。古くは、斎明天皇の時代に阿倍比羅夫が蝦夷の要請を受けて、軍船180隻を率いて^{みしはせ}肅慎（樺太・沿海州から来た海獵民される）を討ったと『日本書記』は伝える。日本海突き出た弁慶岬は大陸がすぐ近くにあるような錯覚を感じる不思議な地形。それは風、空、海の色が人間の持つ方向感覚がそうさせる場所なのかも知れない。弁慶の

銅像の台座にも「^{そうぼう}想望」（同志を待つ心）とつけられている。弁慶は義経がやって来るのをこの岬で待ちわびていた。（寿都町観光協会）

弁慶の土俵 弁慶はここで暫く休養していたが、余り暇をもてあまし弁慶は付近のアイヌ等を集めて角力をとらせ、勝ったものにはいろいろ褒美をだした。其の中に大変強いアイヌが出てみんなを負かし、えぼっていました。これを見た武蔵坊弁慶は、飛び出してわらじをはいたまま其のアイヌと組み合い、負けてはなるものかと電信柱の様な太い足でドシンドシンと力足を踏んだので、岩にわらじの足跡が残り今でもあるということです。

弁慶の土表は、弁慶像のすぐ近く。229号線沿い海に面している。（寿都町観光協会）



日本海にそそぐ姫川



弁慶岬の弁慶像



弁慶の土俵跡

10 佐藤家のニシン御殿 寿都郡寿都町（道指定有形文化財）

ここは義経の家臣、佐藤兄弟末裔の家系である。嘗てニシン漁で栄えた^{すつつまちょうたす}寿都町歌棄にニシン御殿と呼ばれるニシン漁場網元の家が残っている。佐藤家の初代は文政11年(1828)に場所請負人として2箇所を確保していた。苗字帯刀を許された家柄であった。この旧家を町史編纂委員と『義経伝説推理行』の著者合田一道氏が系図を調べているとき、この旧家が佐藤継信、忠信の後裔であることが解ったという。（岩内町郷土館資料提供・館内はニシン全盛時代資料、木田金次郎美術など展示）

11 ^{らいでん}雷電岬 ^{いわない}岩内郡岩内町

『義経勲功記』に、「嶋コキノ北ニ弁慶崎ト云ヘル所アリ。其ヨリ北ニ続イテ、捨津（寿都）、磯谷、知部智川ヲ過ギテ、岩名井ノ南ニ、頼然鼻ト云ヘル所アリ、是山徒ノ民部卿禅師頼然ナリ。其外義経ノ古跡勝テ計ヘガタシ」とある。

義経一行はこの地のアイヌコタン酋長の家で一冬を過ごす。酋長の娘メヌカと恋仲になり、旅立にあたって義経は「来年はきっと帰ってくる、来年は必ず」と言って娘に約束をしたが、義経は姿を現すことはなかった。メヌカは思いあまって海に身をなげてしまう。この別れ話の「らいねん」が「らいでん」になったという。（岩内町郷土館資料より）

アイヌ語研究家^{ちりましほ}知里真志保は「ラクンルム」は「低い出崎」の意で雷電はその転訛という。『夷諺俗話・巻之一』^{くしはらせいほう}串原正峯 著（幕吏）・寛政4年(1792)「蝦夷風俗の事」より義経伝説を《 文治五年、源廷尉奥州秀衡か許におはせしが、鎌倉の命に依て高館へ討手向

ひ、これに依て義経其外従臣衣川にて自害と披露し、密に蝦夷地へ落行給ひしか、蝦夷人共武威に恐れ服し、夫より全国へわたり給ひしよし云傳ふる事なるか、西蝦夷地スツ（寿都郡）といふ場所の内に弁慶崎（寿都町）と云あり。又其先イソヤといふ場所の内に来年の崎（雷電岬）といふあり。是は弁慶蝦夷人に対し来年来るべしと約諾せし所故、爰^{えん}を来年崎と云傳ふるよし。其外、夷言にも義経をシャマイクル、弁慶をヲキクルミなどいふこと今にその名あり。》と記述がある。

1 2 弁慶の刀掛岩 岩内郡岩内町敷島

弁慶岬を去り、雷電の峻嶺^{しゅんれい}にさしかかり一休みをしたところ、弁慶の刀が余りに大きいので置くところが無かったので、側にあった大きな岩を手でひねりまわして、岩の刀掛を作り、それに大きな刀を掛けてから休んだそうです。それでその岩を刀掛岩と言うのだと古老が話してくれたとある。（『北方郷土』第3巻第1号）



ニシン御殿・佐藤家



雷電海岸・雷電山



弁慶が長刀を掛けた岩

1 3 兜岩^{かぶといわ} 古宇郡泊村^{とまりむら} ・229号兜トンネルの左

岩内のアイヌ酋長が義経の残していったと伝えられる、金の兜を洞窟に隠しておいたまま酋長は亡くなってしまった。義経の残したかぶとがそのまま岩になったという伝えがある。アイヌ伝説に自分の死後、「死を惜しみ岩となって自分の姿を残す」伝えがある。

（松浦武四郎『西蝦夷日記』）

1 4 神威岩^{かむいお}（神威岬^{いりか}・入舸）・女郎子岩^{じょろういお}（積丹^{しゃこたん}岬）

積丹半島はなんとも美しい所である。神威岬先端に「神威岩」があり、積丹岬には「女郎岩」がある。『積丹町史』では女郎子岩^{シケオシヨラウシ}と出ていて、アイヌ語の神様が荷物を棄てた所の意味になるらしい。

神威岩 和人の伝える義経伝説では日高平取の酋長のところに滞在していた義経が、日高の山の中に留まることをいさぎよしとせず、岩内の雷電の辺に兵を集め糧食の用意をして、舟で北上して神威岬までさしかかると大荒れになり、舟が少しも進まなくなったのでこの神威岩と海神や風神にを神饌^{しんせん}を供えて祈願したので、無事にここを通り北上してからは、この岩をカムイというようになった。（北海道庁「北海道の口碑伝説」）

一説に難風にあった義経が鳥帽子を脱いで神威岩に投げかけ難をのがれたともある。そ

れ以来この岬を通る者は、必ず酒や洗米、絵馬などを海にながして、海上の安全を祈るようになった。（『アイヌ伝説集』更科源蔵編著・『積丹町史』）

一説に義経が日高平取の酋長の家に滞在中、酋長の娘と恋仲になったが、大望を抱く義経は北に行くことになり、それを知った娘はその後を追い、神威岬まで来たときに、すでに義経主従は帆を張って舟出（シャモの女が乗っていた）したあとだったので、恨みのあまり神威岬から激浪の中に飛び込んで、やがて岩になったのがメノコ岩であるとのことである。それ以来和人の舟が女を乗せてこの先を過ぎようとすれば、必ず船を転覆し難破するという。それは酋長の娘が恨みの言葉の呪いによるもので、それ以来この岬から奥へ女人が入るのを禁じたのである。（北海道庁編「北海道の口碑伝説」）

元禄4年(1691)に松前藩は、西蝦夷地の神威岬から北の方へ婦女子の通行することを禁じていた。後、安政元年(1854)幕府が蝦夷地開拓の計画により、函館奉行所役人が妻子を連れて、宗谷に赴任のため、神威岬を通ったのが最初である。

女郎子岩はシララ姫の化身である 積丹岬島武意海岸に大きな起立した岩、女郎岩と名付けたのは和人であるという。積丹観光協会の説明には《 北へ向かう義経主従は途中大シケに遭い、やっとの思いで入舸村^{いりか}へたどりついた。傷ついた義経は酋長の娘「シララ姫」の看病により傷もいえ、たがいに恋想う仲となったが義経は再び舟出しなければならなかった。涙にぬれ声をからし義経の後を追うシララ姫であったが、その想いはかなわず大波にのみこまれてしまった。その直後に現われた岩をだれもがシララ姫の化身と信じた。のちだれ言うともなく「女郎子岩」と呼ばれるようになり、今も義経を恋慕うかのよう立っている。》とある。

女郎子岩伝説物語は《 義経はシララ姫への未練は残ったが、鎌倉の頼朝の追手が来る前に、早くここを去らねばならなかった。知らせたらシララ姫は義経から離れられないだろう。義経はシララ姫の住んでいる部落に向って合掌し岸を離れた。暫くして、シララ姫の知ることになり、義経主従の船を見つけると狂気の声で、「義経さまー、義経さまー、行かないで」義経主従を乗せた船は止まる気配をみせず沖へ沖へ行ってしまふ。「義経さま、あれほど私の気持ちをわかっていながら、何故、何故に・・・」。月に照らされた義経主従の船は波間に消えた。シララ姫は義経が去ったしまった自分に生きる望みを無くし、そしてシララ姫の姿は絶壁から海中へ身投げをした。やがてそこにシララ姫の化身が岩となり、女郎子岩と呼ぶようになった。その女郎子岩の岩の形は子供を抱いている姿、義経の子であるという。》（※駐車場から女郎子岩まで片道徒歩1時間弱・健脚向き）

積丹^{いりたん}の由来 「積丹」という地名は、積丹川の河口にあった部落名による。この部落は夏期になるとアイヌが漁撈（夏だけ魚場所）に集まってきた集落を「サクコタン」とよば

れた。「サクコタン」が「シャコタン」と和人によって名付けられた。夏の季節だけに集まって漁をした所は西海岸にアイヌの風物詩として続いていた。又神威岬の「カムイ」は「荒ぶる神」で航行の難所であった。神威岬の先端に立ち、またメノコ岩を眺望すると、不思議なことに義経伝説は神話に思えてくる。沖合の海面は少し丸みをおび、神威岬の眺望は「絶景かな」である。道南積丹半島の西海岸線は日本風景の一押し探勝地と思う。



兜岩・泊村



メノコ岩・神威岬



女郎子岩・積丹岬

15 神威神社 積丹町来岸

義経公が神威岬を通過するとき波浪が激しく船を進めることができなかった。神威岩の立岩に向って、神饌（神に供える供物）を整え海神と風神に一心不乱に海上の航行の安全を祈願、やがて波浪は収まり、無事神威岬を通過することができた。積丹村のアイヌたちはカムイと称した。後に昭和6年神威神社となる。

16 セタカムイ岩 古平郡古平町229号沿い・積丹町の次の町

セタムムイ「犬神」という立岩がある。義経はこの地より大陸へ渡ったとされている所で、義経が連れてきた犬があとを慕って、荒れ狂う海に向い吠え続けているうちに岩になったと云われる。似た話しは千葉県銚子市の犬吠崎伝説にもある。頼朝に追われ義経はこの崎から船出した時、愛犬が7日7夜吠え続けたので犬吠崎と名が付いている。

アイヌ民話伝説は 昔、アイヌの若い猟師が犬を大変かわいがっていた。ある時、漁に出たが、暴風雨にあい若者だけが帰ってこなかった。犬は海辺で悲しげな遠吠えが何日も聞こえた。いつしか、海辺に犬の姿は無く、岬に犬の遠吠えをした形の岩が、こつ然とそそり立っていた。村人はその岩を「セタカムイ・犬の神様」と呼んだ。

17 赤岩伝説 小樽海岸赤岩山

小樽海岸祝津の赤岩山は観光公園となりホテル側にある。伝説としては、「この地で逗留していた義経は石狩に去っていった。酋長の娘、フミキは義経を忘れられず、断崖から身を投げた。祝津に春が訪れると、フミキが身を投げた断崖の下に一輪の美しい赤い花が咲きフミキ草と呼ばれた。（フミキ草 = エゾスカシユリの説がある）



神威神社



セタカムイ岩



小樽祝津・赤岩

18 石狩のハマナス 石狩市石狩浜

石狩に逗留しているうちに、義経は村長の娘のスワロと恋仲になったが、やがてこの地を去ることになった。娘のスワロは自分の気持ちの印しとして送ったのが、海浜に咲くハマナスの花であるという。（河合裸石著『ルーラン』「紅燕情話」）

19 黄金山 (739メートル) 石狩市浜益区

すり鉢を伏せたようなタイルベシベと呼ばれる山がある。シャモはこの山を黄金山と呼んだ。昔、義経がこの山に住んだ云い伝えがあり、そのときに置いた甲冑がマムシなったという。（松浦武四郎『西蝦夷日誌』）天正時代に黄金山に金坑があったという。

20 岩燕 伝説 旧浜益村（現石狩市浜益区）

国道231号沿い、その浜益町のはまます郷土資料館を訪ねる。義経伝説は濃昼、群別の地区に『ルーラン』河合裸石著（明治45年）「ゴキビルの岩燕」を『浜益村史』より要約で紹介。《濃昼の湾曲した海の北側に高さ50丈余りの一大峭岩が日本海の荒波を蹴ってそびえ立っていて、すこぶる豪壮な奇観である。村の人はその岩をマッカ岩と称している。その岩根を、はらばいながら、更に進むと譎怪な岩脚に矚然とした一大洞窟がある。その洞窟をのぞくと洞の奥は物凄い程闇黒で、到底究むることができないが、どこやら造化の秘密がかくされてあるらしい。岩面から突然人の顔を掠めて飛び去るものがある。これがゴキビルの奇燕、いわゆる紅頂の岩燕、源義経にからむ伝説のご本尊である。（略）義経公がゴキビルに漂着したその頃、その当時石狩川以北随一の酋長に「トミハセ」と言うものがあって、ゴキビルに山荘を設け、そこに滞在していたが、義経一行が来たと云う急報に接し、「すは、やまと神の子、ヨシチネ来れり」とテンテコ舞をし、早速判官主従を山荘に招き、美釀珍肴の限りを尽してねんごろにもてなしをした。（略）ところがトミハセに「ピリカメノコ」いた。生まれて初めて見るシャモ（義経）に「鬼も18のメノコは義経公に恋した」（略）春が去り、夏が去り、秋の浦風が身に沁みる頃、義経は浜益さして渡海することに決まった。村人と別れの時、アイヌの老婆が手に鳥籠を

携^{たずさ}え、公のご前に馳せ来って言うには、「この鳥のピリカメノコが可愛がっている世にも稀^{まれ}な頭の真紅な岩燕です。メノコの気持ちをヨシチネ様受け取ってください」といって差し出された。義経去った後日、トミハセの庭に一双の岩燕が帰ってきた。だがピリカは義経がいなくなり、生きる希望をなくし「ブシュ」（毒）を食^{もんじ}って悶死^かしていた。斯くして奇^{めづら}しき一^{いっそう}双の岩燕は永い間、主人を失ったのである。岩燕はピリカメノコの恩を忘れないで他へ飛んでゆかず、この岩燕の子孫は今も残っているという。》という物語になる。

又、松浦武四郎の西蝦夷日誌「ハママシケ記」に「昔、義経公、此所の土人海浜にて海馬^{トド}を捕^{たてまつ}りて奉^{ゴキビル}りし処なりと。」と記す。（濃^{ゴキビル}昼 = アイヌ語のボンキビル・岬の陰・水巻く所の意となる）（浜益郷土資料館提供・市立はまます郷土資料館は浜益区浜益・館は網元白鳥家のニシン漁の番屋・明治32年の建物・ニシン漁場の生活用具展示あり）



石狩市はまなすの丘公園



浜益区黄金山



浜益区 濃^{こまびる}屋

2.1 小谷部全一郎が創設した虻田^{あぶた}学園跡 現洞爺湖^{とうやこ}町・役場内（旧虻田村）

『成吉思汗ハ源義経也』の著者、小谷部全一郎が創設した通称「虻田学園跡」を訪ねてみた。今日では一般的に評価の低い小谷部全一郎であるが、虻田町ではどのような位置づけをされているかを、興味を持ってこの町に入った。虻田町は小谷部全一郎の実績を、ありのままに解説され、大人の対応をしていたことに安堵した。

虻田町の「小谷部全一郎と実業補習学校」跡の説明板に次のようにある。《明治元年（1868）秋田にうまれた小谷部全一郎は東京で苦学を重ねたうえ、明治21年渡米し、ハーワード、エール両大学で神学や哲学を学んで同31年帰国した。翌年北海道に初めて渡りアイヌ民族の現状に激しく心を動かされ、板垣退助、大隈重信、二条基弘、近衛篤磨らの賛同を得て「北海道旧土人教育会」を設立した。その目的はアイヌの若者達に農工技術を習得させ貧困から救おうというものであった。東京神田での大演説会での「滅びゆくアイヌ民族を救え」という熱烈な訴えに感動した白井柳治郎と共に明治34年虻田に適地を求め、翌年四月虻田第2小学校をつくり白井柳治郎は訓導^{くんだうむ}無となり、小谷部全一郎は補習学校の建設資金集めに没頭した。明治37年2月には私立実業補習学校「北海道旧土人教育会虻田学園」の設立認可、9月には校舎も建ち、理事長の小谷部全一郎をはじめ農業は白井柳治郎（後に校長吉田巖）、学科は大越連治、蚕業^{さんぎょう}織物は中山桂枝らが担当した。生徒は小学校を終えたアイヌ子弟を全道から募り、全寮制度という画期的な学園が全国的注

視の中で発足した。しかし、年々学園の経営は困窮をきわめ、入園者も減り資金面も思うにまかせず、初志の理想には遠くなり、小谷部全一郎は挫折感のうちに病に倒れ、明治42年11月すべてを吉田巖（アイヌ研究家・帯広市）に託して虻田を去った。同年7月有珠山噴火による避難、入園者皆無という状況となり翌44年四月閉校となったが、小谷部全一郎のアイヌ教育に傾けた情熱とその偉大な業績は、永く教育史上に残るものである。同校舎は大正3年村役場の焼失により仮庁舎に使用した。》小谷部全一郎については第9章項で後述する。



虻田学園跡・現虻田町役場内

小谷部全一郎
虻田町史より

虻田実業補習学校・虻田町史
教育・文化編より

虻田町 噴火湾と洞爺湖に挟まれた町、洞爺湖温泉があり、東に有珠山が日本で最も活発な火山の1つで、25年から50年という周期で大規模な噴火をくりかえしている。また2008年にはサミット会場になった町でもある。

2.2 洞爺湖中島 洞爺湖町（アイヌ語のトウ・ヤはなだらかな丘に囲まれた湖）

義経一行は洞爺湖の中島に渡り、大酋長ポロユクと会う。ポロユクは身の丈6尺、風貌人格に優れ「あなたのような大酋長が我々に味方をしてくれたら、鎌倉に向けて旗揚げしたい。ぜひ手助けしてもらえないか」と協力を頼んだが、ポロユクは義経に同情したが「自分たちはアイヌ人である。もともとアイヌ民族は争いを好まぬ。ましては遠い和人の争いにアイヌが介入する理由はない」と返答され、義経はポロユクの人物を惜しみながらこの地を後にした。（『北海道の義経伝説』北海道口承文芸研究会）

後、寛文年間、円空がこの洞爺湖の中の島に渡り、義経の旗上げをポロユクに助力を願ったが、断られた話を聞いて、円空は義経気持ちを不憫に思い、その果たせぬ義経の想いと供養のために観音像を彫りこの中の島に祀った。その後人々は観音島と呼ぶ。

2.3 キムンドの滝（キム・トは山の湖）有珠郡壮瞥町仲洞爺（洞爺湖中島の対岸）

キムンドの滝の由来は「文治5年10月、本州より難を逃れて渡道し、更に満州に赴かんとした。源義経が、満州地方の事情をきくため、アイヌの酋長「キムンド」に面会を求め、約1週間この洞穴に滞在したが、遂に面会を謝絶されたため、ここを去って、日高の

酋長オキクルミカムイに会い、満州の事情をきいて渡満したと伝えられている。その時より、この滝をキムンドの滝と称し、多くの人に親しまれている」（洞爺観光協会）

『洞爺村史』によれば、昭和11年刊の会沢常蔵編集発行の「北海道庁胆振支庁管内概要」に出てくる。「キムンド伝説」は義経主従が文治5年10月に洞爺湖畔にやって来た。中島にはキムンドという満州人の酋長がいた。義経はわざわざ洞爺に来たのは、満州へ渡るため、満州地方の様子をキムンドに聞くためであった。しかしキムンドはかつて斉明天皇の時代に阿倍比羅夫の蝦夷征伐の時、被害を受けた子孫であった為、日本人全部に敵意もっていて、いくらたのんでも会ってくれなかった。そこで義経は日高の酋長を頼って満州の事情を教えてもらって満州へ渡ったというものである。しかし、この伝説話を金沢常蔵氏がどこでこの話を入手したか明らかでない。（5月中頃から入山できる）

24 義経岩と洞窟（岩屋観音） キムンドの滝より3キロ先・バス亭岩屋観音前

岩屋には義経岩と呼ばれる高さ50mの巨岩があり、25畳敷、80人が入ることが出来る洞窟がある。170年前に有珠の善光寺が徳川家から拝領したという、千手観音像が安置されているとう。伝説は《 義経主従が洞爺湖にたどり着き、岩窟を宿とした。この時どう猛な先住土人に襲われ、義経もよく戦ったが手ごわく、土人たちが毒矢を洞窟に射込もうとしたら、その時、洞窟の奥から、異様な音響と共に五色の光と共に観世音菩薩が現れた。土人たちは眼がくらんで足腰が立たなくなり降伏し、義経の家来となって仕えた。湖岸の石が朱色は義経一族が血刀を洗ったからである。》とあり、対岸の有珠山は今も火山活動で朱色の岩肌の山となっている。（洞爺湖町）



キムンドの滝



義経岩



洞爺湖・奥が中島

25 シノダイ岬（義経岬） 沙流郡門別町

義経が初めて日高に入った所はシノダイであり、その時、義経は泉で渴きを癒したという。それでシノダイ岬のことを義経岬という。（『門別町史』）「沙流の会所（運上屋・アイヌの保護と支配・交易と漁場の管理・外国船の監視）近くの丘には義経大明神の社のほか弁天社、天満宮、金毘羅などの各小社並んでいた。」（『平取町史』より）

『入北記』玉虫左太夫・東西蝦夷地随行記に「弁天社ニ至リケルガ可ナリノ社ニテ中央

ニ弁天本尊ヲ置キ、其傍ラニ義経ノ像アリ。高サ一尺五寸位ニソ金粉ヲ一身ニ塗り美ニ拵ヘタリ。近藤十蔵彫刻スト云フ」である。この2話から沙流の会所に初め義経神像の安置してあったことが判る。『カムイ義経』平取町義経を語る会発行によれば、近藤重蔵は寛政10年(1798)幕吏近藤重蔵が東蝦夷を巡視の折、蝦夷人がオキクルミカムイ崇拜と源義経を崇敬していることを知り、蝦夷地平定の策と考え「英雄源義経神像」を江戸神田の仏工法橋善敬^{ほうきょうぜんけい}に義経像2体作らせた。この御神像はシノダイ(現富浜)に置かれた沙流会所付近の義経社に祀られていたが、後に会所が廃止されたので、御神像は門別の稲荷神社脇に保管された。沙流アイヌ民の伝えによると、明治18年永山屯田司令官が日高地方巡視中、太政官では神名帳に義経という神はないとあって義経像を廃することを指示した。これを伝え聞いたアイヌの酋長ペンリウクが憤慨して、「沙流の神を門別で廃することはもつたい^{もつたい}ない」というので門別村に安置してあった神像を密かに背負って平取の神像と供に祀っていたが、門別の方が大きく且つ成功にできていたので2体は必要が無いと考え、シブチャリ(静内町)で文七と酒2升と交換してしまい、他の1体は行方が分からなくなったという。(『平取村開村50年史』)

26 門別稲荷神社 沙流郡門別町

御神像は門別稲荷神社に保管されていたが、明治元年新政府出された神仏分離令により廃され、ハヨピラのオキクルミカムイ降臨^{こうりん}の丘に移動した。北海道大学図書館蔵の古絵図には稲荷神社付近に「義経神社」の存在が確認されている。(『カムイ義経』)

27 判官館跡 新冠郡新冠^{にいかつぶ}町

新冠川の西に海より50^レ位の岸壁の上に判官館はある。義経主従は帆前船が新冠川口の岬の下に流れ着き、ここに館を築いたが、兵力がたりないと平取に去った。新冠の会所から坂を登っていくと峠に出る。そこが判官館という。アイヌ民は判官館近辺をピポクと呼び、切り立った岩をポロヌプリ(大きな山・親山)とし、神聖な場所として酒を捧げていたそうです。(『判官館の歴史と伝説』より)

幕末の探検家、松浦武四郎の記録『東蝦夷日誌』(1863—65)に「満汐また風波の日には、会所元より九折を廻り、此峠を判官館と云、四方よく眺望^{ちやうぼう}す。其風景云んがたなし」とある。江戸時代末期には「判官館」と呼ばれていたことが判る。(新冠町史)又、シーボルトの息子ハインリッヒ・フォン・シーボルトは、「義経伝承」の調査では、この判官館跡に案内された場所という。

余話・アイヌと和人の衝突 義経の時代より後のことであるが、この判官館前の海岸で歴史的な事件が起きた。日高、新冠、静内地方の東シラヌカアイヌと西マシケアイヌ争いが

6年も続いた。松前藩は仲介の労をとったが、両者譲らず、日高のアイヌが松前藩の武器の援助を要請したが、断られてしまった。その帰路^{ほろそろ}痲痺にかかり死んでしまい、両派のアイヌは松前藩による毒殺と伝えられ、「シャモはアイヌを毒殺する」という誤報が、新たな方向に発展し、松前藩の道東、道南、道西のアイヌ達が「アイヌ蜂起」に繋がってしまった。蜂起に参加したアイヌは約2千人、この時襲撃された艘19、殺された和人東西で273名、このうち198名が本州からの出稼ぎ者であった。（当時の人口は松前藩の和人1万5千人、家臣団80人、アイヌ人口2万人）弘前藩、盛岡藩、秋田藩の援軍出兵により鎮圧した。これを「シャクシャインの戦い」寛文9年(1669)という。シャクシャインは和睦に応じ、この判官館の浜でその祝いとして酒宴が設けられ、アイヌたちが酒に酔ったのを見計らい、松前藩現地指揮官が囲んでシャクシャインと一緒に和睦に応じた14、5人を酒に酔い寝ている処を殺害した。また、シャクシャイン自身を義経の後裔とみるものが元禄一享保^{きょうぼう}期にあった。遠藤元閑『本朝武家評林』(1700)は、「近頃、蝦夷島で日本に背くことがあり、その大将シャムシャインという者が日本に^{したが}随っていたときには、自分は日本人で従五位下兼伊予守源義経の末葉^{まつよ}(子孫)だといった。」ということを書いてある。『義経知緒記』も松前の者の語りとして「蝦夷ノ庄司シャムシャイン」は太夫判官義経の後裔だと述べている。シャクシャインを義経の末裔に見立てるものがあったことは、シャクシャインを敵ながら一目おく評価があったことを示している。その後、シャクシャイン=義経の末裔伝説は発展しなかった。



シノダイ岬



門別稲荷神社



新冠判官館跡橋脚は日高本線

28 義経神社^{よつねじんじや} 沙流郡平取町^{さるぐんびらとり}（サルはアイヌ語・湿原の意・斜里、サロベツ、等）

襟裳^{えりも}街道門別町富川から237号線を約12キロ入ると平取町、その町外れ左側に丘陵地帯に義経神社がある。御祭神は源九郎判官義経、徳川幕吏^{ぼくり}近藤重蔵が蝦夷に伝わる伝説を^{たど}迎って作った義経公の御神像が勧請された。御神徳は危難防除、無病息災、家内安全、交通安全、商売繁盛等一般の神社と同じである。毎年2月の^{はつうまさい}初午祭は馬休安全と必勝祈願祭が行われ、門別競馬場の関係者が多く参詣する。御神像の経緯は「北海道編25・シノダイ岬」と「第3章の14・金田八幡神社」での近藤重蔵の御神像奉納経緯を述べた。

義経神社創祀（義経神社社務所案内より）「当神社の創祀は寛政10年（1798）の

頃、幕吏近藤重蔵守重が御尊像を寄進し創立されました。「源九郎判官義経公、衣川に自決せず、密かに高館を遁れ陸奥を潜行、北津軽三厩を経て海路北海道吉岡に渡られた」とやら、蝦夷各地に残された数々の伝説を辿り、とりわけ沙流川流域ビラトリ（平取町）辺りの蝦夷人が義経公を真摯に敬仰する情あるのをみて、その人々のため又北辺の守護神として尊像を寄進し小祠をハヨピラの地に建立祀らしめたことに依ると言われ、ハヨピラの聖地、沙流川の断崖に安置された御尊像は厳しい北方の暴風雨のため吹き飛ばされ、流出する災禍に再度遭遇し、サルフト（富川町）の浜、又ある時はモンベツ（日高門別町）の浜辺に打寄せられたと言われておりますがその都度奇跡的にも元のハヨピラに還えるので住民から畏敬され、かつその信仰弥々篤く今日に及んでおります。」御神像は鍬形兜に緋威鎧で腰掛ている、目には水晶を入れ、要所には金箔を塗った精巧を極めたものである。像の高さ32センチ、ケヤキの木で作られている。御神像の台座背面には次のようにある。（御神体とは言わない）

寛政十一年己未 四月二八日（1799年）

近藤重蔵・藤原守重

比企市郎右衛門・藤原可満

台座裏には、江戸神田住人大佛工 法橋善敬（『カムイ義経』平取町義経を語る会）

『協和私役』窪田子蔵著 安政3年(1856)佐倉藩士の記述に次のようにある。《自サル、至松前五終 沙流義経神社について・此地源判官を祭ると云事兼て聞候へば、支配人を呼で是を尋ねるに、云、夷人ヲキクルミカムイ、シヤマヤングルと云傳て尊める神あり。然ども何の神なるを知る無し。寛政御領の節近藤重蔵、最上徳内外に松前産の蝦夷言に通じればとて御召構なりし上原熊次郎と云此3人相議して、ヲキクルミカムイをば義経公とし、シヤマヤングルは弁慶と定め、且此地に勧請せしなり。》

境内には栗の大木（御神木）義経が食用として教化した栗の木、樹齢450年位、高さ22m樹周り3・4mの栗の巨木がある。又、境内には、母常磐御前と静御前の石碑やペンリウク翁の頌徳碑がある。（義経神社義経資料館に鎧や太刀など展示館あり）



義経神社



義経公御神像



正受院 近藤重蔵石像

近藤守重（重蔵）像がある正受院（赤ちゃん寺）東京都北区滝野川

25でシノダイ岬の述べたと通り、沙流郡門別の会所に送った御神像を制作にあたり重蔵自ら彫ったとされる甲冑坐像の石像が、東京都北区滝野川2丁目「正受院」本堂前にある。北区教育委員会の説明は《石像近藤守重坐像、近藤守重(1771—1829)は現在の千島列島から北海道までを探検し、石像のように甲冑に身を固めてエトロフ島に渡り「大日本恵土呂府」という標柱を建てた。通称を重蔵と称した。北方交易の海商・高田屋嘉兵の協力で、エトロフ島の開発に尽力した。また製作には江戸派の画家・谷文晁の下絵を依頼して作られたと伝えられています。》とある。

重蔵は蝦夷地に入り、サルを過ぎる時、酋長が刀剣甲冑を秘蔵し、且つ産土神を尊敬する状を看取するや、土人に、「汝等が崇敬する所の者は源義経公であろう。此頃予がここに来る時は、必ず其義経公の神像を授けてやろう」と告げた。ここに於いて土人達は其委細をよくは知らなかったが大いに悦服したとつたえる。（『北海道拓殖大観』）

『日本奥地紀行』 イサベラ・バード著 36信（続き）イサベラがハヨピラの山中腹で義経を祀った社を見た記述の部分を見る。《夕方一人の男がやって来て、やっとしか息のつかない女がいるから行って見てくれないかと頼まれた。行って見ると彼女はひどい気管支炎で、だいぶ熱があった。（中略）私はブランディと麻酔鎮痛薬25錠、非常に強力なビーフティー（牛肉を煮詰めた滋養飲料）数匙与えた。やがて副酋長が私に、私が病人に対して親切にしてくれたことに対するお礼として、外国人が今まで誰も訪れたことのない彼らの神社へ案内したいと言った。しかし彼らは、そうすることをたいへん恐れていて、案内したということを決して日本政府に言ってくれるな、もし知れたらひどい目にあうかもしれないから、と何度も頼むのであった。（略）ジグザク道の頂上の崖のぎりぎりの端に木造の神社が建っている。明らかに日本式建築である。しかしこれに関してはアイヌの伝説は黙して語らない。（略）副酋長が神社の扉を開けると、みんながうやうやしく頭を下げた。それは漆を塗ってない白木の簡素な神社で、奥の方に広い棚がついていた。その棚には歴史的英雄義経の像が入っている小さな厨子がある。像は真鍮象嵌の鎧をつけていた。それから金属製の御幣と1対の錆びた真鍮の蠟燭立てがあり、平底帆船（ジャンク）を色彩で描いてある1枚の日本画がかけてあった。この山アイヌの偉大な神の説明は、義経の華々しい戦の手柄のためではなくして、伝説によれば彼がアイヌ人に対して親切であったというだけの理由で、ここに義経の霊をいつまでも絶やさず守っているのを見て、私は何かほろりとしたものを感じた。彼らは神の注意を惹くために、3度綱をひいて鈴を鳴らした。そして3度お辞儀をして、酒を6回神に捧げた。》と記述している。

イサベラ・バード(1831—1904) 英国女性旅行家。明治11年に日本を訪れ日光、新潟、山形、秋田、北海道を紀行し、『日本奥地紀行』著作。平取には明治11年8月23日か

ら26日まで滞在している。案内通訳者の伊藤鶴吉18歳は英語力のあった人物で、イザベラに「彼はどの通訳者より英語が堪能であった」言わしめしめている。

余話・判官兵法書を盗む 『蝦夷日誌』松浦武四郎著・卷之八（弘化2年・1845）に
《 此処（アヨヒラ）ニ判官の古跡と云もの有。岩窟也とかや。先其夷人の申には、此処の酋長の家ニ虎の巻と云る軍^{いくさ}の秘書の有けるを得んとて其家へ聳ニいられけるが、其夷人名高き武強のものにて、其軍書の一巻を伝うことを惜しみ、其有処も教えず、判官何とか致して此書を得たく考え、判官偽り手、盲^{めくら}となり、或る時大きな罫炉裏^{いろり}のふちに、判官夫婦と子供三人居並て、其抱きたる子を過ちて火中ニ落とし入れたれば、是に酋長其盲を真実と思ひ、軍書の在り処を教えたり。判官即刻ニ其一巻を奪ひて船ニ棹さし、満州さし^{しこうして}而 酋長逃がし給うとかや。此地ニ蝦夷浄瑠璃^{じょうるり}といへるもの有て、此ことを作り述べたり。其語蝦夷語なれば、通詞ニ聞ざればべんじがたし。尚、蝦夷婆南志^{ぼなんし}ニ其浄瑠璃一ツを挙置もの也。》とある。口訳すれば、アヨヒラの酋長の家には義経が婿に入った。この家には兵法書があり、義経はなんとしてもこの書を見たかったので、義経はめくらになった振りをして、自分の子供を罫炉裏の火の中に落とし、目が本当に見えない事を酋長に信用させて兵法書の在り処を教えてもらい、義経はその兵法書を奪って満州へ逃げていったという。これは浄瑠璃の語りからきたものだろう。この似た話はハヨピラ地区以外にもある。

29 ハヨピラ山 『蝦夷旧聞』鈴木善教^{すずきぜんきょう}著・安政元年（1854）によれば《 ハヨピラ山はサル場所（会所）、サルフレ（地名）より五里十八丁ビラトリ（平取）の西方にあり、山中に義経の古社あり。》ビラトリ山の中腹に義経の祠はあったことを記述している。（現在はハヨピラの丘公園は山崩れのため不開園となっている）

30 義経台 上川郡東神楽町^{かぐらちょう}・神楽神社境内

「義経台の由来」は、「その昔、源義経は奥州平泉をのがれ、アイヌ達の導きで北海道に渡り、道南、日高地方に隠れ住み、各地でカムイハンガンと尊称さ、英雄と仰がれた。その折に東神楽のこの丘に登り、アイヌ達と酒を酌み交わし、アイヌ達は義経公を音読みして、ギケイコウと呼び、義経を称え拍手をして散会したとのことである。義経が旅立ったあとも数百年間、アイヌ達は義経を慕ってこの丘に登り、酒を酌み、ギケイコウと唱え拍手をして散会する様子を開拓の古老が聞き伝えて、この丘を義経台と名付けたという。この丘を最適の所を選び明治30年祠を建立したのが鎮守東神楽神社の創まりである。」とある。川上開拓史によれば明治27年頃、多数の人々が入植した頃は、義経台は2町有余の境内は茅の原野であった。（『東神楽町100年誌』東神楽町資料提供）

3 1 義経の里・本別公園（源氏山） 中川郡^{ほんべつちやう}本別町

本別町あげての義経の里を宣伝している。義経山・義経の館と御所・御所車石・弁慶洞・鎧岩・源氏洞・君待ち岩などが公園内にある。竜飛岬から北海道に渡った義経主従は、10年ほどのちこの地に来て「これより山は義経山、洞窟は源氏洞と申すべし」と名付けた。この地のオテナ（酋長）は義経のために家を作り、娘を召使として住むようになった。やがて義経はこの地をさり、ピリカメノコには義経の子がやどっていた。生まれた子は「ヨシツネ」と名付け、父義経の血を引いて人智武勇に優れ、十勝、石狩まで名を馳せ、以来アイヌは義経をサマイクル（文化神）の伝説を残した。（本別観光協会案内）



ハヨピラ山・手前沙流川



義経台・東神楽神社



義経の里・本別公園

3 2 えりも岬 えりも町

エリモ岬の由来は「エルムノツト＝ネズミの神の最も偉い神は襟裳の岬にいる」アイヌの口承語りからきているという。又、岩の連なりはネズミが伏したように見えることから名付けられたともいわれる。この岬の1.2km先の岩にコンブがはえて波にゆられる様は、まるで竜が潜っている淵に踊るように神秘的で、アイヌはこれをエリモ様のおひげと云って採らないという。（えりも町郷土資料館水産館資料提供・『アイヌ語辞典』）

義経は日高の酋長リコブシリにサマイクル尊称をうけた。義経が眼病にかかり、酋長の娘が家に伝来する秘宝を拝観すれば直るといって、父親の留守に義経に見せてしまう。義経の目癒えたが、秘宝には兵書と法力秘伝書に宝剣一振があり、義経は秘宝を盗み逃走した。酋長の追っ手に阻まれたが、兵書の^{ほうりきしよ}法力書を読むと山が現れ逃げ通すことができた。この時できた山が襟裳岬のエリモンツペである。秘宝を盗んだ義経を、オキキリマイ（泥棒野郎）^{さげ}と云って蔑すんだ。（『北海道の義経伝説』北海道口承文芸研究会）

3 3 オショロコッ（義経がしりもちをついた所） 白糠郡^{しらぬか}白糠町

オソル・コッは、人が尻もちをついてできた窪みと解されてきた。町史でも「^{しり}臀跡、土地が臀跡のように凹んでいる処」と記している。これに義経伝説が附会された。2百年前の古文書からみて、オショロコッは、川尻、滝、窪みで滝壺を意味している。しかし現在では滝も沢もない。オショロとは尻のことでコッは乾沢のことであるが、この丘で昔義経

が、寄り鯨を蓬の串に刺して焼いていたところ、串のもとが焼けて焚火の中に倒れ、鯨の油に火がついて炎が大きくなったので、義経はびっくりして尻もちをついた。その跡が沢になったのであると伝えられている。（白糠町資料館資料提供）

34 春採湖 畔の1本松伝説 釧路春採

春採湖の南岸にトドマツの老木があった。これは義経が知人岬から湖の水を飲んでいる鹿に射た矢が土に刺さり芽を出し大きくなったものと伝わる。（『北海道の義経伝説』）



えりも岬



オシヨロコツ義経の尻餅



春採湖

35 義経の窓岩 釧路市興津

興津の海岸に窓岩という穴の開いた大岩がある。義経が知人岬にチャシ（砦）を築いて住んでいたとき、弁慶と弓勢の競争をした。弁慶の射た矢は大岩まで届いただけであったが、義経の矢はその大岩を打ち抜いた。この穴から舟の往来するのを眺める景色がよいので窓岩という。（『北海道の義経伝説』）

36 義経の舟（巖島神社） 釧路市米町公園

明治24年に造成され巖島神社の敷地内にあったという。知人岬に赤茶色土が舟形の窪地あったアイヌはホンカンシャマ（義経）が乗ってきた舟であるという伝説がある。

37 義経岩（熊石とも） 屈斜路湖和琴半島

屈斜路湖畔和琴半島南端に義経岩というのがある。昔はこの半島の突端にあった岩で、この地方のアイヌに生活の方法を教えたサマイクルカムイという神様であるといつて、祭のときには必ず酒をあげるのを例としてあった。ところが或る夏にこの地方に出稼ぎに来た杉夫（林業労働者）が、「こんな岩が神様なものか」と言って小便をかけた。それから数日してあらしの夜が明けてみると、サマイクルカムイの姿見えなくなってしまった。アイヌ達は和人の無礼を怒ってサマイクルカムイは、神々のいる島の上（モシリバ）へ行ってしまったのだと言った。その後土地の人々が湖中に落ちた岩を拾いあげて、現在のところへ運んで来て義経岩と名付けた。サマイクルカムイのいる和琴の岬は、今でもサマイクルアパッテウシといつて、サマイクルカムイが魚釣をした所、又、義経が鎧を着けて腕組

みして湖を眺めている所という。（『アイヌ伝説集』更科源蔵編著）

余話・アイヌ考・サスガ（^{きすかたな}刺刀） 天明8年(1787)、松前に渡った古川古松軒の『東遊雑記』に記述がある。《サスガ（さす刀、五一六寸の腰刀、短刀、小刀）をマキリと称する。これは蝦夷人の制にて、鞘はくりぬきとし、それにいろいろさまさまの模様を刻み付くるものにて、上品下品ありて、青貝細工なるもありて、そのきざみも至ってよきあり。中なるは日本打ちの小刀なり。太刀も数多あることにて、何れも北方の遠き島国より松まえに渡りしものと見えて、制の違いあり。（略）すべて鉄類は蝦夷地へ渡すことは松前侯よりの制度ありて、^{みだ}猥りに交易することならず、^{はがね}刃金の入りし切れものは、何によらずして厳しき^{はつと}法度なるに松前に渡せしことなるにや、または今にてもぬけて、交易することにより、大工道具まで^{ふじょう}富饒なる夷人は所持せるとの^{ふうん}風聞のよし。おもてむきは刃金の入らざるものばかりをわたすことなるに、夷人の手にて如何製することにより、小刀・鎌・^{おの}斧・^{ほうちよう}包丁に至るまでもよく切れて、日本にて使う^は刃がね入りし切れ物に勝ると、松前にて各おのいうことなり。》この記述から見て、松前藩が刃物入手を禁じても、北方交易により、サハリン経由で手に入れていたことが判る。



義経の窓岩



厳島神社の右側という



義経岩

余話・^{えぞにしき}蝦夷錦と^{さんたんこうえき}山丹交易 江戸時代の山丹交易（山丹人・ニヴフ族・ウイльта族・オロチョン族等）は沿海州の民族が樺太で蝦夷アイヌとの交易があった。山丹人は中国製の織物や古着等を持参、蝦夷アイヌは和人交易でえた鉄製品・米・酒等で交換品とした。

文禄2年(1593)に^{かきぎよしひろ}蠣崎慶広が^{えつけん}徳川家康に謁見した際、^{からぎぬ}唐衣を着用しそれを家康に献上している。この蝦夷錦は、中国の^{こうなん}江南地方で作られた絹織物で、北京からアムール川（黒龍江）を下り、間宮海峡を渡ってサハリンに至り、南下して北海道アイヌ民までの5千キロの旅をして来たものである。蝦夷錦は本州では人気が高く、松前藩はアイヌ民に蝦夷錦を手に入れるよう強要した。その結果アイヌ民は交換するものに困り、身よりのないアイヌ民を借金の形に山丹人に引き渡しが行なわれた。蝦夷探検家の^{もがみ}最上徳内は「初めて此事を聞いて、皆涙したり。^{アイヌ}愛玩かれども、^{かえりみ}顧れば蝦夷の身を異国へ売りとる代金なり。実に体の^{かたまり}魂なり。」と記す。間宮林蔵の上司松田伝次郎はアイヌと山丹人の仲介に入り借財を清算した。清算をしないで放置することは幕府も危険な問題でもあった。その理由は、全

アイヌ民がロシア国に隷属して、ロシア軍隊を蝦夷地に駐留されることを幕府は恐れたのである。アイヌ民族とロシア国間の緊張がこれらの地域を至急調査と確認しなければならない背景が幕府側にはあった訳である。



余話・12世紀後半北方民族とアイヌ民族 アイヌ民族と北方民族との交易は、樺太（サハリン）南端海岸の砂浜で、「沈黙交易」という方式で交易が行なわれていた。北方民が特に欲する物は、蝦夷アイヌが持っている「銀鼠」（エゾイタチ・オコジョ）の毛皮であった。蝦夷アイヌが欲したものは鉄器や生活必需品であった。沿海州の山丹人たちは毛皮を求めて、樺太アイヌを仲介として蝦夷アイヌと交易していたのである。

シーボルト著『日本』6巻・「第6節 樺太南部原住民の生活様式、習慣、儀礼の記述・交易」の解説に最上徳内（1754—1836・蝦夷地探検家）の山丹人と樺太アイヌの「沈黙の商い」の記述がある。「山丹の人びとは小舟で樺太の岸に上陸すると、もってきた品物を目に入りやすい適当な場所に並べて、自分たちは遠ざかる。そこに樺太アイヌの人々が品物を見にやってくる。気に入ったものを探し出すと、その品物のそばに交換品を置き遠ざかる。山丹の人々が戻ってきて、その品物の交換品を受け取り、黙ったままでこの商いを終える」。この種の交易はおたがいの深い信頼を示している。この樺太アイヌの交易品を今度は、蝦夷アイヌ民と交易する。蝦夷アイヌは毛皮を和人と交易するより、北方民

と交易したほうが、ナベやカマ、刃物や針を手に入れる益を多くした。その結果として銀鼠の皮が樺太南端からアムール川を上り、蒙古遊牧民に渡っていたのである。

1250年頃、に吉烈迷（ギレミ・アムール下流河口にいたニヴフ同族）を隷属し元朝はアムール河口の奴兒干ヌルガンに東征元師府とうせいげんすいふを置き、ここに官吏と軍隊（3千人）が駐屯した。樺太南端に居るアイヌと宗谷海峡を往来するアイヌのことを「骨嵬ツイ」（こつがい）と呼び、元朝に認識されていた。この骨嵬がアムール河口のニヴフ村を毎年襲撃するので、吉烈迷族の要請を受け、元朝は（1272年—1308年攻防が続く）に世租フビライが元軍1万を送り骨嵬アイヌの征討を行なった。元朝は樺太南端のアイヌ骨嵬を支配下に置き、元朝に徴税ちやうぜい（毛皮税）を約束させたが、徴税は守られず不安定であったという。

この間に、日本の九州に元寇げんこう（蒙古襲来・1268—74）があったが、それが失敗におわった後、元軍はアムール河口から元軍のサハリンへ侵攻が行われ、1305年には樺太アイヌが大陸に渡り元軍と交戦したが、元に降伏し毎年元に毛皮を朝貢することを約したが不安定であった。これを「北からのもう一つの蒙古襲来」といわれる。北からの日本再侵略説があるが、経緯を見ると銀鼠ぎんそなどの高級毛皮の貢物みつぎものが目的と考えられる。

余話・オホーツク文化 5—14世紀に沿海州・樺太からの渡来民が日本のオホーツク沿岸につくった文化。この渡来民は吉里迷ギレミ（中国金・元史料に見える）・ギリヤーク＝ニヴフ族と呼ばれた民は同族とされる。この民族が日本のオホーツク沿岸に渡来してオホーツク文化を成立させている。本州の時代は古墳・奈良・平安・鎌倉前期の時代にあたる。渡来民はオホーツク沿岸全域、礼文・利尻島・稚内・羅臼・根室半島に土器・骨角器・金属製品出土品からオホーツク文化を知ることができる。オホーツク沿岸の交流を伝える渡来民族の痕跡は、礼文島香深井遺跡、北見市常呂遺跡、網走モヨロ貝塚遺跡に見られ、常呂遺跡には6キロmに渡り、2千5百を超える竪穴住居跡群が存在する。オホーツク沿岸に海獣狩猟民がアザラシ・クジラを追って渡来したギリヤーク人（ニヴフ人）は、アイヌ人・和人とも異なる人骨をオホーツク沿岸に残している。渡来民の原郷はサハリン島とアムール河下流地域からやって来た北方少数民族ニヴフ人＝ギリヤーク人といわれる。この民が礼文島・利尻島基地として唐子アイヌ（石狩方面）の交易し、更に唐子アイヌは道南アイヌの交易し、道南のアイヌが和人との交易をするオホーツク海・日本海の交易圏が成立していたことが考えられている。オホーツク文化を成立させたオホーツク人は、やがて11—15世紀頃、道北・道東の蝦夷きつもん擦文アイヌ文化の中に組み入れられて行く経緯なる。その民の末裔は1989年現在、サハリン島に2000人いる。尚、ニヴフ人の総人口はハバロフスク地方含めて4400人いるという。北の古代史は日本の正史に記録はないが、このルートを進みますれば義経が大陸へ渡ることはさほど困難なことではない。義経が大陸へ渡った真偽は別として、小谷部全一郎は「義経は唐子アイヌに先達されて大陸

に渡った」と直感で述べていることは冴えている。何故なら樺太からの渡来民のオホーツク文化を裏付ける遺跡発掘調査は、戦前戦後に始まり、本格的に立証され始めたのは昭和45年以降の考古学であるからだ。（『環オホーツク』紋別市立郷土博物館1991・No.1より・『北海道立北方民族博物館研究紀要』第8号1999）

余話・間宮林蔵渡樺の地 稚内市教育委員会は宗谷岬の間宮林蔵渡樺の説明には「ロシアの南下政策に驚いた幕府は文化5年(1808)4月13日、間宮と松田伝十郎を北蝦夷の調査に向わせた。流氷は去ったものの、なお酷しい寒気と荒波の宗谷海峡をのりこえて人情、風俗の異なる北蝦夷に渡り、東海岸を調べた。この年、林蔵は再び北蝦夷に渡り越冬、翌年文化6年春、西海岸を北上し北蝦夷は大陸と海峡隔てた島であることを確認した。夏には大陸交易に赴くギリヤーク人に同行シアムール下流の満州デレンを訪れ、この地方の情勢を調査し『東韃紀行』として報告させた。後にシーボルトは「間宮の瀬戸」と名付けて世界に紹介した。」と解説している。岬からは晴れた日に見える樺太島まで直線距離43Km余り、季節を選べば無謀の距離ではない。



宗谷岬・左端に見えるのは間宮林蔵の像。右の写真の内左側はモヨロ貝塚・右側は礼文島出土・女性像はセイウチの牙製作。セイウチ分布域はベーリング海域であり、オホーツク海の交易が分かる。像は祭祀に使用されたとの説がある。（道立北方民族博物館より）

余話・日本とロシアの国境の概略 17世紀、18世紀に日本漂流民がロシア国にいたが、幕府の海防政策が厳しく帰国できないでいた。ロシアが日本国への開国を迫った糸口がなかった。寛政4年(1792)9月ロシア使節ラクスマンが伊勢国の漂流民大黒屋光太夫を護送して根室に来航し通商を求めに来た。幕府は翌年松前で目付石川忠房はラクスマンと会見し、通商に関する幕府の国法を伝え、長崎に廻航させ時間かせぎをした。幕府の交渉に不満の帝政ロシアは寛政9年(1797)エトロフ島にロシア人が上陸させた。緊迫した幕府は翌年近藤重蔵らをエトロフ島に「大日本恵土呂府」漂柱を建てさせた。1799年7月、高田屋嘉兵衛がエトロフ海路を開いた。文化2年(1805)江戸幕府は、ロシア皇帝からの対日大使派遣受け入れ拒んだ。同4年には樺太の亜庭湾で日本の樺太殖民化に対し、ロシア海軍は敵対行為の軍事行動にでたことで幕府は憂慮した。樺太・蝦夷・千島南部の岸にロ

シア軍艦がふたたび出現し、この列島をロシアに占領されることを幕府は恐れた。文化5年(1808)長崎奉行高橋越後守の指揮の下、千人からなる哨所^{しやうしよ}(軍の詰所)が宗谷に置かれ、蝦夷、樺太南部、国後島にも要塞を築いた。この時期、松田伝十郎と間宮林蔵(28歳)が遠征に加わり、蝦夷、周辺海岸の大部分の地図を作成した。林蔵は宗谷滞在中に樺太および当時ほとんど知られていないアムール地方の調査報告する秘密指令をうけた。翌6年に間宮林蔵が樺太が島であることを確認し、この海峡を間宮海峡と呼ばれた。幕府は対抗処置として文化8年(1811)、ロシア艦長ゴローニンら国後島で捕え、日本に抑留した事件「ゴローニン事件」がおきる。ロシアはその反撃として翌年、高田屋嘉兵衛をロシア船長リコルドによって国後島の海上で捕えさせた。そして文化10年(1813)リコルドと嘉兵衛が伴い国後へ来航し、リコルドと嘉兵衛の協力によって、ゴローニンらをリコルドに引き渡した経緯となる。(『日本幽囚^{ゆうしゆう}記』)この状況下、間宮林蔵は1年かけて東韃靼地方の土地に関する情報、写生・地図の記録『東韃紀行』を幕府文庫に収めた。後、この機密情報を高橋景保^{かいはやす}がシーボルトに伝えたことによる「シーボルト事件」が起きる。(第9章・余話シーボルト国外追放で述べる)安政元年(1854)伊豆下田で「日露和親条約」(正式名は日本国魯西亜国通好条約)が結ばれた。エトロフ島とウルップ島の間を日露の国境とし、樺太は日露両国雑居とすることで解決する。そして明治8年(1875)、ロシアとの樺太・千島交換条約に調印となり、日本は樺太の権利をロシアへ譲渡する代わりに、ウルップ以北のクリル諸島18島がロシアから日本に譲渡され、全千島列島が日本領となったのである。しかしこの日露和親条約で南樺太を失った北海道民は日本政府の領土問題の解決に道民は不満として残っていた。後、明治政府はこの道民が持つ領土問題の不満を、日露戦争時に「日本の領土を押さえろ」と国策して樺太占領作戦をたて、日露講和交渉の日程予定が決まっていたが、日本軍は南樺太アニワ湾から上陸して圧倒的な軍事力で南樺太を占領、そして北樺太ルイコフをも占領、全土の降伏をもって日露講和交渉にあり、日本は樺太全土を要求したが、ロシア側の「北緯50度以南を割譲」という解決案に日本側は呑んだ経緯となっている。

第8章 モンゴル紀行 13話

モンゴル国の国土は日本の面積の4倍、人口は270万人（内モンゴル400万人）、チベット仏教の国。遊牧民の租は一般的に匈奴（北方遊牧民・モンゴル・トルコ・フン族）に始まり、鮮卑（モンゴル・トルコ系）、柔然（モンゴル系）、鉄弥（トルコ系）、契丹（ツングース系）などの遊牧民族が興亡と混血を繰り返した。

紀元前4千年頃、現在のウクライナの草原で、野生馬の馬がはじめて家畜化された。これらの痕跡は遺跡からの銜留が出土し、埋葬された馬の頭骨の小白歯の前歯に、銜を使った跡が見つかった。「銜の発明」は馬の両側を銜留で固定し、乗馬や馬に荷物を引かせることを可能にした。紀元3世紀から、モンゴル高原は匈奴、トルコ系遊牧民の興亡を刻み、9世紀中頃この地を支配していたトルコ系ウイグル族が、同族のトルコ系キルギスに滅ぼされた。その後、このトルコ系遊牧民は西方に移動しこれにかわって入ってきたのが室韋蒙兀、蒙瓦、萌古などと呼ばれたモンゴル系遊牧民であった。この時代は中国北方系の「遼」から「金」に支配されていた。やがて、12世紀末、モンゴルという名の部族が強勢し、この部族の中からテムジン（チンギス・ハーン）が現れ、1206年に44部族の酋長がオノン河沿いに集合し「クリルタイ」（部族の代表者44人によるハーンの推戴の会議）によりテムジンは「チンギス・ハーン」となった。『モンゴル秘史』は成吉思汗と記し、「ハーン」は「汗」（テュルク語はハン・モンゴル語はカン）「王」を指す。チンギス・ハーンは軍事行政単位を百戸長、千戸長、万戸長に再編し「兵を用いること神のごとし」、ユーラシア草原を駆け巡り、代を重ねながら空前絶後のモンゴル帝国をつくりあげた。チンギスの意はテュルク語の「海」の意。テュルク系民族（古代中国史に狄の民族）の日・月・星・空・山・海の6つの精霊「海の精霊」をさしたものである。モンゴル語は「強大な」の意。又、海という意は、北にあるバイカル湖から祖先が来たからである。

クリルタイ（P 111 写真） 石碑前に玉石で丸く形状に組まれている処は、火を焚き天空に火の炎を上げて、神に誓いを聞いてもらう儀式場となっている。日本への伝播は仏教と結びつき、寺院などで火を焚く儀式は宗派により色々伝承されている。「テン」は天におけるシャーマニズム信仰は、モンゴルにおいては「テングリ」となり、天神・天の神を指す。アジア北方の遊牧民族に共通な「天上の神」「運命の神」とされ、この天空の「テン」を中国語では「天」の漢字音写をあてた。古代中国に於いてテングリは中国史に天の概念に生み天命思想に発展する。テンの神の音は天山山脈にハン・テングリ山7千級があり、日本においては天皇、天下、天命などとなり日本の天孫降臨神話の高天原にも繋がっており、祖先神話の観念と深く関わっている。「テングリ」は「天の神・運命神・想像神」意味する概念は中央アジアから極東アジア、日本等にまで広がっている。

モンゴルの風土 に少しふれる。モンゴルは日本の稚内市の緯度にあたる。国土平均は

海拔1580[㌢]、ウランバートルは1351[㌢]の高地、冬季は平均マイナス38・6度、春は強風と砂塵が吹き荒れ、夏は7—8月昼夜の寒暖の差が大きく、秋は9—10月家畜が丸々ふとり、気温はつるべ落しに下がる。かなり気象条件が厳しいことが分かる。モンゴル人の深層心理にある「万里の長城を造った中国人がえらいのか、造らせた蒙古人が凄いかと」ガイドに言われたときは、筆者は二の句が継げなかった。

テムジンの祖先神話 「蒼^{あお}き狼が天から地上に降り、白き牝鹿と結婚する」、その後裔にテムジンが誕生することになる。チンギスの祖先は「蒼き狼」と伝え、明代の漢訳者の誤訳らしく、原語のボルテ・チノは「灰褐色の狼」を意味し、モンゴル風土では家畜の毛色を表す色彩語が多くあるので間違えたと考えられている。『モンゴル秘史』はチンギス・ハーン族の出自を、蒼き狼神話を作り、系譜に於いて天神から繋がるテングリの子孫神話を真実の話としてモンゴル人に信仰させたのである。天の命令を神託されたチンギス・ハーンは、抵抗する外部族を徹底的に滅ぼし、戦利品を部族間に公平に分配し、たゆまず国土を広げてゆく行動し続けなければならなかった。テングリの子チンギス・ハーンは神託を受け、全地上の人々の平和をもたらすためにモンゴルに生まれ、ハーンに服属すれば国家・人民・財産を保障する神託の行動となる。天神^{てんじん}の子とされる英雄テムジンはその超人的な行動は遊牧民に「テングリ＝神」とされ、これに属するモンゴル種族たちはハーンの下に集結しなければ生きて行けない民族でもあった。

1 クリルタイ跡 ヘンティール県ビンデル村

ウランバートルより東北へ車で460キロ移動、草原の中にビンデル村はある。時を遡って1206年の春、モンゴル族のキヤト氏族の族長だったテムジンが、周辺の氏族を統合し、ここオノン河の河畔にモンゴル諸部族長の代表44者を集め、クリルタイ（部族長最高決定会議場）を招請した。テムジンはクリルタイに推戴されチンギス・ハーンが誕生した所と伝わる。

2 オノン・デリウン・ボルタグ チンギス・ハーン馬つなぎの地 ビンデル村

クリルタイ跡3km、テムジンが馬を繋いだ所となっている。ここはアメリカとモンゴルの両国研究者グループが「ジンギスカンの誕生地・陵墓^{りょうぼ}」として割り出した所である。モンゴル政府はジンギスカンの聖地、誕生地、陵墓とされる所は発掘させない。この場所はヒンデイ山脈からロシアのシリカラ湖から412キロを流れこのオノン河に注ぎ、河の丘陵に現在は木彫刻の記念木柱が「チンギス・ハーンの馬つなぎ」の跡となっている。

1919—20年、日本の探検家でもある小谷部全一郎はこの場に立ち「蒙古人は石を積み上げここであるという。信じるしかない」と不安な気持ちを『成吉思汗ハ源義経也』

第10章「成吉思汗の遺蹟と義経」に次のように記述している。「此処をツグロツスコイと称し南東（南東にと記しているからクリルタイ跡の写真、奥の丘から小谷部は見たと思われる）に面したる丘嶺の半腹に、結構壯麗なるラマ廟あり、僧坊200余宇、3、4百のラマ僧常住す。三方に山廻らし南方展開せる地勢の雄大なると前面にオノン河の清流を控え背後の山を我が国語の旗に通ずるハタ山と称することと、其の地形は陸奥の平泉に彷彿・・・（略）、驚くべきは蒙古オノン河畔に8月15日は成吉思汗崩御の忌辰なりとして毎年その日より向かう1週間に亘り喇嘛廟（ラマ教・チベット仏教）に於いてオボー祭と称する大祭典を執行するなり。」と記述している。大正14年2月1日『中央史壇・成吉思汗は源義経にあらず』第10巻第2号で大反論されているが、筆者もこの場所に立っているなのでその状況を話してみたい。しかし小谷部の歩いた地域は内モンゴル、東シベリア、外モンゴルと地図上からどの方角から見ても気の遠くなる距離である。

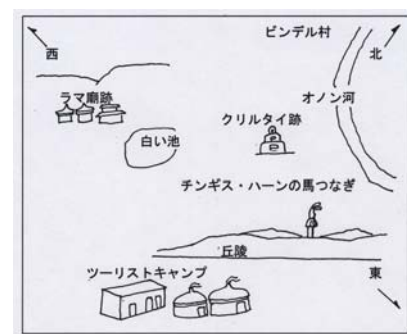
チンギス・ハーンの馬つなぎの写真は午前8時半頃で、影の方向が西になる。記念木柱の真後ろがクリルタイ跡になる。小谷部は南東に「ラマ廟^{びょう}あり」と記しているから、クリルタイ写真の奥の丘、馬つなぎの地を写真奥の丘から東方向を見たと思われる。「三方に山廻らし」はあっている。ハタ山については、現地ガイド・ジャモンハ氏にいろいろと尋ねたが解らなかった。8月15日オボー大祭典については、ガイドは、「昔のオボー祭は各地方や寺院で自由に行っていた。8月15日もあったと思う」との回答でした。オボーは寺院（モンゴルの寺は死者の供養はしない）と別の形で発展してきたものであり、直接の寺院と関係はなが、寺院と近隣のオボー祭は僧侶が仕切ることもあるらしい。



クリルタイ跡



チンギス・ハーンの馬つなぎ



馬つなぎ周辺の見取り図

オボーについて カイドの説明は、古代からモンゴル人は、山や川に神様が住んでいて、1番偉い神様は天に住んでいると考えていた。人々は生贄^{いけにえ}を捧げたりして、村の神聖な所や道や山に石を積んで、願い事を祈る。人々はこの場所に来ると、旅の安全や個人の幸せを祈り、オボーの廻りを3遍まわりながら、「オボーよ大きくなれ、私の富も大きくなれ」と唱えて小石を投げる。その小石がやがて小石の山となる。オボーの有る所は、道の高台、道路の交差している所、日本でいえば村落の辻、お地蔵さんのあるような所にあ

る。モンゴル人は大人も子供もオボーの前に来ると、必ず小石を投げて願い事をする。オボーに願い事の習慣はモンゴル人の生活の一部である。



馬つなぎより西方のラ
マ廟跡を見る



ラマ寺院は右奥の黒い建物か
『成吉思汗ハ源義経也』より



オボーは誰もが参拝する

ラマ寺院について ガイドに聞くと、「ジンギスカンの馬つなぎ地の、この辺りにラマ寺院がなかったですか」の問いに「ハイ、ありました。この目の前です。（上左写真）この寺院は1938年（昭和13年）に取り壊され、現在は草原となっています。遠方の山の麓あたりに寺院があったそうです。何でこんな草原に寺院がこの場所にあったかは16世紀以後、清朝の影響でチベット仏教はモンゴルで拡大されました。あちらこちらにも寺院が建設されました。1938年、寺院は取り壊され、歴史書の伝えでは、ソ連邦の圧力でモンゴル国は1934年に1万7千人の僧侶が処刑され、それから大粛清しゅくせいが始った。ファシストの手先、反革命とされたラマ教僧は、800の寺院のうち760寺が破壊され、1937年に11万人いた僧侶は翌年には1100人になりました。この時モンゴル国は実質的に指導者が全て殺され、指導者の空白になった時代と、歴史書（現代史）に書いてあります。」と答えてくれた。

この寺院の写真があれば捜してほしいと頼んでみたが「いろいろ捜してみたが無い」との回答。小谷部はこの寺院周辺（ヘンティール県ビンデル村）に大正8年入っているの、モンゴルの寺院の写真は無いとすれば、小谷部が持ち帰った写真は歴史的に貴重なものといえる。この時代の僧侶や指導者の粛清事件は、ソ連と清朝の緊張は高まりソ連邦が外モンゴルをおさえ、清朝は内モンゴルをおさえることで、暗黙の了解が2国間にあったと云われる。モンゴルはソ連に隷属させられることにより、今日外モンゴルだけが結果として独立国となれた苦難の歴史的分岐点でもあった。

3 オノン河畔 チンギス・ハーン誕生地

チンギスはモンゴル部族の名門ボルジギン氏族のイエスゲイ・バートルを父とし、オンギライト部族のオルクヌウトウシ氏族のホエン・エケを母とし1162年にモンゴル北部のオノン河の上流、デリウン岳の麓でうまれた。これがテムジン誕生である。

ツーリストキャンプ（筆者が泊まったパオのホテル）のオーナーは『モンゴル秘史』に

登場するグルハン・ジャモンハ（日本の訳ではジャムカとなる）の後裔という。テムジン10歳、ジャモンハ18歳、2人はアンダ（盟友・日本的にいえば義兄弟）であった。テムジンがチンギス・ハーンなる前の草創期、ジャモンハの活躍は偉大であった。後裔の親爺さんは「人間としてはジャモンハの方が人物は上だ」と言っていた。ジャモンハの後裔と言われるオーナーとの夜話を語る。

4 ゲルの夜話 フェルトの丸い家・モンゴルではゲル、中国語ではパオ。

ジャモンハ（？—1205年・日本訳ジャムカ）の後裔おやじさんは45歳位と思われる。ジャモンハの後裔の親爺さんは、テムジンとジャモンハ2人はアンダ（盟友）であった話から始まる。8歳年上のジャモンハはテムジンにとって力強い兄貴分であった。2人のアンダの始まりは、1度目の誓いはシャガイ（羊の足のくるぶし・双六のようなゲームで遊ぶ）を交換した。2度目は、次の年の春、弓の試合後、弓矢を交換した。3度目は、テムジンの妻が他部族に捕えられたとき、ジャモンハは自分の軍隊2万の兵馬を出して、テムジンの妻を取り返すことに協力した。その2人のアンダの固めとして、ジャモンハの帯と、テムジンの馬が交換された。あるとき、ジャモンハの家臣が馬を盗む事件を起こした。テムジンは部族規律の始末として、ジャモンハの家臣2人を処刑した。ジャモンハは濡れ衣と主張したが聞き入れられず、テムジンの規律の厳しさにジャモンハは、テムジンから離脱した。後、2人つき従う部族間の争いが激しくなり、両者は一族の同盟軍の名誉を賭け戦った。しかし、ジャモンハは敗れ、敗走の末に山奥で盗賊団のような逃亡中ジャモンハは捕えられた。テムジンは今まで自分につくしてくれた友情の証にたいしてジャモンハを助けたかった。口訳で、《「ジャモンハよ、今一度、2人の固いアンダになろう」とテムジンは呼びかけたが、ジャモンハは、「今はアンダ（テムジンのこと）は天下を平定した人、いまさら何も益がないでしょう。憐れみはありがたい。私に一刻も早く死を賜りたい。アンダよ、憐れみを垂れて血を出さずにくろしてください。私は高いところでアンダの子孫の幸を祈る魂魄こんぱくになりましょう」とジャモンハはいった。テムジンは言葉通りに、ジャモンハを皮袋に入れ、騎馬によって踏み潰した。》（『モンゴル秘史』東洋文庫より）人間を皮袋に入れ馬の蹄鉄で踏み潰す刑、血を流さず殺す処刑法は、遊牧民の古代トルコ、モンゴルのシャーマニズムの信仰に従って尊貴な人間に対し、処するとする慣わしがあった。ジャモンハの後裔の親爺さんは、2人の英雄は並びえない。戦いに敗れたが部族の信頼はジャモンハの方が上であった、と祖先の血脈を誉めた。

テムジンとジャモンハの仲違いの物語を聞いたところで、ここで筆者は話のチャンスと思い、日本の英雄「源義経」の兄頼朝に追われた悲劇の武将の話をした。そして、「日本の英雄ミナモトヨシツネという武将が、海を渡り大陸に上陸して、やがてモンゴルの大地でジンギスカンになってモンゴル帝国をつくった、と言う話は聞いたことはないだろう

か」と、2人に聞いた。2人共、「その話は聞いたことはない」と答えた。おやじさんは「ジンギスカンの祖先は海を渡ってモンゴル高原にやってきたのだ」と言った。この海の話はモンゴル編の初めの頁で、チンギス＝テンギスは海の意、バイカル湖から来たと言った。ここで通訳のアズザヤーさんは、

「こちらに伝わる伝説として、日本人の「蒙古斑^{ほん}」はフビライ・ハーンが日本を攻めたとき（元寇）、船が竜巻にあって沈んでしまった。敗者の将兵が日本に居残り、その将兵の子孫が今の日本人であり、それで「蒙古斑」があるのだ。とモンゴル人はそう聞き、伝わっている」と言った。筆者はこれには大笑いをしたが、モンゴル人が巷で語られている日本人の蒙古斑伝説話は、高い確率でモンゴル国民に信じられていることが判った。

「日本にはミナモトヨシツネ＝ジンギスカン伝説があるのだが」この質問に色々考えてくれたが、モンゴル側にはその痕跡は結論として皆無ということであった。

そこでジャモンハの後裔の親爺さんは気合いが入り『ジャモンハ一族の研究』（1992年モンゴル国独立後出版・キリル文字）という本を取り出してきて説明してくれた。

「チンギス・ハーンは身長165センチ、ジャモンハは175センチと記録されている」と、この書にかかっていると示してくれた。この本はまだ日本語訳はされていないという。日本の小谷部全一郎説の反論者は「ジンギスカンは大男であったから、義経でない」という根拠は、ここでジャモンハの後裔によって、チンギス・ハーンは身長165センチと研究書で証明してくれたので、この図書により筆者も研究書に従いたい。



左の写真・ジャモンハ氏のキャンプ場（ホテル）の奥の丘陵がチンギス・ハーンの馬つなぎ記念木がある。中の写真・左側筆者・中央が通訳ガイドのアズザヤーさん・右側ジャモンハ後裔親父。右の写真はオノン河の流れ。（2008年7月）

独立前のモンゴルでは学校教育でチンギス・ハーンの話はタブーとされてきた。それはモンゴル帝国がロシア、東欧の国々やシベリアを永く奴隷化して諸国民を苦しめたからであると、ソ連邦は決め付けた。タタールの頸木^{モンゴルのくびき}と云い、牛頸に固定する木・奴隷として国民を使役した極悪の帝王とされ、ソ連邦時代チンギス・ハーンを評価しないように国策とされていた。1992年モンゴルは独立を勝ち取り、モンゴル国民の魂の原点が爆発したように、空港、ホテル、お札、首都の広場にチンギス・ハーン像が溢れだした。

5 チンギス・ハーンの泉 ヘンティ県ダダル・ロシア国境の町

ウランバートルから585 km、ビンデルの町から北東へ約150 km、ダダルの町はチンギス・ハーンの史跡がある。町から少し離れた丘にデリウン・ボルダグで、丘の頂には石碑が建てられ、オボーが作られ信仰を集めている。丘の麓にチンギス・ハーンが産湯につかったとされる泉がある。ステップ（草原）走り抜けて、この地域に入ると突然に森林地帯の村になり、ダダルの地方は雨量あるので松科の森林となる。

6 デリウン・ボルダグ（^{ひそう}脾臓の丘） ヘンティ県ダダル

『モンゴル秘史』でこの「デウリン・ボルダグ」というところで、チンギス・ハーンが誕生したと書かれている。そのため多くの研究者はこの「脾臓の丘」探している。ここはチンギスの誕生地とされている1つの聖地である。日本とモンゴル両国の研究者によってチンギス・ハーンの誕生地であることを、割り出した所である。眺望は日本の高館の衣川を思わせるオノン河の流れが有り、不思議と平泉の高館の風景を彷彿とさせる。産湯をつかったとされるチンギス・ハーンの泉と、衣川を想わせるオノン河の風景は、何故か大陸に渡った源義経＝ジンギスカン伝説を描きたてる。チンギス誕生の聖地デリウン・ボルダグと、ダダルの前項で述べたビンデルのチンギス・ハーン馬つなぎの地も誕生地とされている2ヶ所は、どちらもモンゴル政府は発掘の許可を出していない。



チンギス・ハーンの泉



デリウン・ボルダグ



ボルダグの丘・衣川と高館
の風景を彷彿させる

7 チンギス・ハーン誕生記念碑 ヘンティ県ダダル

高さ10mのチンギスの誕生記念碑、「この身ははてるとも我が国は永遠なり」とウイグル語で書かれている。1962年、ソ連邦時代に作られソ連色が強い政治状況で、学者、政治家は親ソ政権に粛清された。この記念碑は森の中にあつたため、撤去しましたと報告して、難を逃れた記念碑であるという。92年、独立後国民愛国心のシンボルとなる。

余話・ボードクという料理 写真下・ボードク料理。タルバガン（リス科）地面からかわいい顔出すあの地リスを、お腹の中へ焚き火で焼いた小石をいれて、中より焼き石蒸しにし、岩塩と山ねぎを入れて30分ぐらいで、鍋鎌使わずナイフとライターで、遊牧民の蒸し焼き肉料理を作ってしまう。やはり農耕民と発想が違う。ボードク料理は太古よりモ

ンゴルに伝わる野外料理あり、羊やヤギの体から内臓と骨を皮に傷つけないように抜き、皮袋に焼いた石をいれ、皮毛は火であぶってとってしまう。肉味はと聞かれれば舌感覚が肉を味分ける^{したちから}舌力とでも言おうか、遠い昔に忘れてしまった米食民族であることを強く感じる。彼等の表情は日本人の言うところのウニ、カニを食べて「しあわせ」の顔の表情である。彼らは野菜をまず食べない肉食生活を長い歴史を経ている。モンゴルの草原を走ってまず畑を見ることはない。（日本人観光客は「何故、畑をつくらないの」との質問が多くあると言う）もし義経がこの地へやってきたら、米と野菜食民である義経の体質は肉食生活に耐えられるであろうか、その点気になっていたのも、村の売店を覗くと野菜類は無く、ほんの少し中国産のジャガイモと玉ねぎが置いてあった。彼等の日々の生活を垣間見た次第である。筆者は肉食中心の生活スタイルをアズザヤーさんに聞いた。

「親戚や仲間が集まる宴席では、肉料理ばかりですか」「はい、肉料理ばかりです。5畜（羊、ヤギ、牛、馬、ラクダ）を入れ替わりに出て、宴の終りまで肉料理です」又「ポーズという餃子に似た肉饅頭もあります」と言われた。

この国の人々は、朝からでも肉の食欲あるらしい。5畜は草原の草をたくさん食べているから、その肉を食べれば野菜は要らないという話なしなのでしょうが・・・。なにか、人類発祥の元のところで、農耕民と遊牧民の違いを感じてしまう。チンギスの時代、戦場に向う時は、夏期に生肉をひも状に切り乾燥させ、その一切れが1日の携帯食とした。軽量の乾燥の干し肉を馬に付けて、遠い国へ戦いを挑み大帝国を討ち立てた。その後裔たちが今、日本の国技大相撲に挑んでいる。精神文化を別にして遊牧民の若者の肉体と肉力は相撲には合い、騎馬民族達の若者の平行バランスの良さは農耕民族を凌いでいる。国外に出て勇者になることを、蒙古民族がチンギス・ハーン以来持つ血の湧き立つような最高の誉れである文化を強く持っている。



チンギス誕生記念碑



トヨタの四駆でオノン渡る



焼石を入れるボードク料理

8 アウラガ遺跡 ウランバートルより東に250km

2004年、今世紀の大発見と言われた所。中国の史料からアウラガ遺跡にチンギス・ハーンの夏の宮殿「大オールド」があった所として突き止めたのは、新潟大学の白石先生を中心とした日蒙合同発掘隊である。TVでもしばしば放映された。霊廟^{れいびょう}跡は25^{ねん}の角

台の上に11^{メートル}の^{きだん}基壇で、基壇の周囲は馬、羊などの骨が多数見つっている。チンギス・ハーンの死後、5畜の肉を焼いて「^{しょうはん}焼飯」の儀式が行われたと断定した。焼飯の儀式が確認されたことでチンギス・ハーンの^{れいびょう}霊廟（チンギス・ハーンを供養した所）と確定した。出土品は13世紀が多く、ここは国際貿易中継都市となっていたようだ。アウラガ遺跡資料館には出土品やチンギス・ハーンに関連するものが展示している。

9 チンギス・ハーンの^{りょうぼ}陵墓について

アウラガ遺跡の3から5^{キロ}以内にチンギスの陵墓があるとされているが、現段階ではチンギス・ハーンの墓は発見に至っていない。チンギス・ハーン馬つなぎの丘や、チンギス・ハーンの泉でも述べたように、研究者たちは誕生地＝陵墓とみている。従ってこの周辺地が陵墓の可能性が高いとされている。チンギス・ハーンの墓について聞くと、

「伝承では、チンギスの埋めた場所は、チンギスの最高重臣4人が埋葬にあたり、埋葬後、たずさわった人々は全員殺されたので、その正確な場所は解らない。伝わる話として近親者はそのチンギス・ハーンの埋葬地へラクダの親子を連れて行き、その場所で子ラクダを殺しその場に埋める。親ラクダはその場所を覚えていて近親者は親ラクダを連れて子ラクダの埋めた場所に案内してもらい、ハーンの埋葬地へ行き着くことができた。これを何代か繰り返しているうちにその場所が解らなくなってしまった」と説明してくれた。草原の民は古来よりラクダの方向感覚を利用してきた。

現在でもモンゴルの道路は都市を離れると道路は無くなり草原を走る。郊外の道は、誰かが車のワダチ跡をつければ、そのワダチ跡を次の車が目印で走るそれが道路、目標物が無く何処まで行っても同じ風景の海のような草原、ドライバーは草原の1軒家を見つけて「道の方向」を聞いて、やがて目的地に着く。日本人から見ると何を草原の目印して走るのか想像すらできない。



発掘中のアウラガ遺跡



ハーンを供養した基壇跡・資料館資料より

10 伝説義経の墓・小谷部の写真について

下記の亀石写真は小谷部全一郎の『成吉思汗ハ源義経也』からの出典であるが、「伝・義経の墓」とも述べている。下の右写真はモンゴル・カラコルム（現ハラホリン）都城跡にある^{きつ}亀跡の写真である。小谷部の写真との関連は解らないがモンゴル時代に作られた同

類の亀趺と思われる。「^{スウチヤン}雙城子と義將軍の古碑」で小谷部は次のように叙述している。

「雙城子の市邑に土俗の所謂義將軍の古碑と稱するものあり土人はこれを日本の武將の碑とも或は支那の將軍の碑とも傳ふ。居留日本人は一般にこれを義經の碑と稱し^{しこう}而して其の建てられたる市の公園を我が居留民は現に之を義經公園と呼びて有名なるものなり。

(略)此の古碑に對して居留日本人は義經公の碑として敬意をは拂ひ、土着の支那人其他の亜細亞民族も古来の習慣を墨守して敬禮し、露西亞人も必ず脱帽して敬意を表するは^{いとく}懿德廣大なりし古名將の^{おもかげ}倂を不言の^{うち}裡に^{しの}偲ぶるゝなり」と述べている。

義經の墓とされる写真は、小谷部の見たニコリスク市(旧名雙城子)の^{かめいし}亀石を筆者は見えていないので不正確であるが、この亀石はモンゴル時代であることは確かである。正確にはチンギスの息子オゴタイ・ハーンの時代と云われる。この亀石の上には碑文があつたのを「ロシア国がハバロフスクの博物館へ移してしまった」といい、その碑文については「石碑の表面には厚くセメントの^{しつくい}漆喰を塗り、何物か彫刻しあるものを^{いんぺい}陰蔽せり。拙者の友人は碑面の漆喰を打ち壊して碑文を見んと欲し、その着手中、巡警来りて之れを制止せり」と。ロシア国は日本人に見せたら、ロシアにとって不都合なことが生じるから研究させないと小谷部は述べている。(清朝時代=^{スウチヤン}雙城子・ニコリスク=現ウスリースク市)

余話・^{きろ}亀趺について 亀の形をした石碑の台石こと。中国での伝説上の生物とされ、^{りゅうじん}竜神が9頭の子竜を生み、その1頭が亀に似たのが「^{ひいき}鼉肩」(鼉屬・ひき・びき)という。重きを背負うことを得意として碑の裝飾台となる。亀ではなく竜であるという。

『大漢和辞典』に^{ひいき}鼉肩(屬)は^{おおがめ}鼉。又、雌の^{めす}鼉(雌鼉)、一説に大きい^{かめ}龜とある。^{おおうみがめ}鼉 = おおうみがめ・想像上の大亀。海中にあり、背に^{ほうらい}蓬萊(不老不死の靈山)、^{えいしゅう}瀛洲(東海の神仙)、方壺の三仙山を負うという。^{ガウザン}鼉山 = 大きな海亀が戴いているという海中の山、神仙の棲む所。とある。辞典『字統』に「^{ひいき}鼉肩」= 貝は子安貝・宝物・財物、激しい勢いを示す語。肩 = ^し戸は人の形、財を荷う意。「ひいき」は力を^{おこ}作す・好む者に肩入れする意となる。「鼉肩の引き倒し」は、鼉肩(台石)を引っ張りすぎると碑石が倒れる事からくる説もある。



左の写真は小矢部が西シベリア・ニコリクスで義經の墓と云われる亀趺を撮ったもの。出典は『成吉思汗ハ源義経也』より。右の亀趺は西モンゴル・ハラホリンのもの・2代皇帝オゴタイがカラコルム都づくり12の寺院がある。

ガイドに亀石（花崗岩）のことを聞くと、「モンゴル人は亀を長生きの動物（海の神様）として尊敬し、カラコルムに昔は4つあったそうです。カラコルム盆地が山からの水が流れてこないように四方向に亀趺を置いて祈願したと伝えられている。」との説明を受けた。マルコポーロもこの亀趺をみている。

11 チンギス・ハーン生い立ちの概略

チンギス・ハーンは青年期をテムジンといい、現在のモンゴル国のシベリア国境に近いオノン河の溪谷で生まれた。誕生には1162年説・1155年説等がある。テムジン誕生に、右手に血の塊^{かたま}りを握りしめて生まれ、「眼に火あり、顔に光あり」といわれる吉相で誕生という有名な逸話は『集史』『元史』『元朝秘史』に記述されている。この「血の塊^{かたま}りを握って生まれる」という伝承は仏教經典の『アショカ王』の中の逸話と関係があるという。この話は北アジアにあるアニミズムと天神と精霊による、生命の源の信仰が「世界を征服する強大な王者の前兆」と考える思想（サマン^{おとこみこ}＝男巫・ゾロアスター教・マニ教・仏教の影響を受ける）が存在していたと云われている。

テムジンはやがて北アジアの遊牧民族を統一して、1206年にその民族部族長の推戴によって、チンギス・ハーンの称号を名乗った。チンギス・ハーンは周辺の国々へ征服の軍隊を送りつけ、モンゴル軍は東方中国の黄河の北岸まで、南方はパキスタンのインダス河まで、西方はウクライナのドニェプル河の東岸までを征服した。1207年、西夏に侵攻、1211年、金に侵攻し領土とした。

モンゴル軍の残虐な行為の真相は、まず中央アジアの国々の都市に降伏を要求し、降伏をして開城した都市住民は、掠奪を受けたが生命は助けた。城門を閉ざし、抵抗した都市住民はことごとく虐殺された。しかし、何処の都市においても、鍛冶職人、工芸職人、紙すき職人など、生活に必要な職人は、財宝とともに貴族や将校兵士に分配された。捕虜は兵役に使い、身代金を払える者は都市に帰ることを許された。大虐殺の記録は、虐殺を誇大に伝えたのは、侵攻する国々を脅すための戦略として宣伝したことが多いと云う。またイスラムの国々が虐殺人数を多大に報告したことによるらしい。イスラムの王国は話し合い外交で生存を希望したが、チンギス・ハーンはこれを全く無視をしたという。

1227年、チンギス・ハーンは現在の^{ねいかかいぞく}寧夏回族自治区において、タングト族の^{せいしか}西夏王国を滅ぼした後、同自治区の南端、^{かんしゅうしやう}甘肅省の六盤山の山中で没した。（66歳説・73歳説がある）遺骸は故郷のケンテイ山中のキレン谷という所に葬られた。墓には盛り塚も、碑石もなく、埋葬が終わると馬に土を踏ませ、やがて元の自然にかえり、埋葬場所が何処にあるのか誰にもわからなくなった。父チンギスの死の7年後、3男オゴテイが皇帝となり、さらにヨーロッパ、ロシアに攻め入り、モンゴル軍の残忍攻略を宣伝し、各国の侵略を容易にした。チンギス・ハーンの子孫はアジアから東ヨーロッパまで広がり、東方

の世界と西方の世界を結びつけた。13世紀を境に世界は新しい時代を迎え、その扉を開いた人物がチンギスの部族であった。モンゴル帝国は時代が下がるにしたがって分裂し現在のモンゴルを始め、カザフ、トルコ、イラン、アラブ諸国、継承政権であり、中国もロシアもインドも入るのである。

チンギス・ハーンの公式の伝記を編纂した代表的なもの3書を見る。

『**集史**』(ペルシア語『ジャーミア・ウッタワーリーフ』歴史を集めた書史)チンギス・ハーンの孫でイランに建国したイル・ハーン国を建てたフレグの曾孫、第7代ガザン・ハーンが1302年にユダヤ人ラシード・ウッディーンに命じて編纂したもの。ガザン・ハーンの没1307年に完成し、弟オルジェイト・ハーンに献呈された。モンゴル史の史料性は高い。モンゴル帝国の成り立ち、祖先の業績に詳しく書かれている。遠い祖国にすべての部族や氏族の子孫が暮している伝承を記録のあるモンゴル史書となる。

『**元史**』は中国の正史の1つで、元朝最後皇帝・順帝が大都(北京)から、1368年モンゴルに退却した翌年に編纂されたもの。中国では王朝が交代するとき、前王朝の正史を編纂する歴史の伝統がある。急いで編纂されたようで、13世紀後半に書かれた『聖武親征録』(チンギス・ハーンの戦争の記録)、チンギスの没60年後、孫のフビライ・ハーンが編纂した『太祖実録』から太祖チンギス・ハーンなどの原本から写されたと考えられている。(『元史』は明の洪武帝が編纂を命じたもので、夷狄の王朝を早く過去の存在にするために1年半の早さで完成した)「元朝」の創始者フビライは1271年に金の中都ちゅうとであった燕京えんけい(北京)入り「大元」という漢字名の国家称号とした。中都是大都(北京)と命名し、元朝の首都になった。フビライは金の中都であった燕京城を周囲33キロメートルの大都城にした。フビライは1年のうち冬季の3ヶ月間、燕京の温暖都で過ごしたと伝える。

『**元朝秘史**』モンゴル語の題は『モンゴルン・ニウチャ・トブチャアン』『モンゴルの秘史』の題名であるがモンゴル文字の原本(ウイグル文字)は残されていない。(13世紀中頃)現存するものは12巻。『元朝秘史』は原典のモンゴル語を漢字で音写し、中国語で訳を付けたものである。内容はチンギス・ハーンの祖先からはじまってチンギス・ハーンの即位までが書いてある。しかし、歴史的資料にかけているといわれる。内容の描写は当時の草原の遊牧生活や風俗の様子をよく伝えている。明朝の洪武帝がモンゴル語の通訳官の養成教科書として使用していたらしく、原文のモンゴル語を漢字で音訳させ、その一語一語に中国語の直訳をつけ、原文の一節ごとに意識文をつけて作られたものが残されている。

蒼き狼 チンギス・ハーンさかのぼの先祖を遡ると、チンギス・ハーンより150年前まで祖先たちを辿ることができる。それ以前の系譜は空想といわれる。その祖先伝説として「蒼

き狼」の神話について、『元朝秘史』第1巻の一節に、「高き天の^{きだめ}定命を受けて生まれたボルテ・チノがあった。その妻のホワイ・マラルがあった。海を渡って来た。オノン河の源のブルハン・ハルドン（山）に遊牧して、生まれたバタチハンがあった。」（バタチハン
はボルテ・チノとホワイ・マラルの子。最初の王）モンゴル語で、チノは「狼」マラルは「^{めじか}牝鹿」の意で、狼と牝鹿が結婚した。その夫妻が「海」を渡ってモンゴル高原に来た。（海はバイカル湖）そして夫妻が住んだ、ブルハン・ハルドン山とは、オノン河の流れでるケンテイ山脈の山で、チンギス・ハーンの故郷である。ホワイ・マラルのホワイは動物の黄毛をホワといい、ホワイは女性形、ホワイ・マラルは「黄色い牝鹿」という名前になる。これにたいしボルテ・チノは『元朝秘史』の原文には「蒼色の狼」という中国語訳がつけてある。このため1906年（明治39年）に日本語訳して『成吉思汗実録』として翻訳した^{なかにちよ}那珂通世（1851—1908・慶応義塾）はこのボルテ・チノを「蒼き狼」と訳した。日本ではチンギス・ハーンを「蒼き狼の子孫」と呼ばれるが、モンゴル語で「ボルテ」は「^{はんてん}斑点のある」意味で、ボルテ・チノは「^{まだら}斑の狼」となる。斑は灰色の狼、即ち「まだら狼」となる。又、「成吉思汗」は漢字を音写したもので、日本語の「ジンギスカン」は英語の「ジエンギス・カン」からくる、モンゴル語は「チンギス」、トルコ語は「チンギズ」よってモンゴル語に近い発音は「チンギス・ハーン」となる。チンギス・ハーン自身中国語も漢字も知らなかったから音写の漢字表示は認識していないことになる。

匈奴の風土 遊牧民は蓄財ができない経済システムだから「財」が必要な時は、村々から兵馬を^つ募り稼ぎだせばよいと考える遊牧各民族単位である。^{しばせん}司馬遷『史記』の「匈奴列伝」を現代文でつづれば次のようになる。「匈奴は北の蛮地に居住し、畜類を牧するために移り住む。その家畜のうちで多いものは馬・牛・羊である。水と草を求めて移動してくらす。文字はなく口頭で約束、子供は上手に羊に乗り、弓を引いて鳥や^{ねずみ}鼠を射る。大人の男で弓を引き絞る力のある者は、みな甲冑を付けて騎兵となる。一旦急変ある時は、1人1人が戦士になって戦争にでかける。勝と見れば進み、不利と見れば退き、^{とんそう}遁走を恥としない。壮年で力強い者を尊敬し、老いて弱い者を軽蔑する、父が死ねば、息子は継母と結婚する。兄弟が死ねばみなその^{かふ}寡婦と結婚する。その習慣として^{いみな}諱の習慣はなく、姓も字もない。」（現在でも姓はない）と。モンゴル民族に馬の格言が、「馬と離れて、モンゴル人に何ができるのか」「馬から落ちた者は、どうして闘いができるのか」人馬一体の遊牧生活を伝える。

12 『元朝秘史』に出てくる^{くろてん}黒貂の毛皮のこと

蝦夷アイヌの北方交易の頁で黒貂の毛皮のことで述べたが、黒貂の毛皮の会話が出てくる『元朝秘史』場面をみてみよう。草創期の話。テムジンの妻ボルテがメルキト部族に奪

われてわれしまった。テムジン^{てん}はオン・ハーンのキャンプに急行し協力をたのんだ。

《 オン・ハーンは、「おまえの父親からもらった貂^{てん}の毛皮のお礼に、散り散りになりたるお前の仲間を集めてやろう。黒貂^{くろてん}の毛皮の返礼に離れ離れなりたるおまえの仲間を集めてやろう。「秘密は胸にこそあれ 肝臓は腰にこそあれ」と言うだろう、黒貂^{くろてん}の毛皮のお礼に、（略）」オン・ハーンはジャモンハに命じて2万の援軍を出し、テムジンの妻ボルテを救いだすことに成功した。その場面、テムジンはメルキト部族の敗走兵のなかを「ボルテ、ボルテ」と妻の名をよびながら探し走る。月明かりの中にボルテ夫人を探しだし、2人は手を差し伸べて抱擁する若き戦士と妻2人の姿が草原の月明かりに浮かぶ。》英雄叙事詩である。テムジンの父がオン・ハーンに贈った「黒貂^{くろてん}の毛皮」は、もしかしたら北海道アイヌ民が狩ったテンの毛皮を、樺太アイヌ民骨鬼^{かとい}を經由してアムール河口を旅してやってきた毛皮かもしれない。獣皮がいかに高価であることが判る。

13 もう一つのジンギスカン伝説・元使塚^{げんしつか}（神奈川県藤沢市片瀬^{かたせ}・常立寺^{じょうりゅうじ}）

13世紀後期、元朝皇帝の国使としてやって来た「元の国使」5名が斬首された「墓」が、神奈川県藤沢市片瀬の常立寺にある。この時代、蒙古軍は欧州ハンガリー、ポーランド、南部ロシアまで領有し、アジアの侵略を免れていたのは、インド、宋国の一部と日本だけであった。元朝は文永4年(1267)に高麗国の使者に牒状^{ちようじよう}を持って来朝し、続いて文永6年、同8年、同9年と度々使者を派遣してきた。北条幕府の無視に文永11年(1274)10月、元軍3万の兵が9百余艘軍船をもって壱岐・対馬・博多に来襲、日本で言うところの蒙古大襲来(元寇)である。翌建治元年(1275)フビライは降伏か戦いか、恫喝の国書を持って杜世忠^{とせいちゆう}一行5名が、元の国使として長門室津に上陸した。執権北条時宗は蘭溪道隆^{らんげい どうりゆう}(宋国人)や、同国の無学祖先に元国情報を分析し、この状態に於いても日本側の回答をしなかった。執権時宗は西国の警備を命じ、元使5名を鎌倉に呼び寄せ8月に北条幕府は鎌倉腰越浦龍口寺前の竈^{たき}の口刑場にて斬首した。

郷土史『わが住む里』によれば《735年前、(建治元年・1274)、元朝の国使として杜世忠^{とせいちゆう}(モンゴル人他)5名が博多から鎌倉へ送られて来た。国使たちは北条時宗将軍に謁見が許され、国書の取り交わしが成立すると期待していたらしい。5基の小輪塔は春風秋風、数百年の間ほとんど不祀の鬼に化さんばかりに顧みられなかったが、大正14年9月、元使杜世忠ら5名の幽鬼を弔慰^{ちゆうゐ}し、併せて文永・弘安役殉難の英霊を慰めた。大供養塔や香炉は「元使塚」650年を記念して造ったものである。》(『わが住む里』第39号・藤沢市中央図書館蔵より)

杜世忠^{とせいちゆう}の辞世^{じせい}を読み下し文をみる。

「大命を拝して故国を出発の折、あれほどまでに妻子から、成功栄達を望むの余り、帰

国の時宜^{ときぎ}を失わず、恙^{つが}なく帰国してくれるようにいわれてきたのに、今われらは事志と相違し異国の地に果てねばならなくなってしまう」と無念^{むねん}気持ちを綴^{つづ}っている。

考えてみると730年後の平成の世で、初めてモンゴルの方々へ伝える辞世の言葉でもあったのである。祖国の妻子への情愛と異国の地で果てる若き元国使の無念の思いが今日でも伝わってくる。

平成17年、大相撲の朝青龍、白鵬がモンゴルの力士たちが参拝した。同19年にモンゴル国大統領、エンフバヤル夫妻も参拝した。大統領夫妻は、「長年供養していただきましてありがとうございます。」と住職に感謝の気持ちを伝えたそうです。モンゴル国に於いては、モンゴル帝国時代の記念碑や墓など皆無でそのモンゴル帝国のあかしが日本の国に有るというのも日本人から見ると不思議な観がある。

5名の年齢をみると、元宣論日本使^{せんゆん にほんし}・礼部侍郎杜世忠^{らいぶじろうとせいちゆう} 34歳・モンゴル人。兵部郎中^{へいぶろうちゆう}・何文著^{かぶんちよ} 38歳・唐人。
撤都魯丁^{サンドロ・ウッドイン}・イスラム人32歳。国人果32歳・唐人。
通訳・徐賛32歳・高麗人と伝わる。

(宣論日本使は元帝の意思を日本に論ず使臣。兵部郎中は兵部の属官。『高麗史』「日本伝」より)



元使塚前・アズザヤーさん
2009年来日時に案内する

第9章 義経 = ジンギスカン伝説考 10話

1 義経北行伝説

岩手県観光連盟は「悲劇の名将と世にうたわれた九郎判官義経は、兄の頼朝に追われ、文治五年四月、平泉の高館において31歳を一期^{いちご}として自刃したが、短くも華麗だったその生涯を想い、後世の人々は義経に、その1年前に密かに平泉を脱出、北をめざして旅に出たという伝説を作りあげたのである。世にいう「判官びいき」であろう。と、この解説で青森県も同様に各伝承地を紹介している。

第1章から6章までは義経の関連事跡として探聞してきたが、第7章から「義経北行伝説」として岩手県、青森県、北海道道南あたりまで1本線で北走が結ばれて行く。伝説物語は津軽半島の三厩あたりが終点であったものが、江戸時代の初期から藩も民衆も蝦夷地に関心が高まり、蝦夷地の義経伝説へと広がって行くのである。義経は平泉から7年の歳月を経て蝦夷地に入ったと伝えられている。そしてさらに大陸へ渡った伝説が成り立って行く。

寛永15年(1638)俳諧の式目作法の書『毛吹草』^{けふきぐさ}のなかに、「世や花に判官びいき 春の風」作者不詳の句があり、江戸初期すでに「判官鼻貞・ほうがんびいき」^{びいき}が世の中に1人歩きをしていたことが分かる。寛永年間(1624 - 44)読本の浄瑠璃^{じょうるり}、歌舞伎、謡曲などに取り入れられて行き、民衆の判官びいきは、義経不死伝説となり、平泉を脱出して北走、蝦夷地へ渡ったという伝説が成立していった。

人々はこの世の日々の生活に「楽しく生きようや、ほうがんさんが出てこなければ、つまらねえだろう」と元気の応援歌でもあった訳である。田舎芝居で「なんでもいから、早くほうがんを出せ」という掛け声がよくあったと聞く。義経は庶民にとって何時の時代もヒーローなのである。判官とは一の谷で平家を敗^{やぶ}った功により後白河法皇から左衛門少尉^{さゑもん}検非違使^{けんびいし}に叙任^{じょにん}され、この役職のことを「判官」ともいったので「九郎判官」と言われた。

義経伝説は室町期から『義経記』^{ぎけいき}がもてはやされ一種の貴種流離譚^{きしゅりゅうりたん}として奥州で藤原泰衡に敗れた後は北国へ逃亡したという話が流布^{りゅうぷ}していた。又、同時期の義経が蝦夷へ千島に渡ったする『御曹司島渡』^{おんざうし}、これらが結び付いて「入夷伝説」が生まれ、幕府が寛文10年(1670)に成立した『本朝通鑑』^{ほんちょうつうがん}(江戸前期の歴史書・全編3巻・正編40巻・続編230巻)その中の続編巻79に、俗伝として一行「俗伝又曰。衣河之役義経不死逃到蝦夷島存其遺種・衣川の役、義経死せず、逃れて蝦夷地に至り、其の種残す」とある。義経は平泉で死なずに蝦夷に渡ったとする説が初出となる。

義経主従が蝦夷入りを語られ始めたのは、徳川御三家で石高の少ない水戸藩が、蝦夷地を取り込んで北方交易や農地開拓などで水戸藩の経済力を高めたい希望が強くあり、どうやらこの辺が北海道義経伝説の発信元のようなのである。もちろん下地には松前藩のアイヌ政

策による「オキクルミは義経である」との歴史経緯があるが、水戸藩は蝦夷地に対する関心は強く持っていたらしく、徳川光圀の命によって建造された海風丸は、蝦夷探検の航海技術の高さからも入植したい願望が窺える。徳川斉昭もロシアの勢力が南下することにより、蝦夷警備の重要性や蝦夷開拓の計画書を幕府に進言したが、幕府は水戸藩だけに東蝦夷地入植させることに難色を示していたようだ。水戸藩には択捉島えとろふとうに「大日本恵登呂府」の標柱を建てた木村謙次や樺太探検をした間宮林蔵がいる。寛政10年(1798)幕府は蝦夷地探検を実施そのなかに木村謙次47歳、近藤重蔵28歳がいて、総勢80人の隊員が組織され蝦夷へ赴むている。

蝦夷地探検家、松浦武四郎は松前藩から蝦夷地調査に何度も妨害を受けていたが、水戸藩士の藤田東湖とうこらとの接触によって、蝦夷地調査行動の援護をうけている。当時、水戸藩は蝦夷地の秘密情報を松浦から受け取り、見返りとして松浦の蝦夷地の行動に水戸藩の威を借りて行動した。お互いにその思惑が一致して武四郎が松前藩の嫌がらせにもめげず、蝦夷地調査結果を世に公表できたことは、水戸藩の力強い後押しがあったと云われる。水戸藩が蝦夷地に強い関心を持った時代、帝政ロシアの海軍が極東の海域を南下することによる北方の防衛不安が、世の中は蝦夷地に関心を持つことに繋がり、漂流民の伝聞やシャクシャインの乱などが義経伝説の引き金になっていく。これらの背景には、幕府は帝政ロシアの南下による国後・エトロフ島の襲撃問題も放っておかず、北海道に住むアイヌ民を日本国民とし内外に承認させる、即ちアイヌ民が住む所は「幕府＝日本国の領土」となるわけである。オキクルミ＝義経と同一視に勘案したことは、徳川光圀や新井白石は入植・北方交易まで政治的に視野に入れていたかと思われる。

『北夷談』松田傳次郎の記述にあるように、アイヌと山丹人の諸問題を幕府は解決するように立ち回っている。それは樺太南部に樺太アイヌと蝦夷アイヌが混在して住んでいたため、宗谷海峡をはさんで日本国領土として保全を確立することに注がれていた。江戸中期以後になると、北海道海産物は西国・関西方面など国内取引に留まらず、博多から外国輸出品となって、特に中国方面が盛んなる。交易は庶民文化の交流をもたらし、義経伝説を先走りした『鎌倉実記』(1717)や『金史別本』に「日本ノ源義行ト云モノ金国へ渡リタル。義行ノ名ハモト義経ノ訓云々」とあり、江戸時代初期には沢田源内が『金史別本』の日本語訳を世に出して清の乾隆帝けんりゅうてい 清朝第6代皇帝の時代に編纂された『欽定古今圖書集成』の『国書輯勘録』こくしよしゅうかんろく 皇帝の序に「朕ノ姓ハ源義経ノ裔、其ノ先ハ清和ニ出ズル。故ニ清国ト号スル」と書かれていると世に説いた。後『金史別本』も『国書輯勘録』も偽書であることが判るが、しかし判官びいきはなおも発展するのである。

2 親子シーボルトによる義経伝説の研究

1823年に来日したドイツ人医学者シーボルト(1796—1866・オランダ商館医・

フィリップ・フランツ・フォン・シーボルトを大シーボルト呼ぶ) が7年にわたる滞在中に日本の地理・歴史・宗教・言語・政治・経済にいたる広範囲な研究を進めて『日本』を欧州で発表した。シーボルトが日本研究の座右の書としたのは、寛政9年(1797)に刊行された浅野高蔵著『和漢年契』^{わかんねんけい}から中国史に関する年表部分を省略して、ドイツ語訳された日本歴史年表である。(オーストリア国立図書館蔵) 正式な題名は、J・ホフマン博士訳『和漢年契もしくは日本歴史年表、征服者で初代の天皇神武から最近の時代に至るまで「西暦紀元前667年から西暦紀元1822年まで」』訳編である。この訳編の義経の部分をシーボルト『日本』(雄松堂書店)一卷「日本人による自国領土およびその近隣諸国・保護国の発見史の概観」の部分は、

《泰衡によって奥州から追われた義経は文治5年4月自殺した。この事件は『日本紀』にも詳述してある。ところが伝説によると彼は、現在なお支配する將軍家の創立者であり、当時権勢をふるった頼朝の追跡を幸運にもかわして蝦夷へ逃れたという。この見解は今でもなお非党派的な歴史家が持っており、また長らく幕府の下で生活したことのある友人の学者吉雄^{よしお}忠次郎も次のような確固たる発言をしている。すなわち、義経自殺のうわさは、頼朝を安心させ、また頼朝の反対派の武装を解除するために広められ、国の年代記に記入されたのである。さらに彼は義経が蝦夷から韃靼へ渡り、元朝の租となったと確信している。泰衡は義経を殺すようにと2回目の命令を受けたので、義経を生かしておくためには自分の首を賭けなければならなかった。彼はこの危険人物を捕えることができなくなると、義経自殺の噂を広めようと務めたのである。この点でも、義経割腹ということは作り話と見なされよう。義経の蝦夷脱出のうわさは見落すことのできない重要事項である。》と記述している。更にシーボルトは新井白石の『蝦夷志』を例に引いて、又、坂倉源次郎『北海随筆』などを引用して義経伝説の信憑性の説明をしている。

父親シーボルトを「大シーボルト」と呼び、シーボルトの子息(次男)ハインリッヒ・フォン・シーボルトを「小シーボルト」(1854 - 1908)と呼ぶ。小シーボルトは父の日本研究をさらに進めるために、平取アイヌ集落に寝泊りを共して、アイヌ文化を研究、繊細な観察と図版を残している。その一部に義経伝承を『小シーボルト蝦夷見聞記』の中で次のように記述を要約でみる。

《 義経はアイヌに「オキクルミ」、つまり「勇敢な男」と呼ばれ「クルミカムイ」すなわち「神のような男」とも呼ばれる。義経はアイヌに船の建造や農業と弓術を教えた。アイヌは義経への恩義を忘れず、「オキクルミ」とか「オキ」という言葉を発するまえに誰も絶対に「酒」を飲むことはしない。アイヌにとって義経は「チュプカムイ」、「日の霊」によって遣わされた人なのである。日本の著叙述家は、義経が蒙古まで足を伸ばしたということの証拠として、「韃靼の海岸に漂着し、元禄16年(1703)に帰国した日本人が北京の朝廷(政治を司る所)で義経の肖像を見たというが、それはチンギス・ハンの肖像

であることが指摘された。（略） 」と主張している。

父親大シーボルトは新井白石の『蝦夷志』をマルテ・ブリューンの『地理および歴史に関する探検旅行記録集』の中で1814年パリ刊行のフランス語版で読んでいた。この書にオランダの長崎出島商館長を務めたティツチン(1745—1812)の訳で白石の『蝦夷志』と松宮観山の『蝦夷談筆記』と推定される『蝦夷記』とが収められている。又1779年の『東蒙史』や1662年の『蒙古源流』のドイツ語訳を読んでいる。結論から云えば「義経=ジンギスカン説」を流布させる大きな役割を果たしたのは大シーボルトで、彼によって義経不死伝説が概略成立していることが知れる。（『小シーボルト蝦夷見聞記』より）

そして、巷の人々は松浦静山著の『甲子夜話』、古川古松軒著の『東遊雑記』、『奥細道菅菰抄』、蓑笠庵梨一著などを読んでいて、通俗小説、永楽舎一水の『義経蝦夷軍談』では義経=ジンギスカン説が世に成立していて、義経が韃靼に渡りその子孫が清和源氏の一字を取って「清国」を建国したとする話が、当時の人々には「実」しやかに信じられていた。大シーボルトが文永2年、日本を去る頃は「義経=ジンギスカン説」は、一般人や教養人に信じられていたことは大変に興味深いことである。

余話・シーボルトが何故国外追放になるまで知りたがったものとは

シーボルトの『日本』（1巻、4巻、6巻、副題に「日本とその隣国、保護国一蝦夷・南千島列島・樺太・朝鮮・琉球諸島一の記録集。日本とヨーロッパの文書および自己の観察による。」）に目を通すと、先ずその博学と日本及び周辺国の膨大な情報量に驚かされる。ドイツ生まれ彼は、未知の鎖国日本へ行くためには唯一オランダ人にならなければならず、一案して親友オランダ軍医に、オランダ領東インド政庁へ軍医の職を斡旋してもらおう。（ドイツ国籍を移さずオランダ国軍務の許可を得、蘭領東インド陸軍軍医外少佐任命される）当時オランダは仏英国の軍事力に圧倒され、バタヴィア（インドネシア・ジャカルタ）と日本の出島が安全なオランダ国と云われた時代、オランダ政府の資金によって日本へ送られたシーボルトは、日本国のあらゆる収集した情報資料を「オランダ政府に帰属する」との契約を結んで日本へやって来ている。又、日本側に於いてもシーボルトは西洋を大表する最新の医学知識と技術を持ち合わせていた人物でもあった。（彼は母国ドイツで開業医をしていた）当時は漢方医学が主流であった日本に、シーボルトの蘭学と医学技術は画期的なものであったため、長崎奉行を動かして（蘭国の強い要望もあった）、出島の外にある鳴滝なるたきに私塾（鳴滝塾）を作り塾生を集め、7年間に高野長英など当時の日本に於ける第一級の門人蘭学者を集め、蘭学と医術を教えながら、塾生からはあらゆる日本の情報をレポートにして提出させていた。シーボルトは居ながらにして日本の総合的に資料を集め、特に植物の自生地・分布・栽培・学名など重点的に収集した。シーボルトは日本植物をもってヨーロッパ園芸種に「大改良した植物」を作りたい野心もあったと伝わる。

オランダ国からの重要な派遣任務は、衰退の植民地財源を回復させることで、シーボルトの能力を生かし、日本植物の収集から薬草植物の利用活用などを考えていた。特に「茶」の研究を重ね、日本茶で大きな国益を考えて、インドネシア、バタヴィア政庁の要求に彼は茶苗と種子を送っている。1回目の種子の栽培に失敗したが、2回目の文政8年(1825)ジャワ・バイテンゾルフ植物園に送った種子(嬉野・宇治・薩摩地方)は茶栽培に成功している。当時の茶苗移植技術では難問とされたが、2回目の種子は、ジャワ西部の高地にある植物園は気候風土が日本の種子産地と類似していたと云われている。彼は先人たちの失敗を検証して、蘭領東インド政庁の要請に、ヨーロッパ人で誰も成しえなかった日本茶の栽培に、初めてジャワで成功を修めた。(後、バタヴィヤで50万本の日本茶樹が栽培されたが、気候にあわずアッサム茶の紅茶に変わってゆく経緯となる)

シーボルトは植物収集に止まらず、伊能忠敬の「大日本沿海輿地全図」(日本全土と沿海実測録)等の国外へ持ち出す「シーボルト事件」がおこす。1826年、シーボルトは幕府天文方の高橋景保に伊能図を見せられ、その精巧さに驚き、シーボルトは伊能図を手に入れるため、景保が欲しがっていた「世界周航記」と縮尺の「大日本沿海輿地全図」を交換した。この事件は長崎から出航直前で発覚し、景保十数名らは投獄され景保は獄死した。伊能図の最大の魅力は、間宮林蔵が樺太及び黒竜江地方(アムール川下流・樺太)の紀行地の写生、地図を付けて『東鞆紀行』調査書を付けて幕府に納めた。それはヨーロッパの航海士が未知地域の東鞆海峽沿岸地図であった。シーボルトは間宮林蔵に鄭重な書面で親交の場を設け接近を企てたが、幕府を気遣う間宮林蔵はその申し出を断っている。シーボルトの北方への関心は強く、最上徳内の科学的蝦夷地測定を高く評価し、最上との面会した年齢はシーボルト31歳、最上は70歳を超えていたが、学術の意見の交換に研究者同士の親交をも深めている。最上はシーボルト事件には危うく難を免れている。したたかなシーボルトは1829年幕府による取調べ中に、吉雄忠次郎(義経不死説者)の計らいで、伊能図の縮尺地図の写しを数枚国外持ち出しに成功している。

3 末松謙澄(のりずみ・1855-1920)

福岡県生まれ、大庄家の4男。東京日日新聞社の記者、明治8年伊藤博文の知遇を得て外交官としてロンドンに赴任、ケンブリッジ大学に学ぶ。衆議院議員、逓信大臣、内務大臣など歴任した。ロンドン在学中に『源氏物語』を英訳した。この時代の欧州では日本という国は中国の一部であると思われていた時代、末松はなんとか欧州の人々に「日本」を知ってもらいたい一心で、英国人匿名で『偉大なる征服者ジンギスカンは、日本の英雄源義経と同一人物であった』という題名で刊行した。それは水戸藩の『大日本史』やシーボルトの『日本』などからヒントを得て、また末松の文才も兼ねた論文とした。"英国人が書いた論文"であると平然としていた末松謙澄という男は優れた外交センスの持ち主とい

える。おそらく日本外務省も裏で関係があると考えられるが、この時代の日本外交官の度胸は見上げた根性をしている。ロンドンでどのような評価を受けたか判らないが、ロンドンから史実論文として欧州で発表したことは、大変優れた政治家といえる。また帝政ロシア海軍の南下を遅らせることに貢献した義経論文は、日本にとって見事な外交力に繋げ、同37年日露戦争が始まると渡英し、イギリスの対日世論を有利に導くことに努め、又日露戦争時、日本の国債7億を米英のユダヤ系国際金融機関に買わせることに成功している。翌年日露戦争の勲功により公爵に叙せられている。

4 内田^{やほち}弥八 徳島県^{みよし}三好市井川町・『義経^{さいこうき}再興記』訳述者

万延2年(1861)井川村の庄家に生まれる。複雑な家庭環境の中で育ち、15歳で大阪のタバコ問屋に僕として住み込み、18歳の時、商家の計らいで東京の漢学を学ぶ。20歳で家督を継ぐことになったが、一族との意見が合わず2ヶ月で東京へ^{しゅつぽん}出奔する。故郷の友人、島尾岩太郎(慶応義塾生・『世界英傑傳』訳編者)の紹介で慶応義塾に入学。其の頃、英国匿名の末松謙澄の「義経=ジンギスカン」英論文が、義塾の福沢諭吉の所に廻ってきた。福沢は学生たちにこの英論文の訳文を進めたところ、3ヶ月後に仕上がったのは内田弥八一人であった。弥八は末松論文に更に自らの歴史知識と『大日本史』の「義経伝」や「源義経の末裔は清朝である」という義経伝承を入れながら編訳をした。福沢諭吉は「なかなかの良い編訳なので出版してはどうか」と進められ、福沢のお声かかりの出版社に推薦されたが、出版社は未知の作品なので売れ筋に不安があると云うので、弥八の費用負担増で刊行にこぎつけた。又、本の題名の筆を山岡鉄舟からもらっている。題筆をもらった経緯は掴めないが、山岡鉄舟が源義経にたいする思い入れがあったことが窺える。それは、静岡市清水区の鉄舟寺には実物の「義経の横笛」があり、横笛研究者によって復元し、現在でも義経の横笛はその「音色」を奏でているという。

明治18年、本の定価90銭、米1表73円の時代、幸運にも弥八は出版費用負担が多い分だけ大金を手にしていた。日本国は富国強兵と叫ばれた時代、大金を手にした弥八は明治21年、支那、シヤム、ジャワ、オーストラリアへ単身海外視察に出かけた。しかし2年後、旅の途中で結核病に犯され、帰国後懸命な療養ほどこされたが、30歳の若さで死去した。現在の三好市井川町にある弥八の顕彰碑は福沢諭吉の追悼文が刻まれている。

「素心大にして凡ならず、其支那印度に行くを聞き、実業上必ず大に成すあらむと期したりしに、不幸短命にして逝く。其人之為に悲しむのみならず国の為に之を惜しむ」と、福沢諭吉をはじめ広く見識人に弥八を将来に期待されていたことが知れる。

弥八の追悼会には千人が別れを惜しんだといわれ、当時、井川町の人々は内田弥八を国会議員の擁立に動いていた。地元見識ある人たちに「ゆうゆう当選しただろう」と惜しむ声が多々あったという。(『内田弥八の生涯』『内田弥八の手紙』井川町教育委員会資料

提供) (『義経再興記』復刻版は、『書物の王国⑩・義経』須永朝彦訳・国書刊行会)

5 おやべぜんいちろう 小谷部全一郎 『成吉思汗ハ源義経也』の著者(1867-1941)

慶応3年秋田県生まれ。横浜英語学校に学んだ後、明治21年、渡米。同28年、エール大学を卒業、組合派の牧師としてハワイの日系人教育に尽力。同31年に帰朝後、アイヌ保護運動に熱意を燃やし、翌年、北海道胆振国虻田いぶりこくあぶたのアイヌ部落に移住、同34年に虻田土人尋常小学校に、同38年には土人乙程実業学校を設立する。同42年、貴族院に請願した「土人保護の議」が通過し、土人学校が国営化されたのを機に北海道を引き払い帰京する。大正8年にシベリア出兵に陸軍通訳官として従軍する。同13年に初版『成吉思汗ハ源義経也』を出版、昭和4年、日本ユダヤ同祖論の古典『日本乃日本国民之起源』を上梓じょうし、同7年にはユダヤ問題について陸軍大臣に意見具申、上海のユダヤ人機関誌に執筆している。昭和16年、東京大井元芝町の自宅で死去。享年73歳。(『成吉思汗ハ義経也』復刻版・八幡書店。「義経伝説をつくった男」秋田魁新報連載記事・1993年2月15日-4月6日より)



末松謙澄・国史大辞典より



『内田弥八の生涯』



井川町・内田弥八顕彰碑

6 義経 = ジングスカン伝説の証明根拠

小谷部全一郎の「義経 = ジングスカン伝説の証明根拠」は、①古来よりアイヌは大陸と往来があり唐子アイヌの案内による。②ウラジオストクの近くに「ハンガン」という岬がある。③熱河省に「ヘイセン」の地名は「平泉」か。④成吉思汗の祖先に「ニロン」とは「ニホン」の転訛では。⑤成吉思汗の紋章は「笹りんどう」である。⑥「オボー祭」が京都鞍馬山と同じ8月15日にひらかれる。⑦「元」は「源」に通じる。⑧「カン」は義経の「守 = カミ」に通じる。などを根拠としている。

これに対して『中央史壇』第10号巻第2号・大正14年2月号で猛反撃を受けたが、史学者の反論は実地検証の不足から一般大衆への説得力は弱かった。痛烈に批判しているのは中島利一郎をはじめ歴史学、東洋史、言語学や文学博士18名で、比較的説得力ある金田一京助の論文「英雄不死伝説の見地から」を見てみる。

《 私はドクトルの旧知である。従ってこの問題に関してはすでに若干の意見の私的交

換はすんでいる。古くは『東亜之光』で、後にはある公開の講演に、最近では『中央史壇』の疑問の人物号に尽くしている。ゆえに一応お断りしたのである。けれども不幸にして容易にゆるされない。私の接した世評は2通りある。1つはその熱心な支持であり、1つはその痛烈な反対で仮借なく罵倒し去るものである。「伝説」はそれが人々に伝承される所以は人々がそのまま事実と信じるからのことである。即ち信仰が伝説の内容なのである。小谷部氏の義経論は小谷部氏の「義経信仰」の告白にほかならない。換言すればあの書は史論よりもむしろ、英雄不死伝説の圏内にはいる古来の義経伝説の全容の一部を構成する最も典型的、最も入念な文献として興味あるものである。史学は寸分の虚偽を許さないが、一方我々の最もドラマチックな最も華やかなこの国民的英雄を思慕する情の生々しい伝承する限り、正史のままに、あそこで、あのまま死なすことが、永久に忍ぶことの出来ない国民的哀苦である。この思慕の情の続く限り、この哀苦の涙の干ぬ限り、いかなる科学の苔にも係らず、様を入れ替え、姿を代えて隙を見、機を窺って義経は復活するのであろう。読み終えた私は、笑って小谷部さんの義経論を閉じることが出来たのである。》と見識のある論文で答えている。

7 藤原泰衡の頭蓋骨^{ずがいこつ}について

小谷部の歴史認識は正史を疑えという考え方をしていた。小谷部は昭和16年に亡くなっているから、この「伝・忠衡の首」の件は知るよしもないが、この話を聞いたら「だから言っているだろう」怒ったに違いない。昭和25年、朝日新聞が藤原家の廟所である平泉金色堂の学術調査を行なっている。平成6年、中尊寺刊行『中尊寺御遺体学術調査最終報告書』を拝見すると、伝・泉三郎忠衡の首とされてきた首桶から出てきた首は「泰衡の首」であることが判明した。報告書は次のようにある。

「忠衡の頭蓋骨には切創^{せつそう}、割創^{かつそう}等多数の外傷が認められるので奮戦の末捕えられ、第4頸椎^{けいつい}の鋭く切られていることから、斬首されたものと推定される。そして前額部及び後頭部にある孔が一直線にあり、前頭部に於いては外板の孔が内板のより小さく、後頭部のそれに於いては内板の外板のより小さくなることにより、斬首の後、前頭部より御頭部に向かって先端^{とが}の尖れる釘の如きもので突き刺されたものと推定される。眉間の左寄りに円形の大きな孔が認められ、これは後頭部の同大の孔に対応し、太い鉄釘のようなものを眉間から打ち込まれたと推定される。(略)このことはこの首級が忠衡と伝えられているけれども、泰衡であろうと考える有力な証拠となったのである。この推定が正しければ、忠衡と称されていた首は泰衡の首と認定したい。」と解説されている。

『吾妻鏡』文治5年9月6日の条「泰衡の前額部より後頭部に8寸の鉄釘もって打ち付く」あり、磔の穴は泰衡と推定されるとしている。義経を自刃に追い込んだ泰衡の首は中尊寺金色堂には無く、義経に最後まで主君の礼を尽くした忠衡の首桶が秀衡の棺側にある

と伝わってきた。『平泉志』に「中央・清衡、左・基衡、右・秀衡、秀衡の棺側に忠衡の首桶あり。秀衡は黒漆なり。忠衡の首桶も黒漆なり。」とある。

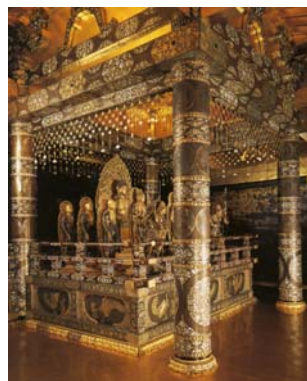
『菅江真澄遊覧記』「かすむ駒形」に「秀衡の棺には、のちに和泉三郎忠衡の頸桶を入れたということである。」とある。後世の史家をはじめ一般民衆は、忠衡の首と今日まで信じられ、どのような行違いか解らないが、騙されてきたのである。

泰衡の首桶から百粒あまりのハスの種が出てきた。このハスの種は平成10年に800年の眠りからさめ、大輪の花を開花させ、毎年7月の初めに中尊寺に訪れる人々を楽しませている。またこのハスは「中尊寺蓮・泰衡蓮」のハスの名で全国の縁のある寺等に寄贈されているという。ハスの種を首桶に忍ばし、泰衡を浄土にお送りした温かい東北人の心根に現代の我々は心を打たれるのである。浄土へ見送り人は泰衡を愛したご婦人たちか、一族主従か、想いは尽きない。

地域の岩手県盛岡観光・歴史情報によれば、泰衡の親戚関係の樋爪^{ひづめ}氏が五郎沼に咲いていたハスの花を泰衡の首桶^{たまむ}に手向けたと伝える。藤原清衡の4男清綱は紫波郡比爪館（現紫波町赤石）を構え、地名の「初代樋爪氏」を名乗る。清綱の娘は信夫の佐藤庄司の妻・子息が佐藤継信・忠信である。頼朝に樋爪氏は滅亡させられたが、清衡の孫である2代樋爪俊衡は高齢のため比爪館（現日詰）に安堵された。俊衡は泰衡の遺子秀安を養育しながら余生を過ごしたという。安堵後、俊衡は仏堂に帰依して蓮阿入道となり大莊嚴寺の開基となる。俊衡と共に生き延びたであろう一族と妻子で藤原泰衡を供養したことが推測される。尚、古代ハスの咲く五郎沼は現紫波町南日詰^{ひづめ}にある。



中尊寺蓮・泰衡蓮
『平泉みちのくの
土』東京特別展資
料集より



中尊寺金色堂中央
壇藤原4代が眠る
『平泉みちのくの
浄土』東京特別展
より

五郎沼のハスのいわれ 古代ハスの解説は「箱清水公民館」に次のようにある。「泰衡の首桶の中から蓮の種子が見つかり大賀一郎博士が研究用に持ち帰り保存していたものを教え子の永島時子教授が、平成6年に発芽させ、平成10年に開花に成功したものを。泰衡のさらし首はひそかに中尊寺の金色堂に安置された。その時、親戚関係樋爪氏の五郎沼に咲いていた蓮の花を、五郎沼ゆかりの婦人たちの手で手向けられたという。蓮が種子となり800年経ってよみがえったものです。平成14年に中尊寺から株分けされ五郎沼の地に移植されました。」と説明がある。百粒あまりの種が出てきたことは、首桶一杯の蓮花

でたむけられ、見送られたことが想像できる。古代ハスは花の経は15粒位で、1輪から15から25粒実がつくようだ。だがここで1つ謎が生まれる。泰衡の弟忠衡は、泰衡に討たれたことになっているが、「忠衡の首」は何処へいつてしまったのだろうか。次に忠衡の伝承をみる。

藤原忠衡の情報 『中野文書』 に、泉三郎忠衡は泰衡に殺されたのではなく、源義経と行動を共にして、久慈、八戸へと案内をした後、蝦夷地へ渡ったという文書がある。その伝える「中野文書」は九戸郡久慈市野田村の旧家の屋号「泉田」の中野浅五郎氏宅にある。この「泉田」は忠衡の3男の子孫が屋号としてきた。1956年に佐々木勝三氏が野田村の中野浅五郎氏宅を訪ね、「先祖之由書」を写真に収めている。由書（由緒）には「我が大祖は藤原秀衡3男泉三郎忠衡なり。・・・第壹代泉三郎は判官殿に随^{したが}って蝦夷に落つ」と記録されている。『義経は生きていた』に述べている。

系図としては、屋号「中健」の中野氏、「中伊」の中野氏、「泉田」の中野氏の3系ある。野田村は中野姓が多くあるので屋号で呼び合っていて、野田村では古来より泉三郎の子孫の伝承地であった。筆者の友人で札幌にお住まいの中野嘉弘氏は、久慈市の中野嘉右エ門系（中野浅五郎氏親戚）の子孫と言われ、機関誌『ボルテ・チノ・日本の心』「義経と静の会」3号に「中野浅五郎のお写真」という題で中野系図のことを書かれている。故中野浅五郎氏は郷土を愛され、郷土史で泉三郎忠衡伝承を世に出されていた。この話を聞いた高校教師の佐々木勝三氏が訪問した経緯であるという。

野田・久慈・普代村に残る義経伝説の文書「先祖之由書」には泉三郎忠衡は衣川では死なず、義経と三陸海岸から久慈の吉田城に入り、長男を残す。3男を閉伊郡小国村（川井村）に残し、屋号を「泉沢」とした。長男の子孫は地名を取って「吉田」と称したが19世の時、母方の「中野」姓を名乗る。33世の時、（元禄元年・1688）野田郷城に移り、屋号「泉田」と称する。また『北の義経伝承』正部家種康著に「類家稲荷大明神縁起」の中で「秀衡の3男の泉三郎忠衡は頼朝に攻められて平泉を脱出、義経一行に加わり、長男を久慈の吉田城に残し、八戸を経て蝦夷ヶ島に渡った」と記述がある。

8 源頼朝没後の流れ

歴史家の評価が高いと言われる頼朝没後に触れる。頼朝は建久10年（1199）1月没。前年の12月27日に相模川橋脚落成供養の帰路、落馬したことが原因とされている。

（第1章の6・旧相模川橋脚参照）『吾妻鏡』の建久7年から9年と、頼朝が死去した建久10年1月の記録が欠落している。いろいろの説が取り沙汰されているが、記録が無い事は、北条幕府も苦慮の末、良い知恵が見つからなかったのだろう。

2代目頼家は建仁3年（1203）「比企能員^{ひきよしかげ}の変」に巻き込まれる。2代将軍源頼家の擁

護派比企一族と北条時政との幕府政権闘争の政変である。頼朝没後の鎌倉幕府の権力は頼家が継いだ、実際には政子と分割していて、北条一族側に政子は立ち、頼家から実朝へ將軍委讓を、政子が東国御家人の了解を取り付けていたことが考察できる。頼家は將軍職を剥奪され、伊豆修善寺に幽閉され元久元年（1204）に没した。3代目実朝は承久元年正月（1219）鶴岡八幡宮の参詣時、頼家の次男公暁に暗殺された。参詣する実朝を襲いかかり「親の敵はかく討つぞ」と叫び殺害し、公暁自身もこれで將軍になれると信じていた野心家とも云われ、「我は東国の大將軍である」と言っていたらしい。公暁は父の死の恨みを叔父や実朝、そして北条氏に復讐した。北条家は源家滅亡を企て、三浦氏は北条家打倒の策謀が背後にあった。頼朝の没後20年で源家の血は途絶えた。東国御家人の政権奪取は北条家の懐柔策に次々に滅ぼされた御家人は梶原氏、畠山氏、比企氏、三浦氏、千葉氏の一部、安達氏である。頼朝没直後から既に源家は北条家の手のひらに乗っていて、頼朝政権は次々に屋台骨を外されていたのである。現在の頼朝の墓（第1章頼朝の墓参照）安永8年（1779）と文化11年（1814）に頼朝の子孫とされる薩摩藩主島津重豪（25代）が再建したものである。もう1つ頼朝の墓の経緯がある。鎌倉市雪ノ下に「勝長寿院旧跡」である。鎌倉市教育委員会の勝長寿院旧跡の説明は次のようにある。

「頼朝は文治元年（1185）亡き父義朝の菩提を弔うために勝長寿院を建立した。同年に義朝の頸と忠臣鎌田正清（政家）の頸を埋葬した。後、足利氏によって護持されましたが、16世紀頃に廃絶したと思われる。ここに集められた礎石はこの場所より出土のものは火災で焼けた痕跡が認められ、勝長寿院の歴史を語る貴重な遺物です。」とある。

『吾妻鏡』の脱漏に「法華堂の西の方上に右幕下（頼朝）の御廟を案ず」とあるので、頼朝の墓が始め邸の西の丘上、勝長寿院の法華堂にあったらしい。頼朝は生前、持仏堂を法華堂としていたので、この堂に安置されたと言われている。旧跡には阿弥陀堂、五仏堂、法華堂、三重の宝塔があったと伝わる。勝長寿院の消滅は鎌倉公方成氏が古河に移住し保護する人がなくなり室町末期には荒廃し礎石のみになっていた。勝長寿院は当初政子や実朝の墓があり菩提寺であったようだ。現在の北条政子の墓は、政子自身が栄西を招いて開山した寿福寺の矢倉群に政子と実朝の墓がある。いろいろの意味で北条政子は源家の嫁として、木曾義仲の子息の「木曾塚」や2人のために弥陀の3尊を安置した「栗船御堂」を建立、鎌倉市亀ヶ谷辻に頼朝と政子の娘大姫に「岩舟地藏堂」を建立している。嫁の政子は歴史的な祭り事を仕切りその歴史を現代に伝えている。あの世で頼朝も義仲も政子に頭があがらないのではないかと思う。歴史家は「藤原泰衡は愚鈍だ」と言われるが、評価の高い頼朝自身も泰衡を笑っている暇などなく、政権維持の困難と源家の未来図を描く余裕などなかったことが判る。勝長寿院旧跡の石碑には次のようにある。

「院ハ文治元年 源頼朝ノ先考義朝ヲ祀ランガ為ニ草創スル所 一ニ南御堂又大御堂ト言フ 此ノ地ヲ大御堂ヶ谷ト言フハ是ガ為ナリ 実朝及ビ政子モ亦此ノ地ニ葬ラレタリ

ト伝ヘラルレドモ 其墓今ハ扇ケ谷寿福寺ニアリ 」

大正六年三月建之

鎌倉町青年会



鎌倉雪ノ下・
勝長寿院旧跡
奥左側五輪塔
義朝・小五輪
鎌田政家之墓



鎌倉寿福寺や
ぐら群にある
北条政子の墓

余話・梶原景時の没落 源平合戦時、侍将義経と景時は「壇ノ浦」の合戦を前にして義経とあわや同士討ちにならんとしたことが、『平家物語』『源平盛衰記』などにみえるので少しふれたい。梶原景時は治承4年（1180）8月、源頼朝挙兵時、石橋山（小田原）の合戦で洞窟に逃れた頼朝の命を救った。以後、頼朝の信任厚い家臣となり、鎌倉幕府の土台を築いた。都の貴族たちから「鎌倉ノ本体ノ武士」呼ばれた。

景時は現神奈川県 高座郡寒川町一宮 を所領、頼朝の死後、正治元年（1199）10月結城朝光謀反の疑いを2代将軍頼家に讒言したとの理由で、御家人66人の連署をもって弾劾され、弁明の機も得られぬまま一宮に下向したが、再度鎌倉に戻るもの、12月に鎌倉追放が決まり、鎌倉の館は取り壊された。正治2年、景時とその一族は朝廷や西国武士団の支援を軸に甲斐源氏の武田有義を将軍に擁立して、再起を図ろうと京都に向う途中、駿河国狐ヶ崎（静岡県清水市）で在地の武士吉川小次郎らに一族33人が討たれ、梶原山（梶原堂に景時の墓がある）で景時も最期を遂げた。幕府内の主導権争いに北条家は梶原氏を快く想わない御家人たちを上手く束ねたことが北条家の勝利に繋がっている。

伝・梶原氏一族郎党（7士）の墓 寒川町教育委員会の説明によれば、この石造物群には次のような言い伝えがある。「正治2年正月、梶原景時一族郎党が一宮館を出発、上洛の途中清見関（静岡市清水区）で討ち死してしまったので、一宮館の留守居役であった家族、家臣らが弔ったといひます。また、景時親子が討ち死にしてから、しばらく景時の奥方を守って信州に隠れていた家臣7人が、世情が変わったのを見て鎌倉に梶原氏の復権、所領安堵を願い出たが許されず、7士はそのそれを祀ったという説もあります」と説明がある。

（梶原景時館址近くにある・寒川神社南東2キロm）

「尊卑分脈」によれば、桓武天皇の4世・平高望の子息平良文の次男系譜、鎌倉権五郎景正の曾孫、大庭氏、



伝・梶原氏一族郎党 7士の墓

侯野氏、長尾氏などの「鎌倉党」と呼ばれる東国平氏武士で勢力を持った武士団になっていた。頼朝や頼家将軍に忠誠心が強い分、義経や他の御家人衆を讒言により陥れる悪人のイメージを北条家突かれ、景時は追い詰められた。景時は源頼朝直系政権維持に奔走したが、北条家との政治闘争に敗れた。何時の世も政権闘争はなくならない。義経は梶原一族に弾かれ、次は北条一族に景時は弾かれた。この世は盛者必衰の^{ことわり}理をあらわす言葉通り、一族の繁栄を継続し続けることの困難なことを、苔むした五輪塔は今に伝える。今日的に考えれば、梶原一族は頼朝・頼家と時代のトップに忠臣的に仕え優れた官僚ともいえる。判官最良の方々から見れば「様を見ろ」となるのでしょうか。

9 同時期に大陸に渡った鳥居龍蔵をみる

ここで小谷部全一郎と同時期に日本軍の要請で満蒙から東部シベリア、外蒙古に渡った人類学、考古学の研究者、フィールド・ワークの鳥居龍蔵がいる。小谷部の「義経＝ジンギスカン説」に『中央史壇』に反論を載せ「小谷部さんは大陸の例を幾つも引いて居られるが、予は不幸にして、氏が立証されたものを大概見たが、同氏の考えとは反対に、義経らしいものはなかった。オノン河辺の鎧は、似てもつかぬものであるし、源氏の笹りんどうの紋云々という話にも信用がおけぬ。（略）氏がこれらの地方を巡遊されたと云うことの功勞に対しては感謝するけれども、集められた材料は義経と何の関係もない。」と答えている。東アジアを走破した鳥居の行動を中藺英助著『鳥居龍蔵伝』でその情熱を見る。

「シベリア出兵は失敗であると叫ぶ人がある。私は一学研、もとよりその可否に関しては何も知らないが、少なくとも出兵によって当地調査の^{べんぎ}便宜の開かれたことは、1つの効果として考えなければなるまい。然しながら、当時駐屯軍の保護便宜あるに拘らず、我が国紳士（軍隊と無関係な学者研究者）が同地の調査あるいはその他の旅行だもあえてしなかったということは、最も遺憾とする所である。この千歳一隅の時に会し、当時まで秘密庫として^{まひ}窺知するを許されなかったシベリアに、何故に我が国紳士は足を向けなかったのであるか。これらの諸君は、シベリア出兵の失敗を語る前に、自ら己が心中を省みて然るべきであろう。」と述べている。人類学、考古学のフィールド・ワーク大家の考えていることが凄まじい。国際紛争もなんのその学術研究に役にたてば何でも利用する心意気には脱帽する。鳥居は敗戦後すぐには日本に引揚ず、中国ハーヴァード燕京大学客員教授に招かれている。そしてやり残した遼朝時代の研究に専念している。

シベリア出兵 第一次世界大戦のさなか、ロシアではソヴィエト政権が生まれ、帝政ロシア側に在ったシベリアのチェコ軍隊が反乱を起こし、帝政を守らんとする白衛軍と共に戦っていた。このチェコ軍支援と慰留邦人の救出を名目として、大正7年（1918）8月米軍と共にウラジオストクへ出兵したのを手始めに、米英仏伊などの各国軍隊が駐留し、

日本は他国軍の撤退後も、大正11年まで駐留し革命干渉を続けたため、人的物的損害が大きく、また国際的信用も失墜した。このシベリア出兵の陸軍省の通訳官として、小谷部は並居る語学者をさておいて選ばれ、大正8年に大陸に渡る。内外蒙古、東部シベリアで国際列強国の通詞をこなしている。通詞の仕事の合間をぬって、小谷部は義経 = ジンギスカンの痕跡を調査している。

10 満蒙・中国・ロシアの歴史の概略を観る

この辺で義経 = ジンギスカン伝説が生まれた沿海州、中国東北、中央アジアにおける日本国との関係を、現在の中国東北地域の歴史を年表的に概略観てみたい。但し、19、20世紀の極東の国際緊張状況のみ述べる。明治・大正・昭和の歴史は一般にどうしても今日の歴史的な基準判断に陥りやすいので歴史評価は下さないで述べる。

「清朝」17世紀初め、中国東北地方にトゥングース系（12世紀以降は女真人）の言語を話すジュシェンという狩猟民族がいた。（黒龍江下流にいた^{こくすいまくわつ}黒水靺鞨）このジュシェン族のことを^{きつたん}契丹（トゥングース系）の^{りょう}「遼」、モンゴルの^{げん}「元」、漢民族の^{みん}「明」王朝たちは^{じょちよく}「女直」と漢字で表示した。日本では「女真」と書く。（宋と朝鮮は女真）ジュシェンの一部族長のヌルハチが1616年にこの種族を統一して^{こうきん}「後金」（清の初期の国号）を打建てた。1619年、サルフの戦いで明軍に大勝利して満州を治め、漢人の土地を没収して女真族に与え、服属した漢人に^{べんぼう}辮髪を強要した。1626年ヌルハチの没後、八男のホンタイジが踏襲した。1635年、北元（元朝の後裔）の宗家チャハル族長リンダン・ハーンが没したために、その遺児エジェイと母が女真に降伏して、元国皇帝の^{せいこうのほう}「制誥之寶」の元朝^{ぎよくじ}玉璽（天子の印）をホンタイジに差し出した。この時、ホンタイジはチンギス・ハーンの継承の^じ璽が天命により自らに廻って来たとして、ジュシェン（女真）という種族の名から「マンジュ・満州」と改名「満州人」に統一した。満州は地名でなく民族名から起った。1636年^{しんよう}瀋陽の満州八旗の王族たち、ゴビ砂漠の南モンゴル16部族長、遼河の高麗系漢人族を招集して、瀋陽で共通の皇帝に推戴された。国名は「大清」、大清は「天」を意味した。公用語は満州語、モンゴル語、漢語の3ヶ国語、これが「清朝」の建国である。1644年に北京城に入り、出身部族の旗の元満州8旗・蒙古8旗・漢軍8旗で中国全土を治めた。8旗は軍事制度と行政制度で、旗人は出身国に関係なく満州人となった。現在でも残る北京の「フートン・^{こどう}胡同」は満蒙語 = 井戸の意であり、8旗の兵營の居住区である。

清露国境 アムール河（^{こくりゅうこう}黒龍江）へロシア人が1644年、北のヤクーツクからやって来た。清朝は1842年5月イギリスとアヘン戦争が勃発した。イギリスは軍艦25隻で上海を占領し、揚子江を上って南京に迫った。清朝は敗北を認め、8月に南京条約を結ん

だ。条約の内容は、香港をイギリスに割譲、賠償金2千百万メキシコドル支払い広東、アモイ、上海など開港するものであった。そして1857年、第2次アヘン戦争を英仏連合軍と開戦、勝ちに乗じたイギリス、フランスは清朝の国土に半植民地の地域を割譲の不平等条約を結ばせた。清朝が南方で英・仏の圧力を受けていた隙間に、ロシアはサハリン（日本では間宮海峡・タタール海峡）を半島でなく島であることを確認し、アムール河（黒龍江）河口から37キロメートル上流に、1850年に軍事基地を設けた。ニコライ1世は「ロシア国旗を揚げた以上、決して下してはいけない」と強く命令した。1858年、清とロシアの国境画定会議を愛琿（現黒龍江省黒河市）条約を結んだ。ロシアは黒龍江左岸の割譲、松花江（ウスリー川）右岸の東側外満州（沿海州）を両国管理地することを要求した。ロシアは軍艦から銃砲を向けて威嚇、調印しなければ武力をもって黒龍江左岸の満人を追い払うと脅し、アルグン河から黒龍江の海口までの左岸の北60万平方キロの膨大な土地をロシア領とした。譲歩した理由は、アヘン戦争で敗北のため、ロシアと戦う余力がなかったことと、清の全権大使たちがネルチンスク条約（1689年にロシアと清国の両国境線条約）の未確定国境線の知識が不足していたと云われる。

続いて1860年、松花江の東側の沿海州を清国との北京条約で、ロシア領土に編入した。ここにロシアは軍隊を入れず軍事拠点の不凍港ウラジオストク獲得した。（露語のウラジヴォストークは、ヴォストークは東、ウラジーは領有又は支配、即ち「東を支配せよ」となる）更に余勢を得て、シベリア鉄道建設計画も立案した。清国は愛琿条約を認める代わりに英仏戦争の後始末を、ロシアに交渉の仲立ちをたのむ外交交渉姿勢であった。

何故にアヘンが多量に上海に渡ったかは、それはイギリスが中国茶の輸入代金の支払いに困り、インドのアヘンで決済したからである。アヘンはマラリヤの特効薬としてタバコに混ぜて吸引していた時代、今日的な罪悪感はないが、1箱60^キのアヘンは百人の1年分といい、18世紀末に4千箱を中国茶の代金決済に支払われていた。

日清戦争（明治27年の夏から翌年春） 日本は1868年に明治維新を成し、欧米国家制度を導入した国民国家をなすとげた。日本と清国は1871年、18条の日清修好条約が調印された。同年台湾へ宮古島民54名が漂着し、殺害される事件が起きた。日本政府の抗議に、清国は台湾を政府の力がおよばない「化外」の領土に属していると回答してきた。この回答により明治政府は台湾に出兵した。1874年5月、明治政府は陸軍中将西郷従道を兵3千で台湾南部派兵した。同年イギリス中国公使の仲裁で、宮古島島民は「日本国属民」と明記された。1879年、明治政府は琉球藩を廃して沖縄県とし、中国へ朝貢を禁止し更に福州琉球館をも廃止させた。日本は明治政府成立の直後から朝鮮侵攻の政策を考えていた。明治8年、江華島事件（日本軍艦がソウル近くの江華島砲台との戦闘・飲料水を探す口実で上陸し、島民殺害と大砲38門を奪った）を契機に、その翌年日朝

修交条規を結ばせた。1880年日本は朝鮮ソウルに公使館を開設した。1882年に日本指導の軍制改革に、朝鮮の不满兵士の抗日暴動がソウルで発生し、日本公使が包囲される事件が起き、翌年ソウルに日本政府は軍隊を駐屯させた。一方清国も朝鮮を服属国とみなし日本の出兵を牽制していた。1885年、日清間に天津条約が結ばれ、朝鮮から日清両国軍は撤退すること、出兵に関しては相互に通知することを約束した。しかし、日本の国民世論は「清国に朝鮮を勝手にさせない」という強い風潮が政府と国民にあった。1894年3月、朝鮮の全羅道で「東学党の乱」（甲午農民戦争）に率いられた農民運動が蜂起し、腐敗した官僚の罷免、租税の軽減を求めて全道（チョンジュ）を占領した。あわてた朝鮮政府は清国の袁世凱軍の派遣を要請した。6月、清軍は農民戦争が盛んな地牙山方面から上陸し、日本軍は仁川・ソウルから天津条約の取り決め通り朝鮮に派兵した。まもなく朝鮮政府と農民は全道で和睦したが、清国も日本も朝鮮支配をもくろみ撤兵しなかった。当寺の新聞の記事を見みる。

東京日日新聞・明治27年7月14日「3国の傍観・英露米3国は朝鮮内政に付き我要求請を至當とし清国に向て日本と協力すべしと勸告したるも清政府は之を拒絶したるを以て3国は調停の事を止め傍観の位地に立ちたり云々とは昨日の各紙中に見る所然るに我社の探聞する所に依れば、3国協力の調停は痕形なし」（東京日日は毎日新聞の前身）

東京日日新聞・明治27年7月20日「清政府は既に一たび我の好意を以てせる協議を斥けたるより我は清の如く外国の使臣にも縋らず又清政府の嫉視をも事とせず段々呼として独力韓廷に助言し韓廷亦我の盛意に服して其要請を容れ暫次効果を實際に見んとする場合に運びたれば清国は躍起となり裏面的陰険手段を逞くしたるも韓廷は唯だ袁世凱の甘言に乗らず猫の如き牙山2千の兵到底頼むに足らざるを知り・・・日韓両国間の交渉を妨害し萬止むを得ざるときは開戦するを辞せずと決心するに至りたり」と伝える。

日本政府は7月に朝鮮王宮占拠して、親日内閣を組閣し、これに不満の清国と日本は、8月1日に両国は宣戦布告し「日清戦争」起こった。翌年1月に李鴻章は降伏し、同年4月、下関で李鴻章と伊藤博文・陸奥宗光とで日清講和条約が結ばれた。この条約の主な内容は、清国が朝鮮独立を承認すること、清国は遼東半島・台湾・澎湖島（台湾海峡）を日本に割譲、などの条項が結ばれた。しかし、これをロシア・仏・独に3国干渉により、日本は遼東半島を清国に返還させられた。ロシアはその報酬として清国から東清鉄道敷設権を獲得した。続いてロシアは1898年には旅順・大連をも租借し、ドイツは膠州湾を、イギリスは威海衛と九龍半島を租借、フランスは広州湾を租借した。なおもロシアは清国政府が日本へ支払う賠償金をフランスからの借款の口利きの代償として、満州里から沿海州へいたる1500キロの鉄道敷設権を得た。2年後ロシアはハルピンから南下して旅順・大連の1000キロ間、東清鉄道南部線の敷設権と遼東半島南部地域の租借権も手に入れた。日清戦争に勝利した日本は、清国の勢力を追い出したが、現実には

朝鮮に政治的影響力得たのはロシアであった。明治29年(1896)5月「小村・ウェーバー覚書」で日本は朝鮮国王がロシア公使館にいる現状を認めさせられた。ロシアは朝鮮と秘密協定「露韓密約」を結んで、ロシアは国王の保護、軍事と財政の援助、ロシアが武力で朝鮮政府を助ける約束がなされていた。その見返りに朝鮮北部地域の鉱山開発権や鴨緑江流域の森林伐採権を得た。日本は帝国主義列強間の軍事力対立に直面し、軍事力の道を更に強固に進むこととなる。明治33年(1900)山東省で義和団の宗教秘密結社が外国人排斥運動を起こし、列強国はこれを好機と捉え、ロシアは鉄道を守る理由で17万7千の軍を満州に入れ、また日本を含む8ヶ国連合軍が北京を占拠した。清朝が安定しても、ロシアは満州から撤退しなかった。英国はロシアを牽制するために、日本と1902年、日英同盟を結んだ。ロシアは満州から第1次軍は撤退したが、第2次撤兵は取りやめ、1903年、「ロシア軍は撤退後満州を他国に割譲しない。ロシアの同意がないかぎ他国の領事館を開設させない。占領したロシアの得た権利は保留する」などの7カ条を清国に突きつけた。同年5月、ロシアは朝鮮半島の日本勢力の駆逐をはかるため、鴨緑江^{おうりょうこう}を東の黄海^{かなめ}の要にするために、朝鮮の龍岩浦^{りゅうがんぼ}に基地を建設した。同年8月、日本側はロシアに満州と朝鮮の特殊権益を相互に認める方針を伝えたが、ロシアの回答は満州にふれず、朝鮮領土の軍事利用など建設禁止を求めるものであった。これを承知したら、対馬の先は帝政ロシアではないか。日本政府も国民世論も脅威が現実のものとなった。翌年日本は御前会議において帝政ロシアと開戦を決意、これが日露戦争前夜である。ロシア軍人は「日本兵3人にロシア兵1人で間に合う、来るべき戦争は単に軍事的散歩にすぎない」と豪語した。

東京日日新聞・明治37年1月3日・「^{きゅうろう}舊臘(昨年12月)日本政府は終に露国の誠意の存否を疑はざるを得ざるの場合に逢ひ乃ち最後の決心を以て露国に復答する所ありしと同時より始めて英米独の3国に向て日本の真意を表明し続いて他の列強に対しても同様の通告を爲したるよしなれば今日となりては^{もはや}最早日本の誠意は世界に知れ渡り居るはずしかも右の通告は片辞の^{げきえつ}激越は^{わた}渉るものなしと^{いな}雖も其裏面に於て日本が最後の決心を有せることをも識認せられたらんと思はる」

同2月3日・「露国の戦備・露国の好戦的態度を取るは今日に始るにあらず其の未だ我と直接の交渉を開かざる猶ほ已に盛に水陸の兵力を増加して清韓両国を強歴せんと欲したるのみならず他の一面には両国に対して益々威迫を加ふ其の汲々として戦備を修むる。」

同2月9日・「日露断交の通知・列国に同文通牒を送りて日本は露国と外交上の干繫を破りたる旨を通知したるよし」と記事は伝える。

日本の外債(外国からの借金)に苦慮 日本は日露戦争に軍事費20億を使った。ロシアもだいたい同額という。日本政府は国内より税金と国債で4億以上集めたが、不足分7億円(戦費の35%)を外債に求めた。開戦と同時に金子堅太郎を米国へ、末松謙澄(P1

26・末松謙澄)を英国に派遣して列強国に親日世論づくりに走らせた。この日本国債金集めに成功した裏に、米国は鉄道敷設で満州市場を目指し、英国は中国への進出を更に進めようとしていたし、仏国は日露が戦争を勃発すれば、ロシアの軍事力が欧州で弱まり、ドイツが優位になってしまう思惑があった。ドイツがロシアを助けたのは欧州のロシアの軍事力を削ぐためといわれる。米英に国籍を持つユダヤ人が、ロシア国内でのユダヤ人迫害が起こり、ユダヤ系の国際金融業者に反感を買うことで日本の外債に有利にはたらいだ。国内に於いては、20万の将兵と20億の国費の結晶、天皇の名で戦われた戦争ということで「明治天皇の遺産」とも呼ばれた。

日露戦争終結 明治37年(1904)2月6日、日露戦争戦が勃発。翌年5月日本海海戦で日本艦隊が辛くも勝利する。9月、ポーツマスで米国のルーズベルト大統領の斡旋で日露講和条約が結ばれた。日本はこれにより韓国の保護権、南樺太、遼東半島、東清鉄道南満州支線の経営権、沿海州の漁業権を獲得したが、12億の賠償金要求は拒否された。また仲介の米国は日露講和会議の最中から、満州の鉄道に強い関心を示し、米国は満州における鉄道を清国の所有と必要な資金を「ドル外交」で関係各国から出資する「ノックス満鉄中立案」を提唱していた。日本が手に入れた南満洲鉄道を米国大鉄道資本が買収工作は、講和会議から帰った小村外相の強い反対でこの計画は潰された。ロシアの兵力3百万・約軍艦51万トン、日本の兵力20万・約軍艦26万トン、その戦力差を日本政府は国民に実情を知らせなかった。日本政府も日露戦争継続には国力は無く、ロシアにおいても国内に革命の内乱事情があり、このぎりぎり交渉を小村寿太郎は見事にまとめたのであるが、実情を知らされていない国民は、小村は帰国時に右翼団体から罵声を浴びせられ、暴徒化した一部の国民は、米大使館・教会を破壊した。この事件を境に米国の親日世論は離れてしまった。

当時の世界に目をやれば日露戦争当時、アフリカの植民地の奪い合っていた英国と仏国が、日露戦争を境に妥協をみて「英仏協商」が成立していた。ドイツはアジアでの大海軍の侵攻が本格化していて、英国に脅威を与えていた。欧州は英国の敵は仏国でなくドイツに変わりつつあった。英国と米国は満州の鉄道権益のために日露戦争に強い関心を持ち、ロシアの軍事力が弱まることを期待していた。仏国はドイツに対抗するために日露戦争を早く終結させたかった。仏国はロシアの意向を受けて調停に動き、米国は露国にある程度の打撃を与えれば、これ以上日本に満州の進出を抑える事で、米国は日露戦争の調停を仲介した。米国自身は満州へゆたかな「ドル資本」で満州鉄道の進出する計画を持っていたし、各列強国の思惑政策が日露戦争を終らせたといえる。この時、日露戦争において清国中国は祖国地に起きた戦争を沈黙した。

日本はロシアから獲得した満州の権益を新たに設立される鉄道会社を引き継ぎ、明治3

9年(1906)8月、旅順に関東都督府^{ととくふ}を置いた。ポーツマツ講和条約より鉄道守備隊を1キロにつき15名を越えない範囲で配置できることになった。日本に譲渡された東清鉄道は長春―旅順間、764キロ余、これにより日本軍は総計1万4419名の守備兵を置けることとなった。1917年ロシア革命が起り日本もシベリア出兵のさなか、1919年、関東都督府は廃止され、都督府陸軍部は独立して関東軍となった。

内蒙古では1912年2月清朝最後の皇帝宣統帝^{せんとうてい}(愛新覺羅溥儀^{あいしんかくらふぎ})が退位した。清朝末期に中国全土に革命運動^{しんがい}、辛亥革命が起こった。革命による中華民国が樹立し、満州の地は中国人による満地開拓運動を推し進めたために、モンゴル人の牧草地を侵食し、牧畜の満蒙民^{まんもう}は生活を脅かされていた。日本の進出は、この満蒙人民が中国人から独立運動する状況下で軍事支援活動をして行く。日本は満蒙の知識青年独立運動組織に武器援助をし、漢人軍閥の進出を駆逐する本格的な支援に乗り出した。そして、日本国の野心はこの沿線上で1932年満州帝国建国につながって行くのである。

この時代世界に眼をやれば、大英帝国は世界一の植民地保有国であり、次いでフランスがそれに続き、アメリカはスペインから独立するフィリピン革命に援助しながら1899年に侵略と隷属化に成功していた。当時の日本国民の世論思考は植民地獲得国家へと躍進していく国家の姿に夢をみた。世界の常識は、植民地を多く持っている国家、すなわち優秀な国家であったのである。

このような時代に明治18年(1885年)『義経再興記』は読まれ、そして大正13年(1924)『成吉思汗ハ源義経也』が読まれた。英傑義経の出現は、義経不死伝説を信じる人々や、日清・日露戦争の勝利を経験した人々、戦争に歓喜をおくった人々に熱心に読まれたのである。この時期、動乱の大陸で活躍した川島浪速^{なになわ}、清朝14世王女、男装の麗人と言われた川島芳子(父は肅親王^{しよくしんのう}・清王朝筆頭の名家)、中国籍に移した伊達順之助等が大正5年に第2次満蒙独立運動に加わっている。それは小谷部全一郎や鳥居龍蔵が大陸に渡る2年半前のことであった。

— 完 —

おわりに

鎌倉から宮城県栗原市まで義経ゆかりの跡は、史実に近い事跡として確認することができ、岩手県に入ると一般的に「はながんびいき」とされる北行伝説が始まり、青森県まで色濃く伝説が残されている。北海道函館、道南あたりにそれに続き、道央、道東に入るとアイヌ民たちが伝えたとする、和人が記録した義経伝説と変わって行くことがお判りいただけたと思う。初めに述べましたが、義経伝説伝承を守られている人たちは、どのような経緯で今日まで至ったのか、民族学的領域になりますが、この郷土を愛する人々の確認の旅でもあった。歴史学者は「義経北行伝説は論外」と一声で片付けますが、北走する義経伝説を追ってみれば一方的に否定の話だけでは済まないことが分かる。

義経伝説の社^{やしろ}を800年間どのようにして守られてきたのか、現代風に言えば「何の徳や利益がある訳でない」となりますが、現場での実感想は義経の足跡を祀る神社・祠^{ほこら}は「信仰」を強く感じるのである。祠を大事に個人で守られている人は守護神として、村落で守られている神社は、村の鎮守様として歴史をきざみ今日に至っていることが良く解かった。余所者^{よそももの}である筆者が現地で何時も思うことは、社^{やしろ}を守られている人々の姿を拝見すると「はながんさんに、ハウガンさんに守られている」と人々の想いを強く受け、まさに信仰を実感した紀行でもあった。郷土の人たちおかれましては、義経伝説の真偽^{しんぎ}を机上で論じる事は、社を守られている方々には「大きな御世話」なこともよく判った。守られている人々は高齢者が多いが、今の若い方々が高齢になれば、必ずやこれらの伝承を受け継ぐことを筆者は確信できる。郷土での「祭」の後ろ姿を拝見すれば、安堵と幸せ一杯の人々が満ちていて、代々「守られている」という安堵感を皆で共有しているからである。これ等のことを考えると、この世には文献などによる歴史学正史と、民衆の伝説伝承史が口承としてあり、その口承の深層には日本民族が持つ「もののあわれ」からくる敗者や弱者に対する同情の念と、中央に対する負けじ魂が脈々と生き「義経不死伝説」は地域の信仰や祭りとなって地域文化として生き続けているのである。

今回の探聞で、義経北行伝説紀行一番の名場面の場所は、積丹半島の神威岬や女郎子岩の前に立ち、水平線の海原を見たとき「義経伝説は神話だ」と思えたことである。よくぞこの岬と海原を見て、義経伝説の物語を創作した人々は超文芸藝術作品賞ものだと思う。

この地方にやってきた和人の人々は義経とアイヌメノコの出会いと別れを、不思議な形の立岩や地形に先人たちに想いをはせた。アイヌの娘との悲話が多いのは、北海道開拓やニシン漁に携った人々の中に浄瑠璃を唸り、座頭の義経物の語りに涙し、なにも娯楽がない時代、漁撈の作業や航海でここを通過する時、きっと義経劇場に居るような興奮と生活に潤いを満たしていたのであろう。ここでの主役は義経以外見当たらない。

「義経不死伝説」や「義経北行伝説」は聞き手側の心情が、義経物語を更にいろいろな物語を生み育てた。特に道南西海街道の江差一小樽間は不思議な奇怪な地形が見られ、

その眺望に立った人々は義経の航海安全の儀式や、メノコとの恋物語を生みだした。道南に渡っていった和人たちの祖先たちは、本土に無い風光明媚な地形を見て、伝説を信じ、また伝説を生み育てたことがよく判る。

義経伝説と直接関係はないが、道南の二海郡八雲町熊石の海岸に「奇岩雲石」という奇岩がある。享禄 禄2年(1529)この地を治めていた藩主松前義広とアイヌ酋長タナケシと戦いがあり、タケナシ軍の追討が激しく松前軍は逃げ場を失い、雲のような形の溶岩岩陰に身を隠した。この時、一天俄かに黒雲が岩の間から湧き上がり、地鳴りとともに天は真っ暗になった。アイヌの軍勢は恐れをなして逃げ去り、この黒雲のような奇岩によって松前軍は上ノ国に帰城することができた。危難を救ってくれた雲石に信仰心が生まれ、松前家において崇敬厚く雲石の故事を伝え、岩上に鳴神神社が祀られている。奇岩雲石は海から陸に向って雲がたなびく黒雲に見える奇岩の形をしている。北海道における伝説の原点を見た思いがした。

話は突然に西国に飛びますが、大分県竹田市の「岡城」は、文治元年(1185)大野郡緒方荘(現大分県豊後大野市)の武将緒方三郎惟栄が源頼朝と仲違いをしていた義経を迎えるため築城したと伝える。西国で再興を期待して、惟栄と義経は共に船で大阪から九州へ渡ろうとしたが、大物浦(尼崎市)で嵐に合い両者一行は散り散りとなり、夢敗れた義経主従は奥州方面へ逃亡した。惟栄は捕えられ、群馬県沼田荘に流された後、惟栄親子兄弟が処罰をうけたが、緒方一族は処罰を受けず豊後南部で繁栄を続けた。九州方面は緒方一族と協力関係の氏族が多く、頼朝も穏便に処置したのであろう。岡城は四方を断崖絶壁の谷の上にあり難攻不落の名城であり、歴史には「もし」はないが、義経は嵐にあわずこの岡城に入っていたら、また違った歴史や伝説が生まれたのであろう。

時代は下って岡城跡にて滝廉太郎が学校唱歌「荒城の月」を作曲し発表している。岡城跡(昭和12年国指定史跡)は「日本百名城」「日本の音風景百選」「日本のさくら名所百選」に選ばれている。実は前々からこの城跡に登りたいと思っていたので、今回「義経伝説」の締めくくりに出掛けた。城石積の曲線の向こうに見える山々、自然の崖壁と谷は見事な眺めである。「荒城の月」の作詞は、土井晩翠が仙台の青葉城址に立った時の歌詞とも、会津若松の鶴ヶ城に立った時の歌詞ともいわれる。「荒城の月」4番の歌詞、感傷的であるがよい詞である。

天上影は かわらねど
栄枯は移る 世の姿
映さんとてか 今もなお
ああ荒城の 夜半の月

夜空に輝く月は今夜も替わらないが、人の世は栄えて滅びる理の姿、それでも今も

なお、それでも今もなお、栄華を映し出そうとそうとしている。嗚呼^{ああ} 荒れた城の石積に、今夜も夜半の月明かりがさんさんとふりそそぐ。

現代からの義経生存伝説を大まかにみれば、シーボルトがたまごを作り、末松謙澄がヒナをかえし、そのヒナを内田弥八が育て、小谷部全一郎が大きくして野に放してしまった感はあるが、歴史的によく調べてみれば、この「義経不死伝説」は世の道連れに、多くの



大分県竹田市・岡城

人々が興味を示し、記述を残してくれた。義経を祀る神社は信仰に、灘の航海では海上安全の儀式に、地形や奇岩をみて民衆の生活に潤いを与えてくれる物語を生み出した。一般民衆は実に芝居好きで、日々の生活を楽しむことがうまい祖先たちは、各地に義経伝説を残してくれた。

モンゴル紀行は、ジンギスカの生まれた草原へ立って見たかったからであるが、あれ程の大帝国をつくりあげた遊牧民の草原に立ってみれば、「ただ、風がふくばかり」の印象であった。草原には立ち木がないので風の音が聞こえず、自分の体と耳元にあたる風だけが、ゴーゴーと音となって聞え、日本人の「物の哀れ^{あわれ}」からくる感情が高ぶり「時が過ぎれば」このような事か、想いを強く受け歴史の究極をみた思いであった。どんな栄えた民族も、個人の大成功も、年月が過ぎればみな消えてしまう。雄強なる民族であってもこの世に継続し続けることはいかに困難であるかを実感する旅でもあった。

終りにあたり歴史記述や、地方での名称のルビ等の間違いをご批評いただければ幸いです。最後までお読みいただきありがとうございました。

終りにあたり各市、町、村の図書館や資料館、神社及び伝説伝承地で親身なってお世話とお話を教えていただいた方々、現地ご案内の先達していただいた方々に心より感謝とお礼申しあげます。

2011年2月吉日

池田 勝宣

※ 文中にアイヌ、土人、めくらなど現在の国語に不適切な言葉や漢字を使用しましたが、中世の伝説を語るための処置なので、読者の方々のご理解賜りますようお願い申し上げます。

自己紹介

池田 勝宣(いけだかつのぶ) 1942年神奈川県藤沢市生まれ。朝日産業(株)墓石卸業・平成16年引退。歴史研究会旧会員。『歴史研究』に「将門記にみる裏切り者・丈部子春丸考」、「仏跡・祇園精舎紀行」、「義経=ジンギスカン伝説を作った男小谷部全一郎を追う」など発表。

参考文献

『吾妻鏡』新人物往来社、『東遊雑記』古川古松軒著・東洋文庫、『南部叢書 3・平泉雑記』相原友直著、『義経記』日本古典文学大系・岩波書店、『菅江真澄遊覧記』平凡社 1・2、『東西雑記』古川古松軒著・東洋文庫、『東遊記』橘南谿著・東洋文庫、『奥の細道』角川文庫、『芭蕉句集』新潮日本古典集成、『奥の細道』蓑笠庵梨一・岩波クラシックス 8、『平家物語全注釈』角川書店、『日本奥地紀行』イサベラ・バード著・東洋文庫、『モンゴル秘史』1・2・東洋文庫、『小シーボルト蝦夷見聞記』東洋文庫、『日本』1・4・6 シーボルト著・雄松堂書店、『シーボルトの21世紀』東京大学総合研究博物館、『シーボルト「日本」の研究と解説』講談社、『木曾義仲』下出積與著・人物往来社、『金属と地名』谷川健一編・三一書房、『考古学ジャーナル』08年、『東北アジアのなかのアイヌ世界』榎森・小口・澤登編、『アイヌの歴史と文化』榎本進編、『アイヌ民族と日本人』菊池勇人著、『世界史のなかの満州帝国』宮脇淳子・PHP新書、『モンゴルの歴史』宮脇淳子著・刀水歴史全書、『ジンギスカン』小林高四郎著・岩波新書、『チンギス・ハーン』岡田英弘著・朝日文庫、『倭国の時代』岡田英弘著・筑摩書房、『奥州藤原氏5代』大矢邦宣著・河出書房新社、『平泉・みちのくの浄土』特別展、日本庶民生活史料集成第4巻・三一書房、『北海道の義経伝説』口承文芸研究資料集、『日本伝説大系』みずうみ書房、『蝦夷日誌』北海道出版企画センター、『ジャパニーズロビンソン・クルーソー』小谷部全一郎著・生田俊彦訳・皆美社、『日露戦争』ユーラシア・ブックレット 71、『義経北行伝説の旅』伊藤孝博著・無明舎出版、『義経北行』金野静一著・ツーワンライフ出版、『成吉思汗は源義経』佐々木勝三著・勁文社、『義経伝説推理行』荒巻義雄・合田一道著・徳間文庫、『日本書紀』中央公論社、『続日本紀』講談社学術文庫、『アイヌ文化の源流』石附喜三男著・みやま書房、『オホーツクの古代史』菊池俊彦著・平凡社新書、

お世話になった図書館他・千葉県立中央、千葉県立東部、東京都立中央、八街市立、茅ヶ崎市立、鎌倉市立、熊谷市立、一関市立川崎、栗原市立、会津若松市立、小松市立、帯広市立、室蘭市立、平取町立、北見市立、長野県立

郷土資料館他・旧金成町、岩内町、知内町、石狩市浜益区、襟裳町 団体・白旗神社広報委員会、栗原市栗駒沼倉源義経850年実行委員会、鎌倉市観光協会、青森県観光連盟、絵図・アートさがみ